果樹園　一七九号　昭和四十六年一月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第179号

をらびうた（遺稿）(八)　蓮田善明
伊東静雄研究(四)　小高根二郎
ロセッティ小曲(三)　森　亮
都会Ⅶ　福地邦樹
花も哭く　吉本青司
はんべん　高梨一男
ある晴れた日に（英訳）　伊東静雄　宮城賢
編集後記

をらびうた（遺稿）(八)

蓮田善明

ジョホールのサルタンの別荘の展望塔上、案内者云くガラス戸のやぶれたるは、こゝより山下将軍の対岸の島を望見せられしところ、一衣帯水を隔てゝ三山並びて見ゆ、そこより敵島をにらみけん将軍の眼光想ひやられて泪下る

三十日作　ジョホール、サルタン邸展望塔上

268頭椎（くぶつち）の　つるぎをもちて　高だちの　窓うちあけて　いくさきみ　あたの島をば　にらみつつ　いくさのはかり　はかりたる　あとどころとふ　その窓の　やぶれし見つつ　その窓ゆ　のぞきてみれば　目の下に　海峡（うなさか）ながれ　目交ひに　ぬりで並みたり　その海に　あぶらながして　火もて焼（た）き　はゞまくはせし　せめつぎし　山の峯（を）ごとに　千五百もの　火砲（ほづつ）は向けし　そのかため　正しに知りて　もののふの　たけきいさをの　よろづ世に　とゞろく山と　三つの峯　名づけたるらし　この窓に　真面（まとも）にありて　天霧れる　雲居の下に　まことに　並みのしるけき　この窓に　い倚り　その窓に　もたほり　ますらをと　おもへるわれが　泪しながる

一日作

反歌

269あたの城を真面（まも）に望（みさ）けていくさぎみい立たしけむ高館の窓

270あたの城をかねて望くといくさきみやぶらしめけむ高館の窓

271神に似しいくさのきみがあたの城を正しに見たる高館の窓

○

272みいくさのあとはしるけし万代にたけきいさをと語りつぐがね

273みいくさのあとはさやけし万代に心しあらばかたりつぐべく

274ますらをが一たび見さけあたの城をとらんと思へる心すがしも

二日作　昭南神社回顧

275高空にたゞよふ雲にかぎろひのにほへる朝の杜（もり）のすがしさ

276南の明星正にのぼりたりあかつきくらき宮路てらして

277神池に朝ぎりうすくもとほりて杜の梢をさやにうつせり

○

278ふるさとは雪ふりさえてうかららが吾（あ）をしくしくに想ひ恋ふらむ

279をさなきが朝け寒きに起きがてに甘えて音泣きやまぬこの頃

280天ざかる遠郷（さと）花のあざらけきいろをばめでず白雪われは

三日

281あかつきの暗きに来鳴く声高き鳥の啼かぬに雨のふるらし

282今もかもみ雪ふるべしふるさとの枯生に白く花敷くとまで

283今もかも白雪けりてふるさとの枯生につまがたちなげくらむ

284三日月のうすくてる夜はふるさとのつまが眉かくすがたうかぶも

285ときはなる南の郷の木々繁みわが恋ひまさるつまが枯生を

○

286さにづらふ花はさけども白ゆきのさやけきこゝろともしく思ほゆ

○

287たづさはり住みたることも短しとよそごといひしとふつまがかなしも

288たづさはりなれたることも短しと言ひし他言吾は忘れじ

○

289胸さきにひげをむすべるくろびとの古りたる男笑みもしなくに

四日　軍旗祭

軍旗誘導将校を命ぜらる

290いくさ旗みちびくぬしとまけられて朝みそぎするにいよよかしこさ

291あかつきの未だくらけくにみそぎすととよもす水の音のさやけさ

292みそぎしてこころすがしきに朝鳥の早起鳥の来鳴くがきこゆ

○

293朝毎に咲きつぐ花に朝鳥の群れゐあそぶを見つつ羨しも

○

294大君のさづけたまへる軍旗みちびきまつるまけのかしこさ

○

295たづさはりゐし吾妹子が衣手はなれはしつれど直にしたしも

296くろかみの長き処女がふる妻となれたる衣はぬぐべからざり

○

297時じくのこのみ飽くよは冬の夜を椎の実煎りて子ろとついばま

五日

去る一日乗船の予定を、伝染病患者幾少ありしとて検疫関係より出船を差止められ、日頃すごす、これ豈進軍すべきものの処置ならんや

298病み人のありとていくさとゞめなばすゝむいくさは蓋し無きかも

現代日本文学大系第61巻

林房雄・亀井勝一郎
保田与重郎・蓮田善明　集

〔房雄〕獄中日記抄・勤皇の心抄・狂信の時代・転向に就いて等
〔勝一郎〕転形期の文学抄・人間教育抄・信仰について抄
〔与重郎〕日本の橋・戴冠詩人の御一人者・後鳥羽院・英雄と詩人抄
〔善明〕詩と批評・鴨長明抄（方丈記、風雲の日）・神韻の文学（枯野の琴、青春の詩宗、志貴皇子、雲の意匠）・有心（小説）
〔付録〕近代主義と民族の問題　竹内好／日本浪曼派批判序説　橋川文三／林房雄論　三島由紀夫／亀井勝一郎論　利根川裕／保田與重郎論　川村二郎／蓮田善明とその死　小高根二郎／小林秀雄と保田與重郎　安東次男

12月20日刊　￥720

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

293すゝむべきいくさならはず和びとのおきてならふはいきどほろしも

300かたくなに我はさだめつみいくさの道は直すらにいやすゝむべく

301弓はりの月夜となりぬいたづらに浪は島廻をたもとほりつつ

302大君のみことかしこみたけびつつすゝむいくさにいとまあらめや

○

午後中隊長と二人居るに、さま〳〵のものがたりきき

303ひた恋ひに恋ふるをとめのこころとはけだしいくさに似るがあはれさ

304とつぐべく心さだめて女子の一生のいのちはげしくかけし

305女子もいのちかけたる恋路には言あげせずて死なんとはする

306とつぐべき健男としりてをとめごが祈りはつくせ言あげせずも

307一生をばみぢかき夫にさゝげつつ恋ふべきひとをかへりみぬはや

六日

心身疲れ眠りがたき夜をあかして

308朝雲の群立つみれば天地にうけしいのちはたけくあるべし

309こころざし確にあるべしこゝろざし長くあるべし清くたもちこそ

310朝雲に天つ日さして大空にかゞよふみれば息づきたつも

311草ふみて高処に立てば天地をめぐりて朝の雲めぐるらし

○

312疾雨すぎたる庭にくれなゐの花びらちれり血とまがふまで

313疾雨の衝きくるなべにいなづまのまてりてうたく昼の八衢

○

七日

武威山、砲観山凹谷ノ射撃場にて実包射撃、戦跡未だ歴々、

314巌裂け階石崩れ弾屑の地に錆びたるこの跡どころ

315崖下ゆわきづる清水くまむとはしつつたゆたふこの跡どころ

〔注〕「たゆたふ」の左傍に「なげかゆ」と併記する。

八日

大詔奉戴第二年

○

316みいくさが牙かみうたきてたへにけんこのあとゞころ踏むにかしこし

317草かげに壕（わりみち）ここだ見出して思ひしぬばえ泪こぼるゝ

318繁み立てる大木の幹はことごとにたまにくだけて真日てりあつし

○

昭和十六年十二月七日暁明に靖国神社に詣づ、厳寒霜厚く気凍る、すでに神拝者、また小国民の清掃に奉仕するもの多し、その翌朝交戦に入るの報導をうけ、感慨殊に深甚なりし、

319皇は神にしませば言さへぐ夷向くべく大のらしたり

320みいくさのたけくをあれと祈るなり神ののらししみことのまにま

九日

321国遠き道の長路に見る花のくれなゐのいろは心染まずも

○

322月夜よしひとりしくめばわびしくて珠名をとめのながうたをよむ

323ふくろ夜をわがくむ酒はさかつきに妹が面わのにほひくるまで

324月夜よみくむに吾妹がおもかげのにほふがごともうごく白雲

詩人・伊東静雄 (四)

小高根　二郎

3　羅災、北余部で迎えた敗戦

昭和二十年に入ると二月から本土空襲が始まった。三月一日には硫黄島が陥落、十日には夜間大空襲で東京の枢要部は灰燼に帰した。十三日夜から十四日朝にかけての大空襲で、大阪も中央部の大半を失った。四月一日には敵はついに沖縄に上陸、島を挙げての抗戦もかいなく六月二十一日には占領されてしまった。七月に入ると空襲はいよいよ近畿全体に及んだ。六日の夜間、B29約百十機は紀伊水道から侵入すると海南市と明石付近を爆撃した。九日の十二時頃P51約五十機は熊野灘から奈良を経て大阪へ侵入、少数づつに分散して和歌山・大阪・西宮・伊丹・京都北部・大津を空襲した。昼間の爆撃がすんで、ほッと一息入れた矢先、二十一時から翌十日の二時にかけ、B29約二百七十機は五群に分れて熊野灘、紀伊半島、紀伊水道、土佐付近から侵入してくると、和歌山・堺市・大阪市南部・高知市に焼夷弾の雨を降らした。堺に来襲したのは約百機で、市の東はずれで畑地に膚接し、御陵に臨んだ安全地帯と目された北三国が丘にも延焼、静雄の借家も丸焼けになってしまった。

三月末から小学校は南河内郡丹上に疎開したので、四月十五日にまき子と花子と夏樹とはその近く平尾村菅生に移住していた。北三国が丘で留守していたのは静雄と妹りつだった。

「この日類焼でわが家焼ける。りつと二人でゐた。書籍の全部を失ふ。『コギト』『四季』友人らの署名入りの著書皆失ふ。昭和に於ける約十年間の友人らの文学運動の記念であつたのに、惜しまれる。」

そう静雄は痛惜のおもいを日記にしたためている。しかし、かねて非常持ち出しの用意をしていたのであろう、北村透谷賞の正賞――透谷の顔を浮彫りにした富本憲吉作の陶板は、ぬかりなく持ちだしていた。又、先輩や知友から貰った手紙の中から、各人一通ずつ記念すべきものを選別して風呂敷包みにし、それを後生大事に搬出していた。それが十年間の文学運動の形見であった。その夜持ち出した荷物をリヤカーに積んで、来援した花子と三人で、十二時近くまでかかって菅生に引揚げた。そこは南海鉄道高野線の北野田から二キロの山近い田舎だった。そこの、人が住むより、獣が棲んだほうが格好なあばら屋だった。

八月六日にはついに広島に原爆が投下された。三日後には故郷長崎にも投下されて、敗戦を迎えることになった。

「数日前から心臓ひどく圧迫を感じて痛み、脈博時々乱れるので、十五日は休養してゐた。高岡の西のおばあさんが来て、今日正午天皇陛下御自らの放送があるといふニュースがあつたと云つた。門屋の廂のラヂオで拝聴する。ポツダム条約受諾のお言葉のやうに拝された。やうにといふのはラヂオ雑音多く、又お言葉が難解であつた。しかし「降伏」であることを知つた瞬間茫然自失、やがて後頭部から胸部にかけてしびれるやうな硬直、そして涙があふれた。近所の人々は充分意味汲取れぬながら、恐ろしい事実をきいたことを感知して黙つてつき立つてゐた。

太陽の光は少しもかはらず、透明に強く田と畑の面と木々とを照し、白い雲は静かに浮び、家々からは炊煙がのぼつてゐる。それなのに、戦は敗れたのだ。何の異変も自然におこらないのが信ぜられない」

玉音盤のラジオ放送で敗戦を知って、「茫然自失、やがて後頭部から胸部にかけてしびれるやうな硬直、そして涙があふれた」静雄

ロセッティ小曲 (三)

森　亮

エバに先立つ　アダムが妻
リリスがことの語り言――
夫をたばかる舌聡く、
貴なる髪は黄金いろ。

この旧りし世に　いや若く
今も坐りて　み髪毛の
網をし張れば　男子たち
魂も、いのちも囚はるる。

リリスが花は　薔薇に罌粟――
匂はしき脣、濃き甘睡、
そを憧れぬ者やある。

あはれ風流人が若き眼も
汝が眼乞へれば　心肝を
髪ひとすぢに絞られし。

「生の家」第七十八歌

の心情は、日本人なら誰しもの、いや、まさしく日本浪曼派詩人としての、正気である。この正気は、いつもと変らず田畑や木々を強く照らす陽光や、静かに浮んでいる白雲、さては昼げをととのえるつつがない炊煙を、おや？　といぶかっている。「何も異変が自然におこらないのが信ぜられない」からである。神国日本が敗けたのである。なにらかの異変が起って当然である。太陽は陰るか、白雲が妖雲となって天駆けるか、炊煙もブスブスとためらわねばなるまい。しかるに自然はいつもとなにら変っていない。この平常さが静雄の胸中に鎮座していた祭壇をたたき壊したのだ。日本は神国なんぞでなかった。ただの人間が統治していた人類の一聚落にすぎなかったのだ。この瞬間、静雄は完全な人間世界へ復帰したのである。しかし、橋川文三は言葉をかえていう。

「それは一つの信仰の孤独な絶対さとその挫折の絶対さを同時にあらわした言葉であろう。その時、すでに詩人は甦る途を絶たれ、自ら悠遠な記念碑と化する運命に引き渡された」（「詩人の戦」「争日記」）と。

十三、戦後から死まで

1　ケストナー・リルケから再出発

菅生が遠いという理由よりも、通勤電車の混雑があまりにはげしいため、木・土を除いた他の五曜日は、学校の宿直室に寝泊りするようになった。

「このごろは電車ずゐぶん混んで到底朝の出勤時間に間に合はぬので、学校に泊ることにしている。一時間一回の発車で、しかもくる車来る車が大満員で、連結のところは勿論、窓にも腰かけ、腰をかけるところには皆立ち上つてそれでも身動きも出来ない。屋根の上に上る者さへある。うつかりすると三時間も駅で待たされることがある。さうしてのつて、半死半生の態で目的駅でおろされる時はぐつたりなつてしまつてゐて、一日何も出来さうにもない程だ。このごろの食事、朝ジャガイモ三個位。ひるは大豆粉のだんご。夜、一合足らずの米にジャガイモ入れたもの。おかずはなすび、かぼちやなど」（「日記」一八月二十八日）

静雄はこんな混乱した大阪を、「猥雑不義住むに堪へない」と、戦後初めて音信を復活した友――栗山理一に書き送った。「それで諫早か長崎の田舎に移住しようと思ひ、最近

弟の結婚によつて近しい姻戚になつた長崎高女の校長に頼つて転任の運動を初めてをります。……。向ふで生活が思通りにゆくなら、小説を書きたいと希望してゐます」（十一月二十九日付）

静雄は十六年間も住み馴れた大阪を捨てようとしている。そして、ホクロの看板をおろして以来の念願である、小説を書こうと願っている。この意向が固まったのは、十一月初旬弟寿恵男の結婚式で長崎に帰ってからだった。「長崎に久し振りにかへり、改めてその美しい風景、しつとりとした人情、ゆたかな物資を見直して」猥雑不義な大阪生活がいやになったのだ。そして、長崎でもしも小説が完成したら、「それを持つて、東京に出て行く」（十一月二十三日付亀山太一宛手紙）夢をもったのである。

それにしても、いかに風景が美しく、人情がこまやかであり、物資が豊かであるとはいえ、静雄はなぜ原爆の長崎へ帰ろうと願ったのか？　かつて「曠野の歌」で、死者となって故郷に帰る覚悟をうたっていたが、逆に故郷の方が先に死ぬという奇狂わせとなったので、静雄は早々と生者として帰る決意をしたのかもしれない。そういえば、弟の寿恵男は原爆ニュース映画の最初の撮影者であった。不幸そのフィルムは占領軍の押収するところとなったが、彼の肉眼と耳に焼き付け収録した見聞を、夏樹の誕生以来…詳細につけている日記にこきまぜ、そこに思いがけず出現したノワイユの幽霊や、そのかみのわがひとでも登場させたら、それこそ予期しなかった一大小説が生まれる可能性が全くないわけでもあるまい。宿直室で飯盒からむしたてのジャガイモを取り出し、髭面でフウ！　フウ！息を吹きかけながら、丹念に薄い表皮を剝きむき、一人とる夕餐。その暗くわびしいどん底生活の静雄にとって、その長崎行と小説執筆の夢は、まさに夕づつの光耀であったこと間違いない。

しかし、鉄の骨組、藁蒲団の寝台があるだけの殺風景な宿直室も、来訪者で賑わい、けっこう静雄は寂しさを忘れることができた。

まっ先に駆けつけてきたのは、よい道連れだった庄野潤三だった。彼は内地勤務だったからだ。部下百名ばかりを指揮して房総半島で砲台を建設していたのだ。その間、林富士馬や三島由紀夫と一緒に、信州に引揚げ直前の佐藤春夫を訪問した話など面白おかしく話して聞かせた。例によって如才なく土産――煙草も忘れなかった。

静雄の文学的な最後の拠り処「舞踏」を発行する斎田昭吉もやってきた。某月某日京都で馳走を用意する旨の、耳寄りな話をもってきた。

特攻に出発を予定していたところ、急に上官の姿が消えてなくなったので、練習機を駆って命からがら引揚げてきた大野海軍飛行少尉もやってきた。身柄一つの上、家も焼けていたのに同情し、静雄は炊きたてのカボチャと大豆を半分わけてやった。

北海で掃海中に戦死した長野の父もやってきた。色紙に追悼の句を書いてくれろというのである。静雄は目をつむる思いで「こころ優しき益良夫の君が思出はわが胸の筐に枯るる時あらざらむとはに」とだけ、やっと書いた。

その他未知の読者もやってきた。学徒動員の外地からの引揚げ兵たちだった。名刺代りというわけだろう、煙草を四本くれたりした。

静雄はこの日頃の複雑な心境を、栗山理一に次のように伝えている。

「大阪は十六年になりますので未練はいささかもないのですが去らうとすると実にさまざまのことを考へます。そして、それが私の今の生活に大へんいい影響を与へるやうであります。時勢を堪へる痛切さと二重になつて、一種異様な沈静な音楽と色彩とを感ずるのであります。それに四十歳という

都会Ⅶ

福地邦樹

大阪の町は
一つの盲いた白内障の眼球である
うすよごれた水晶体を透して
太陽の明りだけが
ぼんやりと差し込んでくる
網膜の血管の中を
ゾヨゾヨと自動車が通り人が通る
眼底出血の煙が
硝子体をたえまなく染めてゆく

すっかり血走った夕暮どきに
彼は取りすがるように
昔この眼でみた風景を思いだそうと努力
する
しかし　それは二度と還らぬ
とりつくしまもない幻影にしか過ぎない
のだ

ふ心理的生理的変化が伴奏してをります」（十二月八日付栗山理一宛手紙）

静雄は昭和二十一年二月、一年ばかり住み佗びた菅生から。北西二キロの黒山村北余部に引越した。黒山高女に勤める花子にとって、地元の方が遙かに便利だからだ。又、静雄が通勤するにも、駅（南海高野線・萩原天神）までの距離は二キロで前と大差はないが、一駅だけ大阪寄りなので、それだけ時間が短縮された。それに、前の馬屋のような小屋より、建具こそ不完全ではあったが、人間が住む条件も備わっていた。それに栗山に語った「一種異様な沈静な音楽と色彩」と「四十歳といふ心理的生理的変化の伴奏」とで、久しく沈黙をしていた詩心が、おもむろに発動しだした。静雄は遠距離の通勤とジャガイモ腹にもめげず街に出ると、猥雑不義の巷からしきりに詩材を模索しだした。それというのも、転任のむつかしさから長崎行の夢があやしくなり、大阪に詩人として住み果てる覚悟ができてきたからだろう。潤三はその頃の静雄を次のように伝えている。

「先生は、一日おきに街に出ることに決めて、都会の詩を作つてゐる。……。

詩が二つ出来た。一つは、パンパンガールが都会の虚無の中に生活してゐて、その中で自ら都会の慰め――それはさゞなみのやうに起つて来る――を受けてゐる。さう云ふところを書いたもの。題は「都会の慰め」こんな詩を二十位かきたい。君もさう云ふ作品を書かねばいけない。

伊東先生は、それを大変元気な調子で云はれた。酔つて居られることは酔つて居られたが、僕はその勢ひにすつかり圧倒されてしまつた。同時に、永い間模索して居られた詩作の道がやつと開けて、一つの方法を見つけられたのだなと、心に嬉しく思つたのだつた。

島尾は一月に日本デモクラシー協会と云ふところに入社したが、その日クビになつたので、すつかり陰気になつてゐた。その晩は、伊東先生と富士氏とで島尾を慰めてゐたのだつた。

この晩は、それからコンドルへ行つて伊東先生を中心に先からゐたI君やK君にN君を加へ、金を出し合つてどぶろくを買つて来ては終電車近くまで騒いでゐた。（その頃は、酒を店で販売することが禁止されてゐた。コンドルの近くにうまいどぶろくをこつそり売つてゐる店があつたのである）

伊東先生があの晩のやうに酔つて意気軒

昂としてゐたことは珍らしい。先生がマダムに向つて云つた言葉を僕は覚えてゐる。（このマダムと云ふのは、僕は大嫌ひなやつだつた。）

「君、僕は日本の金星だ。夕方、一番最初に現れて、美しく、明るく光つてゐる金星だ。マダム、この人たちを大切にして下さい」」。

（「祖国」昭和二十八年七月号、庄野潤三―「反響」のころ）

静雄は戦後初めて詩ができたうれしさで意気軒昂としていたのだ。静雄が潤三に手本とせよといったのは次の作品だ。

都会の慰め

商人らは映画を見ない　夕方彼らは
たべ物と適量の酒と冷たいものをもとめる
事務所で一日の勤めをへたわかい女が
まだ暮れるには間のある街路をあゆむ
青葉した並木や焼跡ののびた雑草の緑に
少しづつ疲れを回復しながら
そしてちらとわが家の夜の茶の間を思ひ
　浮べる
そこに帰つてゆく前にゆつくり考へてみ
　ねばならぬ事が
あるやうな気がする
それが何なのか自分にもわからぬが
どこかに坐つてよく考へねばならぬ気が
　する
大都会でひとは何処でしづかに坐つたら
　い、のか
ひとり考へるための椅子はどこにあるの
　か
誰にも邪魔されずに暗い映画館の椅子
じつと画面に見入つてゐる女学生や受験
　生たち
お喋りやふざけ合ひから――お互の何と
　いふことはない親和力から
やつとめいめいにひとりにされて
いぢらしい横顔　後姿
からだ資本の女達もまたはいつてくる
岸の崩れた堀割沿ひの映画館　かれらは
　そこで
暮れ切るまでの時を消す
暗いなかでもすぐに仲間をみつけて
何かを分け合つては絶えず口に入れる
かれらは画面にひき入れられない　画面
　の方が
友人のやうにかれらの方に近よつて来る
そしてかれらは平気で声をあげてわらふ
事務所づとめのわかい女は
かすかな頭痛といつしよに映画館を出て
　来る
もう何も考へることはなくなつてゐる
また別になんにも考へもしなかつたのだ
街には灯がついてゐて
彼女はただぼんやりと気だるく満足した
　心持で
ジープのつづけさまに走りすぎるのをし
　ばらく待つてから
車道を横ぎる

（「光耀」二号、昭和二十一年十月）

戦後の風景をあるがままに観、あるがままに表現しようとする、あの日記に見る静雄の新即物主義的な意志が、明らかに動いている。それは又、清水文雄に書き送った「これからは「観る」生活をつづけようと思ひます。そして詩は譬喩だと思ふやうになりました」（昭和二十一年十二月十四日付手紙）という態度にも通じている。

静雄は十四年前に、ケストナーの新即物主義を「なるべく事物に即し明澄な鏡での様にこの紛雑した世界に対し、それを透徹しよう」というもくろみであると解釈していたが、それと似たようなもくろみで、第二次大戦後の紛雑した世相の一角を照射し透徹しようという意図がうかがえる。

伊東は岸の崩れた堀割沿いの映画館を、都会の中の考える椅子、或いは時間を消すレジュアの場所、ないし待合わせの空間として設定している。この闇を人工した空間に、家に帰るまでに何かを考えねばならぬような気になったビジネス・ガールを入場させている。彼女はそこで女学生や受験生、それからパンパン・ガールと同席して映画を観る。が、彼女等のように映画の方から同化されぬ孤我の気質は、軽い頭痛という違和感とけだるい満足感と一緒に映画館をでるのである。

この場所は、囁きしか許されぬ沈黙が要請された暗い空間だ。聞くことだけが許容される一方的な音声の世界だ。いわば占領下の日本そのものである。戦時中の大声叱咤や号令をケロリと忘れたかのように、虚脱した日本人は、ぶつぶつという呟きか、唖のような沈黙しかできなかった。日本政府も、行政機関も、それに民間組織も、みんな自主的な執行力を失って、なにをするにも、「進駐軍の命に依り……」という御託宣をかつぎださねばならぬ時勢であり、世相だった。その日本をこの作品の映画館で静雄は皮肉っているともとれるが、もっと卒直に「紛雑した世界に対し、それを透徹しよう」という新即物主義の「明澄な鏡」のつもりなのかもしれない。その静雄の心境を、潤三は次のように伝えている。

「私のこの頃の考へは何か一つの事象なり風景が自分の心を捉へたとすると、何故それが自分の心を捉へたのであらう？　何故自分がそれを面白く心に思ふのだらうと言ふことを考へつめる。考へつめることによつて到達するその世界を書いてゆく」（同前）

静雄はこれと同じ心境で次の新即物主義的な作品ものしている。

露骨な生活の間を

毎日夕方になると東のほうの村から
三人の親子のかつぎ屋が
駅に向ってこの部落をとおる

花も哭く

吉本青司

あなたは
大切なものを奪って去った
あとに光の
アニーミアを残し
いたたまれず
とほとほと歩いて行くさきに
白い
大きな建物の姿があった
誰かに訴えなければ
誰かに
と想うにつけて　街はいっそう
暗澹としていた
あなたは
そこからも　だいじなものを
奪っていったのだ
〈若死するほどの者は
　自分のことだけしか考えないものだ〉
もう　何もいうことはない
あなたの
いた空間を　せめて
花で埋めよう
あなたは　ほんとうに
ひどいひとだ

母親と十二、三歳の女の子と
まだ十になつたとも思はれぬ男の子だ
めいめい精いつぱいに背負い
からだをたわませて行くかれら
ずん〳〵暮れるたんぼ道を
かれらはよく小声をあわせてうたつていく
そのやさしいあかるい子供うたは
いちばん小さい男の子をいたはり
またみんなをはげまして
小声の一心な合唱が
うず高い荷物の一かたまりからきこえる
それは露骨な生活の間を縫う
ほそい清らかな銀糸のように
ひと筋私の心を縫う
（いまどんなお正月がかれらにきているか）

（『新大阪新聞』昭和二十四年一月）

静雄は毎日家の前を通る担ぎ屋の親子三人を見逃してはいない。彼等は東の黒山村に買い出しにゆき、夕方に北余部のはずれにある静雄の家の前を通り、田圃道を抜けて、萩原天神の駅に出るのである。片道二キロあまりの道のりである。母親と十二、三才の女の子と十才未満の男の子。父親は健在なのであろうか？　いや、いや、禁令を犯して危険な闇商売をしなければならぬのだから、父親はいないにちがいない。戦死したのかもしれない。或いは引揚げ後、病床にあるのかもしれない。担ぎの主役は母親だが、脇役の小さい肩は小さいなりに、〈精いつぱい背負い　からだをたわませて〉いる。この女の子と男の子のいたいけな姿に、静雄はまき子と夏樹の姿をあてはめてみたこと間違いない。女の子はまき子より一、二才下、男の子は夏樹より三才ばかり年長だ。この小さな弟を励ますために、姉は〈やさしくあかるい子供うた〉を唱い、母親が唱和する。その合唱に誘われて男の子も斉唱しだす。その〈小声の一心な合唱〉は〈うず高い荷物の一かたまり〉と一緒に、やがて野面をおおう暮靄のなかに消えていく。その影が見えなくなり、声が聞こえなくなるまで、釘付けになっている静雄が見えるようだ。なぜなら彼は銀糸で夕闇に縫いつけられているからである。

この〈ほそい清らかな銀糸〉を静雄の社会主義的な良心だと説くひとがある。その解釈を間違いであるとはいわない。事実、戦後になって静雄は、「これからは社会主義の時代

棟方志功
芸業大韻

全国に散在する棟方画仙の襖絵・屏風絵・壁画・障壁画・ドンチョウ・軸もの・額など数千点の中から傑作一五〇点を厳選して収録。先の「棟方志功板画大柵」と合わせて棟方芸業の一大集成。

★解説者★
谷川徹三・河北倫明・保田与重郎・浜田庄司・柳宗悦・河井寛次郎・梅原竜三郎・川勝堅一・小高根二郎・小林正一・水谷良一・大原総一郎

代表作品五点を選び額装用として添付

一時払　¥29,000
分割払　¥32,000

限定　3000部

講談社

だ。お前たちも社会主義の勉強をしなさい」と、花子に語っていたほどだ。しかし、〈露骨な生活の間を縫う　銀糸〉とは、醜の中の美、せちがらさの中のゆとり……といったほどの、唯美的な感慨と解釈した方が適切だ。

そういえば、静雄が初めて詩精神を発見したときもこの〈銀糸〉を使っていた。〈私が青空に身を委ねた時〉〈縫ひつけられた幾条もの銀糸が光つた〉（昭和六年十一月十六日付百合子宛手紙）。この〈銀糸〉も吹き上げる噴水の譬喩——唯美的な表現だった。

そう解釈しないと、〈いまどんなお正月がかれらにきているか〉の結句は、あまりにも母子たちにとってそっけない。このそっけなさは、静雄の心情が社会主義的であるよりも、むしろ新即物主義の「あるがまま」のにおいに近いといっていい。

ともあれ、この未曽有の生きがたい時を、〈あかるい子供うた〉を唱ひながら、懸命に生き抜こうとする母子の姿に、静雄はゆくりなく敗戦で自決した心友・蓮田善明の妻子の姿を、想い浮かべたはずである。と、いうのは、昭和十二年の夏、高野山での別れの日に、年格好の同じ愛児の土産に鶯笛をもとめ、ともに試吹してみた仲だったからだ。

善明の死を静雄が知ったのは終戦の翌年の夏だった。蓮田家に公報が入ったのは六月だから、その後であったろう。

善明は昭和十九年の正月から浸北は小スンダ列島中のスンバ島の守備に当っていた。しかし、アメリカ軍の蛙跳び作戦の裏街道になって、進駐が無意味となったのでシンガポールへの転進が命じられた。善明らは鰐のような形の列島を一五〇〇キロ島伝いに歩き、海峡を渡ってマレー半島のジョホールバールにたどり着いたのは昭和二十年の春だった。そこで英印軍とマレー土民軍に備えて陣地を構築中に終戦を迎えたのである。新任の連隊長は、士気旺んな熊本部隊の能動性を警戒したからだろうか、新王宮での軍旗告別式の訓示で、先手を打って、敗戦の責は天皇にあるとし、日本精神の壊滅を説いた。後日、善明はその非を諭し前言の訂正を連隊長に迫ったが、容れなかったのでやむなく拳銃で射殺し、自らもまたコメカミを射抜いて四十二歳の生涯を閉じたのだった。

この事実はいろいろに誤伝された。誤伝された噂は静雄にも伝わった。「南方の某小島でピストル自決をやられた由」と二十一年夏に富士正晴へ伝えた。進駐地スンバ島を決行地と間違えている。又、新秋には百合子にも同じく善明の自決を報じ、「立派な人格の人でありました」と哀惜した。さらにその具体的な心情は、晩秋清水文雄宛に次のようにたよりしている。

「丁度一年目の八月二十日ごろでありました。その日は颱風の余波が、河内平野を過ぎようとして、しきりに雷鳴のある日でありました。それから二三日目に未知の青年（三高の学生）が来訪し、その人が話のついでに、蓮田さんに対する敬愛の衷情を述べましたので、その最後のことををしへましたら、急にその青年は、顔面蒼白になり、貧血をおこした模様で、失礼しますと云つて、私の前に仰向けにねころびました。私は驚くと同時に、この青年の肉体にまでしみこんでゐた蓮田さんの影響を思ひ、痛切の情にうたれました。私は『ひとりの友を失つて、他の多くの友をも遠ざかつてゐたい気持』とそのころの心境をノートに書きとめておきました。ほんたうに壮年時代が過ぎたといふ感がいたします。『余生』といふことも考へます。私はただこれからは『観る』生活をつづけようと思ひます。そして詩は譬喩だと思ふやうになりました。」（昭和二十一年十一月四日、清水文雄宛手紙）

この手紙によると、善明の死を静雄が知っ

たのは丁度一周忌の八月二十日頃、台風の余波がまさに河内平野を過ぎようとして、しきりと雷鳴がした日であったという。そして、二三日後に来訪した善明の愛読者だった三高の学生が、善明の死の真相を知ると、脳貧血をおこして静雄の前に横たわった出来事を伝えている。恐らく静雄は、善明の自決だけでなく、連隊長の他殺まで伝えたのだ。その頃やはり静雄を尋ねた富士正晴にも他殺事件を伝え、「ひとりで死にやいいのに……」（「祖国」追悼号、静雄）と述懐していた。アイドルが殺人犯であったという、あまりにも懸隔のある落差……。そこから落雷が生じて学生を撃ったのである。静雄もまたこの学生の衝撃を知って、「痛切の情」にうたれたのだった。その痛切の情とは、言葉を変えていえば、「ひとりの友を失つて、他の多くの友をも遠ざかつてゐたい気持」であったのである。それは古い交友へのサヨナラなのだ。終戦ま近、ホクロの看板を降ろした衝動的だった自分の行為が、今にしてわかる、古い世界へのサヨナラだったのだ。

夏の終り

夜来の颱風にひりはぐれた白い雲が
気のとほくなるほど澄みに澄んだ
かぐはしい大気の空をながれてゆく
太陽の燃えかがやく野の景観に
それがおほきく落す静かな翳は
……さよなら……さやうなら……
……さよなら……さやうなら……
いちいちさう領く眼差のやうに
一筋ひかる街道をよこぎり
あざやかな暗緑の水田の面を移り
ちひさく動く行人をおひ越して
しづかにしづかに村落の屋根屋根や
樹上にかげり
……さよなら……さやうなら……
……さよなら……さやうなら……
ずつとこの会釈をつづけながら
やがて優しくわが視野から遠ざかる

（「文化展望」昭和二十一年十月号）

飛び去るはぐれ雲はまさしく善明の霊魂だ。台風となって南の海を渡ると遙々サヨナラを告げにやってきたのだ。静雄はまたこの「夏の終り」で彼のサヨナラにこたえ、併せて古い友らへの袂別を歌っていると考えていい。

2　サロンの夢想とリルケへの回心

静雄は善明の死を契機として、多くの古い友たちから遠ざかったが、若いか、それとも新しい友たちに対しては、むしろ自分の方からも近付いていった。根が寂しがりやの彼は、とうていひとりぼっちでいることに耐えられなかったからだ。

元老格の富士正晴。昔馴染みの林富士馬。教え子中での頭領庄野潤三。潤三を介して知った島尾敏雄。教え子斎田昭吉。その他に、Iがあり、Kがあり、NやSたちがあった。それに少し遠いけれども逗子には、東京から疎開した和製ノヴァリス・田中光子があった。これらの若い魂たちとの交渉から、純粋な文学のサロンを夢想したのである。

「文学者は、文学のために生活すればいゝ筈だのに文学以外のことに時間を費してゐる。何故、ひたすら文学のためにのみ生活のすべてを費さないのだらう。リルケはさう反問してゐる。彼は前大戦後、十七年間書けなくて煩悶して、各地を放浪し、到々あるところの林の中で、遂に自分の苦しみ、探つてゐた詩の世界を発見し、そこでぐんぐん書いた。『ドゥイノの悲歌』、『オルフォイスに捧げるソネット』がさうである。我々も、本当にもつと純粋に文学のことばかりやつて、いゝ作品を生むことの出来るやうな生活と環境に身を置かなければいけない。『だから』と先生は云はれた、『僕たち、うんとこれから文学青年風の生活をしませうよ。そして先づ零囲気を作りませう』」

そこで、僕は伊東先生と一緒に、この夏休みには、どこか田舎の静かなお寺の離れでも借りて、合宿しませうと云つた。先生は、じゃが芋を持つて行き、また向ふで米の買ひ出しをやつて一緒に自炊しようぢやありませんかと云はれた。」

（「祖国」追悼号、庄野潤三―「反響」のころ）

静雄はサロンの雛型としての合宿を、愛弟子潤三と計画をしたが、あまりの食糧難で、その実現をみなかった。若い魂たちに取り囲まれて、その中心で蠟燭のように燃えつづけたい。その念願は次の作品によくあらわれている。

中心に燃える

或る人の詩集の後に

中心に燃える一本の蠟燭の火照に
めぐりつづける廻燈籠
蒼い光とほのあかい影とのみだれが
眺め入る眸　衣（ころも）くらい緑に
ちらばる回帰の輪を描く
そして自ら燃（みづか）えることのほかには不思議
な無関心さで
闇とひとの夢幻をはなれて
蠟燭はひとり燃える

（「四季」Ⅳ号、昭和二十二年四月）

副題「或る人の詩集の後に」の「或る人」とは、田中光子のことである。ホクロの看板を降ろしたての静雄は、東京で彼女の詩集の添削を手伝ってやったが、その後にできた作品を詩集に編んで、また添削と跋とを求めてきたのである。

「原稿とどいたのが十月十三日、それでこんなにおそくなりました。字句ところどころ不隠当に思へるところ発見しましたが、なほしてゐたら限りなく、又所詮はあなたの息吹みたいなものゆゑ、直しやうもない気もし、常識にそむいてゐるところもうちすてておきました。

跋はやはり詩にしました。（これは明日中にでも速達してお手許にお届けします。）

これはあなたの詩集を機縁にして出来たものですから強ち、跋として不適当でもないと思つてゐます。

はんぺん

高梨一男

上野桜木町へ抜ける
公園の
夕闇に
仄白い物が落ちていた

はんぺん
半月形のはんぺん

竹の皮をはみだした
裸のはんぺんは
ぶるるん
ぶるるん
顫えていた

――私は憶い出す　三十年の昔
上野公園の夕闇を

「四季」正月号に出す予定、これも予めお許しねがつておきます。一流の詩人にあなたがなるためにはひとり合点めくあの文章、是非一度は直すやうにしたいものですね。大へん惜しいですね。もつと近ければ一つ一つにとひただし筆を入れて貰ふのですが……。」

（昭和二十一年十月十八日付田中光子宛手紙）

ここで静雄が、「中心に燃える」を「あなたの詩集を機縁にして出来た」といっているが、むしろ「詩集添削の場としてのサロン構想を機縁にして出来た」といった方が適切である。末尾の「一つ一つとひただし筆を入れて貰ふ」という願いこそ、実は静雄の本音だからである。

ともあれ、静雄はこの「中心で燃える」で、文学以外の一切を顧みなかったリルケのあの純粋さを念願としている。その念願は〈自ら燃えることの以外には不思議な無関心さ〉で〈闇とひとの夢幻のそとで〉ひとり燃える蠟燭に象徴しているわけだ。その火照で廻る切り絵燈籠は、つまり若い魂たちの比喩なのだ。この蠟燭に関連して、大山定一は次のようにいっている。

「ぼくは戦後、ちいさな雑誌を編集していて、その一冊にレンブラントの素描をつかったことがある。一本のローソクのもとで、熱心に何かを削っている男のデッサンだった。いわゆるレンブラント光線の不思議な明暗のなかに、ローソクの光が静かな輪をつくっている。じっと刃物の先を凝視する、はりつめた男の横顔が描かれている。一点に集中する力の異様な緊張が、ひしひしと迫ってくる感じの素描だ。「これが詩です。この集中と緊張が詩です」と、伊東静雄がいった。ぼくは「反響」のなかの「中心に燃える」や「帰路」という詩をよむと、いつもかれの言葉を思い出す。「見ることをまなぶ」といったり「最後の最後まで見とどける」といったりした、リルケの根本態度が、このようにして伊東静雄のなかで、かれの眼になり、かれの表情になり、かれの精神になるかのようだ。」

（「伊東静雄全集ノート」昭和三十六年、大山定一―伊東静雄とドイツ抒情詩）

大山はここで、リルケの「見ること」「最後の最後まで見とどける」根本態度から静雄は学んだというが、もっと推しつめていえば、この二営為を通しての「抽象」と「還元」と「単純化」をものにしたのだというべきだろう。廻燈籠に切り絵されている図柄は〈蒼い光とほのあかい影〉に抽象され、その回転する光絵（ソログープの影絵と反対）を鑑賞する家族は〈眸〉〈衣〉の二名詞に還元され、燈籠をつるす軒先の庭に〈緑〉一字に単純化されているからである。

大山は「中心に燃える」の他に次の作品にも、リルケの態度を認めている。

編集後記

十一月十日。心斎橋の大丸百貨店で催された棟方・浜田・芹沢三巨匠展で、棟方志功画仙とチヤコ夫人にお目にかかり、文化勲章のお喜びを申し上げた。実は受章決定の数日前に、久々の画仙の来阪をお迎えして、猪名川上流の東光寺へご案内して、そこの境内の立樹に彫られた木喰上人の子安観音を見ていただく約束であつた。ところが受章である。にわかに画仙はお忙しくなり、その計画は後日に譲らねばならなくなつた。しかし、互に掌と掌を取り合つて、そこから頂いた、四十年の恩愛のぬくみは、なによりも有難かつた。

二十三日。新潮社の池田雅延氏が来訪された。たまたま「文学界」に奥野健男氏が「蓮田善明の死の謎」を書いて下さつてる由をうかがつた。「朝日新聞」「えつらん室」に書いて下さつた拙著評の補筆だつた。感謝申し上げる。

二十五日。昼食後近くの理髪屋の寝椅子でウツラウツラしていたら、突然特別ニュースをテレビが伝えた。三島氏の蹶起と割腹である。初め絶命が伝えられ、すぐまだ息があると訂正された。困乱したホット・ニュースだつた。モミあげに剃刀を当ててもらつていた僕は、瞬間雷撃をうけたようになり、顔から血の気が引いた。やがて、割腹の上介錯されたという報導が伝えられた。「阿呆なことをしよつて……」と呟きながら剃刀を使つている主人から逃げるように、僕は早々と退散した。帰つてくるとすぐ「実業之日本」の前之園定良氏（VIKING会員）から電話があつた。犬死であるということと、拙著「蓮田善明とその死」の三島序との関連性についてであつた。早まつてくれた！　そうした暗澹とした感慨で胸が苦しくなつた。テレビに釘付けにされ、早速組みあげられた新聞の報導と諸家の感想をむさぼり読んだ。元新聞記者の松本清張氏のさかしらぶつた解説にヘドをもよおした。どこへも訴えようの

On a Serene Day

Shizuo Itoh

On a serene day as it happened,
My aged mother was forced to return home,
I must so tell you,
My wandering half, loved one.
Not everyone is allowed
To live where he wishes to.
Your letter from a distance
Came to tell me
That you had arrived and stayed for some time
Upstream of the River Chikuma,
Where at the end of April
Snow one meter deep was still left in the sunshine,
On the surrounding mountains and even on the village paths,
And in May at last
Cherries blossomed and right apple trees were seen
    in the backyard!
To be loved, however,
You are so bidden.
In the home land where we had both lived as infants,
We donned broad-brimmed hats already in April;
Also, in the dazzling sun,
On the ground hard to walk on bare foot,
We planted a variety of the apple tree
Which could only anticipate green fruit!
I can guess right,
Bidden one, my wandering half,
What on earth is it
That you are so hard trying
Not to believe there.

Translated by Ken Miyagi

果樹園　一八〇号　昭和四十六年二月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第180号

をらびうた（遺稿）(九)　蓮田善明
をらびうた（遺稿）(九)　蓮田善明
伊東静雄研究(三)　小高根二郎
三島由紀夫烈士を思ひて　緒方武亞
ロセッティ小曲(三)　森　亮
飛　翔　吉本青司
篠山街道　高梨一男
編集後記

をらびうた（遺稿）(九)

蓮田善明

十日

325今の世にわびしきことは拝むべきを拝むとふこと忘れゐるしはれ

326今の世にわびしきことはなりはひの神のみこゝろ忘れゐるしはれ

327今の世にわびしきことはつるぎ刃のさやけきこゝろ忘れゐるしはれ

328今の世にわびしきことはふることのながきこころを忘れゐるしはれ

329今の世にわびしきことはあそぶてふ神のこゝろを忘れゐるしはれ

330今の世にわびしきことはさきはひのいさむこゝろを忘れゐるしはれ

331今の世にわびしきことはこひといふいのるこゝろを忘れゐるしはれ

332今の世にわびしきことはさかしらをかしこきことに思ひゐるしはれ

333今の世にわびしきことはいきどほり狂ふこゝろも忘れゐるしはれ

334今の世にわびしきことはわぶことのいたきこゝろを忘れゐるしはれ

335今の世にわびしきことは大いなる神のさかりを忘れゐるしはれ

○

336異華（ことばな）のこきを念はず荒野らの茅花なつかしみ時を経につつ

337疾雨のすぎにしあとの露重み茅花穂垂りぬ揺れんともせず

○

338疾雨の去りて日照れば百鳥の諸声たつもかしましきまで

339山鳩の家近き枝にこもりつつなくがなつかし声さぶしくて

満月

340異くにの高樹のかげにもちづきのにほひつるかも白たまの如

341さやけきますみの空に白玉のもちのおほ月わたりかゞよふ

○

342もちの月　高てりのぼり　みさくる　空の極（そき）　ひとなみに　かゞよふみれば　海潮（うなしほ）を　しぶける風の　染み委れて　ありたる時の　大海の　奥浪わたり　船ぎほひ　すゝみし時の　心との　たけきいさみを　さかり経る　陸（くが）の暇（のどま）の　日長きを　念ひ出でつつ　いぶせみて　憂ひまさるも　もののふ吾は

反歌

〔注〕歌を欠く。

十一日

343焼太刀のとくと念ひしみなと出の日はさだまりぬいそぎてな伴

344いで行かばここもすぎにしふるさととなつかしみせむ旅なるわれが

345つはものの いのちすぐべきいくさ路のさき路いたらむ海のそきへに

○

果樹園　一七九号　昭和四十六年一月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

蓮田善明とその死

小高根二郎

文人の倖は、凡百の批評家の讃辞を浴びることよりも、一人の友情に充ちた伝記作者を死後に持つことである。しかもその伝記作者が詩人であれば、倖はここに極まる。小高根二郎氏のこの好著を得て、蓮田善明氏は、戦後二十年の不当な黙殺を償つて余りある……　三島由紀夫

内容

第一部
「豪僧の父・慈善」～「「万葉末期の人」としての家持論」に至る十七章
第二部
「応召と賜死の「大津皇子論」」～「生還の惑いと「方丈記」」に至る十五章
第三部
「遁世の願いと阿蘇行」～「死・それから」に至る二十章

¥3,600

東京都千代田区神田小川町二一八
振替東京四一二三
筑摩書房

ない詰屈から、すでに首と胴がバラバラになつている三島氏に、「カクテハ　リユウ　ト　ナリタマエ」という弔電を打つたらいささか心が和んだ。眠りに陥るまで三島氏との因縁をしつこいほど反芻回顧していた。

忘れもしない昭和十九年、中河与一氏が発行していた「文芸世紀」七月号に、まだ学習院高等科生徒だつた氏は小説「朝倉」を発表した。母娘二代にわたり男二人を持つた女の王朝悲劇だつた。僕は当時中国戦線にあつたが、遺品として爪と一緒に雛ノウに秘めていた詩「或る遺書から」を発表した。思えば初めから不吉で因縁し合つたわけだ。

初めての出会いは昭和三十四年十月梅田の阪急百貨店の書籍売場だつた。「鏡子の家」のサイン・パーティーの席上だつた。その頃僕は蓮田善明伝の資料の蒐集に夢中になつていて、三島少年から善明及び敏子さんにあてた手紙二通と、追悼録「おもかげ」に三島氏が墨書した詩の写真を入手していて、その収録の許可を得る必要があつたからだ。彼は快諾した。そして彼は「鏡子の家」の見聞きに署名したうえ、詩の結句「その身は漠々たる塵土に埋れん」を書いてくれた。

昨年八月十九日、熊本市水前寺会館で催された善明の二十五回忌に、はるばると花篭を託送してくれた。白百合が特に印象的だつた。十月二十五日荻窪の昔茶料理桃山で東京の追悼会が開かれたが、篠突く雨の中を三島氏は出席してくれた。そして拙著が刊行された後で、蓮田選集をまとめたいので、その時は協力してほしいという申入れを受けた。

今年の一月八日、待望の「蓮田善明とその死」の三島序が筑摩書房に渡された。テレビ座談や「週間ポスト」によると、元旦の夜三島邸に招かれていた丸山明宏氏と村松英子さんは、三島氏の背後に、アゴ紐をかけ軍刀らしいものを差した人影を見たそうである。それは三島氏には見えなかつた由……。或いはその夜彼は序の構想を考えてくれていたのかもしれない。僕は担当の東博氏から彼の名文を見せられた時、「蓮田善明は……文人としての美むべき好運を担つた。私ははんどこれを嫉視する」という冒頭の文章に、身慄いするような異様な感銘を受けたことを思い出す。

三月二十二日。新宿紀伊国屋ビルで拙著の出版記念会が開かれた。三島氏は丁度入隊中で欠席した。氏が帰都した時は、僕の離都した時だつた。こんな因縁だつた。

十一月二十六日。サンデー毎日の中西靖忠氏から、三島序と僕の跋に見える三島書簡で、死は早くから覚悟されていたように見受ける……といつてきた。僕は否定しなかつた。

二十七日。会員の布引弥太郎氏から三島悼歌が送られてきた。

二十八日。読者の染谷一夫氏より次のような手紙をいただいた。「三島由紀夫が自害しました。それを知つたとき、僕はたちまち蓮田の死が二重映しに視えました。そして、御著の序を読みました。最初に読んだときには気がつきませんでしたが、更めて今日三島の自決を知つて読みなおしてみますれば、あきらかに、蓮田に対する殉情の吐露と將に遺書であることが知れました」云々。

(O)

*　*　*

果樹園　第一七九号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年一月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五の八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社（電話池田六一・八三一七）
定価　四〇円　送料　二〇円

346ありつゝもたけくさやけみ旅にしてめこら
しぬばえ泪ぐましも
347うからからがかけてしぬべる草枕旅なるわれ
がさやけくありけり
348もち月のますみにてれる大空のくまなく子
らがおもほゆるかも
349ふるさとは霜夜をいたみもち月を天路振さ
け旅をしぬばむ
350ふるさとは凍る霜夜をいねがてに旅なるわ
れをしぬばむ妻が
351うからからが血とあるわれや草枕旅なる島に
さやけくありこそ
○るも
352草枕　旅なるわれを　天ざかる　くにのう
からが　己が血と　恋ひしぬぶらむ　隔りて
言は通はね　しぬびつる　心われ知る
わが念ふも　めこらが胸に　眼交ひに
相見るが如　清明けく　うつりてあらむ
かゝれこそ　さやけくわれが　いのりつる
かも
○
353遠妻は　真澄の月か　もち月の　くまなく
てれば　にほひつつ　すがたしぬばゆ　な
ぐさもる　すべしらねば　酒くみて　酔ひ
泣きせむと　さかつきを　かさねてわれ
が　夜ふかすかも

反　歌

354さかつきの一杯ごとに遠妻の面かげしぬぶ
月の今夜は
355うからからはわが血にあればすみさえて月い
や照るに恋ひまさるかも
356然ばかり遠き家路をしぬびつつさき路はす
ゝむもののふの伴
357ちゝのみの父に抱かれ飯はむをたのめる子
ろがいかにせるらむ
358家にして見れど飽かぬを草枕旅なるわれが
思ひしぬぶ子ら

十二日

天皇大神宮御親拝の日なり、晨旦口噤ぎ例
の如く遙拝、体操、木刀振り、みそぎす、
空しづかにはれわたり、百鳥の声にぎは
ひ、のどかなり、
○
359かけまくも　あやに尊く　言はまくも　ゆ
ゆしきことぞ　天照　日大神の　大御前
清めたまひて　やすみしし　吾大君の　を
ろがむと　すゝみたまへる　神さびて　つ
げますことの　神からと　ねぎますことの
言はむすべ　せんすべしらに　ゆゆしく
畏きろかも

反　歌

360大君は神継ぎませば御民は身をたなしらず
いはひ仕へつ

十三日

361すゞ風の吹き抜くなべにつはものがつくり
し鈴をならしつるかも
362大き窓に真照る空あり青いろはかしこきば
かり思ほゆるかも
（又乗船の日延ぶ）
363さかつきにうかべんと思ふうなの上の明月
すぎばよしもなきかも
○
364いくさうたうたひとよもす宵闇の空をめぐ
りてしるきいなづま

発熱臥床

〔注〕ここに「身ほてりて心たゆめど
……」の歌を書き、あとで消す。

十四日

365身ほてりてこゝろたゆめる目交ひに茅花そ
よげり白くほけつゝ
366わがめづる茅花を病めば目をおかず見つつ
たぬしも白き茅花を
○
367思ふどちつどひてくみし年酒はさかりにく
むとわれに告げこせ

○
368宿舎の東側の丘といつてもすぐ目交ひに
あるのだが、その丘の草叢に、ほんの一
かたまりながら茅萱がまじつてゐるらし
く、白い穂花が斑のやうに生え、朝夕こ
このベランダや窓戸から見られ、私は殊
にこれをながめるのを好んだ。必ずしも
異花をしりぞけるとではなく、ゆくりな
く茅花のなつかしさをしつたのであつ
た。昨日今日少しく不気分で床について
ゐると、自然に見るともなくてもそこに
視線が真向かふためによしない暇々に目
を移してたのしんだ、故国ならばもうこ
れらの花も無い、まして他のみどりなす
草、くれなゐの花など思ひもかけぬ、し
かしやはりここも北半球なれば、今は冬
とて、茅花などもさきまじるのであらう。
よくみれば数日前より穂花もほゝけ白さ
も銀に近く枯れてゐる、私はそれにわづ
かながら、雪の幻影をゑがきなどもし、
少しほてる頭をのどめたりしてゐた、ひ
るすぎ、曇つてゐた空から疾雨となり、
それよと見やるに、おのが向き〳〵に立
ち並んでゐたあの白い穂花が、右に左に
そよぎみだるゝがうちに、雨滴にうたれ
つつ次第に濡れてゆくにつれ、恰度雨に
とける雪のやうに、その白いいろは目路
からうすれ〳〵て消えていく、その茅花
をめでながら
369ありつゝも消ぬと思ひし茅の花はふりくる
雨に消えぬ雪かと
370おのが向き並みし穂花の吹きみだりなびく
がまにまぬらす疾雨
それが雨もすぎ、殆ど他の草とまがふま
でにぬれそぼつてゐた茅花が、ふと何か
きらめく光りを感じさせ、露がひかるの
かと思はれたが、そのうちに、一穂々々
と白さが浮いてくるのを見れば、雨滴が
落ちて次第にもとの白さにかへらうとす
る、そのかそかないろあひであつた、し
かしまたもふりくるしき雨にたちまち色
がしづみ、細々とした白い、そして又他
の草の中にまぎれてしまふのを、
371雨霧ふ丘べの茅花いろきえて心はありて思
ほゆる君
○
372合歓木の大木の枝の繁こもり鳴く山鳩は花
ちらしつゝ
373朝に日に赤に咲きつぐ花の木にむれゐちら
せる白斑小鴉

蓮田善明とその死

小高根二郎

文人の倖は、凡百の批評家の讃辞を浴びることよりも、一人の友情に充ちた伝記作者を死後に持つことである。しかもその伝記作者が詩人であれば、倖はここに極まる。小高根二郎氏のこの好著を得て、蓮田善明氏は、戦後二十年の不当な黙殺を償つて余りある……　三島由紀夫

内容

第一部
「豪僧の父・慈普」～「「万葉末期の人」としての家持論」に至る十七章

第二部
「応召と陽死の「大津皇子論」」～「生還の感いと「方丈記」」に至る十五章

第三部
「近世の顧いと阿蘇行」～「死・それから」に至る二十章

￥3,600

東京都千代田区神田小川町二一八
振替東京四一二三
筑摩書房

○

374 えみしらが肥えし膏の臭ひたる街あらため
よみこともちびと

375 天にぎし国にぎしますすめ神の遠のみかど
はゆたにあるべし

○

376 いねがたき夜にはなれてしかすがに子ろ思
ふにたへがたきかも

伊東静雄研究（三五）

小高根二郎

大山定一は「中心に燃える」の他に次の作品にもリルケの態度を認めている。

帰路

わが歩みにつれてゆれながら
懐中電燈の黄色いちひさな光の輪が
荒れた街道の石ころのうへをにぶくてら
す
よるの家路のしんみりした伴侶よと私は
思ふ
夜ぢゆう風が目覚めて動いてゐる野を
かうしてお前にみちびかれるとき
いつかあはれなわが視力は
やさしくお前の輪の内に囚はれて
もどかしい周囲の闇につぶやくのだ
――この手の中のともしびは
あゝ僕らの「詩」にそつくりだ
自問にたいして自答して……それつ
きりの……
光の輪のなかにうかぶ轍は
昼より一層かげ深くきざまれてあり
妖精めくあざやかな緑いろして
草むらの色はわが通行をささやきあつた

（「改造」昭和二十二年三月号）

この光と影に取材した作品に、赤彦の〈ちようちんのうすき明りは足のへに落ちてゆすれぬ霜のけはひを〉が投影したことは既述した（参照一の3）。その赤彦の霜の〈けはひ〉という投影を、リルケの「最後の最後まで見とどける」執念が、〈轍〉を昼間より一層かげ深く刻んでみせ、なにやらブツクサと呟いて通りすぎる静雄を、路傍の草むらに噂させているのである。当時、静雄のこの懐中電燈で見送られた島尾敏雄は、次のように述懐している。

「大阪のつとめをやめてから私は、神戸から大阪に出たあと南海電鉄の高野線に乗り、長い時間をかけて彼の北余部の家をひとりで訪ねることをはじめた。そのようにして訪ねて行っても彼が不在のときにぶつかることも多く、そうすることによって私はなにを求めていたのだったか。また夜道を懐中電灯で照らし、駅までの長い田舎道を送ってもらいながら、彼がやっとつかまえた詩の主題をむちゅうで話してくれた日など、帰りの長い車中を私までほてった頬でさまざまな思いの去来するはずんだ時間を持つことができた。そう、たぶん彼は若々しくはずんでいたのだった。彼のしなやかなしたたかさを持った思考の魅力が私をとらえてはなさなかったのだ。」

（「季刊芸術」昭和四十三年春、島尾敏雄――伊東静雄との通交）

はるばる神戸から尋ねてきてくれた敏雄を、駅まで懐中電燈で見送る静雄の意向と、見送られた後まで車中で興奮している敏雄の志向の間には、たしかにサロン形成を静雄に思い立たす雰囲気がある。その雰囲気が現実になる可能性を想わせるうれしいたよりが、やがて光子から舞い込んだ。

「速達拝見しました。こちらで勉強したいと仰有る御希望、私も同感出来ます。私はいい先生ではありませんが目下のところあなたの周囲では私よりほかにその役目を果すものはあるまいと信じてゐます。出来るだけ、室をさがします。就いては「晩春」の出版暫く見合はせて、訂正してからにしてはどうです。わたしは特にこのごろ語格の正しさ、用語の素直さ、を重んずる気持が強いので、あなたのどのお作も大へん不具に見え、それが惜しくてならぬのです。あなたの資質に就いては、今のところ私が一番の同情者であるので、その上で不具と率直に申すのです。」

（昭和二十二年十一月付田中光子宛手紙）

大阪で勉強したいので貸間を探してほしい……という要請が、光子からあったのである。なんという僥倖だ。夢の方からやってきたのだ。彼女の部屋はサロンにも利用できる。静雄はさっそく貸間を物色さすと、次のように彼女に知らせている。

「わたしの友人（詩の方の私のお弟子みたいな人）が、恰好な部屋を中学校の近所にみつけてくれてゐます。

ブルジョアの大きな家の由。友人の親類。その友人らもあなたのおいでを喜んで期待してゐるやうです。ついては夜具や食事はどうなさるおつもりですか。その点をその友人は知りたがつてゐます。小麦粉を持つておいでになつて、パンにやかせ、くわん詰をおかずにすれば、別に炊事道具も入らんでせうが。尤も時々だつたら一緒に御飯位炊いて上げてもよいさうです。

これらの具体的な計画大至急御返事下さい。これは「晩春」を訂正する御仕事として私は賛成なのでその前に「晩春」を出版してしまはれるのでしたら、私の興味は半減することもつけ加へておきます。」

（十一月十一日付手紙）

住吉中学近くの絶好な位置。宏壮な邸の一室。喜びと期待で彼女を待ちうけている若い同志たち。静雄は炊事にまで気をつかっている。彼の胸にはもう立派にサロンができあがっているのだ。そこに鎮座する詩の女神――メイド・イン・オキュパイド・ジャパンのノワイユ光子。文学以外の一切を捨象した純粋な環境と文学青年らしい生活……。そこから悲願とする小説を執筆する契機がつかめるかもしれない。しかし、それはあてはずれの残酷な夢だった。それとも死の予告を前にした、生涯最後の恩寵の夢だったといった方が適切かもしれない。というのは、数ヵ月たった昭和二十三年七月、彼女は、待ちうけている大阪ではなく、京都は北白川に居を移すと、彼女を紹介した伯父という触込みの大塚から、光子の興味は詩から小説へ移り、すでに川端康成に弟子入りしている旨、知らされたからである。

ちなみに彼女は後年になって小説「鯉の肌」（「新潮」昭和三十七年十月号）一篇を発表したが、その中で、「罪無い先夫人を知らず知らずに追ふやうな運命を持つた美貌のお祖母様、花を追い廻して世を終へた母上、そして私は妻をもつ人を恋して別れ、今、ただ一人で生きて行かなければならない」と、ノワイユのように妖艶な女の血統を述懐している。

3　終の栖・元陸軍幼年学校だった病院

サロンの夢がついえたことは静雄にとって一つの打撃であったことは間違いない。それに蓮田善明とともに、その帰還を心待ちにしていた心友・中島栄次郎が、フィリッピンはルソン島で戦死していた事実が判明したことも、落胆の種になったことも確実だ。それに学制改革のごたごたで、二十年来つとめ馴れた住吉中学から、阿倍野高女に転任しなければならなかった事情も、一種の虚脱状態を醸成したことは否めない。静雄は意気沮喪をした。「ずゐぶん永くお会ひしませんね。この、お会ひしなかつた間、私はいろんなことが原因で、すつかり意気沮喪して暮してゐまし

た」（昭和二十三年五月二十二日付）と、富士正晴にたよりしなければならなかったほどである。

しかし、この意気沮喪のも一つの原因は結核菌だった。そ奴はすでにジャガイモ腹で栄養失調になっている肉体に巣くい、肺臓だけでなく、意気までも虫食みだしていたのである。例年の夏であれば、少しばかり肉体的に不調であっても、強い陽光を見ただけでモリモリ生気を感じ、蘇生の思いをするところである。ところが静雄は夏中ずっと胃腸のぐあいがわるく、死んだみたいに弱って寝ころんでいた。恩師の穎原退蔵が八月三十日に京都の大将軍西町で死去したが、静雄は葬儀にも参列しなかった。その訃は新聞にも報じられたし、野間光辰からも通知があったはずである。師弟の道に厳しかった静雄にしたら、全く異例の怠慢である。よほど肉体的にまいっていたとみねばなるまい。彼はやっと冬になって、「この夏はひどく弱って――身心共に危い大転機に立ってゐるやうな脅迫観念で、ぐったりして二ヶ月ほど弱ってゐましたが、このごろはすこしましになりました」と（昭和二十三年十二月十二日付手紙）と桑原武夫に知らせている。そしてその衰弱の原因が肺浸潤であることを認めているのは年が明けてからだった。「夏からずっと気分悪かったのですが（肺浸潤）最近は好調で、詩のことも熱心に考へてゐます」（昭和二十四年一月二十四日付富士正晴宛手紙）、そう、正晴にだけは告白している。ところが花子の「病床記」（「祖国」追悼号）によると、「静雄の胸部に軽い浸潤のある事が分ったのは昭和二十四年春の学校集団検診の結果」ということになっている。そこに二三ヵ月のずれがある。たぶん静雄は、自覚症状があったが家族の心配をおもんぱかって、秘密にしていたのであろう。そういえば詩にはもっと早く兆候があらわれていた。

詩作の後

最後の筆を投げ出すと
そのまゝ書きものの上に
体をふせる
動悸が山を下つて平地に踏み入る人の
足どりのやうに
平調を取り戻さうとして
却つて不安にうちつづける
窓を開け放つた明るい室内に
いつの間にか電燈が来てゐる
目はまだ何ものかを
目究めようとする強さの名残にかがやき
ながら
意味もなくそれを見てゐるうちに
瞳は内なる調和に促されて
いつか虚ろになつて
頭悩を孤独な陶酔が襲つてくる
庭一杯に茂り合つた
いろんな植物の黒ずんだ葉の重りや
花の色彩が
緻密画のやうに鮮やかに
小さく遠のいてうつる
やがて夜の昆虫のむれが
この窓をめがけて
にぎやかに飛び込んで来るだらう
瞼がしづかに垂れる
向うの灌漑池では
あのすこやかに枯れきつたいつもの老農夫が
今日も水浴をしてゐる頃だらうか
濃いい樹影が水に浸るやうに
睡りにふかく沈んでゆく

（「光躍」昭和二十一年十月号）

結句を書き終えるなり原稿用紙にうつぶせになって、心悸の亢進を鎮めなければならなかった静雄は、すでに異常である。この昭和二十一年の手紙を見ると、やはり誰彼に異常を訴えている。「病気のこと心配かけてすみません。神経衰弱と相俟ってどうも快方に向

ふとは云へぬ状態」（昭和二十一年二月二十四日付斎田昭吉宛手紙）。「お蔭であの頃から気分やつと立直り、病的な状態から脱することが出来ました。胃がよくなつたらこんなうまいことはないと楽しみ……」（八月二十二日付中川邦夫宛手紙）。もっとも当時の国民全体が飢餓状態であったから、これしきの異常さは、病気のカテゴリーに入らなかったかもしれない。しかし、潤三によると、「住中の宿直室に寝泊りして居られた時は、僕が訪ねて行くと、よく飯盒でじやが芋を電熱器にかけてふかして居られた。一番食糧不足の頃であつた。この頃の無理が後の先生の発病の原因になったのだ」というから、やはり浸潤の兆候はすでに始まっていたとみていいのかもしれない。

それにしても、まだ明るい部屋にいつかきていた燈火。その戸惑いに似た目くるめきから、凝視めていた庭の黒ずんだ葉むらと花の色彩がぼやけもせずに緻密画のように遠のき、それと入れ替りに押し寄せてくる賑やかな昆虫群……。これを凝視めている静雄の神経は病的なほど細緻である。詩の末尾に見える灌漑池は萩原天神に向う通勤路のわきに三つあった。その一つは周囲に桜を植えた堤をめぐらしていた。そこで一日の勤労を終えた老人が枯れた身をそそいでいる。その彼だけに健康が感じられるから妙である。あまり細緻に物が見え、目覚めすぎてる静雄に病気が感じられ、枯れた者、眠たげな物にかえって健康が感じられる。静雄は神経か、それとも肉体のどこかですでに病んでいたのである。

静雄が休務しだしたのは昭和二十四年の六月からだった。十二日の日曜から引続き、十三日（月）、十四日（火）、十五日（水）の三日間休務したのが始まりである。十六日（木）から二十九日（水）まで元気を取り戻して出勤した。が、三十日（木）から七月六日（水）

三島由紀夫烈士を思ひて

緒方武亞

まのあたり神風連をみたりけり神のごとく
　にきみ蹶ちませり
爛々と眼見据ゑて振り絞る益荒男きみが永
　久の雄叫び
ひ弱なる自衛隊士憐れむやしばし見据ゑて
　黙しいませり
これまでと天皇陛下万歳を三たび唱ふや去
　りましにけり
なげかくる自衛隊士が罵声背にきみ逝きま
　すか泣かざらめやも
一文字腹割つさばき迸る血の悲しくも逝き
　たまひたり
誰か言ふ三島美学終焉をきみが美学はここ
　にはじまる
文士三島さもあらばあれすめぐにの益荒男
　が死をなにはづかしむ
浮草の如きマスコミ種々に言ひ交しつつ否
　めざるもの
はづかしめおとしめよそふ声虚ろ益荒男き
　みははやあらなくに
あざむきて生きゐるこそぞむなしかる益荒
　猛男は神去りませり
愛し妻と二人の子ろをおきてゆく踏む初霜
　や一すぢの道
言ふべきは言ひてはてたる益荒男が願ひし
　ことはただひとつにて
きみが白刃よしやたたふもこのくににきみ
　が祈りをみるやいつの日
雑踏の師走の街を今日も行き益荒猛男を思
　ふのみなる

まで連欠しなければならなかった。翌七月七日（木）は心友・辻野久憲が重態に陥った忘れがたい日だった。若死の運命に抵抗するつもりだったのだろう、その日を下して出勤し余力を振り絞って十一日（月）まで勤務した。しかし十二日（火）からは連続欠勤をして夏休に入った。だが、もともと好きな真夏のことである。肉体は病んでいても、気分だけはまだ晴れる日もあったのである。「少し熱があると、もう詩作など到底出来ません。毎日仰けにねて、夏の強い光を見入つてゐると陶酔を感じます」（昭和二十四年八月二十二日付山根忠雄宛手紙）。又、その陶酔の枕辺に、思はぬ楽しみもあったのである。「毎日、枕元で夏樹が一日中絵を書きます。そしてよく私にサービスしてくれます」（八月十三日付斎田昭吉宛手紙）。その絵の一枚はこんな種類の絵だったのだ。

子供の絵―疎開地に住みついて―

赤いろにふちどられた
大きい青い十字花が
つぎつぎに一ぱい宙に咲く
きれいな花ね　沢山沢山
ちがふよ　おホシさんだよ　お母さん
まん中をすつと線がよこぎつて
遠く右の端に棒がたつ
あゝ野の電線
ひしやげたやうな哀れな家が
手前の左の隅つこに
そして細長い窓が出来　その下は草ぼうぼう
坊やのおうちね
うん　これがお父さんの窓
性急に余白が一面くろく塗りたくられる
晩だ　晩だ
ウシドロボウだ　ゴウトウだ
なるほど　なるほど
目玉をむいたでくのぼうが
前のめりに両手をぶらさげ
電柱のかげからひとりフラフラやつて来る
くらいくらい野の上を
星の花をくぐつて

（「文芸往来」昭和二十四年七月号）

星。電線と電信柱。坊やのお家。お父さんの書斎の窓。晩。牛泥棒……。七つの夏樹があやつるクレヨンの先から、つぎつぎに跳びだしてくる画材は、強い光に陶酔している静雄に、さらに親馬鹿の楽しい陶酔を恵んだのだ。特に最後に現われた牛泥棒はほんとにあった事件だった。家の裏手にあたる静雄の書斎の細長い窓と、隣りの農家の牛小屋とは、眼と鼻の先だった。そこに泥棒が入って牛一頭を奪って逃げたのである。静雄はその現行の目撃者だった。彼が語った犯行の手口といきさつが夏樹に印象されて、＜前のめり両手をぶらさげ＞て忍んでくる＜目玉をむいた＞牛泥棒になったわけである。

それにしても、こんな物騒な村はずれの界隈では、花子が学校に勤めに出た後を守る、静雄は絶好の留守番の形になった。その枕辺で目がな一日絵を描いていた夏樹も、夕方にはようやく飽きると、ふと戸外からするはし

新詩篇第壱巻
春風と蝶
大村直子
休みの日の石切場の
ひめじょおんの花かげに
おっかいを忘れた天使が
ねむっている
¥700
東京都千田区西神田三―八―七
共文社

ロセッティ小曲（三）

森　亮

「生」の瓶に描かるる
衆の長閑さ、わが手もて
瓶を回して見ぞ恍くる。
瓶の中なる若者は
いざ競走と　きほひたち
砂原わたり　花野越え
（浮かるる人を　よそ目にて）
月桂冠　かざす見ゆ。

われや満たさむ　この瓶に
血潮に代る葡萄酒を、
涙に代へて血のさわぎ、
過ぎにし恋の花々を。
思ひ遂ぐれば　この瓶を
砕かむもよし　さて如何に。

「生の家」第九十五歌

やいだ会話や歌声に、クレヨンを投げだすと跳びだしていったろう。家の門を出るとすぐ、街道脇の地蔵の祠で、いましもお祭が始まったからだ。

夕映

わが窓にとどく夕映は
村の十字路とそのほとりの
小さい石の祠の上に一際かがやく
そしてこのひとときを其処にむれる
幼い者らと
白いどくだみの花が
明るいひかりの中にある
首のとれたあの石像と殆ど同じ背丈の子らの群
けふもかれらの或る者は
地蔵の足許に野の花をならべ
或る者は形ばかりに刻まれたその肩や手を
つついたり擦つたりして遊んでゐるのだ
めいめいの家族の目から放たれて
あそこに行はれる日日のかはいい祝祭
そしてわたしたちもまた
夕毎にやつと活計からのがれて
この窓べに文字をつづる
ねがはくはこのわが行ひも
あゝせめてはあのやうな小さな祝祭であれよ

仮令それが痛みからのものであつても
また悔いと実りのない憧れからの
たつたひとりのものであつたにしても

（「座右宝」昭和二十一年九月号）

一人の参加者がふえて一層賑やかになった祝祭のさんざめきに、静雄もつい寝床を抜けると窓辺に寄り、夕映の中に供花や、撫で仏にするような親愛な愛撫の行事や、参拝者たちの童歌を見聞きしたであろう。小さな、可愛いい、遠い祝祭……。いや、必ずしも遠くなんてなかった。ほんの手近に持つことだってできたんだ。首のとれた地蔵尊なんぞでなく、絶世の女人観世音。それも道端ではなしに、邸宅の一室のサロンにすえて、そこで若い友たちと文学の祝祭を催すことだってできたんだ。

ねがはくばこのわが行ひも
あゝせめてはあのやうな小さい祝祭であれよ

仮令それが痛みからのものであつても
また悔いと実りのない憧れからの
たつたひとりのものであつたにしても
憧れはもともと実りがないからこそ、憧れ

なのだ。悔いを知らない性懲りのなさで、初めて成り立つ夢なんだ。それはたった一人の夢であるからこそ、値うちなんだ。誰も知らない夢だからこそ、詩になるのではないか？

静雄は夕映の中に動くともなく動いている黄金色の馬車のような横雲を凝視めていた。そして連欠の始まる前に光子が京都から見舞いにきてくれたことを思い出していた。

「先日は失礼、こりずに又来て下さい。あれから少しづつ気分よろしく、喜んでゐます。メタボリンがよくきいたやうです。食慾も出、顔色もややよろしいやうです。詩も書きたい心持になりつつあり。あなたの詩集待ち遠しいですね。私のもあなたのと一緒に出るのが願はしかつたのですが。」

（昭和二十四年六月三日付、田中光子宛手紙）

静雄は光子の詩集を待ち遠しがっている。「中心に燃える」を跋がわりに与えた、あの詩集である。第四詩集『反響』の版元である創元社に、出版方を口添えしていたからである。その光子の詩集と一緒に、静雄の詩集が出ることを願っているのは、「反響」につぐ第五詩集を編む心づもりを、病床にあっても堅めていたのであろう。（しかし、創元社では静雄ほどに光子の詩を買っていなかったらしく、彼女の詩集はついに陽の目を見なかった）。

夏休は終りに近付いたが、静雄は第二学期に出講する自信がなかった。彼は同僚に欠勤をするおもむきを、次のように伝えている。

「五、六日前から熱も咳もやつとなくなりただ静かにしてゐて御馳走をたべてさへをればよい楽な状態になりました。気力も出て来ました。しかし詩作などは到底思ひもよりません。『講談倶楽部』ばかりよんでゐます。九月にすぐ出勤することは出来さうでなく、又皆様にさんざん迷惑おかけすることをすまなく存じます。（三十一日家内を学校に参上させたいと存じます）」

（昭和二十四年八月二十七日付中西靖忠宛手紙）

第二学期も連欠している静雄が長期療養を決意して、高野線も奈良県境にかかる河内長野の国立病院に入院したのは、やっと十月十三日だった。楠氏の千早城に近いそこは、元陸軍幼年学校跡で、広大な構内に殺風景な兵舎式の木造建築が建ちならんでいた。静雄が収容されたのはその北端の病棟だった。さっそくレントゲンを撮ると小豆大の空洞が確認された。医師に迫って評判のアメリカの新薬ストレプトマイシン四十本を朝夕に分けて打ってもらうことになった。初めの十本は面白いほど奏効した。三十九度前後あった高熱が三十七度台にまで下った。しかし、その薬効も長続きはしなかった。たまたま静雄を見舞った同僚に、静雄は熱ッぽい眼で次のような述懐をしている。

「医者はよくなつてはいないと云うんですよ。悪くなつてるとまではいいませんがね。前は空洞があつたのです。（手で型をする）。が、すつかりつぶれて黒くなつてゐるさうです。熱も下らなくてずつと三十八度を越します。四十度を越える時もあつた。ですがね二、三日前から気分がよくなつて今日なんか熱がない方です。

小つちやなつまらんことばかりはつきり

孝子伝抄

詩・天野忠
絵・富士正晴

一 神女
二 奇蹟
三 竹馬
四 正直
五 姥捨

限定 三〇〇部 非売品

京都市東山区南梅屋町二〇六
文童社

思ひ出すんですよ。小つちやなことをね。高等学校や大学の時のことは思ひ出しませんがね。郷里の伍朝顔を洗ひに行つた川のえびのことや、石垣にはつてゐた蔦のことやら、街でのおつさんの顔やら、実にはつきり思ひ出すのです。

いやになつてしまひました。五十年ただ感傷ばかりで生きて来たと思ひつまらんとね。徹した悟性を持ちたいと思つてね。考え方をかえて落ついたところですよ。強盗でもした方がよい。私など感傷の連続だつたのですよ。酒をのむのなんかもね。幾分悟つて来ました。梅雨までに熱を下げたいと思つていますが中々気長なことですね。」

（昭和二十五年三月二十六日—中西靖忠ノート）

静雄は、川蝦とか、蔦とか、おっさんの顔とか、古里の微小なものしか思い出さない自分の小人物性を卑下している。強盗でもいい。男らしい豪放な無頼性を羨望している。詩とか、酒とか、感傷だけにかかずらわった生涯を後悔している。なぜ俺は思うとおり、願うとおりに行為できなかったか？　結局は、いつも悟性に徹しきれなかったからだ。今からでも遅くはない。徹しなければならない。そう、考えを変えた静雄は、梅雨までに熱を下げること願っている。好きな真夏。せめて願うところのまま、悟達した明るい時間を持ちたい。

しかし、梅雨が明けても熱は一向に下らなかった。静雄は思い出したように、京都の光子のもとに、斎田昭吉を使者にして手紙を託した。

「要用のみ前略

この状持参の人は中学以来の私のお弟子さんで、斎田昭吉君といひます。才能ある詩人です。会つていろいろ話して下さい。よければ友人になつて上げて下さい。

私の病気のこと、この人に尋ねて下さい。寝てて書くのが苦しいから用事のみ」

（昭和二十五年七月十九日付）

特別な用件はなさそうである。斎田は詩の小冊子『舞踏』を出していたので、それに光子の新作を発表させたかったのだろう。創元社に託していた彼女の詩集が、一向に刊行される気配がないのも気になるのである。昨夏静雄は、彼女の詩集と自分の詩集が一緒に出ることを望んでいた。その自分の詩集『伊東静雄詩集』が、桑原武夫と富士正晴のはからいで、急に企画が進みだしていたからだ。又、よければ斎田を友人にしてやってくれといっ

飛翔

吉本青司

旅にでる少女を送って
田舎バスにのった
高日川
空漠とした
冬の田園
少女はつつましく
白い花のように黙っていた
わたしは
画帖に
野の流れを描き
カモの群の
飛びたつときを映していた
別れるとき
少女におくるためだった
バスは
風の中を走り
一直線に
道は
野を貫いてのびていた

ている。この交際から、間接的であれ、彼女の華やかな消息を、静雄は病床の慰めにしたかったのだろう。

事実、身体を動かすことのできぬこの頃の静雄は、間接的に聞く若い女性の声にさえ、センシブルに心を動かしている。病床に花を求める心緒である。

……

声

その人は二十くらゐの娘さんだと云ふ。兄さんと二人で、満洲から逃げて帰つたのださうだ。他の患者からも附添ひのおばさんたちからも、大変、愛されてゐると云ふことだ。

半年程前、私は重体になつてゐた。

或る日、となりの部屋で一少女の声が聞えたが、（病室は大きな部屋を、白い帳で区切ってあるだけなので）それは、びつくりする程、甘美で透明で、思はず耳をそばだてずには居られなかつた。

その声はすぐやんだが――一寸、その部屋の病人を入口のところで見舞つたらしい――印象は長く脳裡にとどまつて、その人の顔を一度みたいとねがつた。

ひどい熱や、乱れた多くの脈搏の間で、考へることは、非常に鋭く強かつた。

私は、私の看病人に、果物とお菓子を買はせて、二階の私の真上の大部屋に、雑居してゐるといふその娘さんの所にもたせてやつた。そして、

「貴方の真下の部屋に、四十五になる、ひげむしやのおつさんがゐて、貴方の声が、きれいだからあげます」

と言はせた。娘さんは大変笑つて、

「有難う」

と、言つたさうだ。

やがて、私はアメリカの新しい薬で危機を脱したが、今度は逆に、娘さんの方が、ひどくなつて、動けなくなつた。

私は、いくらかよいとはいへ、足腰たたぬ病人で、到底、二階などへはいけない。

娘さんは、私によく利いた薬のことを聞いて、自分も試みたらしいが、効果はないらしかつた。

そんな日、二階から使ひがきて、瀬戸物の風鈴を呉れて、二階の娘さんからだと云ふ。

窓に吊したが、風の入らぬ部屋で、あまり音も立てなかつた。

夏もしまひ頃になると、娘さんは、だんだんよくなり、今度は逆に少し私の調子が狂ひだした。

一昨日、九月三日、物凄い颱風がやつてきて、病院の大建物が、船のやうにゆれた。

私の部屋は、雨風が吹きこんで、居られなくなり、病院の男の人に、抱つこされて前の部屋に移された。

同じその部屋に、赤い模様の浴衣地の着物をきた娘さんが、すつと入つてきて、

「ここに寝かせ頂戴」

と、言つて、あいてゐる私のとなりのベットに横になつた。

私はその顔をみて、すぐ、それが二階の娘さんであることがわかつた。そして、

「Nさんですね」

と、私はいつた。娘さんも、すぐ私のことがわかつたらしい。

私はその娘さんが、まだ病菌に、あまりやつれてゐないのが嬉しく思へた。

また、自分もそれほど衰へきつてゐない所をみてもらつて嬉しく思つた。

私達は、熱心に病気のことを話しあつた。一時間半ばかり話しあつてゐたが、嵐はやんでしまつた。その人は、また二階にかへり、私は担架で自分の部屋につれ戻された。

「今度は、いつあへるでせうねえ」

と言ひ

「半年ぐらいもしたら、どちらかが、歩けるやうになるでせう」と、私はいつた。

娘さんは、

「さいなら、お大事に」

と、いつただけで、笑つて帰つていつた。

（「舞踏」昭和二十五年九月号）

……

静雄はこの散文に、「病気で、頭も体全体、ぼつとしてゐて何をいひだすかわからない。けれども、斎田君が言へといふから、口伝へに書いてもらつた」という解説をつけている。

静雄は甘美で透明な声を聞いただけで、この若い女性に憧れている。患者や附添婦の間ですでにペットだったというから、その人気に煽られたからでもあったろう。彼は勇敢にも果物と菓子のプレゼントをし、やがて彼女から答札の瀬戸の風鈴が贈られた。互いの好意は、それでたしかめられたわけだ。そこに天の配剤か、台風が来襲した。互に避難した部屋で、「僕は伊東」「わたしはN」と初名乗りをあげて憧れが現実となったのだ。

この静雄の心緒は淡々としているようだが決してそうではない。追いつめられ煮詰った生がギラギラと沸騰しているようである。

「ひどい熱や、乱れた多くの脈搏の間で、考へることは、非常に鋭く強かつた」と静雄が告白しているとおり、生への妄執を根源とする強烈な花への憧れなのだ。その証拠は、翌月斎田に口授した次の散文に如実に現れてい

篠山街道

高梨一男

――初冠雪の三田富士
涸れ沼に蓮根を堀る
老人ふたり
窯元への峠道は
るいるいと寒苺熟れ
しきりにお辞儀している
ジョウビタキ
黒地に白の紋服姿で

三方五湖

――車同志のすれちがいは到底無理
と美浜で聞き
淡い星明りをたよりに
湖畔の山路を辿る
暗香浮動

ようやつと梅丈岳に着く
毛布にくるまり車中に待つ
夜のひきあけ

しだいに逆光に泛び上る
墨画のように
日向湖水月湖久々子湖三方湖
菅湖は半ば山蔭に隠れ
東西南北不即不離に
集う五湖

他の車の来ぬうちにと
天下の景観と惜別する

大気は冷え冷えと澄みわたり
土地自慢の西田梅は
ひそかに湖畔に咲いている

る。

……

花

わたしは、いままで、花などを、部屋に飾る趣味はなかつたが、病気になつて色んな人が豪華な花を、次々にもつてきてくれた。

それらの花を、美しいと思ふより、季節の移り変りが感ぜられて、自分の病気の長いのが思はれた。三十九度以上もの、熱のなかで、室咲きの繊細な華麗な花を、みてゐると、何だか非情な気がした。ただ一度となりの部屋で、（その部屋とは白いカーテンで、しきりがしてあるだけ）椿の枝を瓶にさしてゐて、その影が、夜ははつきりと、カーテンにうつつた。そして、となりの患者が、

「ああ蕾がひらいた。」

と、何度もいふのが聞えた。あんな固い蕾が、冬の冷い一鉢の水でひらいて、造りもののやうに部厚い濃色の花瓣が咲きでるのを想像して、何故だか、大へん不思議な気がして、一途に、その花がみたく、又、自分も椿の蕾を、花瓶にさしてみたくなつた。

その欲望は非常に強いもので、おとなりの患者が、嫉ましく腹立たしくさへあつた。

花を、そんなに欲しがつたのは、その時だけであつた。そのころが、わたしの病気の一番危い時期であつた。

（「舞踏」昭和二十五年十月号）

……

この「花」も、先の「声」も、結局は同じものなのだ。カーテンの向うにした甘美で透明な声に、その声の主の顔を一度見たいという「非常に鋭く強かつた」慾望と、カーテンに椿の影絵を見せつけられ、「ああ蕾がひらいた」という声に挑発されて、自分も椿を花瓶にさしたいという「嫉ましく腹立たしくさへあつた」熱望とは、共に同じ心緒なのだ。それはいずれも静雄が重態に陥っていたときに感じた、生の代償としてのやみがたい願望にほかならなかったからである。

昭和二十六年四月から三回目のストレプトマイシンの治療が始まった。今度はパスも併用された。その結果、劇的に奏効し、一年半も続いた熱が下り、食慾も増進した。体重も病気前より増し、秋には手術ができるかもしれん…という希望が湧いた。五月の中旬には床の上に坐ることが許された。下旬には窓までの伝い歩きもできるようになつた。「時にはベットを離れて、つたひ歩きして窓のところにゆき、初夏の夕景色など眺め入ります。しかし病勢安定するといろいろな慾望が悩みと共に迫つて来て精神が動揺し、困ることがあります」（昭和二十六年五月二十六日付山根忠雄宛手紙）あの「声」や「花」に感じられた生の代償としての願望ではなく、生そのものの慾望さえ頭をもたげてきたのである。「花子さん、土、日は大へんたのしかつた、病気のこともすつかり忘れた。しつとりと段々美しくなり、目がねもよく似合ひ、話し上手になり、こんないい、又永年なじんだ花子さんを残して、さうやすやすとは死なれぬと決心しました」（五月三十日付花子宛手紙）。六月に入ると歩行も許された。「私は六月四日に一年八ヶ月振りで（!!）歩きました。割に平気でした。それからは、じつとしてねてをるのが今迄より苦痛になりました。今日はこの室の出入口まで行って裏の野原や小松の山を眺めました。夕方は、運動場で看護婦さんのする庭球など眺めます。ピチピチと元気一杯の若い人の運動姿を見てゐると、取りかへしのつかぬわが身が、不覚に悲しくなつて来ます」（六月十日付庄野詞三宛手紙）。激しい看護業務の後でさえ、なおゴムマリのように弾みうるピチピチとした彼女ら…。杖にすがり、やっと五分ばかりの散歩が許されるようになったわが身

をふりかえり、手放したゴム風船でも見送るような後悔で、静雄はゆさぶられている。しかし、寸時ではあれ、戸外の散歩や、隣り近所の病室を訪れることができるようになった療養患者としての自由を、彼はやっと手に入れた宝石のように楽しんだ。おりから夏休となった花子が、病室で寝起きを共にしてくれたことも、その楽しみに喜びを加えてくれた。それは充溢とまではいかなかったが、久しぶりに恵まれた幸福な夏の日だった。

しかし幸福な日々は永くは続かなかった。秋風が吹く頃から腹もゆるみだし、それに痛みも加わった。結核菌はすでに腸まで冒しだしていたのである。ストレプトマイシンにもパスにも抵抗が生れた。それに心臓や神経にも副作用を及ぼしだした。頼みの綱は、そのころ特効で新聞紙上を賑わしだしたヒドラジッドがあるだけだった。昭和二十七年の春、長崎から来阪した寿恵男は、東奔西走してヒドラジッドの入手に狂奔した。そのかいがあって、小瓶の底に白く光る二グラムのそれを持って帰って来た時には、その手に、静雄も、花子も、取り付いて泣いた。しかし、その新薬にもやがて抵抗が生まれた。昭和二十八年一月十二日ついに大喀血が起った。それから二ヵ月、万策がほどこされたが、もはや歩み寄る死を遠ざけることはできなかった。しかし静雄は最後まで悟性を失わなかった。三月十一日には、枕頭につめかけた妻子や肉親たちに向って、「そんなにしてゐると死なねばならぬじやないか、まあ皆さん自由にしませうよ」（伊東花子「病床記」）と冗談をいうほど自若としていた。そして言えるうちに言つておこうかなァ…といって、父母兄弟の戒名を唱え、明るい声で、姉ミキ、弟寿恵男、花子に別れの挨拶をした。こんなに明るい声でこんなに元気なのに、やがて死がやってくるのかしら？　と、つい花子は涙ぐむと、「泣いてはいけない。感傷的になってはいけない。最後まで頑張りますよ、死なないよ」と、逆に静雄は花子を励ました。

翌十二日午後七時、静雄は針金のように細った手を、自分から胸元にもっていった。生涯花を求めてやまなかった、その手を…である。〈手にふるる野花はそれを摘み　花とみつからをささへつつ歩みを運べ〉（「そんなに凝視めるな」）。その花は摘めたか、摘めなかったか？　静かに合わされた掌はなにも語らなかった。静雄が息をひきとったのは、それから約四十分後だった。四十八才の生涯であった。

これは蛇足に属するが、静雄はこの日のための覚悟を詩にして、すでに新聞社に送っていた。かつて青春の日、〈わが死せむ美しき日のために〉（「噴水の歌」）と、生涯の覚悟の歌を作っていたほどだから、別に不思議ではない。あの日の覚悟はいささか若さに気負った勇ましい調べだったが、この日のそれはさすがに沈着沈痛なおもむきがみなぎっている。それは遺言のように死後紙上に発表された。

倦んだ病人

夜ふけの全病舎が停電してる。
分厚い分厚い闇の底に
敏感なまぶたがひらく。
（ははあ。どうやら、おれは死んでるらしい。
いつのまにかうまくいつてたんだな。
占めた。ただむやみに暗いだけで、
別に何ということもないようだ。）
しかしすぐ覚醒がはつきりやつて来る。
押しころしたひとり笑い。次に咳き。

（「大阪毎日新聞」昭和二十八年三月）

（完）

現代日本文学大系 61

林房雄 保田与重郎 亀井勝一郎 蓮田善明 集

房雄集
獄中記（抄）・転向について・動皇の心・狂信の時代・作家のために・文学のために・四つの文学

亀一郎集
転形期の文学（抄）・人間教育・信仰について（抄）・美貌の皇后・上代思想家の悲劇・現代歴史家への疑問

与重郎集
他界の観念・今日の浪曼主義・日本の橋・戴冠詩人の御一人者・物語と歌・風雅論の歴史感覚

善明集
詩と批評・鴨長明（抄）・神韻の文学（抄）・有心（今ものがたり）

〔付録〕
近代主義と民族の問題　竹内好／日本浪曼派批判序説　橋川文三／現代詩への二つの支点 —小林秀雄と保田与重郎　安東次男／林房雄論　三島由紀夫／亀井勝一郎 —その信仰と美　利根川裕／保田与重郎論　川村二郎／蓮田善明とその死　小高根二郎

¥720

筑摩書房

編集後記

十二月四日。京都ホテルで「新潮」の田辺孝治氏とおめにかかり三島由紀夫氏の死について語り合った。夢中になっていつか夕闇になったのも知らなかった。

二十三日。用務があって東上、久しぶりに筑摩書房に東博氏を尋ね、できあがったばかりの「現代日本文学大系六一巻」を頂戴した。同巻の附録に三島由紀夫氏の林房雄論が収録されている。校正のことで、死の一週間前に三島氏に電話したという。その折、三島氏は拙著の売行きを尋ねたという。まだ若干残っている由を伝えると、なにぶん高価ですからネ……という返事があったという。三島氏は序を書いて下さったばかりに、死を前にしてこんな些事まで気を配ってくださっていたのである。ところで氏の死後その若干部は忽ち売り切れてしまったとのことである。いくら三島氏の霊を拝んでも拝みきれない。（O）

果樹園 第一八〇号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年二月一日発行
編集兼発行者　小高根二郎　池田市石橋二丁目六ノ五
印刷所　元市印刷株式会社　大阪市東住吉区桑津町五の八
発行所　果樹園社　池田市石橋二丁目六ノ五（電話池田六一・八三一七）
定価　四〇円　送料　二〇円

果樹園　一八〇号　昭和四十六年二月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園　一八一号　昭和四十六年三月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第181号

画仙・棟方志功(一)　小高根二郎
一九七〇年　田中克己
俳句　吉本青司
をらびうた(遺稿)(十)　蓮田善明
京都　伊東静雄
峡深く　高梨一男
二月の花　美堂正義
善明・愛の手紙　蓮田善明
編集後記

画仙・棟方志功 (一)

小高根二郎

一、画魂の形成・系譜と土俗

1 家伝の青不動図

画仙・棟方志功の次兄賢三家に、正月にはかならず鍛冶場にかけたという軸物がある。青不動の図柄である。六本の手には、金剛鈴、金剛杵（しょ）、弓、矢、日、月を捧げもち、後背には三つの火焔をめぐらしている。頭髪もまた火焔のようになびき、牙を剝き、眼を怒らせて虚空を睨んでいる偉容は、なにの変哲もないが、変っているのは両脚が踏んまえている座具である。吹子（ふいご）なのだ。周囲にしめ縄を張りめぐらしたその吹子の取っ手を、黒の立烏帽子（えぼし）をかぶった手伝いが、呼吸を正して押している。吹子の筒先から吹きだす真赤な炎の前には、侍烏帽子（さむらい）にカミシモの正装をした刀鍛冶が、右腕を肩衣（かたぎぬ）から抜きだし、槌をふりかぶって、左手で金敷にすえた刀身を、今しも打とうとしている。彼の眉とヒゲは尻上りにいかめしくはね、どう見ても、刀鍛冶というより武士の風貌だ。この先き手である刀鍛冶の前には、向う槌の青鬼と赤鬼とが、槌の柄に頬杖をつき、あるいは小脇のつっかいにして、一息入れている。いや、一息入れているというより、刀鍛冶の手練のワザに息を呑んでる……といった格好である。

この軸は鍛冶職・藤屋（ふじ）、つまり棟方家の家宝だった。年越しの宵になると、かならず倉から出して鍛冶場にかけられた。この青不動を前にして、酒好きの父幸吉（号・富士幸）は年越しの酒をクビリクビリやり、明けるとまた屠蘇を祝った。ローソクの灯影に一段と朱を帯びた幸吉の顔は、日頃の癇癖を忘れたように、なんとなし和んで見えた。志功は青不動がかけられると、ああ正月だナ……という思いとともに、当分は癇癪玉の飛ばぬ安穏さに、ホッとしたものだった。しかし、志功の記憶には、この青不動図がかけられぬ幾度かの年越しがあった。日頃の貧乏が底をついて、御神酒（みき）の身代りに質屋へ入れられたからだ。そんな正月、酒杯をかたむけている幸吉の姿は、なんとなし淋しく見えた。と、いうのは、三が日がすぎて仕事初めの行事に、完璧が期せられなかったからである。幸吉は初打ちの鎌を手にとると、「たあッ！」という気合いもろとも柱に向つて投げつける。濡れた紙を刃の上から落すと、真二つになるといわれた「富士幸の鎌」の名代の切ッ先。ススで真黒になっている柱の腹を白くえぐって、ハッシ！　と突き刺さるのを、青不動の照覧に入れるのが、例年のならわしだったからだ。彼は酒盃をなめつつ、質屋の倉の内で青い憤怒で燃えているお不動様に、そっと掌を合わせていたのだ。

この伝来の不動尊の図柄は当然のことながら幼年期の志功に克明な印象を与え、生涯に

決定的な影響をおよぼしたと考えていい。青不動・赤不動が、志功の得意中の得意のモチーフになったのもそのためだ。それに、不動尊も、鬼も、親方も、手伝いも、一緒くたになって同居し、しかも仲良く共同作業をしているこの超現実・超時空性と、それに馴れ合う親和性とが、幼年の日、彼の身体に入ってしまったのだ。

志功のもっとも深い理解者であった陶匠・河井寛次郎は、志功のこの超現実・超時空性と親和性に、あきれかえったように感嘆した。

「君は郷里津軽の農夫を連れて来て『こぎん』を着せて日神に仕立ててゐる。君の国の娘子を連れて来て、普賢・文殊の諸菩薩に代へてゐる……。こんな現世を仏界に、こんな肉身を仏菩薩に仕立ててよいものか」（「棟方志功と其仕事」）

又、志功みずからそのふとどきさを認めている。

「裸体の、マッパダカの顔の額の上に丸い星をつければ、もう立派な仏様になって仕舞うんだから、ありがたく忝けないんですね……。その額の星が、つくと、付かないかで、タダの素裸の女になったり、ホトケサマに成り切ったり……」（「板頂礼」）

まさに手放しの自讃である。

青不動図　棟方賢三氏蔵

2　武家出身の画家・棟方月海

筆者はこの青不動図を棟方賢三家で検分したさい、これを単なるロマンチックな幻想画だと思った。しかし、この絵が津軽伝説――鬼神太輔や鬼神太夫に拠ったものであることが、近頃になってわかった。と、いうのは、この鬼神は、徳川時代の有名な旅行家・菅江真澄の『遊覧記』にあらわれているからである。

昔、西行だか、定家だかが、八富士見ずば不二とやいわん　みちのくの岩木の山の雪のあけぼの〳〵と、歌ったという伝説がある、海抜一六二五メートルの津軽富士・岩木山。その山麓の北方数キロの所に十腰内という村がある。そのかみ、そこに鬼が棲んでいて太刀を打っていたが、それを鬼神太輔と呼んでいた。初めは十腰あったが、いつのまにやら一腰が何処に行ったのか行方がしれなくなった。つまり、九腰――地名の十腰内になったわけである。ところが、行方がしれなくなった一腰は、実はその村の李木川の水底に潜んでいたのである。そして夏分になって、村の人が淵瀬で釣りをしたり、水浴などをしていると、水底の一腰はいきなり水面に踊り上って、その人を刺した。爾来、夏分になると、川辺に「立入禁止」の制札が立てられるようになった……という伝説である。

その他にも刀鍛冶をしていた鬼神の伝説がある。先の十腰内の南方の山麓一帯を赤倉というが、そこにも鬼神太夫と名乗る刀鍛冶が棲んで太刀を打っていたという。その太刀を現に祀っているのが鬼神神社だという伝説である。又、そこらに「卍」「錫杖」と呼ぶ二匹の鬼が棲んでいて、藩祖・津軽為信の旗揚げに加勢したとかという伝説もある。つまり、この伝説の鬼神太輔、鬼神太夫、その他卍、錫杖の鬼どもが、棟方家の軸に乗り込んで、家業の守護神になりすましていたのである。

遺憾ながら、この青不動図には作者の銘が入っていない。しかし、その筆勢、彩色、構図、構想から推量して、昔のなかなかの描き手であると志功は想像している。が、検分したところあまり古いものではない。せいぜい徳川末期の作品である。筆者はその作者を、志功自敍伝『板頂道』に「三代目の先祖」と書かれている月海・棟方角馬その人ではないかと想定している。

棟方角馬は津軽藩士の父太郎、母尚の子として天保七年（一八三六）弘前に生れた。中堅武士の家柄である。慶応四年三月、西郷隆盛と勝海舟の間で江戸開城の約が成った翌四月に、京都から仙台へ奥州鎮撫総督として九条道孝が派遣されたが、その総督のもとに津軽藩から差遣された家老杉山八兵衛に目付けとして従った。庄内藩を討伐せよとの命令の受領だった。時に角馬は三十三歳。無事その大任を果して御留守居組頭柄、軍政局御用係に任じられた。翌明治元年には幕府海軍の副総裁・榎本武揚が函館の五稜郭に立て籠った。ここに再び津軽藩に討伐命令が出て、彼は軍政局長・御旗本軍監大隊長に任じられて参戦、五稜郭の東南油川に陣をしいて奮戦した。明治二年五月に鎮定し、六月に弘前に凱旋したが、論功行賞として巻物ならびに金七円を賜った。その後、軍政局知事、会議所副議長、軍監、大隊長などを歴任、禄高二百石の気鋭の武士であった。ところが廃藩置県である。明治三年八月に三十五歳の働き盛りの身で、悲痛な浪人に転落したのである。

しかし、角馬はさいわい武骨一遍の無風流な武士ではなかった。若い頃から絵心があった。竹刀を握るより絵筆をとる方が好きだった。従って藩の御用画家・三上仙年のもとにも出入りしていた。彼は絵筆で悲痛な運命を切り開こうと決意をした。しかし、城下町の弘前には、職業画家、仙年を初め彼が率いる高橋米舟やその他の弟子がぞろぞろいた。素人画家の角馬が月海を名乗って看板をかかげることは不可能であった。港町青森の新天地に運命を賭けよう。そう決意して居を青森に

蝦蟇仙人　八木橋武実氏蔵

移すと、親戚縁者の挨拶まわりから商売を始めた。当然、鍛冶職として繁昌をした藤屋にもあらわれた。そして生涯チョン髷をゆっていたという志功の祖父彦吉（富士彦）に、なにぶんの支援を仰いだことは間違いない。その仕事初めの一幅がこの青不動図だと、筆者は見ている。

新米画家の月海は、なにか従来の職業画家にない新機軸をださねばならなかった。それは初商売の面目と、武家出身の画家としての覚悟であった。鍛冶の守護神である不動尊の台座といえば、盤石座か、井桁を組んだ瑟々座かの、どちらかにきまっている。それでは新規開業の面白さがない。なにらかの類例のない新しいアイディアが必要だ。そこで月海は、井桁を改造して吹子を作ることに思い付いた。今までの定型的な職業画家が思い付かなかった新しい構想だ。月海は御前試合で面を一本とったときのように会心の笑みを浮かべた。それにしても、扶持米を頂戴していた、ついこの間までの職場だった鷹揚城が思い出された。又、倉主町の家、屋敷もなつかしく思い浮んだ。その向うの大空には、朝な夕な峨々悠然と津軽富士が聳えていたっけ……。そうだ。あのなだらかな山麓には、刀鍛冶の大先輩――鬼神太輔や鬼神太夫が棲んでいたではなかったか！　それに藩祖為信公の武運につながった、卍・錫杖のめでたい鬼もいたではないか！　とりあえず彼らに助けを求めねばなるまい。

たとえ富士彦が、鎌・蝶番・鱈鈎・錨なぞを打つ百姓鍛冶であっても、御一新の世の中だ、伝説にあやかって刀鍛冶に仕立てても、いっこうかまうことはあるまい。いや、平民のたつきの具を打つとも、槌を振りかぶる精神は、刀鍛冶のそれでなくてはなるまい。月海は彦吉の町人髷に、遠慮なく侍烏帽子をかぶせてしまった。そこで、さらに破格の新機軸に思い付いた。儀軌によれば、不動尊は右手に剣、左手に索を握ることにきめられている。その右手の剣を一時あずかり、それを刀鍛冶になりおうせた富士彦に託し、それを日本刀に打ち変えさせる発想である。ところで不動尊の空になった右手はどう処置するか？為信公の兜の前立になった錫杖も格好な持ち物だ。さすれば左手の索に代えて卍を握らせねばなるまい。しかし、それではあんまり儀軌にもとる。そこで錫杖の形に似た金剛杵、索の代りに金剛鈴を握らせた……というのが、筆者の楽しい想定である。なんのことはない。月海は彦吉をつかまえて、赤鬼・青鬼を向う槌とした鬼神太夫に仕立ててしまったのである。

3　志功に流れている蝦蟇仙の血

月海は風景や静物も描いたが、もっとも得意としたのは人物、それも蝦蟇仙人だった。その傑作が弘前の八木橋武実家に伝っている。しかも、その軸には、次のような面白い折り紙が付けられている。

「予ハ知己ノ伊藤説ヲ聞ク。棟方氏ノ蝦蟇仙人ノ画ヲ能クスルハ三上仙年ト優劣如何ト云フヲ信ズ。月海氏ニ該ノ画ヲ乞フ。廿三年九月上旬出来セリ」

明治二十三年といえば月海五十五歳の時である。つまり、武家出身の素人画家だった月海も、二十年の辛酸をなめ、精進をつんだ結果、蝦蟇仙人を描かせたら、職業画家・三上仙年といい勝負だという評判をとっていたのである。仙年といえば、慶応二年に上洛すると、近衛忠熙公に揮毫をひろうしてお褒めにあずかったり、明治十四年に大帝が東北巡幸をされたみぎり、御前で暗門の滝を描いてご覧に入れたほどの画家である。月海も大変な上達をしたものといわねばなるまい。

まこと、腰には瓢をくくしつけ、両手に山笠を支え、ひろげた胸元に不逞な面魂をした蝦蟇を抱いて、ザンバラ髪と素衣を山風になびかせながら、眥を裂き、まさに月に向って嘯いている情景の仙人は、生動する気韻にみちみちている。仙人の怒眼と蝦蟇の鋭い目の焦点は、画賛「寿雪煉気帝処煉神」に結んでいる。「めでたい雪で山気を煉って浄化した所、まかりい出た神に紛う蝦蟇仙人」といったほどの意であろうか？大方の示教をお願いする。この唐風な画賛の字もまた、さすが書家「蝦山」と号しただけはある見事さである。ここで注意を喚起したいのは、冷厳な大地を踏んまえているその足である。まるで山野を疾駆する獣類のそれのような頑強さ。足指のバネのような屈曲。長く鋭い爪のウガチ。前蹠からカガトにかけて肉付ける適切な線描。この描法と造型は、先に掲げた青不動の足にそっくりだ。ただ違いといえば、青不動の方の懸命さにかかわらず、力がどこかで抜けている素朴さに対して、仙人の方は洒脱であって簡勁、よく弾力を筋骨に蓄えている絶妙な迫真性である。さすがにそこに二十年の技量の落差が感じられる。

この月海の画と書に対する才能。それから蝦蟇仙人のような化物を好尚した特異な資質は、そのまま脈々として志功の血の中に流れている。「まるで化物ですよ」という言葉を常套語とする志功は、月海に劣らず化物好きであるからだ。

「化物だか、幽霊だか、判らないような、ところまで、のし上らなくては、ほんとう

の仕事に、いや、板画にならないんだから、可笑しいものです」（「板頂礼」）

化物好きどころでない。化物そのものになろうと志功は念願しているのだ。つまり、デーモンにとり憑かれ、化物になりきることこそ芸業の道にしているのだ。

そういえば、出世作『大和し美はし』の日本武尊も、煙のようにモクモク湧く文字の中で剣舞をする化物だ。それにつぐ『鬼門』の間引きをされた真黒童子・真黒童女も化物だ。いや、『十大弟子』の富楼那や須菩提だって、仏より怪物の方に身近かな化物だ。『門舞神』のスサノヲ・コノハナサクヤ・アメノウズメだって化物だ。これらの黒と白の化物どもは、紛れもなく蝦蟇仙人の血族だといっていい。化物・志功の血の中には、たしかに化物・月海の血が流れている。その風狂の血は、流れ、逆巻き、溢れ、滝となり、飛沫をあげ、淀み、裂け、また流れ流れている。が、その流れが、先祖の血筋のどこで分岐し、どう引き継がれているのか、遺憾ながら今のところまだ明確ではない。ただ志功の長兄一が伝える次の事件は、月海がかなり身近かな血筋だったことを物語る唯一の証拠である。

既述した蝦蟇仙人を描いてから五年近くたった明治二十八年三月九日のことである。月海の僚友だった大湯平三が斬殺された。場所は日本聖公会の婦人宣教師ミス・サザンの仮寓だった米町の浅井庄右衛門宅であった。当時の新聞は、事件を次のようこ伝えている。

「大湯平三氏一夜何者の所為なるを知らずサヽン宅に於て殺害せらる。其後伝道者松下一郎氏田中ハナ子共に謀殺犯嫌疑の廉ありとせられ拘禁の厄に遇ふ。茲に於てか教勢一変又昔日の観を留めず会衆頓に減じ求道者の去るもの二三名あり、然りと雖も信徒の情勢更に堅固の気勢あり」（「東奥日報」）

ミス・サザンが日本女性の伝道師二名を伴って来青したのは二年前だった。さっそく学舎を設けて日曜学校を開いた。ところで、絵だけでは食っていけなくなった月海は、浪人数年してから教区取締という役にありついていた。視学といった役柄だろう。大湯はその職場での同僚だったわけである。二人は同じ浪人仲間だったからだろう、気心が合ってどこへ行くにも一緒だった。職掌がら日曜学校にもよく出入りしていた。それにミス・サザンがなかなかの美人だったので、二人は彼女を張り合っているのだろうという噂が立ったほどだった。先の東奥日報の記事も、男の伝道師と女信者とが、大湯を謀殺したのではないかという三角関係の嫌疑を伝えている。若い男女が出入りする教会は、恋愛媒介所ぐらいに世間から思われていた当時である。別口の桃色嫌疑が月海にもかかった。大湯の検屍をした結果、死因の袈裟斬りがあまりに見事だったからだ。犯人はよほどの使い手だ。さすれば月海をおいて他に目星はない。大湯は抜け駆けの功名で一人こっそりミス・サザンのとこに忍んだのだろう。そこへ後から月海がやってくると、嫉妬のあまり有無をいわさず抜き打ちに斬ってすてた。そう、当局は判断すると、月海を逮捕して未決監に収容してしまった。ところが一、二年してから真犯人が判明した。稲妻強盗として全国的に凶名を馳せた坂本慶次郎である。彼は静岡あたりで逮捕されたが、その自供中に、青森はサザン宅での斬殺事件も混っていたからである。無実の罪が晴れて月海はすぐさま釈放された。彼の足は援助を求めて自然……藤屋へ向いた。祖父彦吉は亡くなっていたが、祖母つるが健在で零落した月海に応待をした。蝦蟇仙人さながらの風体をした月海を、やっと物心がついたばかりだったが、一は見逃がさなかった。なんだか恐ろしい人……と幼な心を冷やした。なにがしかの援助を受けて彼が立ち去ってから、その場に居合わせた伯母よねに、あの人は誰？　と尋ねた。彼女はシッ！　と

一の無心さを叱ると、前記のいきさつをかいつまんで話して聞かせ、これは誰にも語るな！　と稚い耳に囁いた。

それからあまり間のない時である。一は再び月海にめぐり合った。浜町の女友達の家である早瀬旅館に遊びにいった時だ。隠れん坊でもしていたのか、どんづまりの廊下の隅までくると、開け放たれた丸窓の向うの座敷で、絵を描いている老人がある。向う鉢巻、諸肌脱ぎの荒々しい格好で、雄健に絵筆をふるっていた。一はつい窓から覗き見した。紙には菊と蓑虫が描かれつつあった。蝦蟇のように這いつくばっていた老人はやがて上半身を起こすと、絵筆を置き、ふ——ッと息をついた。酒気がぷんぷんした。老人に見覚えがあった。ザンバラ髪を向う鉢巻きでたくし上げてはいるが、鋭い眼光は、過日の月海だった。一は足がすくんだ。が、伯母の話を思い出し、縁者としての懐かしさも湧いた。足うらがむず痒くなって、みつかりもしない女友達の名を呼ぶと廊下をすッ跳んだ。その日、月海は、菊の花に身の潔白、蓑虫に無実の罪を語らせていたのだ。

月海は明治三十七年、志功が生まれた翌年、六十九歳の波乱万丈の生涯を終えた。それにしても大湯事件のあった時は齢すでに六十であった。しかもなお艶っぽい嫌疑をうけるあたり尋常な男でないことは確かだ。やはり志功流の化物に類する人物だったのだろう。

一九七〇年

田中克己

小学校の一年の時の担任水田潔先生は
去年の賀状でもう字が書けなくなったと記
　され
今年は御遺族から喪中の御挨拶をいただい
　た
高校でドイツ語をお教へ下さった本庄実先
　生は
十月二十一日に亡くなられ八三歳であった
中学で博物を習ひわたしを植物好きになさ
　った森中篤美先生は
十二月十八日に亡くなられたと新年になっ
　てからおしらせを受けた
義弟の河野岑夫は十二月二十七日萎縮腎で
　亡くなった
わたしは主のみこころで今年は還暦を迎へ
　たが
たびたび死んだ思ひをしいまは永生天国を
　信じ
三人の師や義弟ともいつの日にか再会する
　と信じてゐる
このわたしの信仰に一人でも同調してもら
　へればと
拙いことばで主に祈ってゐる。

二、遠祖と近祖—胸形と棟方

1　遠祖・胸形時代

月海・棟方角馬は禄高二百石のれっきとした武士だったが、その遠祖を辿ればずいぶん古い家柄である。

系図によれば、その礎を築いたのは胸形兵庶頭藤原義直で、保元三年（一一五八）因幡の国は松賀郡を将軍家より拝領し、そこに砦を築いている。この松賀という所は、現在鳥取のどこらになるか明確ではない。又、将軍家というのは、二年前の保元の乱の勝利者・後白河天皇を戴いた関白藤原忠通をさすのか、それともその配下だった源義朝、或いは平清盛の意味であるのか、判然としない。とまれ、

拝領した松賀郡は、敗者・崇徳上皇、藤原頼長の没収された荘園を、論功行賞として配分したその後の、裾分けだったかもしれない。胸形家は丁度武士の興隆期にスタートした、もっとも典型的な武家だったことは間違いない。

それを明かすように、二代目胸形対馬守義弔は元暦元年（一一八四）一之谷の合戦に御旗本奉行を勤めている。先代が隷属したのが、義朝、清盛のいずれとも判らないので、源平のどちらであったか分らない。

三代目の胸形石見守義広は、源実朝時代の建永元年（一二〇六）に或る合戦で陣没している。

一代跳んで五代目胸形尾張守義直は、弘安四年（一二八一）に執権北条時宗の命によって元軍を迎え撃った勇士だが、二十年後に「故あって」信濃海野に国替えになっている。

二代跳んで八代目胸形出雲守義昌は応仁元年（一四六七）に応仁の乱に参戦した。因幡守護職山名持豊に従って細川勝元と戦ったが、今度は利あらず敗北した。「細川山名両家禍を構えて天下大いに乱る。此時に当り日本諸国の大小名浪人多し」と系図に解説がある。義昌もまた浪人になって筑前に落ちのび、宗像に居住するようになったのである。宗像も胸形も同じくムナカタと呼ぶ。もともと縁があったのだろう。そこの田島村には宗像神社があって、天照大神の三女神――多紀理姫、市寸島姫、多紀都姫を祀っている。この三女神は又、青森は善知鳥神社の祭神ででもある。彼女らの招きがあったわけでもあるまいが、義昌から四代目に、福岡から青森まで遙々と移住することになるのである。

十一代胸形玄蕃義利の項に、系図は次のように註記している。

「此の節西国に於て、奥州津軽の大領主藤原為信公は智仁勇を兼ね備え、近国悉く靡き従ふの旨、遍に聞き、義利深く其の高名を慕ひ奉り、時に天正十九年（一五九一）春二人の男子を召し連れ、当国へ下向す」

義利が太郎・次郎の息子を連れて宗像を発った年は、丁度、豊臣秀吉が朝鮮遠征の戦備におうわらわの時だった。前年の十一月には、すでに朝鮮国王を通して大明国に宣戦が布告されていた。明けて十九年一月には、石十五石に付き大船二艘と水夫とを供出する指令が全国に出された。遠征軍は九軍、約十六万名、軍船四万艘の編成である。宗像は名島城主小早川隆景の指揮する第六軍の管下だった。総勢一万五千七百名の中の大多数一万名が隆景の管下から動員されたのである。胸形義利もその一万名の中の一名に予定されていたことは間違いあるまい。或いは太郎・次郎を加えた三人であったかもしれない。

義利は渡海の運命を前にして茫洋たる玄界灘を想望した。八代目の義昌は敗残の身を波枕に託して、因幡から宗像に落ち延びてきたのだ。それから苦心惨憺の二代の経営……。やっと落ち着いたところで、再た存否の運命の前に立たされているのだ。義利はたまたま港あきんどから聞いた陸奥の新たな英雄・津軽為信の存在を思い出した。為信はもと南部の部将。お家騒動と失政とにつけこんで、石川城に南部高信を攻め滅して旗揚げをしたのが二十年前だった。それから十七年の才月を費やして諸所の豪族を討ち、或いは追い、南部の執拗な反撃を退けて、津軽一円を手中に収めたのは、やっと三年前だった。機を見るに敏な彼は、昨年三月秀吉が東上して北条を攻めた際、十八名の臣下を従えて逸速く西下、小田原に伺候して、ぬかりなく津軽三郡と合浦一円の安堵を得ていた。彼はこのように智勇に秀れた武将であるばかりではなかった。仁慈にあつい政治家でもあった。他国者を歓迎し拒まなかった。落人には荒地の開墾に従わせ、功があれば新知士と呼んで武士にとりたてた。一藩の創建に志す彼は人材をこそ宝

としたからである。

義利は決意した。港あきんどの話の当否はともあれ、いずれ渡らねばならぬ海である。玄界灘を越えて得体の知れぬ朝鮮に渡るより、響灘をよぎり、先祖がいた因幡の沖を越えて、まだ夢がある陸奥に新天地を求めよう。ぐずぐずしていたら船もろとも身体までも徴用される。思い立ったが吉日と、身の廻りの用意も早々と、船に太郎・次郎を乗せて宗像を出奔したというのが真相だろう。船は下関を過ぎると、日本海に出、柴山・小浜・福浦・新潟・酒田に寄港して、青森西岸の十三湊に入るのが当時の順当な船路だった。十三湊は岩木川と日本海の合流地点。川上には朗春富士が聳えている。その裳裾をひいた立姿に、胸形親子は出迎えをうけたような親しさを感じたであろう。義利は川を溯航すると、できるだけ津軽為信の居城近くに居を求めた。早く知遇をえる機会に恵まれるためである。

「棟方由緒書」（津軽藩旧記伝類）によると、最初の居を定めたのは、「東在」とあるが、東方の在所、いわゆる東郊という意味であろう。そこに閑居すると、雪融けで潤んでいる土壌を耕して、早速糧の種をまいたのである。幸い為信に出会う機会は意外に早く恵まれた。津軽野に根をおろして二年目、文禄二年（一五九三）三月であった。為信は前年の検地で決定した四万五千石の領土の朱印状を、じきじき秀吉から頂戴するため京都へ向け出発した。一行は碇が関、矢立峠越えで、佐竹領を通る予定であった。その途すがら大鰐近くの石川村で、義利は為信に拝謁したのであった。為信は人材を得るために気安く人に会った。義利は既述した胸形家の系図と、家伝の菊寿の刀の由来を説明申し上げた。姓は同じ藤原。まず為信の胸に好意を呼んだであろう。保元の乱以来の、まさに武士の発祥と共にスタートした古い武勲の家柄。その武勲の恩賞である菊一文字の名刀を子細に検分した為信は、大変に満悦した由を「棟方由緒書」は伝えている。又、「棟方後代系図」によれば、義利は為信の懇命によって、弘前の堀越城下ではなく、遠く青森と浅虫の中間――外ガ浜の浜

俳句

吉本青司

一人の老女が訪ねてきた
＼しばらくでございました／
という
きけば信雄の母だという

信雄は鍛冶だった
そして俳人だった

ある日病院をぬけだした信雄は
鍛冶つぼに下りて劇薬をのんだ
とりすがる母の手のなかで

三十九年のいのちを断った

十二月の寒い日だった

病院に遺したノートには
＼さらば風雪よ　みんないい人だった／
と記されてあった

老女は顔をあげて
その俳句を墓に彫りたいという
やつれた姿が
いたましかった

＼鍛冶信雄　生涯深し枇杷の花／

野村に居を定めている。恐らくその地を開拓すると共に、目と鼻の南部藩の前衛基地・野辺地に備えることを命じられたのだ。義利はそこで太郎次郎を養育しつつ、宗像から津軽に移り住んでから丸十四年、慶長九年（一六〇四）にこの世を終っている。

これは余談になるが、津軽には義利のような他国からの流入者が多かった。弘前在住の詩人船水清にいわせると、県人の約六割はそれに当るという。キリシタン流人。関ガ原合戦、その他の戦争の敗残・逃亡者。幕府の公裁で決った流刑者、その他諸藩からの預かり者。その中で最も有名なのは、宮中の桃色事件に関係した右大臣藤原定熙（ひろ）の二男花山院忠長。町奴と事を構えた米津勘十郎。幕府内の意見対立で失脚した小田原城主・大久保相模守忠隣の四男正率。会計の不始末で切腹した美濃の代官栗原加賀守盛清の次男盛次。紫衣事件に連座した妙心寺の高僧・東源和尚。外交文書を改ざんした対馬宗藩の家老・柳川豊前守調興。お家騒動の幕府裁定でお預けとなった肥後人吉城主・相良壱岐守の家老・相良清兵衛長兄、等々。彼等の中には赦免されて故国に帰れた者もあれば、そのまゝ津軽に骨を埋めた者もあった。

義利は、これらの強いられた人々よりも早く、しかも自らの積極的な意志で、さいはてを厭わず津軽の地にやってきたのである。その果敢な志と祈りは、当然なにらかの形で、子孫の血潮の内に示顕しなければならなかった。成人して太郎義助は角之丞、次郎貞家は作右衛門を名乗って、共に津軽家に仕えたのは、父の死後二十年を経た日、即ち二代信牧の治下であった。月海・棟方角馬、従って棟方志功は、この太郎家の方の系譜に生を享けたのである。

をらびうた（遺稿）（十）

蓮田善明

○

377月読のおそきをかこちなく虫の身からもながきなげきするかも

378まちいでゝ月の光になく鳥のこよひもなける月のおそきに

十五日　尚ほ熱少しと頭痛

379ひるのくもさかりにおこるまさやけくかみなりいでん時の近づく

○

380さ百合（ゆり）花あたかも似るを木にさける花の繁（しゲ）枝をさせる花瓶

○

381暮（よひ）まけてふるはや雨は庭ぬちの木々をとよもししぶきくらめつ

十六日　本日乗船、頭ノ皮いまだにいたし

○

382暮雨（よひさめ）のいたくふれれば蛙の天にとよもしやまず夜すがら

383谷くぐ（ママ）のさわたるきはみ見（め）したまふ国からなれや夜（よひ）とよもすも

384谷くぐ（ママ）のとよもすきけば大名持少名神のいにしへ思ほゆ

385夜の鳥は羽ぶく高せず枝うつり間なくし呼べばいねがてにすも

京都

伊東静雄

私が京都で大学生生活をしてゐたのは、大正の終りから昭和の初めにかけてである。九州の田舎から出た性急な私は、京都の温雅清寧の風景に先づ閉口してしまつた。何処に行つても融和しがたい、憤懣に似た感情を味つた。私の当時の情感は、京都の風景を拒絶したが、悪いことに、私の本質はその美しさを

峡深く

高梨一男

淡い日溜りをえらんで
よたよた歩む
蝶

——もはや飛ぶ力も失せて
と見ていたら
ほろほろ　ほろほろ
舞い上った
夜は氷豆腐干す庇のほとりへ

冬の小川

寒鮒いつぴき
居る
ひしと鱗をたたんで

理解してゐたのである。そのために二重にいらいらとし、自分がのけ者になつてゐるのを覚えた。私はこの温雅な風景に向つて、大声に罵倒してやりたい衝動をいつも覚え、おちついたその鑑賞者までが癪にさわつた。自分が大学で専攻した国文学に就いても、又その教室の雰囲気についても、略々同様であつた。

私は仕方なく、下宿にばかりこもつて、出歩くのをやめ、友人とも交際しなかつた。しかも私はかくれて、千年伝統の和歌をせつせと作つたのである。そして和漢朗詠集と新古今集を愛読してゐたのだ！　私はその頃の自分を考へると可憐の情に堪へない。しかし私は今日でも尚、それ等愛読の古典とそれを生み出した京都といふ土地とを結びつけるのに困難を覚えるのだ。それは何故だらう。この背反の中にそのまま住するこのやり方は、私の性格に深く根差した発想法ではないかとも思ふ。自分の詩と生活の様式はいつもそこから出てゐるのぢやないか、そんなことが、それから十年経つた今日少しづつ自覚されて来るやうだ。しかし、再び京都に行つて、も一度今の目で京都を見直したいといふ気には未だなれない。その気持は頑強に持続してゐる。

しかしただ、私は京都の詩人と語つて見たいとは思ふ。私の京都が具体的にそこにあるのぢやないかと思ふ。「新生」の人々がこの私の希望を真に満して下さることを願つてゐる。

昭和十五年一月号「新生」（臼井喜之介編集）

雑

六月号の野道さんの「桜が散る」はいい詩ぢやないかと存じます。いつかの春情を歌つた「たれか部屋の外で呼んでゐる」といふ風の繰返し句のある詩（注——依田義賢「春愁」——）もよかつたと記憶してゐます

「新生」昭和十二年七月号
（臼井喜之介宛書信）

善明、愛の手紙

蓮田善明

—岐阜第二中学教諭時代—（二十五才）

昭和三年六月二十三日

〔岐阜市外加納町第二中学校より熊本県鹿本郡植木町師井淳吾方敏子宛（封書）〕

六月二十三日午後零時半。

この間の手紙があんなにおくれたので、それにもう一週間（今日は土曜）にもなるので、只手紙をかゝうと思つて、今日は一時間目に作文だつたので、教室で書きかけたけれども、字をきゝにきたり、又ほつてもおけず、みてもやらねばならぬので、二行程かいてすてゝしまつた。そして職員室にきてみると、あなたの手紙がきてゐた。しかし、今日はおひるまで、ぶつづけなので、ひらいてみることもできないで、今やつとみました。帰宅してゆつくり書かうとも思ふたけれど、今日はこの間から三四の生徒が遊びに行くといつて、待つてゐるのでとてもかけることではないから、ここで短いながら書き終へて帰るつもりです。そして今日はこれを出します。明日は日曜で、丁度当直なので、又ゆつくりかきます。

あなたが牧氏の宅に行つたことも、電報もつて行つたことも父から詳しくしらせてきてゐました。そして、あの時一緒につれてやるばかりだつたとかいてありました。余り悲観した顔でもしてゐるのではありませんか。手紙には書くことに縁起がわるからうが何だらうが、あなたのしてゐることがくはしくかいてあればあるだけすべてうれしいのだから、かまひはしない。

採点は――後始末も私が一番早くすみました。二百枚以上溜つてゐた作文も一気に片附けました。それに、あつちこつちへの手紙、手紙、手紙……でうんざりする程つかれてしまつて、昨日からむし暑くて、本もよめないし、昨夜だけは手紙をかくのも放つて九時すぎにねてしまひました。朝寝のくせがついたが、毎朝それを少しづつ回復して行つてゐます。朝と寝る前に冷水摩擦や乾布摩擦をやり、軽く胃を強くする体操をします。体をつよくするといふことにも、結婚してからは二重の意味があります。一つは自分のため。一つは我々のため、そしてそのために生きる力をかんじる……。

父から牧氏の御子息の死去をしらせてきた二十一日の夜、（―又、月給日の夜）雨の中をひとり（ひとり歩いたり電車にのつたりしながらつねに二人で歩いてゐる所を想像してゐる！）岐阜市に出かけて、鮎のかす漬や羊羹をかひにあるデパートに入つた所が、気の利かぬ店員だから、あの荷造が仲々手間取つて、正に郵便局〆切五分前にかけつけてたのんだのでした。鮎はうまくはないといふ話だけれど、目でみるだけでもまあいいわいと思つて送りました。うまくないといふ話でもあつたら、「名物とはそんなものだ」とあなたの言葉として弁解しておいて下さい。

家にばかりゐては淋しいでせう。学校にも出かけたらどうです。なるべく心をなぐさめて下さい。この前あんなに早くこちらに呼ばうと書いてやつたけれどもこちらによんでも、ひるま一人ぼつちにしてしまはねばならないと思ふと、可哀さうだから、やつぱり御大典なり、本式頃までそちらにゐてもいいといつてあげようと思ひ直したりしてみたこともあるのです。今日の手紙をよんでどちらにしたらいいかわからなくなつてしまつた。あなたがよい方をえらんで下さい。しかし、どうせ夏休みには一度私が帰つてみねばなりますまい。それまでに、すぐこちらに来るか、先まで待つか考へておいて下さい。その返事で、こちらで家をさがしたりもしておきますから。これをよんだら、又明日あなたの手に次の手紙が入ることを待つてゐて下さい。今一時十四分。――あの時計が。（此頃生徒があの時計のことでやんやいつてゐる。）まとまりのない手紙だが、ゆるして下さい。も一つ――、今朝、あなたが袖を上げてくれたワイシャツをきてきた。

さよなら

二十三日　　善明

とし子様

二月の花

美堂正義

寒椿も
山茶花も
すべて黒い土に消えてしまつた
愛してゐた少女達も
どこかへ行つて消息もない
花弁とともに消へてしまつた
わたしの若い心

×

どこの会社があぶない
そんな話がちらほら耳に入る
この二年間勤めてゐる小さな会社
なんでもして精神をすりへらした
梅の花・水仙
固い蕾を見てゐると
ふしぎと
失はれたものへの愛着が深くなる

七月六日

〔発信宛名同前〕

七月五日

約二時間友達が話して去る。もう十二時。このごろ万葉集とクオ、ヴァディスを少しよみつゞけてゐるだけ。

○人言は夏野の草の繁くとも妹（思ふ女、恋人、妻のこと）と吾とし携はり寝ば

○この頃の恋の繁けく夏草の苅りはらへども生ひしく（益ること）如し

この他一緒によみたいやうな歌があるのです。

＊　＊

六日

朝！　朝は八手の葉のやうに健康です。
冷水マサツと体操で赤らんだ顔が
小鏡の中でかゞやく！
爽やかに張りきつた目と艶ついた唇が
あなたを呼ぶ！
青い匂ふやうな七月の朝！

＊　＊

午前七時七分。登校前二十分間。
登校前は空想が又部屋一杯に漲る時。空想、空想、空想！

＊　＊

次々と幸福が
あまり早すぎるくらいに
わたしに向つて
おしよせてくるだらう
あなたの手を握つても
あなたの胸を抱いても
ああ、あふるる感動の
やりばがないほど……

七月八日

〔発信宛名、同前〕

もうすぐ十二日。その日のことをのこらず思ひ出そう。（注・前月の十二日結婚した）その後十三日、十四日、十五日、十六日……十二日に届くやうに何か送りたいな。

もう午後五時。今日は日曜なので、朝、霧のやうなうすい雨の中をあなたへの手紙を出しに行つたゞけ。おひるから、ひるねをして、さつき風呂に入つて気分を一掃しました。もう明日のやうに青く晴れて時々木の枝にこゝと鳴つて風がはためきこんできます。

さつきひるねからさめて、このごろまるで紙屑籠のやうになつてゐた机の抽出を片附け、あなたの手紙をそろへて、初めから読み返してゐたら、寝覚めの折だつたせいか、ば

かに胸にしみてきた。

同じ一つの手紙でもくり返してよむごとに、書いてあることでも更にふかく意味があり、尚書いてはないが言外の心持が自ら分つてきて、いつまでもたのしめるのです。あなたの手紙はいつまでも蔵つておこう。

今ごろあなたは夕食の支度でせう。あなたの料理がたべたい気がする。

私は脂肪分を摂る必要があるらしい。家では団子汁、学校ではライスカレー、兵隊では豚の入つたウドンがいちばん好きだつた。団子汁に鶏卵を割つてたべるのが大好き。この三つなら、かなり　大食もできるらしい。……こんなことを云つて、ひとりで、気もちだけ御馳走になつてゐる気だから、をかしい。きらひなものは牛乳だけ。味噌汁も好き。冬の大根汁。熱い豆腐汁。魚は脂こいものがすき。トマトにソース。沢山ほしい。生胡瓜のきざんだのにマヨネーズソース。すし。御飯はこはいの。

よく、うちのオヤヂから、今日は敏子が何をもつてきた、彼をもつてきたと料理をかいてある。オヤジ殿は幸福だ。そして私に対して無礼だ！　そんな時はね、敏子さん。あの部屋に入つて心の中だけでいいから、私にもさあおたべといつて下さいね、私は淡ましくてしかたがないのだ。

今朝、今ゐる部屋を南側の壁に背をもたせてスケッチしました。今は机の前であの湯上りを着込んでペンをとつてゐるのです。ガラス窓はひらいてゐます。夕方までは西側から、夜は東の窓から風が通ります。この窓の所で、くらくなるまで手紙をかいてゐることがあります。夜はカーテンをしめて、寝る時は、電燈の紐をひき出して、枕元までさげます。東枕でねます。蚊帳の吊紐は四隅にあります。

八日夕　　善明

とし子さん

七月八日

〔発信宛名、同前〕

A

九日。朝ぐもりの中に白く太陽がぼけてうかんでゐる。今日から試験でいそがしい。いそがしいが、どんなにあなたの愛で元気づけられてゐるか、又その故にどれ程までいそがしさをつきぬけて手紙も怠りなく書くか、目を大きくしてみてゐて下さい。

B

午後二時三十五分。晴れて、蒸しあつい。こんな時試験をやるのは酷だ。こちらもつらい。早速採点をはじめてゐると、校長と、隣の男が大声で教育論をはじめて、仲々やめない。暑さは暑し。遂々、下宿に帰つてやる方が能率があがるといふ口実で帰つてきたのです。ここでなら裸でどんどんやれる。

C

今日、あの服を着て、青黒い色の蝶形のネクタイをつけて行つたら、とても似合ふといふ。洋服もいいといふ。うれしい時や、得意な時は黙つて笑つてゐることにしてゐるので、今日も黙つてゐた。生徒がワーといひかけたが、かまはず試験問題の説明してやつたので、大騒ぎをやる余裕はなかつた。

暑い。空に刷いたやうにかゝつてゐるうすい雲すらも、押しのけたいやうに感じる。薬局（注・実家の師井医院）もこんな日はたまるまい。

中学生のTさんがレモン水を一杯もつてきて話していつたので、今三時。のんでしまつたら、やはりあつい。さあ、これから少し採点をやらう。今夜は岐阜に出て、何か買つて送ります。一寸たのしみになるやうなものを。

D

ほんとにすまないことをしてしまひました。今夜岐阜に行けなかつたのです。といふのは家のことで、どうしても今夜話に行かねばならなかつたし、それで帰つたのが十時です。下宿のかなしさはこれから出かけるわけにも行かないのです。しかし、十二日－十二日までには届くやうにします。中が何か、それは私もまだしらない。送りたい気持だけだから。

家は遂々建てゝもらふことにしました。その方が新しいし、家賃も安くつくし、こちらの要求もきいてもらへるから。二軒並んで、（長屋に非ず）体操のK氏のと同じ土地に建てゝもらふのだから、ひるまも、わりにさびしくなくすごせると思ひます。K氏の奥さんは鹿児島から来るのです。おとなしい人らしい。しかし、明晩か、明朝学校に出てみないと、はつきり分らないのです。が殆ど決定的なものです。たゞそのために、八月二十日まではかゝるかもしれないのです。十五日まで建てる約束にしておいて、二十日には確かにこちらに来れるやうになることを第一条件にしてあります。

カマドはつけてくれるでせうから、それなら、経済の点から、当分、石油コンロは延ばしておきましよう。少し落ちついてからでいいでせう。

くはしい設計の話は明日の手紙にかけるでせう。夕方まで、今日持つてかへつた分の答案の採点はすつかりすみました。明日もすこし。明後日は漢文。

E

よく撮れてないけれど、送り物がおくれた申訳に、ほんやりした写真をおくります。別に撮るといいけれど、乾板を仕入れに岐阜まで行くのをついつい忘れてゐるのです。そのうちに実物が逢ふから、これでゆるしてもらひませう。――この写真今朝さがすがどうしてもみつからぬ。昨日送つたのかしら？

F

午後十一時。暑い。Good night! Toshiko! 敏子さん。こちらにきてから、二人で合唱をやりませんか。一つか二つの歌でいい。敏子さんはいい声をもつてゐるでせう。歌へますか。少くとも歌ふ気はありますか。

十一時十五分　　善明

とし子さん

〔補　記〕

「善明、愛の手紙」を連載する計画は、ここ一二年前からあつて、未亡人敏子さんが今日なお手離しがたくて筐底に秘めておられた貴重な数通の発表もお許しをえていた。その第一回を発表した直後、他におあずかりしている遺品の中から、胸ポケットに入る大きさの黒クロス装の「従軍日記」を発見した。従軍中のメモか草稿かと思っていたところ、よ

三島由紀夫
十代作品集
¥450

はやくからその文学的素質をあらわし、早熟な才能として注目された十代の作品を著者生前の選択により収める。中でも単行本初収録の「王刻春（たまきはる）」は著者の愛着深く本書の編集に際して、その収録を特に希んだ「春の雪」の萌芽ともいうべき恋愛小説である！

■収録作品■

* 花ざかりの森（十五歳）
* 彩絵硝子（十六歳）
* 苧菟と瑪耶（十七歳）
* 玉刻春（十七歳）
* みのもの月（十七歳）
* 世々に残さん（十八歳）
* 祈りの日記（十八歳）
* 中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃（十九歳）

新潮社

現代日本文学大系第61巻

林房雄・亀井勝一郎
保田与重郎・蓮田善明 集

〔房雄〕獄中日記抄・勤皇の心抄・狂信の時代・転向に就いて等
〔勝一郎〕転形期の文学抄・人間教育抄・信仰について抄
〔与重郎〕日本の橋・戴冠詩人の御一人者・後鳥羽院・英雄と詩人抄
〔善明〕詩と批評・鴨長明抄（万丈記、風雲の日）・神韻の文学（枯野の琴、青春の詩宗、志貴皇子、雲の意匠）・有心（小説）
〔付録〕近代主義と民族の問題 竹内好／日本浪曼派批判序説 橋川文三／林房雄論 三島由紀夫／亀井勝一郎論 利根川裕／保田與重郎論 川村二郎／蓮田善明とその死 小高根二郎／小林秀雄と保田與重郎 安東次男

¥720

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

く見ると既発表の「陣中日記」に対応する「陣中詩集」であることが判明した。措辞なぞ、まだ彫琢を要する点が全くないわけではないが、一応は作品になっているので、手紙の発表より、これを先にする必要が痛感された。収録するところ三十数篇。来月より当分「陣中詩集」を連載するので、読者のご諒恕をねがっておく。

＊　＊

編集後記

一月四日。南御堂裏に当る楠の大樹で美しい坐摩神社に詣でた。佐久良東雄が祝部をしていたことのある神社である。桜田門外の変に連座して獄死した東雄を知って詣でる人はもうありませんと社務所の人は語っていた。彼の代表作〈朝日影とよさかのぼる日の本のやまとの国の春のあけぼの〉は、どこか善明の〈大海原 豊采昇る 朝日影 天足らしたり 国足らしたり〉に似ている。又、〈君がため朝霜ふみて行く道はたふとくうれしく悲しくありけり〉は、由紀夫の辞世〈益荒男が たばさむ太刀の 鞘鳴りに幾とせ耐へて 今日の初霜〉に通う風韻がある。

十二日。人文書院を訪れ「伊東静雄全集」決定版の原稿を手交した。本号に発表した「京都」が恐らく最後の資料なので、初版刊行以来十年を経て、真に資料の発見に協力してくださった方々の親切に、ここらでお答えする必要があると思ったからである。

二十四日。午後九時発のひかりで東上、筑地本願寺で午後一時から行われた三島由紀夫氏の葬儀に出席した。しかし満員で葬儀には参列できず、一般の告別式の列につらなった。三島資料の熱心な蒐集編集者である山口基氏が、あまりの行列の長さに茫然として佇んでいるのに出会った。「彰武院文蔵公威居士」の英霊に敬礼するだけが用事である私は、白菊を捧げるとすぐ退去したが、集英社の金沢一氏が警備に立っているのに出会った。

二十五日。熊本の蓮田敏子さんから「現代日本文学大系」を喜んでくださったたよりをいただいてほッとした。十一月二十五日以来、三島未亡人や遺子たちの身上に、わが身とひきくらべ心痛されていたからである。

三十日。筑摩書房の歌人・東博氏より、三島氏の辞世一首目は「幕末志士」二首目は「浅野内匠頭」であるとし、あの「古風」、あの「一月並」、あの「紋切型」が与える異様な感動こそ、他の文芸と性質を異にする短歌の「徳」であるといってきた。卓見である。それに〈たばさみし太刀の鞘鳴りさやさやに清（さや）けき死（しに）を死に給ひたり〉の悼歌が添えられていた。

（O）

果樹園 第一八一号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年三月一日発行
編集兼発行者 池田市石橋二丁目六ノ五 小高根二郎
印刷所 大阪市東住吉区桑津町五の八 元市印刷株式会社
発行所 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社（電話池田六一・八三一七）
定価 四〇円 送料 二〇円

果樹園 一八二号 昭和四十六年三月一日発行（毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四〇円 送料二〇円

果樹園

第182号

画仙・棟方志功(二) 小高根二郎
陣中詩集(一) 蓮田善明
放浪への誘い 高梨一男
封筒 吉本青司
スマトラ記(十) 田中克己
公園・その他（実録） 伊東静雄
宮城賢
編集後記

画仙・棟方志功 (二)

小高根二郎

2 近祖・棟方時代

因幡以来の胸形の姓を、棟方と改めたのは太郎家・次郎家の各二代目、角左衛門貞像、十左衛門清久の代になってからである。が、この二人の代に、思わぬ吉凶の出来事があって、家運の上でかなり大きな格差ができたのである。

太郎家の角左衛門は寛文九年（一六六一）家督百石の新知士としてスタートした。寺衆、手廻、目付を経て長柄奉行となり、大目付を兼ねて二百石取りの中堅にまで栄進した。がやがて百石で、閑職の留守居頭を勤めていた。享保三年（一七一八）在勤四十七年の時のことである。甥の油布次郎衛門が発狂したという家からの急報で、息子の弥市郎と共に馳せつけると、抜刀をして荒れ廻っている。危険で、なんとも取り押えようもない。放っておくと家人や他人に危害を加える心配がある。万やむをえず槍で油布を仕留めてしまった。ところが後日になって、公儀の指示も仰がず私刑にしたというかどで、角左衛門は閉門の上禄知を召し上げられ、息子弥市郎はまだ部屋住みながら百石いただいていたが、その分も取り上げられ解雇…という悲劇が起った。角左衛門は閉門中に病死、弥市郎が七人扶持で再雇傭されるまでには七年間の謹慎を要したのだった。

太郎家のこの不運な挫折に対し、次郎家はトントン拍子の好運に恵まれた。十左衛門清久は万治元年（一六五八）家督三百石でスタートした。（スタートから二百石の格差があった）。九年後の寛文七年（一六六七）諸手足軽のとき四代藩主信政に認められ、妹与根姫を妻に下された。この際、胸形を棟方と改姓したのである。さっそく扶養の資として妻へ百石、清久は九百石に加増された。六年後に子達の養育費であろうか、さらに三百石加増され、しめて千三百石の大身に成り上った。但し、その後において病気がちになり、御役御免、加増の禄知は召し上げになったが、留守居頭になった晩年にも、三百石の扶持は保証された。とまれ、清久が得たこの閨閥によって、息子の作右衛門貞良が家老職につく道が拓かれたのである。

この吉凶による太郎・次郎両家の格差は、その後も変らなかった。謹慎後に再出発をした太郎家の弥市郎の息子、角之丞貞寄などは一藩を代表する人物であったが、次郎家との比較において下座につかねばならなかった。寛政元年（一七八九）アイヌ族の反乱が起って、幕命で派兵が決った時である。さっそく遠征軍の編成が作られたが、その三番手——八百五十余名の指揮は、たまたま次郎・太郎両家で執ることになった。即ち、侍大将は二

十八才の次郎家の十左衛門貞豊であり、その号令を伝える者頭は五十九才の太郎家の角之丞貞寄だったからである。家門で侍大将、者頭の格差が人物や年齢にかかわらずついたのだ。それにしても編成は、棟方家と他家の組合せにすべきだったと思うが、乱が平定して実際の派兵に及ばなかったことは、せめてもの幸せであった。

事実、当時の津軽藩は派兵どころではなかったのだ。と、いうのは、餓死者八万余（藩民の三分の一）を出した天明大飢饉後の藩政の建て直しこそ、急務だったからだ。幕府や他藩、それに大阪の商人たちに、救恤米を購入した莫大な借財がかさんでいた。その後四年も経過していたので、金利を加算しての返済は財政を圧迫していた。再たいつ見舞うかもしれぬ天災に備えて、備荒の籾米も用意せねばならなかった。又、食のためには、火付け、強盗、殺人が流行し、下層階級にあっては人肉をさえ喰った人心の荒廃を、刷新せねばならなかった。

幸いこの時局を担当した八代藩主信明は英明な青年藩主だった。前代の失政と家老の無為無策を看破し、まず人事の一新を図った。無能な家老や用人を次々に解職し、家門や門地にかかわらず人材を登用した。登用された者は三十石から百石ぐらいの中堅武士が多かった。世人は彼等を「君子組」と呼んで尊敬した。前述の遠征軍の編成で、者頭にあげられていた角之丞貞寄も「君子組」の一人で、大目付、用人に抜擢されたのだった。

明君信明の治政下で浮かび上った施策に「家中在宅」があった。武士の帰農政策である。サラリーマン化した武士を、新知士の初心の昔に返えして土着させ、荒廃した田畑を耕作させつつ、用務の時だけ登城させる方策である。この方策は信明時代、菅江真澄とも交際があった智者・毛内宣応（もうないぎおう）によって献策され、彼自身によって実践された。しかし、申し出があれば許可するにとどまり、制度化されるまでにはいたらなかった。この「家中在宅」が制度化され、二百石以下の武士はすべて帰農が強行されたのは九代藩王寧親（やすちか）になってからであった。志功の先祖が棟方角馬の先祖と袂を別って商家になったは、この「家中在宅」の風潮に乗ったのではあるまいか？弘前から青森へ移住して藤屋を名乗ったのは、君子組の貞寄より三代目、棟方左太夫からであった。

三、美の象徴・火と花

1　小学一年時代の青森大火

京都文庫
京のおんな
依田義賢
¥690
駸々堂

志功は日露間の風雲急を告げだした明治三十六年（1903）九月五日、青森は大町一番戸に生まれた。父幸吉三十四、母さだ二十五のときの子である。自叙伝「板極道」によると兄弟姉妹十二人とあるが、これは誤り。九男六女の十五人の中の三男坊――六番目の子なのである。

母は、まだ一（はじめ）（十）、ちゑ（八）、賢三（四）、ちよ（三）の四人にかなり手が取られたかして、志功に乳房を充分にふくませる時間の余裕がなかった。従って、志功が空腹で鬼の子のように大聲で泣きわめくと、飯の炊き汁であるォネバをあてがわれることが多かった。おむつ交換の世話も、六十一でまだ気丈な祖母つるの担任だった。いわゆる婆ちゃん子なのだ。母は五人の兄や姉が先取りした後のお余り、いわば憧憬のような存在だ

った。

もともと父の幸吉も、この祖母つるの眼鏡にかなって入り婿となった人である。彼は十和田街道を二キロ南に行った浜田村の安田家の次男、鍛冶町の和田に徒弟に入っていたがその腕前を祖母に見込まれて、まだ十六だったさだと一緒になったのである。そういえば志功という名のヒントも祖母から出た。死んだ夫彦吉の彦を取ったものだった。ヒコは東北訛でシコと発音される。シコから志功という、まるで彼の発奮の人生を予め造型したような、打ってつけの名となったのである。

幸吉は初打ちの鎌を青不動の照覧に入れたことでも分るように、一種の名人気質を持っていた。気に入った仕事でなければ手をつけなかった。名代の鎌は博覧会に出品していくつも賞状や賞杯を貰ったが、刃物なら鉈、包丁、薄刃、鯖割きも得意だった。その他は大物作りが得手だった。土蔵扉前、蝶番、錨、井戸掘り道具などの工作機にまで及んだ。特に船釘打ちなど妙技に属した。「左足でフイゴを呼吸させて、ペタペタ、つるべ打ちに打ち揚げる船釘の腕前の美事さ」など、志功はヨダレを垂れながら陶然と見とれた。しかし名人気質というものは、反面、一種の頑さにも通じる。彼は気が向いた仕事しか請け負わなかった。自然に仕事の量が限定された。それに生き物が道楽だった。雲雀、鶯、鶉、目白、ヒワ、雀、金魚……と。なんでも飼ったが、可愛がりすぎて結局は落す始末になった。これらの小さな声と色を持った生命に哀憐を感じる心緒は、同時にその生命を奪う残虐さと裏腹だった。それは声のない魚たちに向けられた。彼は釣りにも熱中した。鯉、鮒、鯰……なんでもよかった。釣れようが、釣れまいが、同じ釣り場で糸を垂れねば気がすまなかった。と、いって獲物を自分は喰うわけでなかった。惜し気もなく人にくれてやった。全く無償の行為だった。いや、無償どころか、息子の一や賢三にとっては、大変な犠牲を強いる有償行為だった。飯時になると釣り場まで弁当と酒を届けねばならなかったからである。特に薄暗くなってからの釣り場は、足場が悪くなっていやだった。いくら小遣をはずんでもらっても、釣り合わぬ有償行為だった。

ところが幸吉の無償行為の度がすぎて、とんでもない有償行為をしでかしてしまった。顔馴染みの左官屋・中村某の借金に、連帯保証人となったのである。中村は金を手に入れると逐電した。幸吉は莫大なその借金の肩代りをせねばならなくなった。連帯者は幸吉の他にも一人あった。が、幸吉はその男を気の毒がると、妙な侠気を出して全額を自分一人で背負いこんでしまったのである。一（はじめ）の記憶によると、月六十円の高利だったというから、家財という家財は持っていかれ、稼いでも稼いでも日銭の責苦に追われたのだ。母さだの姉である「横丁のお母サ（ヨコチョガサ）」ことつねの預かり物である皮鞄を、顎髯の濃い執達吏が持っていこうとし、それは姉さまの持ち物ですからと、やるまいと懸命に押える母の白い手を情容赦なく打ちのめして強奪していった法の無情さを、志功は唇を噛んでマナジリの泪を押さえ、じっと眺めたこともあった。食べ物は蕎麦・粥はよいほうだった。味噌汁に大根の切れ葉、それにスイトンが浮くだけの時もあった。自然徒弟たちも見切りをつけて去っていったので、母は足袋はだし、モンペ、前掛姿で、父の向う槌をトンテンカンと務めねばならなかった。それでも彼女は夫に対し苦情一ついわなかった。苦情や不平を鳴らす暇があるなら、その前に片付けねばならぬ家事が山積していたからだ。寒くなる頃には、夜鍋で「母（かか）ッちゃ足袋」を幾つも作らねばならなかった。幾枚もの布を丹念に重ねて縫った足袋底は、革靴の底のように横に喰み出た上、足裏にゴワゴワして穿きづらかったが、店売りのコールテン鬼足袋など、志功にとっては

陣中詩集 (一)

蓮田善明

押し花

友の美しい詩集に、わたしは
時々、所々で摘みとった草や花を挿んだ
（ああ、こんな時、こんな所に！）

日経て、詩集を開く時、それら草花
其の侭に押し花となりて、ひったりと
やさしい姿を、眠ったまゝ、残してゐた。
もはや　あの　やはらかさは無く涸れて、
悲しい一つの形になり果ててはゐたが、
残し得た花の、草の見事さ。

その一つの花を、わたしは或る日見めでて
やぶれぬやうにそっと指もて剝がしてみた
るに
葉の裏にも匿れて、又、花がしっかりと
着いてゐた。

—青興鎮にて—

戦と笑

始馭天下之天皇、神日本磐余彦炎出見尊、
登美の長髄毘古を征ち給はんとてちぎり
給はく、
「吾は、日神の御子として日を負ひてこ
そ撃ちてめ」
かく正しき日の御影のまゝに匿蹤み給ひぬ。
かの時、尊おんいきどほり烈しかりければ、
三度
「うちてし止まむ」と、大御歌歌よみ給ひ、
八十梟師ども皆がらに殺し給ひて、大御饗
をば
悉に御軍どもに賜ひて、大いに笑ひぬ。
（記紀による）

—晏家大山にて—

夏相聞

夜べにや、いたく降りけらし、
暁、潤の音疾く
疾くも人を憶ふかな。

夢には近き人のかげ。
さめては空し、未だ残る
妹が小指の温み。

「忘れよ」とわが戦ひの
深きこころの谷に夜の
雨ぞ、あやなく降りたりし

うつつにきけば崖の
木末に鳩の、沾れし羽を
うちはらひつゝ鳴けるかな

—青興鎮宿舎—

獅子

雨の無い焦熱の日続き
洞庭湖も干涸れて来ると水は
赭い底の色を呈し、
咽をかきむしるやうに苦しみ出し、
水が燻り燃え立つのが望瞰された。
わたしたちは、獅子が鬣逆立て、
くるひ躍るやうだと話し合った。
こんなに自然も、露に怒るかと
わたしたちは骨まで顫へる思ひがした。
たゞ、わたしたち「彼方」を思ひつつ、
漸く
この威怖に堪へてゐた。

—晏家大山にて—

炎日

炎帝天を歩む時
地の物全て色変り、
乱れし雲も、そのままに
身じろぎ息めて佇蹲めり

涼しき風は岩角を
そと越え来り、掘立ての
日覆の下に吹き入れて
やさしと思ふに、はや去りぬ。

見よや、真昼の堡壘に
影てふものは消えはててて
涸れたる山の骨露、
昆蟲の類を音なはず

ああ焼け焦れたる大坩堝、
何ぞも、遠く空の声、
地の音鈍く轟ける——
「死」想ふはるけき彼方より

晏家大山にて

草

（田中克己氏へ）

出征の日に、あなたの詩は
遠征の彼方から私を呼んだ。

まさに高根の花であった。

高根の花といえば、憧憬というか、美というものが、初めて志功の身体に入ったのは明治四十三年五月三日の大火の時であった。「板極道」では尋常二年の時のことになっているが、彼は九月の遅生まれだから尋常一年の時のはずである。その日は初めての遠足の日だった。汽車で弘前を通過して大鰐温泉までいく、子供の胸がはずむ企画だった。しかし志功は支度ができなくって行けなかった。その志功が可哀そうなので、次兄の賢三も学校を休んで、慰安の凧揚げをやってくれた。幸い西風が強くてよく揚がった。曽我の五郎と御所の五郎丸力くらべの図柄は、宙天で左右に頭を振ると、うン！　うん！　と唸りをあげて、ほんとに相撲をとってるようであった。蠟を塗った四つの眼玉がよく陽に光った。丁度午すぎであった。近所から火の手が上った。安方町の成田菓子製造所だった。十五メートルの強風なので焔も煙も地を這った。賢三は凧をたぐる間もなく、志功を連れると家にとって戻した。「火事コだァ……。みんな逃げれ！」と暗い家の内に向け絶叫した。父母はいなかった。内から姉つせ、ちゑ、妹のちよ、たけ、弟武志郎の六人が転がり出た。賢三はとッさに志功を背負った。志功よりたけと武志郎の方が一、二歳、齢下だった。普通ならこの二人の中のどちらかを背負うのが筋である。だが、弱視の志功は煙に巻かれ落伍する危険があった。まだ十一だが、しっかり者の賢三の判断だった。「旭町の三浦サ！」と、一行の進路を指示した。西南千キロ、鉄道近くにある徒弟の家なのだ。火元の斜め風上に当る。群集は焔と煙に追われて風下の東方へ逃げる。家財を負い、或いは車力に積み罵りわめき、我先に逃げる奔流に逆っての突進だ。賢三は小さな身体を楯にして、「離れればマイネ！」（注・マイネは いけないの意）と、左右の姉、後に従う妹、手に引く弟を、幾度も叱咤せねばならなかった。やがて、焼け落ちた火元から大きな火の玉が舞い上った。それは頭上の真ッ黒な空を翔けると、寺町の方角へ落下した。新たにそこの蓮心寺も燃えだした。賢三の率いる一行は、左右二ヵ所の火群を突き抜けねばならなかった。必死の突進だった。賢三の背に負われている志功にも危機が直感されたのか、大声あげて泣きわめいた。

「青森じゅうの神さま、仏さま、消防のポンプさま、みんなきて助けてケロジャー」

家近くの善知鳥神社もすでに火焔に呑まれていた。今が今、蓮心寺へも飛び火したとこ

わたしはあなたの詩集を何処に置か
うかと携へて来たゞけである。
わたしは探険家が、その太古、秘匿された
る宝を、
あやしい絵図、そこに開きて索すやうに
あなたの詩集を戦のにはで繙く。
ここでわたしはただ石を見た。
岩の上には、唯、草が風に吹かれてゐた。
わたしはその処々で草を摘み、あなたの
詩集に
そっと挿んだ。

—晏家大山にて、コボト五月号の後記をみて—

位置

私はしってゐる、私は尋ねようとはしな
い。
私は茲にゐる。
黙せる草よ、花よ
ただ酷しき熱光よ、真闇なる夜よ
私の堡壘を歩む靴は磨り滅って
私の皮膚は焦げ、しかし私は夜をめざめ
てゐる。
雨と風とがこの岩山をかくもすりくだいた
やうに
空が何も無くて斯くも高く広くなったやう
に。
この山は図式の如く北より南、敵の方へ伸
び、
太陽は真左より真右へこの高地を横断す
る。
太陽が湖水に沈み、又私達の寝床なる地底
をくぐり、
朝、ここより出でたりとひむがしの地平に
かゞやき出づる。
正確と
位置と、時と——
夜ほど星へ私の魂の通ずる時はない。
日中、私は太陽と雲との正しさに惚りす
る。
わたしは茲に守り、茲に睥睨する。
山の胸から滴る水をわたしは舌打ちして飲

ろだ。自分に火が付いた神様も仏様も、人様の救援どころでなかった。現に、新安方町の町角には、武田知事と大味警察部長の督励のもと、市消防組の第一部と第二部とが、自慢の腕押ポンプを総掛りで操ったが、いよいよ燃え盛る火勢に対しては、まるで蝉の小便だった。青森歩兵第五聯隊からカーキ色の三百五十名の兵士も出動した。県庁、物産陳列所地方裁判所、監獄、中・女学校を守るためだった。引火しやすい周囲の構築物や家屋の取壊しにかかった。港に停泊中だった駆逐艦曙から、水兵達もボートで救援に漕ぎつけた。賢三にとっては、たった一キロの道のりが、四、五キロにも、いや十キロの遠さにも感じられた。が、やがて黒煙しをかけた古枕木の鉄道の柵が見えだすと、目的地はすぐだった。乱打されてる半鐘や警笛が初めて耳についた。「あと一と息だ。けッぱれ！（注・けッぱれは頑張れの意）」と、賢三は姉妹や弟を励ました。この時、三浦にすでに避難していた母さだは、一行を発見すると駈けつけた。彼女の姿をみつけた賢三は背から志功を降ろすやいなや、「お母ッ！」と叫ぶと、きょうだい七人、辞をそろえてわッ！と泣きだした。背負われてきて一番楽ちんだった志功の声は誰より高かった。母のうしろにいつか父幸吉も立っていた。彼は

む。
わが兵らもここに登るために苦しみ、
敵はいら立って砲火を浴せ岩角に傷つけ
た。
しかし　私は日中は更に後方なる高き峯
を、
夜は光芒きらめく北極星を背負うて黙し、
希望と憧憬をさへ見殺しにした。
私は自分と人間と生活とを知らない。
小鳥は茲に鳴かぬ、唯棲める雲雀も山よ
り
翔り放りて歌ひ、鳶のみ押し黙りて浮み
寄り来る。
あゝはるかなる未知の友はその好き文章
の中に、
「順ふや音なき花も耳の奥」と鬼貴の句
を書きつけてきた。
私は日を数へることに倦んで日没を眺め
静かに翳り初めた山の東面に心を憩うた

—晏家大山にて—

傷つける兵

敵は劫き夜は明け
兵ら血と土に汚れたる戦友に寄り添ひ、ま
た
擔架をば四人にて　肩に　荷ひ
山をしづかに降り行きぬ
肩を手榴弾に射ち貫かせ、腕も血噴きたる
に分隊長は
自ら軽機関銃を腰に提げ、
敵の前に立ちふさがりて射ち薙ぎ
手榴弾なげすてて逃ぐるをうしろより
更に弾丸新たにこめて射ちしといふ
彼、先つ頃まで上等兵として中隊きつての
名射手なりき
今負傷兵の最後尾より銃手離さで附添へり、
その他、兵ら夜明くる迄己が傷を言はず、
或は腕しびれて動かざる迄戦ひ、
或は脚、腿傷つきつつ更に前進して手榴弾
擲ち
また己が傷忘れて絶えず戦友を気つかひ労
はりしといふ

例のように釣場にあったが、火事を知ってとって戻すと、すでに燃えだした家の内から、家宝の青不動だけは持ち出した。その軸を両掌に握りしめながら、「みんな、好がった。好がった……」と、珍らしく安堵と慰撫が混った言葉を洩らした。が、志功だけは一番最後まで泣きじゃくっていた。と、いうのは、あれほど頼みにした神様、仏様、それに消防ポンプ様も、一向にご利益がなかったからである。いや、ご利益を垂れるどころではなかった。その神様、仏様ご自身が、凶火に追ひたてられ、舐めまわされ、人様にご利益を垂れる暇もなかったからである。それに知事閣下からお聲がかゝった消防ポンプ様も、操手を繰りかえ、腕力のかぎりをつくして奮闘してるにかかわらず、洪水のような火勢に抗しきれぬからだ。火蛇の舌はさらに目抜きへ伸びて、めぼしい西洋建築——東郡役所、警察署、巡査教習所を呑みこもうとしていた。大空には噴火のような大入道雲が立ちはだかりもくもくと盛んに湧き上り、たぎりつつあった。広大な火の海は風を呼んで、さらに焔の色と勢を新たにした。泣きぼけて、泪で洗眼された志功の弱視に、この時、火は美の権化に変身していた。それは家宝である青不動の後背の焔より美しかった。鍛冶場のフイゴが

そが中に一人の若き新参の小柄なる兵
かねて　めざましく真面目にて、黙々と働
　けるが
顔より足先へ四つの傷に全身を血に彩りつ
つ
わが問へるに嘗て一度も苦しげなる面せ
ず、担架の上にもほほえみて答へけり
かくて三々五々山より下らんとするに、折
　から烈しき朝の雷雨にて
滝なす猛雨を浴び傷つける者も扶け擔へる
　者も、肌まで余す所なく
しとどに濡れそぼちつつ、押し黙りて隊に
　帰り行きぬ。
暗澹たる雨の中に汝ら唯無念の怒りに眼光
　りてゐたり

―わが小隊に贈る―
（今朝この戦ひあり、今夜われ山に赴かんとして）

戦死せる同郷の若き兵士に

昨夜彼の守れる山に敵の来襲あり、彼、聯隊砲四番砲手として奮戦中、頭部貫通銃創にて、午前〇時三十分負傷、一時三十分死亡せりと今朝電話にてその隊より本部に報告せるを、たまたまかの山より八キロ隔てし山の守りにありしわれ、ふと受話器の耳にふれ、おどろきて確かめたるに、相違なくわが同郷の兵M也。わが出征の時彼の若き妻女手紙を托せし縁あり。この高地とかの高地二つ相聳えて相守る。われこの一日、ここより幾度か双眼鏡を目に当ててかの山を望み堪へがたし。

堪へずわれ泣きぬ今朝の夜星の下堪へて
　君　呀　命ささげぬ
今朝の夜君戦闘にみまかりし今日の夕べの
　暮れなんとする
午前零時三十分に頭部貫通銃創一時すぎ絶
　命といふにあらずや
雲は泣き風は哀しみ声もなく鳶は君が戦死
　の山に舞ひつつ
君戦ひに死せしその日ぞ暮れんとす暮れて
　明けなば果てなかるらん
君とわれ八粁隔て聳えたる高地並べて警備
　りしものを
この夕べ湖水の上に雲赤し君が魂しひさし
　隠るごと
夕陽さし松は青くも静かなり君戦ひて死せ
　しかの丘
双眼鏡もて見れば余りに山近しまざまざと
　見き君戦死せし巓

―七・二五―

吹き出す火より清澄で硬かった。それは日本武尊を囲んだ野火のように宙を飛んだ。あの剣の火焔だ。或いは、一つの焔と他の焔とを柔軟な鎖で結び、それからまた無数の焔と結びつく、立体的な不動明王の火焔だ。どのようにも形を変え、又形を作る、変化自在の畏怖だ。水によって制せられるふりをしながらその構成原素である水素と酸素とを養分とするや、爆発的な活力でいよいよ猛然と燃える原始の力だ。この畏怖と力を象徴とする美の元締めだ。志功の唇がにんまり弛んだ。さっきの悲しみは、いつか微笑に変っていた。火とはなんという恐ろしい美しさだ。そう、彼に初めて美が感応された、記念すべき刹那だった。

堤川を越え遊廓まで焼き払った業火が鎮まったのは、やっと午後四時頃になってからであった。全焼家屋五千二百二十二戸。罹災者三万。死者二十六名。重軽傷者百四十六名。損害七百五十余万円であった。

彦吉（明治27・4・10）
つる
幸吉（明治3・9・9　大正14・10・26）
さだ

一（昭和4・3・21　明治62・3・4）
ち　ゑ（明治29・4・26）
つ　せ（明治31・2・18　明治35・3・24）
ち　賢　三（明治33・1・1）
し　功　よ（明治34・10・2）
た　志　功（明治36・9・5）
け　武志郎（明治37・10・16　明治38・12・9）
き　せ（明治40・5・1　明治41・9・21）
トミヱ（明治42・3・28　明治43・12・5）
彦六郎（明治44・2・28　明治44・2・10）
吉　雄（明治45・1・18）
正七郎（大正4・8・18　大正7・7・4）
喜八郎（大正7・7・15　大正7・7・4）
九二夫（大正9・1・1　大正8・7・11）

銃　弾

にくしみの地の底空の極みより湧き出でて
　来て敵を追ひ射つ
岩かげにわれ待ち顔に敵の顔かなたに向け
　りいざ狙ひうて
一斉に火蓋を切れば岩をうち草切りてとぶ
　銃だまあはれ
にげまろぶ便衣を着たる敵の奴手に銃持て
　るぞ勿射ち洩らしそ
応戦のすきまを与へず敵をうつ兵どもが銃
　の音さやけ
坂を転び松の林の麓べをにげ隠れ行く射ち
　倒しけり

ほととぎす

花がちつて朝と夜のあはひを、ほととぎす
　が、
まぼろしをこの世に告げる声をもて
鳴き渡りゆく季節、
弘法大師は、
杖を執りたまうて、
やまとの国々歩き巡り玉うた。
（おお、今日もあの杖の音がする、ああ、
南無大師）
弘法大師の為されたことは、今にこんこん
　と噴き出でる
泉や井戸――。
大師の遍歴の詩を、今も素直な農民が
あはれ深く語りつたへる。
――この国土を蔽うてゐるなんといふいみ
　じい比喩ぞ。
大師は幻想と冒険とで
感動が創る智慧を諭へ玉うた。
大師は東へ西へ歌ひ渡り、
（……あさきゆめみしゑひもせす）
岩土に杖つきさし玉へば
村村の泉と湧き出で、又
倒さに突き立ててそのままに捨て去り玉ひ
　し竹や木や、
倒さのままに根生ひ、青々と芽をさしぐみ
　ぬ――。
しかし大師は地下の美しい脈を指し玉ふの
　みにて、
村にいつまでも駐まつては在さなかつた。
その後こんこんと水は湧き、
さらさらと葉は鳴り、
ああ無双の多才と能芸、

2　M・ファルマン機とオモダカの花

青森の大火で、尋常一年の志功の身体の内にしっかり根をおろした美の種子は、年次が進むにつれ、やがて青空に双葉をもたげた。四五年生の頃には、もう級友から絵の注文があった。沢地甚蔵辯護士の長男司郎からだった。習字の半紙に凧絵を描いてくれろというのである。志功は武者絵を描いた。得意の図柄は「幕上げの曽我五郎」だった。大きな眼は復讐の怒りにマナジリを裂いて燃え、抜き身の刀をへの字の口にくわえ、両掌はまん幕をもち上げて、まさに父のかたき工藤祐経の寝所に踊りこもうとする勇姿である。志功をとり囲んでいた小山のような坊主頭から、「うめェ」「ワにも描いてけろ」と喚聲と注文の声があがった。一枚描いてやると、その代償に半紙二枚をくれるという揮毫契約である。差し引き一枚がもうけになる勘定だ。その一枚を習字の時間の用に当てたのだ。この

奇蹟を以て説法に代へた智者。

ああ、大師、今日末世にあなたの開山の心
空しく衰ふる時、
あなたは約束を守らぬ怯懦者でさへあり、
あなたは退屈のために
眠ることにさへ目ざめがちであらう。
あゝほととぎす――。
ほととぎすも、あまりきかなくなつた。
（だが、今日もあの杖の音がする。）

―八・五―

商売用の武者絵は、いわば青森大火で感得した火の美の申し子のようなものだった。が、やがて、火の美に対応する花の美が、志功の身体に入る機会がやってきた。

それは志功が六年生のときだった。つまり大正四年十月二十日から二十三日までの四日間おこなわれた陸軍特別大演習の時の出来事だった。大本営は第八師団司令部のある弘前に置かれて大正天皇も滞在された。いわば実戦さながらの陸軍の祭典だった。フランスから輸入したばかりのモーリス・ファルマン一九一四型も参加した。プロペラが機翼の後にあって、複葉の主翼の前方に櫓のような運転台が伸びていて、その突端で飛行士は昇降舵をあやつる構造になっていた。蚊トンボのような清楚さと頼りなさを兼ね備えたような飛行機だった。飛行士は、その機種を輸入した当事者の沢田秀中尉その人だった。（この中尉は二年後に愛機と共に墜死した）。青森市民は噂に聞いた飛行機というものを、初めて青空にみつけて熱狂した。勇ましい爆音をとどろかせて上空を旋回すると、機首を下げて志功らの長島小学校の門を擦去すると東方に飛び過ぎた。「それッ！墜落だ」と、誰いうとなく叫んで、先生は竹の鞭を手にしたまゝ生徒たちは教科書をおッぽり出して運動場に跳びだした。後はワッという群集心理となって、鎌重（かまじゅう）の別荘裏の田圃の方角へ胡麻粒のように駈けだした。志功もその一粒だった。弱視の彼に機影が見えたわけではない。が、爆音の去った方角へ無我夢中で走っていた。いや、友に負けられない好奇心が地を跳んでいたのだ。家並みを抜けて別荘裏の方角の田圃にかゝった。不定型の湿地帯と溝があった。友らの越えていった溝の一つを志功も跳んだ。飛行機のようにひらりと飛んだはずであった。が、目測を誤ったかして、足をとられた胴体は宙に浮くと、後はいやというほど地に叩きつけられた。疼痛が内臓に稲妻して眼がくらんだ。脛のどこやらに、蛭でも吸いついてるようなヌメリとした感覚があった。どうやら血が出ている様子だった。次第に意識がはっきりしてくると、志功はすんでに頭を泥水に突っ込むところだったのが分った。眼の前に花があった。それは水中から抜きんでた花茎に咲いた三弁白色の花だった。三つ四つ咲き、いただきの方は蕾だった。花心に蕊は黄に鎮まり、白くて丸い花弁が、燃々たつのを引き留めている格好だった。それは水中から燃えだしたつつましい典雅な燭台のようであった。その灯を消さないように、まるで矢ジリか、楯のような鋭三角形の大柄な葉が水から頭をもたげると風を防いでいた。花弁も三なら、葉のとんがりも三だった。割り切れぬ三。神秘の三。なんという神秘な美しさだろう。なんとありがたい神からの頂戴物であろう。もしッが転ばなかったら、この美は永久に授からなかったに相違ない。それにしてもこの花の名はなんというのだろう。飛行機を追っていたことなどけろり……と忘れていた。志功はいつまでも寝転んだまま、まるで花をなめるようなあんばいに、下から仰ぎ横から眺め、まともから凝視めて飽かなかった。いつか大火の紅蓮の焔で火の美を体得したが、花の美はこの時みごもるように志功の身体に入ったのだ。

志功は後年この花を回想して、名もしれぬ神秘な花だったといっている。それかとおもうと、あれはオモダカの花だったともいっている。オモダカなら夏の花だ。季はすでに中秋の下旬であり、しかも北国のことだから、はたして現実に咲いていただろうか？やはり名もしらぬ神秘の花としておいた方が正しいかもしれない。ともあれ、もしオモダカの花だとすれば、志功にはすでに剔染みの花だった。と、いうのは、まるでわが家の庭のようにして遊んでいた善知鳥（うとう）神社の前通りの堀割に咲いていたので、彼は遠目ながら眺めていたからである。

善知鳥神社は三四五七坪もある広大な神社で、社頭には青森県の里程元標が設けられてある。つまり、青森県の元締めになる地点なのだ。面白いことには、祭神は先祖の胸形が筑前で剔染みだった宗像神社の三女神――天照大神の姫君たちであることである。まるで志功の遠祖である胸形玄蕃義利が、筑前から奉戴してきたといったあんばいなのだ。しかも神社の縁起たるや、他国からの移住者である点も同じなのである。

昔、都に安方（やすかた）という智・仁・勇にすぐれた人がおいでた。ところが悪者のザンゲンで失脚すると、東夷の国へ流罪となった。愛子もまた遠く西国に配流となった。安方ははるばる津軽までやってくると、国見嶽に登って外が浜一帯を展望した。土地がひらけ、住むに格好な所がある。そこを目当てにやってくると祠が祀ってある。北方には潟が展け、その先は海につらなっている。又、西方には沼があり、東方は大きな河になっていて、三方は葦原ばかりで住めそうな場所がない。やむをえず祠の傍らに小屋を結んで仮寓とした。ところで、この祠は誰をお祀りしているのか？　と、土着の蝦夷に聞いてみたが知っている者とてない。或る夜さ夢に女人が現れて、「汝、夷人を憐れみ、漁渡と耕作の道を教えて丹精をつくしなば、末永く子孫は栄えん」と告げた。その頃蝦夷たちは山海の悪鬼にたたられて安穏な日とてなかった。安方は蝦夷を従えてこれらの悪鬼を平らげ、たつきの道を教えたので、ここに平和な外が浜が生まれたという。安方は常日頃から宗像の三女神を信じていたので、それ以来この祠にお祀りすることになったというのである。又、西国筑前に配流となった子も、同じく宗像の三女神を祀って、父の無実の罪が一日も早く晴れることを祈っていたので、当社と一体の西社になったというのである。又、社名を善知鳥（うとう）というのは、安方の妻が「ウトゥの前」という名だったからだという。彼女は浅虫掛橋の山上の館に住んでおられたが、はなはだ長命で生き神になられた。彼女を神社の裏手の瓢箪池の浮島に弁才天として祀ったとこから、いつか社名になったというのである。ちなみに、安方・ウトゥの前の間にできた子安日の時代安方の勅勘は解け中納言の位を贈られたという。時は斎明天皇の御代、おりから安倍比羅夫が蝦夷征伐にやってくると、外が浜一帯がことのほか平和であることに感銘、その由を奏上したので、この恩典があったというのである。

まこと、めでたしめでたしの縁起であるが筑前宗像で父との再会を生涯祈りつつむなしく果てた愛子と、その宗像から魅されたように安方ゆかりの外ガ浜にやってきた志功の先祖の間には、なにやら仮初めならぬものが感じられる。「善知鳥神社は、私を育てた時が所が、何時、何処にあってもあの境内が私の身体に附いてゐる」（「善知鳥神社」）という志功のひたむきな愛着も、この潜在する結縁の余波であるかもしれない。志功は境内の拝殿

・手洗鉢・石燈籠・檜の大鳥居や大銀杏に愛着したばかりではない。社前の大通りに貫流している堀割りにも詩のような慕情を寄せたのだった。

「あのアカシアの花が房に匂うて、あの境内前通りの巾広い堀堰に、水を湛へて水草が浮ぶ、沢潟が咲き、あの土堤に、春には菫が咲き、蒲公英が実を飛ばした頃を思ふ。柳が枝たれて水面の浮草を釣ってゐる事なども目にしたものだった」（同前）

志功は土堤のアカシアの葉蔭にときに憩うと、淀んだ水中から花燭をもたげたオモダカを、遠目ながら鑑賞していたのである。それに水底の泥んこには神秘な伝説が身をひそめていた。主は一間余もあるという沼貝夫婦だ。典雅なオモダカの花燭で誘いをかけ、うつつをぬかしてるところをずるずると水底に引きずりこむ……。そんな幻影が小さな志功の脳裡にひらめいたに相違ない。しかし、九月中旬の大祭には、この堀割りの真中に棒杭が打ちこまれた。それに今年編んだ新しい縄を張りめぐらし川提灯を吊るした。赤ただ一色の素紙の提灯は、まるでたわわなホオズキのように水面ちかくまで垂れ、初秋の風に揺らいだ。その揺れにつれて、志功も小さな肩を左右にゆさぶりながら、耽美の眼を細めたのだ。

この赤提灯は、境内の右手から裏手にかけて広大にひろがる、善知鳥沼と瓢箪池のふちにもる吊された。もともと善知鳥沼は潟から導入された水門で、漁舟や商船などが入ってくると、水続きの瓢箪池の浮島に祀られている弁才天に、水路の安全を祈ったものだったのだ。この浮島と眼と鼻の民有地には、志功の弁才天たちの館があった。右から伊東内科野間歯科、佐藤外科がそれだった。そこの看護婦たちはみな弁天様のようなもんだった。書生たちはこれまた慈悲深いエビス・大黒だった。とりわけ、真中の野間家とは、家族ぐるみといっていい親密な交際があった。だから志功にとっては、神社の境内続きのように身に付いたものだったのである。そこには茂子、弘子、治子という三人の可愛いい女の子があった。長女の茂子は志功より四五歳年下で、頬のふっくらとした、まさに少年志功にとっての弁才天だったのである。もう暗くなってから、父の鍛冶の使で境内をよぎらねばならないとき、志功はきまって茂子を呼びだすと道連れにした。こんもり茂った境内は気味悪く、沼のふちに沼貝夫婦がバックリ口を開けて待ち構えてるかもしれないし、手洗鉢の上あたりに、水虎様の四十八人衆・河童がしゃがんでいるかもしれないからである。弁才天は境内の守護神だ。従って茂子さえ連れていけば、行く道がぽッと明るむほど、志功は安堵をおぼえたのである。

放浪への誘い

高梨一男

思い思いマイホーム建ち並ぶ
界隈に
桜並木の
満開の
ユウウツよ

またもや僕に鎌首もたげる
性得の放浪癖
をもてあまして居る

——うす汚れた乞食に身をやつし
異郷の片田舎を遍歴したいと

——沙漠に淫しない影曳く狐と化し

春ちかく

埋立ての黒土に醗酵する春
いちはやく小花をひらくタンポポ　イヌノフグリ
建ちかけの家の砂丘へ
犬は大急ぎで駈上り
うさんくさげに嗅ぎ廻る
崩れる砂のせせらぎ
そわそわ熟れゆく光に
ういういしく風は顫え
マイホームの子供部屋より
おぼつかないエチュード洩る
桜の蕾はまだ固いのに
犬は季節のユウウツに敏感だ

黝んだ地平の彼方へ消えてゆきたい　と

封筒

吉本青司

絶望の中から
沈んだ光がさしそめる

捨てたふるさとに
なぜこんなにこころひかれるのか

山荘の庭のすみれの
ひきのこした根株から
もう新芽はめばえたか

とだえた通信の
透いた封筒の底から
春雪のふりしきる谷あいの村が見えてくる

原生林のブナの木はだのように
聡明なあなたの手足よ

絶望の中に沈んだ光が
なぜこんなに僕をとらえるのか

そこにはもう僕の
時間は無いと知りながら

スマトラ記 (十)

田中克己

一昨年の十一月号（一六五号）に書いて以来やめてゐたスマトラ記をつづけて書くことになった理由は二つある。誰も読んでくれてゐないと思ったこの記録を、春夫先生の七回忌でお会ひした庄野英二さんに「昔のことよくおぼえてますね」といはれて、読んでもらってゐるのがわかったことが一つ、もう一つは今年八月に迎へる還暦の翁の常として思ひ出話が楽しいのである。読まない「果樹園」の読者にはまことに気の毒ながら、小高根さんが散文をも書けと仰せられたことをいいことにして書かしてもらはう。

プラスタギといふメダン市の避暑地のホテルの庭でわたしは平服でざん切り頭の男が近づいて来て、突然話しかけたことばにおどろいた。その男はわたしに「軍属さん、あなたの知ってゐる日本の軍艦はおほかた沈みましたよ」といったあと、くはしく聞かうとするともう見えなくなってゐた。わたしはゴルフのクラブを握ったまま、しばらく考へて「気ちがひだらう」と結論して、またクラブを振

った。

わたしの知ってゐる軍艦は陸奥、長門などの旧式戦艦だけで、それもはっきりとは知らないが、三月シンガポールへの航海中、サイゴンへ寄る途で見たわが聯合艦隊の偉容はまだおぼえてゐる。それが殆んど沈んだとは信じられなかったのは当然である。この軍人の伝へたがったのは多分六月五日のミッドウェー海戦の大敗であらうが、この海戦のことは南方の軍属には伝へられず、もし伝へられたとしても、失はれた航空母艦「加賀」「蒼竜」「赤城」「飛竜」はその存在も知らず、これとともに海中に沈んだ空軍の勇士たちの損失がその後の航空戦の不利を来すことなど、想像もできなかったらう。この一瞬だけわたしを驚かせた軍人はたぶん味方の敗戦を知らぬげの軍属に憤慨して、軍の機密を漏らしかけ、その危険に気づいて早々に姿をかくしたのであらう。

わたしは暖い飲物を摂取したあと、毎日新聞の自動車でまた暑いメダンに帰って来た。

メダンの宣伝班の支部から軍人の引揚げが命ぜられたのはこの直後で、わたしは残った軍属四人中の最年長者として支部長を命じられた。同じころ毎日新聞の支局も為井さん一人となり、篠原、桐山二氏もシンガポールに

Some Fragments

Shizuo Itoh

The Park

Every place where I sit down
Becomes a park.
Then people recover of themselves
Their easy pace as water,
Begins to talk in their own language
Like treetops.

Recollections

At the root of green reeds, certainly,
Live the recollections.
Swaying leaves
Sound like a May spring,
But nowhere signs of the wind.
I must be watchful.

August

No premonition was in the streets.
And
One had nothing to do but wait
For oneself to recover.

The Lake

My wife, do not believe
The affnity of the small boat.
It is the lake's thoughtful deception
That it looks so white on the water.

Translated by Ken Miyagi.

帰還することとなった。二君はわたしに別れを惜んで、化粧鞄を賜はったが、これは長くわが家にとどまって、昭和一八年、報道業務中に亡くなられた篠原氏を忘れさせなくした。

わたしは仲良しを失った上、俄かに小人数になった宣伝班支部長として、大変な苦痛を感じた。シンガポールで一ケ月間、一二〇人の現地人の長としてゐたときにも感じたが、わたしは人の上に立つ柄でないのである。わたしの部下といふことになってゐる永田君は新聞記者、も一人の某君(姓名を全く忘れた)は台湾の教員、一番若い森武二郎君は同盟通信のカメラマンから徴用されたのである。わたしは支部長として、すべての責任は負うかはり、永田君はマスコミ関係、某君には現地人の日本語教育、森君には師団から一週に一回支給される主食副食の受取りをたのんで、了承してもらった(と思った)。もとより三君が兵とともに従来行ってゐた日朝日夕の遙拝点呼などはとりやめとし、支部長の中尉の用ゐてゐた室は永田君に与へた。永田君はわたしに一番近いと思ったし、いまも信じてゐるが、相手がわたしのことをどう考へたかはわからない。

事務室(現地人の出入する)の奥には特別

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

「詩人、その生涯と運命」が刊行されたのは昭和四十年だった。その後の五カ年間に、詩・散文・手紙の新資料がいくつか発見された。又、静雄の声価が日を追って高まるにつれ、諸家の研究発表もようやく盛んになった。その中には参考にすべきいくつかの啓示があった。従って拙論にも若干の増補と訂正をする必要ができた。その意図も含めて、昭和四十四年一月から毎月「伊東静雄研究」の連載を始めた。当初、この内容を「詩人研究篇」「作品鑑賞篇」に分ける予定であったが、思うところがあって、「研究篇」に当る部分を「詩人・伊東静雄」と改題して刊行する、

5月25日発売

新潮社

の椅子が置かれてゐたが、さて九時の執務時間になると、台湾から来た某君がデンとそこに坐った。わたしは不審でもあり不快にも感じたが、「そこは支部長の席だよ」とは、いふもいまいましく、そのままにさせておいた。

不愉快な支部長の任務が何日続いたか、シンガポールから映画班が到着した。スマトラ紹介の映画をとるといって、これも徴用の映画技師稲垣浩邦君が長、カメラマンの田辺良男君とインド人を父とし日本人を母とした青年（日本姓を称してゐたがこれも姓名ともに忘れた）を通訳として、戦闘をほとんどしないで日本領土となった（とわたしは思ってゐた）沃土スマトラを内地に紹介するためにわざわざ派遣されて来たのだった。

将兵がゐなくなったので、室は十分ある。どうぞどこでもいつまでも使っていただきたいといふと、稲垣君は早速三人で、メダン市中を撮影に出かけたが、帰って来ると、ポーイ（ジョンゴス）に命じて米飯をたかせ、市場（パッサル）で買って来た魚や貝で握りずしを作った。見事なもので、まぐろ、えびなど日本そっくりのタネはおほむねそろったが、シャコだけは見つからなかった由であった。わたしはシンガポール市長の大達茂雄閣下に漬物をいただいて以来、久しぶりに日本食を食べた。おいしいことはまちがひなかったが、わたしはふしぎに現地食に慣れるたちなので、味よりは稲垣君らの腕の方に感心して食べた。

編集後記

二月一日。大阪の今橋画廊の竹中郁個展で久々で竹中氏にお目にかかった。「四季」の発刊打合会以来のようである。氏の年賀欠礼の挨拶状で昨年母堂が亡くなられたことを知ったので、遅ればせながらお悔みを申しあげた。

五日。杉本秀太郎氏より拙稿「伊東静雄研究」完結の祝状を頂戴した。

六日。石川勝之氏より同じく拙稿完結の祝状をいただいた。「声」「花」のくだりで、泪がこみあげた由付記されていた。

十日。宮城賢氏が同じく祝状をくださった。やはり末尾で涙がこぼれた由しるしてあった。

二十二日。蓮田敏子さんから秘蔵の善明さんの手紙が送られてきた。拝讀しているうちに、善明さんの青春が私にのりうつってくるのを感じた。手紙というものには、普通の文章にはない確かに生命がこもっている。

二十三日。熊本の荒木精之氏より、三月四日に熊本市民会館で「三島由紀夫・森田必勝氏百日忌追悼の集い」が催される由のご案内を頂戴した。早いものである。しかし、日が過ぎるに従って、三島氏の映像はいよいよ克明になってくる。

二十八日。新潮社の池田雅延氏が来訪された。上掲の広告のように、拙論が新潮選書として刊行されることになったからである。伊東静雄の顕彰に力を致された方々の所説や言葉は、できるだけ広範囲に収録できたつもりである。静雄はまさしく現代詩の六連星の一つになった。（O）

果樹園 第一八二号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年四月一日発行
編集兼発行者 池田市石橋二丁目六ノ五 小高根二郎
印刷所 大阪市東住吉区桑津町五の八 元市印刷株式会社
発行所 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社
（電話池田六一・八三一七）
定価 四〇円 送料 二〇円

果樹園 一八三号 昭和四十六年五月一日発行（毎月一回一日発行）池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四〇円 送料二〇円
果樹園 一八二号 昭和四十六年四月一日発行（毎月一回一日発行）池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四〇円 送料二〇円

果樹園

第183号

画仙・棟方志功(三) 小高根二郎
春早く 吉本青司
無垢 高梨一男
陣中詩集(二) 蓮田善明
スマトラ記(二) 田中克己
魚の眠り 福地邦樹
編集後記

画仙・棟方志功(三)

小高根二郎

3 鍛冶と侯武多の手伝い

志功の幼い身体と心に入った火の美（荒魂）と花の美（和魂（にぎ））を、小学校卒業後も育ててくれたのは、藤屋のオンチャこと、本家の次男・棟方忠太郎であった。彼が毎週、新番組ごとに描き換える活動写真館のペンキの絵看板や、石版刷りのビラやチラシは、鍛冶の手伝いをするようになってからの志功にとって、まさに美の象徴だった。当時は映画が誕生したばかりで、日活の尾上松之助や沢村四郎五郎やが、印を結べばドロドロドロン……と姿がかき消える忍術映画で天下をうならせていた。スクリーンの脇にはカイゼル髭・紋付羽織・袴姿の辯士が控えて美文調の解説を朗吟し、スクリーン下には音楽隊が待期していて、場面場面に応じて緩急よろしくメロディを振舞って情緒を醸していた。志功は週変りの早朝も起き抜けに、まっすぐ上新町の活動写真「常設館」へ駆けつけた。そして一回りは齢が違うオンチャが描いた、目も、手も、足も、まるで生きているようなヒロー・ヒロインの人物描写の生彩に息をはずませた。それに志功は日頃から立川文庫の愛読者だったから、一つのスナップから猿飛左助や霧隠才蔵のひょうびょうとした浪曼的な物語につながった。いや、それ以上に、いつになったらこの看板コ—岩見重太郎狒々退治—がワに描かせてもらえるだろうと、茫洋の夢想でたたずむのであった。

志功自らこの執心を次のように述懐している。

「雪の吹雪く真冬も、晴も雨も曇り日にも、わたくしは未明に起き、そのかはるがはるの石版絵や看板絵に『絵姿』の至極を『絵』といふどうにも逃れることの出来ない姿を拝み始めたのだった」（「侯武多」彩々）

しかし、その夢想は意外に早く実現の緒についた。七夕祭りの山車（だし）であるネプタの制作に、オンチャから助手を命じられたからである。ネプタといえば、昔坂上田村麿が蝦夷征伐のとき、敵をおびきよせる計略で作ったと伝説されている万燈の化け物だ。まず「牛若丸・辨慶」「曽我五郎と十郎」といった主題が決定すると、割り竹で主題を造型する骨組みが作られる。内には百目蠟燭五十丁、百丁がともるように仕組まれる。次で仙花紙か奉書で紙張りがほどこされ、それからがオンチャの活躍舞台なのである。下図にもとずいて墨で描き割りがされる。次に色分けと隈取りのための蠟引きをする。その上から強烈な黄、赤、青、紫といった原色系の彩色が塗りたくられる。志功の助手の務めは、初めは墨すりや泥絵具とき、やがて色合せに進み、後年には蠟引きにまで抜擢された。仕事が完成に近付くにつれ、達人と評判をとったオンチャは上機嫌になった。牛若丸の凛々しい眼に、涼しい点睛を入れていた彼は、「あゝ青年画家

・棟方忠太郎君……」と叫んだ。この独言にあっけにとられて、頭上を見上げた志功におかまいなく、彼はなおも「青年画家・棟方忠太郎氏は……」と、自讃と陶酔を格上げした。次はなんとしても、「青年画家・棟方忠太郎先生」とこなければいけない。

ところでネブタの絵自慢は他にも沢山いた。張り出し名人格の錦章。俗にヨッケのネブタといって別格の人気があった。それもそのはず、本職が日本画家だった。忠太郎の達人に対して、名人格に左官屋の北川があった。彼は親方だったが、ネブタが近付くと本職は休業仕って、もっぱらネブタ作りに専念した。この人の作品は「北川のネブタ」で通り、スケールは幅があって大きかった。「その「描割り」に於ては遠く忠太郎さまの敵ではなかったが、そのつくる俟武多は、何か俟武多本来の面目を躍如とさした不邁、不法、無尽な「運行」があったのだ。まるで生き者の様にその北川俟武多が「揺れ揺れ」して六法を踏んで来る」（同前）。そう、志功が感銘したほど、山車としての本質を生かしたネブタだったのだ。つまり、忠太郎は絵において北川にまさり、北川はネブタにおいて忠太郎をしのいだわけだ。その他にネブタ上手として「目腐れトンコ」があった。重傷トラコーマでその名があったが、本職は籠屋で、彼の作るネブタは稚拙だったが、そこになんともいえぬ可憐さがあって人気があった。

志功はネブタ祭りのその日がくると、自ら制作を助けたネブタの前で、女装をした跳人（はねと）として踊った。相棒は野間歯科の書生遠藤と山田だった。豪気で凝り性の遠藤は、花笠までは手が届かなかったが、自前（じまえ）で唐チリメンの浴衣から帯・足袋・草履までととのえ、手足もぬかりなく白粉で化粧をした。山田は野間夫人の長じゅばんを借りうけた。志功はせめて下着だけでも女装をしようと腰巻を借りて回った。女中頭の琴は笑い上戸で、「そいだバ、化け物だきゃア……」と、身体を二つ折れにして笑い崩れて、話にならなかった。痩せっぽちで泣き上戸の清は、腰の物を供出すると聞いただけで、ベソをかきそうになったので志功はあきらめた。やっと、右隣の佐藤外科の丸顔の看護婦だけがニコニコと承諾して、よそいきの真赤な花模様の腰巻を供出した。佐藤を除いた二人は、そんな片輪の女装で、煽りたてるような太鼓・鉦・笛の伴奏にのると、ラセ、ラセ、ラセラセ……と浮かれ出た。

ネブタ　流れろ
忠臣　立てよ
ラセ　ラセ　ラセラセ
イペラセ　イペラセ

この掛け声に煽られて、二人はネブタの先導をすると町中を跳ねて回った。一杯（イペク）出セ、イペラセ。町内のあちこちで振舞われる御神酒。初めは夜目にもくっきりと威勢がよかった佐藤の化粧した手足も、いつかしどろもどろとなり、あちらで引っかけ、こちらで転んで、せっかくの唐チリメンも帯も、ズタズタに裂けてしまった。長襦袢の山田もへべれけになり、どうやら善知鳥（うとう）神社までたどりついたが、沼貝夫婦におびき寄せられてか、どぶぼり沼にはまってしまった。這い出ようとあせればあせるほど深みにのめりこんで、やっと泥杭につかまって悲鳴をあげたところを、必死で志功は引き上げたが、拝借物の長襦袢は泥んこで、貝沼夫婦の養子になったような山田の姿に、志功は思わずぷッ！　と吹きだした。ところで、人を笑った志功の方も、腰にぶら下った花のお腰は真二つに裂けてしまっていて、そィだばまるで岩見重太郎に退治された俳々（ひ）コだけンだ……と、山田と佐藤に指摘されて、なんといってあの気のいい持主に詫びたもんかと、今度は志功の方が青くな

るというていたらくであった。

この真夏の日の底抜けの歓喜をしめくくるように、二ヵ月後の九月十五日には善知鳥神社の秋の大祭がやってきた。志功が例の紅提灯の数に、残る秋の美しい日数を数える詩人になったものだが、宵宮には佐藤・山田と組んだ脱線トリオで裏道から浮かれでた。暗夜には沼貝夫婦と河童（メドチ）に占領されたこんもりした境内に、見せ物小屋と売店が立てこんで賑わった。見物（みもの）は寺町高田屋の寄進にかかる仕掛け花火だった。仕掛け綱がかけられる神木のような大銀杏に、白紫色の閃光を炸裂させてシュル、シュル、シュッ……と昇天する火竜。それを誰よりもよく見ようと、身軽な志功は拝殿ぎわの多層の石塔のてっぺんまで攀じると、石川五右ェ門もどきに絶景を堪能して佐藤・山田をうらやませがらせた。又、吹き矢でオデンの数も競い合った。標的の盆には金、銀、黄、青の区切りがしてあって、中心の金にあたるとオデンが三本だった。一番遠目のきかぬはずの志功の矢は、不思議と金的を射とめて、二人より一、二本多くオデンを賞味した。一銭で二本のオデンだった。勝ち誇った志功は、最後は必ずカラミ飴に立ち寄った。白手拭をかぶった馴染みの婆さんが、半固形の飴を指に唾をつけて伸ばしながら、割箸に巻いて売っていた。手作業なので、少し大きい目のができると、子供達は一斉に「ヒイキする。まけてケロ！」とはやしたてて、自分の巻き量を少しでも殖してもらう算段である。その飴を買うと、志功はさっそく口にふくんだ。やんわりと舌の上に乗せると、棒を両掌にはさんでキリ揉みした。ペロペロペロン……。土くさい甘さが口腔いっぱいに拡散する。田圃に寝っ転がってかいだレンゲ草の甘い匂いだ。いや、甘酸い湯気を立てる馬糞の臭気

青森ネブタ　　棟方忠太郎作

にも、どこか似ている。いや、飛行機を追って転んでかいだ、あのオモダカのほのかな甘さだ。ベロベロベロッ。ベロベロベロッ……。口腔いっぱいに拡散した甘さは、唇の両端から溢れると、ねばっこいヨダレになって垂れていた。そんな志功をみつけた野間家の三嬢は、「やァーツ！　スコーサ、牛コだきやァ」というシゲ子の発声で、笛付風船のような陽気な笑いをぶちまけた。

四、出発と離別

1　青森裁判所弁護士控所給仕

母さだは大正八年七月、十五番目の子、九男の九二男を生んでから、急に健康がすぐれなくなった。腹の子を出したばかりなのに、もう一人入っているあんばいに、妙に腹がふくれていた。それに疼痛もあった。まだ四十の若さであり、それに気丈なさだは、血の道だろうぐらいに高をくくって、賢三と志功が血と汗で鍛えあげた製品の売りさばきに懸命であった。が、どうにも枕から頭がもちあがらぬ日もあって、寝たり起きたりの生活が始まった。母体が病んでいるので、当然のことながら、乳呑児の九二夫はひ弱かった。三カ月あまり経った大正九年の元日に、げんでもなく、死んでしまった。その後は力が尽きたように、さだの寝たきりの生活が続いた。

結局、作工場の段取りも、製品の売りさばきもできなくなったので、自然…賢三は吉尾自転車屋の修理にかかりつけになった。鍛冶は休業となったので、志功は十六歳の身をもてあましながら、毎日ブラブラしていた。そんな志功を見掛けて、裁判所の弁護士控所の給仕にならんか？　という、願ってもない話が、沢地甚蔵弁護士からかかった。彼の息子の司郎は、志功描くところの凧絵の大ファンだったので、沢地は志功の才能を見込んだわけであった。事実、彼は大観や栖鳳の絵を愛蔵していたほどの美術愛好家だった。したがって、志功の武者絵のどこかに、すでに異才の萌芽をみつけていたのであろう。志功は一も二もなく、先生、お願いします……ということになった。

さっそく出所してみると山本という先任者がいた。猫背で近眼。じじむさい青年だった。彼は貧寒な風貌にかかわらず、態度には妙に、悠揚としてせまらぬものがあった。なんでも彼は文学に打ち込んでいて、近日中に東京へ出ていくということであった。つまり志功は、青雲の志を抱いた彼の後釜だったのである。山本は申し送りの固定資産である、津軽塗りの盆、土瓶、先生用のフタ付古九谷の茶碗、茶托、書生用の糸切りが渋皮色になった湯呑茶碗などを引き継いだ。その際、流動資産ともいうべき、「きゆッ！」という独特の呼称も申し送った。先生や書生方は、山本を呼ぶさいには「きゆッ！」と言うというのである。つまり、「きゆッ！」は「給仕」の「給」で、「仕」は必ず省略されるというのだった。呼称の省略は、とかく、アダ名のような蔑称に多いが、この省略は、あくまで繁忙な先生方や書生方の、能率的な必要から生まれたものだから、ひがまぬように……との注意だった。さすがに文学的な解説であった。それから、彼は一度試験をしてみるから、志功に答えてみよといった。彼は猫背の背におもむろに左腕を回わして、心もち反り身になると、

「きゆッ」

と鋭く呼んだ。すかさず志功は、

「はいッ！」

と、倍の音量で返事をした。山本は眼鏡の底に糸のように眼を細めると、ニヤリとした。

「きゆッ！」

「はいッ!!」

今度は当初の二倍のフォンで返事をした。山本は、よしよし……といわんばかりにうなず

いてみせた。

「きゆッ!!」

「はいッ!!!」

山本は、そんな調子でよろしいというと、最後の申し送り資産である雑巾といびつなバケッを取り出した。そして、

「ここの給仕は歴代大物になるんだ。俺は東京へ行く。お前も今に絵の方の大物にきっとなれるぞ」

そう、先輩としてのおごそかな託宣があった。

給料は月六円だったが、裁判があるのは月曜と金曜日だけで、従って、他の火、水、木、土の四曜日は弁護士は出所しなかったので、志功にとっては銭金に替えられぬ貴重な勉強時間であった。かつて早暁に起き抜けると、忠太郎が描いた活動絵看板を勉強にいったように、まだ薄暗いうちに出所して掃除すると、スケッチ・ブックを小脇に、東方三キロの海辺である合浦公園まですッ跳んだ。立樹が多く、池には噴水がシブキをあげ、池畔には藤棚や亭が憩いの場を作っているそこは、画材にはこと欠かなかった。或る日スケッチから戻ると先生方の出所を待ちうけていた。湯もチンチン沸いて、いつでも茶の出せる体制で、準備万端ととのっていた。やがて、書類を包んだ風呂敷包みを下げた書生を従えて、羽織・袴姿の先生方が悠然と入ってきた。志功はうやうやしく朝の挨拶をすると、さっそく茶の準備にとりかゝった。この時、「きゆッ！」というお呼びがかゝった。沢地先生の書生さんからだった。「はいッ!!」と、練習ずみの二倍の音量で返事をすると、志功は駈けつけた。

「これなんだば？　鼠コでねだか？」

と、書生さんは仔鼠の尾ッぽを指でつまむと、屍体を宙にブラ〳〵させた。近眼の志功は揺らぐ屍体に鼻をすれすれにもっていくと、それを確認しようとあせった。と、書生は催眠術でもかけるあんばいに激しくゆすぶった。志功は、指先で目まいをかけられた麦藁トンボのように、大きく剝いた眼をクルクルさせられた。書生と先生方がドッ！　と笑った。

春早く

吉本青司

二羽の小鳥が庭にきて
よもぎを啄むでいる
淡青にちぎられた葉っぱが
ひときれ空にはねたと思うと
たちまち見事に嚥みくだされてしまう
荘重な春の聖餐
けさは空気も澄んでいる

彼岸

冬のあいだ無機質の骨であった
今日みると
すみれが花を咲かせている
感情のほむらに灼かれ
感情の潰えに痩せた死者たち
このあざやかな転身が
対話には
欠けてはならないものであった

反歌

崖にすみれの花をかざって
死者たちは
眠やかに語らっている

が、静止した屍体を確認すると、なんとそれは雑巾の切れ端だった。綴れのようになっていた古雑巾が、古机のどこかの角っこに引っかかって千切れたのだ。

「豚眼！　気をつけネェか……」

そういって書生は切れ端を、恐縮した志功の掌にのっけた。

しかし、この仔鼠事件は、志功におもわぬ二つの好運をもたらした。その一つは、沢地先生から銀縁眼鏡を下賜されたことだった。凧絵好きの、あの司郎の姉がかけていたお古だ。度が合わなくなって不用になっていたのを頂戴したのだ。さっそく志功は掛けてみて、あまりに外界の事物や人物が克明に見えすぎるのにびっくりした。もう雑巾の切れ端を鼠と見違える心配はなかった。事件の張本人の意地悪な書生の顔に、噴火口のように吹き出ているニキビの数が目立ちすぎるのを、気の毒に思ったほどだった。親切な沢地先生の鼻毛の数まで読めた。つまり、外界が力をもちすぎて、レンズを透して受けとる側の方が戸惑う形だった。志功は眼球を押さえつけられるような圧迫を感じた。

「先生この眼鏡コ見えすぎますッ」と志功がいった。書見をしながら、伸びた鼻毛を抜いていた先生は、見向きもせず

「それなら、眼鏡に目を合わせろ！」といったので、志功はぺこりと辞儀すると、恐懼して引き下った。

もう一つの幸福は、仲良しの茂子が、級友である若井てる子と宇野さい子を連れて、学校の往き復りに、掃除の手伝いに立寄ってくれることになったことだった。てる子は魚問屋、さい子は米屋の娘だった。彼女たちは、かいがいしく井戸から水を汲んでくれたり、弁護士の机の雑巾がけをしてくれたりした。志功が野間の書生部屋で、初失敗である鼠事件を披露したことから、遠藤か山田の口からその話が茂子に伝わり、眼の悪い志功を応援しようという、この義挙になったのである。もともと彼女は、恐がり屋の志功のために、宵闇の善知鳥神社の通り抜けのパイロットを勤めたものだった。この義侠的な彼女の提案で、今後はかわりばんこの当番制で、毎日、給仕のそのまた給仕という下請負を、やってくれることになったのだ。志功にとって身に余る幸福であった。贈られた眼鏡のお蔭で遠目も効くようになった彼は、そう約束して帰っていくマントを着た彼女らの後姿に、おもわず掌を合わせていた。メンコイ、メンコイ、この女人観世音の卵たち……。茂子は青、てる子は緑のチェック、さい子は海老茶のマントを着ていたことを、志功の眼は忘れがたく刻んでいた。

2　師匠からの逃亡と母の死別

もともと出発と離別とは表裏一つのものであるに相違ない。弁護士控室の給仕になって、いっぱしの人生の新しい視野が展けだした志功に、運命はぬかりなく二つの離別を用意していた。その一つは師匠忠太郎との生別であり、もう一つは母さだとの死別であった。

肝臓癌と診断された母さだと、カリエスの姉ちよとが、仲よく枕をならべている二階の窓外には、七夕ちかくの真夏の空が、紺青に焼け爛れて広がっていた。その空のそこゝの一角に、名に負う名人・達人、いずれも負けんきの大天狗・小天狗たちが、炎熱と戦いながら、一斉にネブタの造型に熱中していた。例外なくオンチャの忠太郎も、町内の名誉にかけて制作に取り組んでいた。今年も志功は光栄な助手を仰せ付かって、筒袖で滴る額の汗をぬぐいぬぐい、汗みずくになって献身していた。水運びから墨すり。それから蠟融き。忠太郎師匠は化物のように巨大な紙張りに墨割りをしていた。義経の八艘跳びか、それとも辯慶の勧進帳か、次第に造型の主題が明ら

無垢

高梨一男

いつまでも幼く澄んで在りたい
フィリパ・ピアス曰く
〈私たちはみんな自分の中に子供をもっている〉
——私の中の子供
今日まで私を守って呉れたのはそれだ

赤ん坊

1

赤ん坊が笑う
——赤ん坊が笑うように
笑えたら

2

赤ん坊が泣く
力いっぱい
身も世も在らぬように
泣く
——あのように
泣けたなら

かになるところである。ヒーローの、眼を剝き、唇をへの字に結んだ怒顔の輪廓ができあがる頃から、ご機嫌の「青年画家・棟方忠太郎君は……」が始まるのだ。そろそろ頃おいだ、と、丁度忠太郎の裸足の足元で蠟引きをしていた志功は、ニンマリ微笑を含んだ。いや、待て、忠太郎師匠とワとは十三ちがいだから今年三十一ではないか。青年画家というより、もう壮年画家と呼ぶべき先輩なのだ。そう、思ひながら、鼻先にある忠太郎のカガトを、見るともなしに凝視めていた。凝視めれば凝視めるほど、妙ちきりんな格好をしている。これはまたなんという怪奇な形状だろう。もともと、日頃見馴れていない肉体のこの部分は、尋常であっても変な形相に相違ない。忠太郎師匠のこの部分は、まるで歯抜けで片目の婆さんの顔にそっくりだ。座りタコの出た外側のクルブシは、トラコーマで盲いた眼窩だ。両クルブシと肉のあるカガトの三角地帯に刻みこまれた横皺は、歯のない歯グキだけの口腔にのめりこんだ、色褪せた唇と、それに伴う醜い条溝といったあんばい。この世のありとあらゆる煩悩と、見果てぬ未練の悉皆を、ことごとく畳みこんだといった老婆の醜悪な顔相！　それが忠太郎のカガトに現れている。いや、いや、これはもはや人間の肉体の部分ではない。どうやら畜生のけがれた肉体の、どこかに似ている。日照り田のように、カサカサにひび割れた脂ッ気のない皮膚……。これはノロノロと熱気のなかを食を求めて漫歩する草食動物—あの象や、犀の、排泄孔のあたりの青臭い干上った皮膚なのだ。志功はいきなり目まいを感じた。いや、それは堪えられぬ嘔吐感を伴っていた。手にしている罐の中に融けてる蠟が、突然、屍臭のようなにおいを放ちだしたからである。志功は我慢しようと思った。下唇を噛んだ。この時、空の方で、のびやかな「ああ、青年画家・棟方忠太郎君は……」が始まった。目まいと嘔吐感が一緒くたになると、志功の内にむらむらと謀反気が起った。三十一にもなって青年画家であっていいものか！　この老婆のように皺がより、脂涸れた貧素なカガトが、どうして明日への跳躍をする、青年の肉体であっていいものか！　申訳ないが、これはワの師匠の足ではない。その跳躍を見習うべきバネのあるカガトではない、クルブシではない。この嫌忌感は、どうとも押えようのない激情に爆発した。逃げろ！　その場から逃亡しろ！　それもすぐにだ。そう、胸の内の激情が志功に命令した。志功は手にした罐と筆とを、そっと灼けた地べたに戻すと、高みで

陶酔している師匠をそのままにして、一散走りでその場から逃げだしていた。どこへというあてもなかった。とにかく、二度とオンチャに呼び戻されぬ遠く……と、思って走っていた。

志功はその日以来、二度と忠太郎とは出会わなかった。万年青年絵師であったこの師匠は、昭和二十五年に満六十歳で楽天的な生涯を閉じたが、その日まで丸々三十年もの間、志功は逃亡の日の志を曲げず、かたくなに二度と出会おうとしなかったのである。

陣中詩集 (二)

蓮田善明

夏雲

夏雲馳る、銀のごと
塊いくつ相連れて
ただ馳りゆく。
ああ、ひたすらに馳ろは快きかな。

雨に水漬ける山山は
蘇生りきぬ爽かに。
葉裏に光り風は行く
ああ、風に嘶ゆる山の聲。

今は何を思はんや
凡べて霖雨に腐りたり
今日山嶺に我が立てば
目に煌めける夏雲よ。

見よ、群嶺越ゆる群雲の
紫の影地をとびて
涯なき目路へきえてゆく
ああ、翔けゆく思ひこそ愉しけれ。

—七月初旬—

巌嶽

あれを越えてきたのだと人は指さす
私はかへりみて怖ろしく目を蔽ふ
越えてきた道さへ見えぬではないか

嵬峩として青空を嚙みやぶり
雲は血のやうに黒衛萄色の岩肌をながれ
一角の嶺さへ一怪岩の肘つける姿であつた
ただこの岩嶽に踏みしだかれた褐近い山々が
すこしの草と低い松とで青み、双眼鏡で見ると
鳶がその梢を黙々と舞つてゐた

それより上は、もう怖ろしくて
ああ、あの山脈が空虚に向つて咆吼する日、
ああ、あの一角が拆け崩れる日——
ああ、何といふ比喩を見てゐるのだらう、
しかし私はこれを夢と思ふゆえ！
おののきつつこれを信ずるよりほかなかつた

偶詩

独りねておのれを見れば
ともしびにわが身を照らし
いのちなるかも
足かげを壁にうつして
虫けらの蟲の音をきく

秋韻

曼珠沙華露浴びて居りひと想ふ
こほろぎや夜陰にすだく土数尺
猫ちやらし大きく伸びて子を想ふ
なまめきて蚊の泣きわたるころしけり
秋草のさかりとなりし瓶にあり
処女さぶいろをむかしは女郎花
月落ちて地平の下の稲光り
萩のびて蕾待たるる夕明
有明や歯朶に秋の蚊とまりをり
鹿ありて飛べよ朝霧海をなす
霧を抜く陣地石なり雛雞を飼ふ
雲海を出でて翅疾し岩燕

看板絵師忠太郎からの逃亡は、この日から新しい出発を志功に約束したわけであるが、旅支度をととのえるためには、四ケ月後の十月二十五日、母さだの死という涙の洗礼を経なければならなかった。彼女は十六歳で養子幸吉を迎え、十五人もの子を次々と生みつづけ、満四十一歳の若さで、この世を過ぎたのだった。志功はこの母の乳房より、オネバを多くあてがわれた、いわゆる祖母ちゃん子で、母の慈愛とはまさに木洩れ陽……、多くの兄や姉のおこぼれを頂戴するといった格好だったが、それだけにまた母に寄せる憧憬と思慕は熱かった。さだを追悼する次の名文は、その事実をよく物語っている。

「母からは、父の不行を一つも聞いた事はありませんでした。今に、どうしても、父の悪口を母から片言も耳にした覚えはありません。父は子供を厳しく扱いました。子供の頃、わたくしはその激昂を受けて、鉄瓶を投げられました。間に入って楯になっていた母は、それを真向から受けて大きい傷を受けました。後々まで繃帯で鉢巻していた母の愛しさを、母の教えの様に生きています。みんなの子供たちの楯傷は母からきれませんでした。今、想うて、わたくしにも哭ききれない傷でした。…中略…

貧乏の底にひたり通しの母の半生には、着物と言つても赤い色の入つた、何一つも身体にしていた記憶をわたくしは知りません。その頃の髪型で、あったのでしょうか、銀杏返しという潰れた「二つの輪」が向い合って頭の後上に乗っていたものを器用に、短かい時間で結って、白い元結いの両端を指扱いままチョキンと切っていた様なことまで判って参ります。…中略…母は、縫物仕事が、達者であったと、祖母が、何時もじまん話でした。有名な青森の土祭「ねぶたどき」に跳ねて踊る人々の新しいネブタユガダコを一日に十何枚も縫い上げた事の手練の程を、今も親類中の話の底になっているものです。母は、そうして家事に、家業に憑かれとおしに動め抜いて仕舞ったのです。

青森の冬は、一月が最中です。吹雪鱈の漁期です。今、青森県自動車学校校長の次兄とわたくしが鍛冶場でつくった「鱈鈎」を、その頃の若由、沖五、千葉伝、角利その他の魚問屋に、母が売りに行くのです。その日その日の材料、燃料で打った鈎は問屋のカマズに小さくなって、頭を叩いて、鼻の高い母が、何丁、何丁と「富士彦」の鱈鈎を数えながら、袖形、丸形、巴形と、それぞれの問屋の特別な型に分けられて、買われて行くのです。いつも、わたくしは、遠くこの有様を想い出されます。吹雪が、吹雪を馳けて、青森の往来は一寸さきも見えません。重い金造りの鈎は、仲々おもうように売れない時には、手縫いの指無し手袋も、何の暖かさもなく、凍る手腕が重かった事でしたでしょう。朝が、昼になって、夕となっても鈎が売れなかったかもしれません。富士彦の銘は切ってあっても、値段の都合で何度か、何度、値だたかれし

た事でしょう。母は必死となって、その日の米、惣菜の代を稼いでいるのです。暮れた吹雪の街に暗い電燈が灯っても、手元が見えなくなっても母が帰りません。『おがあ！』兄弟たち集って、母の姿を待って、待っていたものです。黒い頭巾から、ハ、クズをはいた足先まで吹雪で真白になり、その吹雪を連れて来た様に門口を開けた母が、ふところから、湯気が昇っている新聞紙袋を、わたくし達に出したのです。薩摩薯の蒸かしたものです。その頃の青森と言っても貧乏人の子供の魅力は、この蒸かし薯です。『よく蒸けだァ薯コ！』母はあの巣にある鳥の仔達に餌をあてがう様な気持で、御飯を焚く前に、この腹ごしらえをさせるのでした。

不運だったという事に尽きた母は、肝臓癌という、その頃では、ことの他どうにもならない病気で、短い生涯を不幸のままに死にました。父の打擲（ちょうちゃく）に堪えて放題をゆるした母の臨終に、父も泣いた。わたくし達が想うているよりも、もっと切なく喚き、哭いたのは父だった様でした。出棺の時、『さだ！ ガバ、ヘンカ（注・喧嘩）すのも、コイで最後だ。ッツト泣げ、泣げ』父はそう言って母の棺の蓋の釘を矢鱈に打ちつづけていました。倖いの薄かった母は四十二歳、哀しい父もそれから三年後、五十二歳で若く死んで行きました。（「哀母記」）

スマトラ記 (十)

田中克己

稲垣君にたのまれたかと思ふが、メダンのサルタンをとりに行くといふので、ついていった。わたしのインドネシア語では敬語はないので、もとより通訳が交渉に当り、サルタンは承知して四人の妃と多くの子供たちを全部、中庭に集合させた。しかし撮影が手間どるとみるみる機嫌をわるくして、いい加減にしろ、とでもいった様子であった。これがすむと稲垣君は駅へ行って木炭を焚いて走る汽車を撮影した。兵隊がゐないのは困ると考へたが、わたしをのせて車窓から首を出して手をふらせた。この映画は昭和一八年に東京で現像されたが、とれてゐたのはこのにせ兵隊と西海岸州知事のセメント工場の視察の場面だけが、まあ写ってゐて、あとは熱帯の強い光線と、押収したイギリスのフィルムの感度敏感とが加はって、みなまっ黒だった。稲垣君は会社の仕事だったら首だったと閉口気味だったが、それはあとの祭りで、これから何十日か一行はスマトラを撮しに歩きまはるのである。

その第一は前に行ったブラスタギ高原へ行ってシバヤク火山の噴火を再び見て、ここのホテルに泊った。一行は運転手（ジャバ人であった）を含めて五人、町をゆく女たちが大原女のやうにかぶり物をしてゐるので、たづねるとトゥドゥンといった。一行がここの踊りを撮影してゐる間、わたしは何となく懐郷の情に襲はれてゐた。気候が涼しいのと、久々に日本からの便りを見、軽井沢あたりを思出してゐたのであらう。

翌日はシナブン山の裾の高原を通って、アチェー州のバンベルといふところで部隊がジャングルを開墾して稲田を作ってゐるといふのをとりにゆく。途中サリネンバといふすすきのたぐひの風になびくところに墓標が七つ建ってゐるのを見た。これは近衛師団の北山捜索聯隊の岩崎隊がナランダ軍と戦闘して、千名を降服させた時の戦死者の墓だったといふことだった。この墓はいまはどうなってゐるだらうか。隊長の岩崎中尉とはこの夜同宿して戦闘の様子を聞いた。

バムベルの手前に小川があって、一休みする。向ふに二人の男がゐる。わたしは近づいて一礼し、この辺りをアラス地方といふがアラス族といふのは、とたづねると、年輩の方がわたしがそのアラス族で総人口三万、二人のラジャに統治されてゐて、プロナスとバムベルの二区に分れ、プロナスの区長はシドゥン、わたしはバムベルの区長ラジャ・マリブンと答へた。ラジャは前にもいった梵語系統の「王」である。わたしは鄭重にアラス語を教へていただけないかといひ、金田一京助先生に教はったとほり、身体の各部の名を問うた。眼はマトゥ、口はババ、頭はタカーと教へてくれる。も一人の男にもいはせて少しちがったかと思ふが二、三〇単語をひらった。帰国語、スマトラなつかしくいろいろ本を読んだが、アラス語を一語も憶せたものはなかったので、わたしはアラス語と他のインドネシア諸語とを比較して、「インドネシャ諸語の身体呼称」といふ報告を書いた。生涯にただ一つのこる素人言語学である。

佐官の隊長の指揮する伐木作業を稲垣君らが撮影してゐる間に、わたしは下痢気味だったので、傍らのジャングルに入って行った。まっすぐに入って行って用をすまし、廻れ右をしてまっすぐ帰ったつもりが、ジャングルから出られない。伐木の音も聞えないし、わたしは青くなった。二、三〇〇メートルしてやっと繁みから出られると、入ったところとは全く別の場所であった。従軍中、青くなったのはこれ一回で、わたしが廻れ右の時ちょっと角度をちがへたのが原因だったろう。この時の部隊の開拓地はどうなったらうか。三千メートルを越すバリサン、ウイルミナ両山脈の間を流れるラウ・アラスの谷にも一度ゆかなければわからない。ラウはアラス語で正しくは（わたしの採集では）ラウエで「河」の意である。

八月三日もと来た道を通ってメダンの宿舎に帰り、師団司令部は大体の旅程を書いて出張命令を受けた。二十日位の予定であったので、わたしは内地へ便りを書いた。小高根二郎氏には、

山吹の咲き出る垣根いひおこす友ある身ゆゑなかなかにたぬし

と書いたが、この軍用郵便ハガキを二郎氏は今もおもちだらうか。伊東静雄さんに書いたわが書棚にルバイヤットのあるゆゑに君が詩集を思ふことあり

といふ歌をかいたハガキは堺市三国ヶ丘のお宅の焼けた時になくなったに相違ない。

翌八月四日わたしたちは出発した。メダンの市はスマトラでタバコの栽培から発展したのである。八年から十年間の輪作で、休耕期間の最後の年にはミモザ（含羞草）を植ゑて地味を回復する。このミモザをマレー語ではクチガン（猫の爪）といふ。とげがあるからだといふことだ。

このタバコを園を写したあと、一行は近衛師団が無血上陸？したタンジョン・ティラム（タンジョンは岬）に向った。無血上陸だのにとるものは何もない。静かに打ち寄せるマラッカ海峡の波を見たあと、一行はテビン・ティンギの町を通ってシャンタルの部隊に一泊した。一泊する前には部隊（野村聯隊といったと思ふ）の庶務に申告にゆかねばならない。その時になってわたしはあはてた。自動車の中にわたしの刀が無い。申告には刀なしではゆけないからである。この刀はわたしが南方にゆくといって大阪のホテルに泊ってゐた時、軍から貸し与えられた長い剱が格好がわるいといふので、皆が刀を用意してゐると聞いて八十になる祖母が買ってくれたのである。備前の新刀で値段はともかく祖母の情を思ってわたしは途方にくれた。

★

★

★

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

5月25日発売

新潮社

¥550

魚の眠り

福地邦樹

魚は夜も　眼をあけたまま眠っている
瀬戸内海の鯛も
黒潮にのった鰆も鮪も
エムデン海溝の鰻も
みんな　眼をあけたまま
背びれや尾びれを
無意識にひらひら動かしながら
眠っている

僕の家の金魚も
真夜中にふと電気をつけてみると
眼をあけたまま　ガラス槽の底で
ひっそりと眠っている
すべての家の熱帯魚や金魚たちが
一晩中　眼をひらいたまま
眠り呆けているのだ

★　★　★

編集後記

三月三日。庄野英二氏から旅の小説集「白い帆影」をいただいた。偶然、前号の田中氏の「スマトラ記」に、氏は影を見せるが、集中の「オートバイ」「ジンガポール」は征旅に当るわけだが、後記で敗旅だったと弁明している。この弁明は不用と思うが、氏にはどんな悲惨さを描いても陰濕におちいらぬ一種の徳がある。その徳が誰からも好かれるゆえんなのだろう。どれも明るい好手なる八篇だ。（創文社・八〇〇円）

十三日。「四季」の詩人大木実氏から「冬の支度」を頂戴した。氏の資質は、どこか庄野氏の明るさに通じている。「戦艦・武蔵の生残者の悲惨で無視された運命を歌った「海戦のあと」などは、悲痛を極めた抗議であるのに、妙な明るさが読後に残るから不思議だ。どれも後味のいい清澄な四十八篇の詩だ。（潮流社・八〇〇円）

十九日。清水孝之氏より棟方月海の画賛は「静處煉気さわがし處煉神」ではないかと教示があった。傾聴すべき高説として深謝申し上げる。

又、拙稿「画仙・棟方志功」に関し、次の諸氏から激励の辞をいただいた。心から感謝申し上げます。片岡久・武内潔真・関野準一郎・小川和佑・稗田菫平・船水清・飛鷹節・阿川昔・久保忠夫・蓮田敏子・川上澄生・殿岡辰雄・吉田正勝・宮城賓・高藤武馬・松井秦・土屋郁子・内田克巳・佐藤栄次郎・高坂貫昭・福地邦樹（敬称略）

尚、棟方一氏は三月二十一日、七十七歳で長逝された。合掌。

果樹園 第一八三号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年五月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五の八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社（電話池田六一・八三一七）
定価　四〇円　送料　二〇円

果樹園　一八三号　昭和四十六年五月一日発行（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園　一八四号　昭和四十六年六月一日発行（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第184号

画仙・棟方志功(四)　小高根二郎
ロセッティ小曲(三)　森亮
陣中詩集(三)　蓮田善明
方舟　吉本青司
美幌峠高梨一男
スマトラ記(三)　田中克己
共通点　福地邦樹
編集後記

画仙・棟方志功 (四)

小高根二郎

3　「白樺」の口絵—ゴッホの「ひまわり」

昭和九年は師匠忠太郎と母さだとの別れがあい継いだが、昭和十年にはそれに代る貴重な出会いに恵まれた。それは初めて油彩を手ほどきしてくれた小野忠明（現明ノ星女子高校教諭）と出会ったことと、彼を介して知ったヴィンセント・ヴァン・ゴッホであった。

小野は弘前から青森に出てくると、町外れの浦町は野脇方で、瀬辺地出身の女性と同棲しながら絵を描いていた。ゴッホ好きな彼は、ゴッホ風なモチーフを捜していたからである。津軽富士を背景にもった故郷の弘前は、アルル時代のゴッホが好んで描いた花咲く桃の果樹園にそっくりな林檎園を、郊外の野や丘々にふんだんに回らしていた。しかし、パリー時代のゴッホが描いた汽車が橋上をいく堀割や、アルルの跳ね橋や、サントマリの漁船を配した風景はなかったからである。それに、ゴッホが最も得意とした糸杉や麦畑の背景として、津軽富士ではあんまり絵になりすぎた。どうしても不均斉な山塊——青森の八甲田山が必要だったからだ。

小野の記憶によると、初めて志功と出会ったのは新町であったという。港のスケッチでもとろうと浦町からぶらぶらやってきた彼は、荷馬車の上に陣取って絵を描いている少年を見掛けた。筒袖を着ているが、彼とほゞ同年輩である。一枚二銭の木炭紙を八つ切りにし、それを綴じた自家製のスケッチ・ブックに、ⅢBを使って近隣の平凡な風景を描いていた。背後から覗いて見ると、なかなか伸びやかで雄健な筆致だった。描き終ったところで、互いに、やァ、やァ……ということになった。と、いうのは、小野もスケッチ・ブックを小脇にしていたので、すぐさま志功に同好の士とわかったからである。名乗りをあげてみると、志功はすでに彼の名を知っていた。小野は弘前に根城をもつ北斗社の会員だったからだ。その北斗社とは、五十九銀行の頭取の息子で、上野の美術学校出身の関彦四郎が主宰していて、当時青森県きっての前衛的な洋画団体だった。その会の動静や、会員の名や、若干の消息を、志功は新聞その他の報道で知っていたのである。奇遇を喜んだ志功は、まさに小野を擁さんばかりの親愛の情を示した。そこに志功の次兄の賢三が現れた。自転車修理のあいまに、まだ荷馬車の修理も頼まれていたのだ。今まで志功がスケッチの座にしていた荷馬車がそれだった。修理の助手をしなければならぬ志功は、再会を期して小野と別れねばならなかった。

暇な務めの志功が浦町に小野を尋ねたのは、それから間なしであった。妻君を貯蓄銀行の勧めに出し、彼は都合よく留守をしてい

た。彼は雑誌『白樺』を愛読していたので、まずそれを志功の閲覧に供した。同誌には、毎号若い画家や美学者たちが、かわりばんこに、ロダン、ルーベンス、ミケランジェロ、レンブラント、レオナルドなどを紹介していたからである。たまたま大正十年二月号にはゴッホが紹介されていた。口絵にはカラーで「ひまわり」が掲載されていた。

プルッシャン・ブルーの背景。淡紫の台に青磁の花瓶がすえられている。その花瓶に、太陽のように燃えた花が二つと、ほとんど種子だけの球になっているのが一つ、二枚の葉をアクセサリーにして挿してある。卓上には枯れかけの三花が、真向き、或いはうつ伏せになりながら横たわっている。輝やくようなタブローである。里見勝蔵の解説によると、大きさはP四十号、日本にも招待されたことのある作品だったが、惜くも第一次大戦の戦火で灰になった由がしるしてある。

志功はこの「ひまわり」に魂を奪われてしまった。彼はう――む……と唸った。プルッシャン・ブルーの背景はまさにミチノク青森の空そのものだ。六つのひまわりの花はまた、その空に輝く太陽の刻々の命を象徴している。つまり、その一は暁に萌え始めた呆っとした太陽。二つめは午前に燃える初々しい太陽。三つめは正午に灼熱する太陽。四つめは余熱ゆえにいよいよ燃え盛る午後の太陽。五つめは余燼となってくすぶる夕の太陽。六つめは終に残照を明星に託して地平の向うに沈んだ太陽。その刻々の命が、この六つの花に象徴されてはいないだろうか？　いや、志功をゆさぶったのは、そんな分析的な鑑賞ではなかった。魂の底からゆさぶりをかける宇宙的な感動だったのだ。このひまわりは単なる花の絵ではない。眼の前にしているのは掌の広さに等しい口絵。現画にしてもP四十号というから、せいぜいタタミ半畳ほどの大さだ。それでいて、宇宙をここに収束したミニアチュアとしての、充足感にみなぎっている。生命感に輝き溢れている。志功は再びう――むと唸らされた。『白樺』を持っていた手がワナワナと慄えた。これほどの感動を与えるものが真正の絵画だったのだ。そして、この感動の美を作りだす者こそ真実の画家というものだ。それはゴッホをおいて他にはない。真正真実の画家とはゴッホだ。ゴッホのことだ。感きわまった彼は、「いいなァ、いいなァ……」を連発して『白樺』を鷲づかみにすると、大掃除でもするあんばいに、ささくれだった古畳を叩いていた。と、いうのも、志功は看板絵師忠太郎から逃亡し、前衛集団の北斗社の風聞ていどは知っていたが、洋画に対する知識は、まだ次のように幼稚だったからだ。

「そのころの絵描き仲間に、弁護士の子供で飯島勉（ツッチャ）と、それから刑務所へ弁当の差入れをしている弁当屋の子供の斉藤勇（ユッコ）の二人がいました。二人は東京の文房堂から、ルフランとかニュートンなどという絵の具を取りよせるほど絵に熱中していました。飯島勉は中学生で、常識の勉強した、いわゆる透明の水彩画でした。なかなか見事な流暢な、感覚のよい水絵を描いていました。――そのころから現在の美術誌『みづゑ』の前身でしたが、『みづゑ』を東京から取り寄せて見ていました。ワットマンというガワガワ音のする、縁のボソボソした、英文字が透かしになった紙を使っていました。その最初のWという文字が目にしみるほど印象深いものでした。飯島勉から『これはホワイトマンという紙だ。まともに見ていると目がつぶれるぞ――』とおどかされたものです。お札のように文字が透かされているのが、尊く見えたものでした。

斉藤勇は『少女之友』に出ている口絵のような甘い絵が上手でした。ことに、少女

ロセッティ小曲（三）

森　亮

きこゆるは　いのちの調べ
（さも似たり　空の広さに、
海原の　潮の響みに）
わが生より　したたり息まず。

否、死か、雷鳴具して
おぎろなき海のおもてに
わが波を　小さく立たせて、
わが果つる海路見据うる。

あはれ、こは何の調べか、
来し方の　わが道知るや
（照り曇る峰のをちこち）、
日溜りに　さては導き、
過ぎし後悔　燻ゆるわたりを
眼にとめて　われを笑まする。

「生の家」第七十九歌

の目や、まつげの隈取りのボカシが得意でした。ツッチャは中学生のうちに早く死にました。ユッコは絵描きにならないで、鉄道の制服を着ていたのを見かけたことがあります。…中略…

「スコ（志功）、おメェネ、洋画描くなら、紫の陰つけねばマイネ（注・いけない）ど、そうさねば洋画にならねえど」

「ソダカ、ソダカ」

それからいつとき、わたくしは、太陽のかげも、犬も、牛も、馬も、木も、みんな影は、みんなを紫にしたのでした。

「これ、洋画いうものだろうナ」

「ン、ほんだ、ホンダ。紫派だネ」

二人はこういっては得意満面でありました。」

（「板極道」）

画友ツッチャとユッコと分かちあった、この素朴な知識と幼稚な紫派の境涯から、志功は『白樺』の口絵を介して、一ッ足跳びにゴッホの高次な境涯と高邁な真髄を味到してしまったのだ。その咀嚼と吸収力の速さと確かは、まさに本能といってよかった。

小野は『白樺』の他に、東京の展覧会を見にいった際に求めた、神田の清泉堂がフランスから直輸入した複製版も見せた。その中には糸杉が天にそそり立った「糸杉と星の道」もあった。それに、北斗社の関からの受け売りである、ゴッホの幾つかの逸話も紹介したのだった。

姪である子持ちの未亡人に失恋して、ランプの焔で掌を焼いて失心をした話。アントワープの港で入手した日太茶の包装紙であった浮世絵の版画……。その楽しく澄んだ色彩が、新境地を拓く啓示となった話。親友ゴーギャンの傲岸さに激昂して、クリスマスの夜に彼を殺そうとして、誤って自分の耳を剃り落してしまった話。発狂と入院。ピストル自殺。生涯、この不幸な兄を支援してやまなかった弟テオの兄弟愛。E・T・C。

そして、ゴッホの絶作である『烏のいる麦畑』にそっくりな風景が、ここ青森にもある、と小野は付言した。それは堤川の東岸の相馬町（現港町）にあるとのことだった。青森漁港を中心とするそこら一帯は、連絡船が発着する青森港界隈――安方、蜆見海岸に住みついていた漁民を、明治時代に集団移住させたことで開けた。彼らはそこに住みつくと、或る者は漁を、又ある者は水産物加工や缶詰製造を営んだ。つまり、漁業、工業の合作地帯なのだ。そこに藤田組は敷地を持っていた。石炭ガラの廃棄所と鉄屑の集積所につかっていたのである。たまたまスケッチ・ブックを

た。彼は雑誌「白樺」を愛読していたので、まずそれを志功の閲覧に供した。同誌には、毎号若い画家や美学者たちが、かわりばんこに、ロダン、ルーベンス、ミケランジェロ、レンブラント、レオナルドなどを紹介していたからである。たまたま大正十年二月号にはゴッホが紹介されていた。口絵にはカラーで「ひまわり」が掲載されていた。

プルッシャン・ブルーの背景。淡紫の台に青磁の花瓶がすえられている。その花瓶に、太陽のように燃えた花が二つと、ほとんど種子だけの球になっているのが一つ、二枚の葉をアクセサリーにして挿してある。卓上には枯れかけの三花が、真向き、或いはうつ伏せになりながら横たわっている。輝やくようなタブローである。里見勝蔵の解説によると、大きさはP四十号、日本にも招待されたことのある作品だったが、惜くも第一次大戦の戦火で灰になった由がしるしてある。

志功はこの「ひまわり」に魂を奪われてしまった。彼はう――む……と唸った。プルッシャン・ブルーの背景はまさにミチノク青森の空そのものだ。六つのひまわりの花はまた、その空に輝く太陽の刻々の命を象徴している。つまり、その一は暁に萌え始めた呆っとした太陽。二つめは午前に燃える初々しい太陽。三つめは正午に灼熱する太陽。四つめは余熱ゆえにいよいよ燃え盛る午後の太陽。五つめは終に残照を明星に託して地平の向うに沈んだ太陽。その刻々の命が、この六つの花に象徴されてはいないだろうか？　いや、志功をゆさぶったのは、そんな分析的な鑑賞ではなかった。魂の底からゆさぶりをかける宇宙的な感動だったのだ。このひまわりは単なる花の絵ではない。眼の前にしているのは掌の広さに等しい口絵。現画にしてもP四十号というから、せいぜいタタミ半畳ほどの大さだ。それでいて、宇宙をここに収束したミニアチュアとしての、充足感にみなぎっている。生命感に輝き溢れている。志功は再びう――むと唸らされた。「白樺」を持っていた手がワナワナと慄えた。これほどの感動を与えるものが真正の絵画だったのだ。そして、この感動の美を作りだす者こそ真実の画家というものだ。それはゴッホをおいて他にはない。真正真実の画家とはゴッホだ。ゴッホのことだ。感きわまった彼は、「いいなァ、いいなァ……」を連発して「白樺」を鷲づかみにすると、大掃除でもするあんばいに、ささくれだった古畳を叩いていた。と、いうのも、志功は看板絵師忠太郎から逃亡し、前衛集団の北斗社の風聞ていどは知っていたが、洋画に対する知識は、まだ次のように幼稚だったからだ。

「そのころの絵描き仲間に、弁護士の子供で飯島勉（ツッチャ）と、それから刑務所へ弁当の差入れをしている弁当屋の子供の斉藤勇（ユッコ）の二人がいました。二人は東京の文房堂から、ルフランとかニュートンなどという絵の具を取りよせるほど絵に熱中していました。飯島勉は中学生で、常識の勉強した、いわゆる透明の水彩画でした。なかなか見事な流暢な、感覚のよい水絵を描いていました。――そのころから現在の美術誌『みづゑ』の前身でしたが、『みづゑ』を東京から取り寄せて見ていました。ワットマンというガワガワ音のする、縁のボソボソした、英文字が透かしになった紙を使っていました。その最初のWという文字が目にしみるほど印象深いものでした。飯島勉から『これはホワイトマンという紙だ。まともに見ていると目がつぶれるぞ――』とおどかされたものです。お札のように文字が透かされているのが、尊く見えたものでした。

斉藤勇は『少女之友』に出ている口絵のような甘い絵が上手でした。ことに、少女

ロセッティ小曲(三)

森　亮

きこゆるは　いのちの調べ
（さも似たり　空の広さに、
海原の　潮の響みに）
わが生より　したたり息まず。
否、死か、雷鳴具して
おぎろなき海のおもてに
わが波を　小さく立たせて、
わが果つる海路見据うる。

あはれ、こは何の調べか、
来し方の　わが道知るや
（照り曇る峰のをちこち）、
日溜りに　さては導き、
過ぎし後悔　燻ゆるわたりを
眼にとめて　われを笑まする。

「生の家」第七十九歌

の目や、まつげの隈取りのボカシが得意でした。ツッチャは中学生のうちに早く死にました。ユッコは絵描きにならないで、鉄道の制服を着ていたのを見かけたことがあります。…中略…

「スコ（志功）、おメェネ、洋画描くなら、紫の陰つけねばマイネ（注・いけない）ど、そうさねば洋画にならねえど」

「ソダカ、ソダカ」

それからいつとき、わたくしは、太陽のかげも、犬も、牛も、馬も、木も、みんな影は、みんなを紫にしたのでした。

「これ、洋画いうものだろうナ」

「ン、ほんだ、ホンダ。紫派だネ」

二人はこういっては得意満面でありました。」

（「板極道」）

画友ツッチャとユッコと分かちあった、この素朴な知識と幼稚な紫派の境涯から、志功は「白樺」の口絵を介して、一ッ足跳びにゴッホの高次な境涯と高邁な真髄を味到してしまったのだ。その咀嚼と吸収力の速さと確かは、まさに本能といってよかった。

小野は「白樺」の他に、東京の展覧会を見にいった際に求めた、神田の清泉堂がフランスから直輸入した複製版も見せた。その中には糸杉が天にそそり立った「糸杉と星の道」もあった。それに、北斗社の関からの受け売りである、ゴッホの幾つかの逸話も紹介したのだった。

姪である子持ちの未亡人に失恋して、ランプの焔で掌を焼いて失心をした話。アントワープの港で入手した日本茶の包装紙であった浮世絵の版画……。その楽しく澄んだ色彩が、新境地を拓く啓示となった話。親友ゴーギャンの傲岸さに激昂して、クリスマスの夜に彼を殺そうとして、誤って自分の耳を剃り落してしまった話。発狂と入院。ピストル自殺。生涯、この不幸な兄を支援してやまなかった弟テオの兄弟愛。E・T・C。

そして、ゴッホの絶作である「烏のいる麦畑」にそっくりな風景が、ここ青森にもある、と小野は付言した。それは堤川の東岸の相馬町（現港町）にあるとのことだった。青森漁港を中心とするそこら一帯は、連絡船が発着する青森港界隈――安方、蜆見海岸に住みついていた漁民を、明治時代に集団移住させたことで開けた。彼らはそこに住みつくと、或る者は漁を、又ある者は水産物加工や缶詰製造を営んだ。つまり、漁業、工業の合作地帯なのだ。そこに藤田組は敷地を持っていた。石炭ガラの廃棄所と鉄屑の集積所につかっていたのである。たまたまスケッチ・ブックを

陣中詩集 (三)

蓮田善明

岳陽楼にて

秋天は晴れて色なき蒼さ
濁水は空を抱いて下に満ち
おゝ洞庭湖
古人幾度か茲に来り臨み
北八百里の江に想ひかけり
南瀟湘を杳かに望み
たへがたくて「酔ひにき」と
思郷の詩悲しく楼に刻みたり

ああ　何かある！　むなしい
秋風の響と波だつ水と――
たましひは吹き晒され、
夢のやうに泣くよりほかない

折から溯江してきた汽艇が
崖下の桟橋に向かつて寄つてくる
かあいい笛をならし、日の丸はたゝくと
美しく

雁

いくさに来り秋くれて
山に警備の幾月ぞ
時雨も寒くなりたれば
兵どもがかたらひて
自ら作る炭かまど
一日は山に鋸の
まめつくりつゝ木をこりぬ
二日は谷にかまを立て
楠、樫、かへで、うち交へ
炭木を積めばそが上に
赤土を盛り打ち敲き
夕づく風に汗拭きぬ
三日火口ゆさしくぶる
薪も生木の楠なれば
薫りてもえつ日もすがら
明日迄焚けばかまの木に
火は附き七日燻りなば
幾俵の炭出で来とふ
くはしき兵の指図しつ
とまれ薪をさしくべて
火口をかこみ腰やすめ
すぎし戦の話やら
はるばる遠きふるさとの

小脇に、そこにさしかゝった小野は、渚に捨てられた魚の腸を漁る鴎の大群を見かけて、ゴッホの「烏のいる麦畑」を直覚したのであった。明日そこで小野が油彩を描くというので、志功は油彩の描き方を学ぶために、その場に立ち合わしてもらうことになった。志功は給料の一部を貯蓄して、すでに油彩の準備を始めていたからである。

小野は志功の帰りしなに、『白樺』二月号を、「ゴッホサ、ガ（君）に呉る」と贈呈した。志功の指は、まるでスッポンの嘴のように、対談中ずっと『白樺』を手離そうとしないのに気付いたからだ。小野は自分以上のゴッホへの執心を志功に直感した。「ワ（我）のゴッホサ、ガ（君）に呉る」と繰り返えしいうと、志功は満面に欣喜の笑いを漂わせて、狂喜して踊り上った。「ゴッホサ、ワに？」「ゴッホサ、ワに？」と、『白樺』を抱くと、まだその恩寵が信じきれないようであった。「ンだ。ガにける」と、小野が贈呈の意志がひるがえることのないことを、三度重ねて表明すると、志功は「ワだば、ゴッホになる！」「ワだば、ゴッホになる！」と、小野の好意に応える覚悟を表明するように叫ぶと、その好意が取り消されぬうち……に、というように、そそくさと帰っていった。

秋の思ひ出なつかしむ
折から梢ならしつつしづかに通るしぐれ雨
にくやと見れば峰こえて

翌日も幸運に恵まれて空はブルッシャン・ブルーに晴れていた。相馬町は志功が通い馴れている台浦公園のつい手前なので、藤田組の広場はすぐわかった。赭い鉄屑の山と黒い石炭殻の丘が、互いに盛り上り、起伏し、或いは拒絶しあってつらなっていた。それをゴッホのオーヴェールの麦畑と見ようと、又は野菜畑のつらねと見ようと、それは見る者の勝手であった。志功は右往左往して待ちうけていると、やがて善意に満ちた小ゴッホが、絵具箱をかついでやってきた。彼はまず平坦な場所を選んで携帯用のイーズルを組み立てると、それに白い麻布のカンバスを抱かせた。次で三脚椅子を開いてそれに鎮座すると、おもむろに絵具箱を開いた。箱の蓋裏からパレットを取り出し、それに油壺を装置すると、穴に親指を挿入して、掌の脇とで、この薄板を支えた。余力のある人差指以下の四指には、やんわりと筆を握らせた。小野は眼を細めてオーヴェールの野を見渡した。眼底の水晶体を分光器としてスペクトルを作るためだ。空はブルッシャン・ブルー。麦畑はオークル・

はれゆく雲にかくれつつ
ひとつら細き雁のかげ

イエロー。烏はアイボリー・ブラック。三叉の里道はライト・レッドにバーント・シェンナ。畔はサップ・グリーン…。彼はそのスペクトルに従って、パレットの上にその色名のチューブを絞った。そして、そのスペクトルとは別に、シルバー・ホワイトをたっぷり絞り出した。ここで小野は、ホワイトだけを特別多量に絞り出した理由を説明した。水彩では、色の濃淡は水の多少で加減するが、油彩では、水の代りにホワイトを媒体にするという解説だった。水彩から油彩へ転向したては、色の濃淡を、ホワイトではなく液体の油で調合しようとする失敗を、誰しも経験するからである。

小野はセピアのコンテを手にとると、カンバスの中央に横線を引いて天と地の領分を区画した。それから麦畑ならぬ、石炭殻と鉄屑との集積を大まかに区分した。後は筆の役割だった。小野はまず影の部分からカンバスを塗りたてた。次で中間色で余白を埋めた。最後に光の部分を明色で盛りあげた。これも水彩の描法と反対であることを、志功は知らされた。オーヴェールの畑まがいの相馬町の廃品集積所は、まさにゴッホ風に仕上がりつつあった。後はM型に無数の烏を、いや鴎を、浮かばせればいいだけである。小野の背後で腕組みをした志功は、肩を左右に大きくゆすぶっていた。腕がムズムズしてたまらない……といった表情だった。「カラシ（烏）コ、ワに描かせれ！」。そう、いいたげな動作だった。が、実は、志功は胸の中のカンバスに、サン・レミ時代のゴッホになくてはならぬモチーフ、天にも届く巨大な糸杉を亭々と描き添えていたのである。

五、青光画社と狢の会

1　若い狢の群

狢は、多くの地方で狸の方言だとされているが、又、或る地方では穴熊の別名ともされている。その狸とも、熊ともつかぬ底しれなさ、得体のしれなさが面白いとあって、志功は若い同志たちと一緒に、自分たちは狢であると戯称した。

その一匹の狢は、寺町は常光寺の隣、太間仏具店に棲みついていた。北津軽郡は木造町の桶職の子松木満史（画家・国画会々員）だった。初め満子と名乗ったが、訓みようによっては、女陰

の名称にも通じるので、間もなく子を史と改めた。小学校を卒業をすると家業の見習いをしたが、桶という、あまりに日常的で変哲のない造型には、なんとしても興が湧かなかった。木彫りをやりたかった。このやみがたい熱願に親も負けて、木工同志という職能的な親しさから、仏師本間正明の徒弟にしたのだった。志功より三つ齢下だった。

稽古始めにお稲荷さまの狐を彫らされた。木質の従順な朴を削ると、ポリポリ……と、まるで新沢庵をかじるような小気味いい音がした。色気のない狐ではあるが、木端の不定型から、次第に命あるものの定型を生みだしていく造型は楽しかった。桶の比ではなかった。

或る日、松木はあいも変らず店先で狐を彫っていた。と、誰か少年らしい影が佇んで、物珍らしげに自分の工作を眺めているのを感じた。いつものことなので、気にもとめず彫り続けていた。少年も執つこく立ちつずけていた。ふと手を休めた瞬間に、チラリと眼をやった。自分より二つ三つ齢上らしいことが、ひねた面構えから分った。黒色の鳥打帽をかぶっていた。おや？ と思った。と、いうのは、そのヒサシからイタダキに雪をのせてると思ったのは、一面に白い唐草が描いてあったからである。こんな鳥打帽は見たこともなかった。少し頭がおかしいのではあるまいか？ と、松木はいぶかった。

「何ンだば？」

と、つっけんどんに唐草少年へ問いかけた。すると、筒袖を着た少年は、懐中から紙片を取り出すと、

「位牌コ作ってけェねだか？」

といった。松木は紙片を受けとると、苦手の漢字で戒名「清芳院泰月貞照大姉」としるしてある。おかしいどころではない。お客さまなのだ。松木は奥に向けて、「お母さまッ！」とおかみさんを呼んだ。

唐草少年は志功だった。母さだの百日忌を前に、白木の仮牌を漆塗りの正牌に換えるために、幸吉の使で降雪中にやってきたのである。用務をすました志功に、今度は松木の方が注目した。志功の鳥打帽の白い唐草は明らかに油彩で描かれていたからだ。松木も油彩を始めたばかりであった。彼は大町にある古本屋・大観堂で「洋画講義録」という本を入手した。おぼつかない読解力で、どうやら油彩の輪廓をつかむと、今度は絵具を入手するのに腐心した。当時は青森駅の構内に閲覧用の新聞がはりだしてあった。その新聞に、たまたま大阪の画材商の広告を発見した。さっそく所と商店名を写して帰り、裁判所横の代書屋に頼んで注文の手紙を書いてもらい、送ってきた画材料一式で油彩を始めたばかりだった。それにしても、油彩の唐草を頭にいただいて、大道を闊歩している志功の放胆さに舌を巻いた。

「おめエ、油絵コ描くだか？」

「ンダ…」

これだけの問答で、もう十年の知己だった。二人にとって、絵具や、絵の話は、共通の血汐のようなものだからだ。志功は松木の彫りかけの狐を手に取った。なつかしさが胸の底からこみあげた。陶製のつがいの狐は、幼な心に畏怖の対象だったことがあったからだ。

「わたくしの四ツ五ツごろの記憶によると、わたくしの家は真つ暗で、梯子段が黒光りに光つていて、天井から鉄の重い自在鉤が下り、それに黒い大きい鉄びんが下っている。そして神棚があって、真っ白い御幣が置かれてあり、その両側に狐が二ツ向い合つているのでした。その狐が子供心にも恐ろしく思われました。ときどき時計の音がチンチンと聞えてくる、そんな光景が、わたくしの最初の記憶です。」（「板極道」）

つまり、松木の狐は、志功の最初の記憶の一つである狐と仲良く握手をしていたのである。二人の間には共感となつかしさが溶融した、友情のような感情が交流した。その交流を、いち速く見てとったきさくなおかみさんは、丁度三時の休憩時間だから、なんだったら上って遊んでいけ……と志功にすすめた。偶然みつけた同好の士を、松木も逃がしはしなかった。志功だって同じだった。誘われたのを幸、ノコノコ松木の二畳の私室に上りこんだ。押し戸一枚で、仏壇・仏具・位牌で抹香くさい本間家の雰囲気と打って変って、どことなくイキなにおいを漂わせていた。雨洩れのシミが地図を描いている壁面には、草土社の統領・岸田劉生の「切通し」の絵葉書が鋲留めされていた。その下に、古い仏壇を改造した本箱が腰をすえていた。そこここに金箔が剝げ残っていた。本棚には、さいぜんの「洋画講義録」をはじめ、武者小路実篤、有島武郎、石川啄木などの文学書が背いくらべをしていた。志功なじみの立川文庫より、だいぶ格が上らしかった。鴨居から、よそいきらしい、細い縞目の袖付の小倉ガスリが首を吊っていた。その横には、苦心して入手した絵具箱がぶら下っていた。

そこにおかみさんが茶と菓子とを運んできた。小僧満史の友としてでなく、まさに主人正明の正客の待遇だった。志功は生れて初めて

女王国家
— ヒミコと聖徳太子 —
小島信一
新人物往来社
¥ 900

殉国の教育者
— 三島精神の先駆 —
不二教職員連絡会
浅野晃 編
日本教文社
¥ 500

三島由紀夫
— その運命と芸術
三枝康高 編
有信堂
¥ 900

方舟

吉本青司

かたばみの黄の花々の小さな語らい
生れたばかりの小すずめたちの音楽教室
方舟のような庭に
可憐な草花たちがひとときの花をつけて
　いる
縁さきでむすめの晴着を縫っている妻
＜きれいな庭だね＞
＜まるで星の世界をみるようだ＞
妻も花々の語らいに参加する
彼女の日々の行動圏だけを残して
あとはいちめん小さな星々の饗宴だ
物置の軒さきに　もう
あしながが蜂が巣をはじめている

茶というものを呼ばれた。菓子はメリケン粉を落し焼きした素朴な豆煎餅で、象眼してある南京豆の香ばしい風味が、なんともいえぬ懐かしい後味を残した。それは本間家の味のようであった。弘前にいた昔はなかなか豊裕だったらしいが、貧乏している今も、貧乏なりに仕事や生活を楽しんでる…といった、鷹揚な家風だった。この恵まれた環境の上に、松木の生家も、病弱な満史のために甘かった。修業途上の彼に毎月仕送りがあった。展覧会でも、音楽会でも、鑑賞するのは意のまゝだった。志功は羨望にたえなかった。雨洩れが地図を描いたその三畳が絢爛たるサロンに見えた。油彩の唐草の鳥打帽を再びかぶった志功に、サロンの主は、読め……といって啄木歌集を貸してくれた。

もう一匹の狐は、同じ町の菓子の考舗・三浦甘精堂に潜んでいた。大湊は浜町の鍛冶屋の長男、古藤正雄（彫刻家、院展同人）だった。

彼は志功より四つ齢下だった。見本を得意先へ持って回り、その注文によつて配達する、いわゆる外回りの小僧だった。絵が飯より好きな彼は、その外回りを利用して、いつも写生の道草をくうのを習わしとしていた。常得意に弁護士宅があった。自然、裁判所の弁護士控所にも出入りする機会があった。その控所の勝手口である給仕部屋。或る日、そこに古藤は、思いがけず油彩の少女像を発見したのであった。スケッチ板だった。三、四点ならべられていた。モデルは中学一年生ぐらいの面輪の少女で、三つ編みのオサゲがふっくりした頬を引き立てていた。茶道具や、掃除用具や、古びた座蒲団、新聞・雑誌が雑然と同居している陰暗なその場所に、そのタブローは唯一つの命ある物象のように明るかった。古藤は注文のアンパンの紙袋を給仕さんに手渡すのも忘れて、つッ立っていた。見とれていたのである。タブローそのものの魅力というより、うねうねと盛り上って光彩を放っている、マチエールの蠱惑に茫然としていたのである。彼は外回りの暇なときなど、製造部の手伝いを強いられたことがあったが、そんな時には餅粉や——食用色素の食紅、草色、黄、紫の粉を、やるせない油彩の幻想で、ドロドロにこね回したことがよくあったからだ。

「ガも絵ッ好きだか？」

と、袴をつけた給仕さんが満面に自足の笑いを漂わせて語りかけた。

「ワだば飯より好きだ」

と、渡し忘れていた袋を手渡しながら、古藤はいった。受け取った紙袋を左脇に抱えこんだ給仕さんは

「ワもだ……」

というと、空いた右掌を差し出して、古藤の右掌を固く固く握った。

これが古藤と志功の出会いであった。志功がアンパンの袋を、土瓶を載せた盆に添えて、先生方の机まで運んだ後は、自由時間であった。二人は昼食も忘れて好きな画論に夢中になった。てっとり早く眼前のスケッチ板が話題になった。モデルは、毎日当番で掃除にきてくれる見知りの少女だと、志功は鼻をうごめかした。どれも同じ面輪から推して、野間しげ子だった。三つ編みのオサゲはブルッシャン・ブルーだった。黒よりも艶やかな黒に見えた。志功は指先でそのオサゲを撫でるようにして、これはゴッホの色だと説明した。そして、古雑誌の山の中から『白樺』をとり出すと、証拠を見せるあんばいに、口絵の「ひまわり」を開いて見せた。背景のブルッシャン・ブルーと花の黄金色。そのゴッホのブルッシャンブルーと黄金色が、しげ子の髪と顔に乗り移っていた。それから志功は、恋に身を焼いたゴッホの逸話を話して聞かせた。子持ちの未亡人から肘鉄を食って、蠟燭で掌を焼いたあの話である。小野からの請売りだった。ワだば恋に身を焼くより、ゴッホに身を焼

美幌峠

高梨一男

登るほどに霧は薄れ
地を匂うトド松の群落
を彩る
レングレッツジ離々として
タレをつけて焼く唐黍の香り
峠いちめん漂うて
アイヌ衣裳のモデル女が小さく欠伸をす
る
渺々と眼下に横たう
屈斜路湖
その天空に
むらがる雲の夕焼けて
カムイの手に成る壮麗な壁画だ

く。「ワだばゴッホになる！」。いつか興奮して、志功はそう叫んでいた。志功は古藤の両肩を鷲づかみにすると、「ガもゴッホになれ！」とゆさぶっていた。「ガもゴッホになれ！　ワだばゴッホになる」。この志功の気勢に呑まれて、「ンだ。ワもゴッホになる」と、古藤は呟かされていた。

この二人の共鳴と興奮は、控所の方には喧嘩でもしているように聞こえたのかもしれなかった。

「きゆッ！」

と、書生の呼集がかゝった。「はいッ!!」と志功がすッ跳んだのを汐に、古藤も甘精堂へすッ飛んでいった。アンパンを配達するだけで、小一時間も道草をくっていたからである。

もう一匹の狐は、志功がよく写生にいく合浦公園近くの、県立青森中学校に巣くっていた。旧南部領は七戸の産の鷹山宇一（二科会理事）である。志功より五つ齢下だった。鷹山は志功との出会いを次のようにしるしている。

「陽春の合浦公園の一角に画架をすえて、棟方志功は遙か東岳をにらんでいた。それからやおら腰を下し画筆を雄渾に走らせた。その時棟方志功は古手のフロックコートを着用していた。

やがてカンバスに油絵具が塗りこめられると、一張羅のフロックコートにも処かまわずべたべたと絵筆が拭われはじめた。

絵が仕あがるにつれて、フロックコートも絵具の花盛りと化した。

私はこの奇行にたまげてしまった。見ていた囲りの人も、公園も春もたまげたことであった。

当時青森中学の一年坊主だった私の、棟方志功に対する驚きはこの時にはじまるのである。」（「みちのくの民芸」第七号「棟方志功の驚ろき」）

志功が着ていたお古のフロックは、れいの沢地弁護士からの下され物であろう。或いはしげ子の父である野間歯科医からの賜物だったかもしれない。（野間から後年志功は帯を貰ったことがある）。ともあれ、鎧でも着込んだあんばいに重いドスキンを羽織った志功は、一騎打ちでもするように風景と取り組んでいたのだ。初めこそ絵筆は、刷く色を変えるたびに、ていねいにタオルで拭っていた。が、次第に熱中してくると、いつしらず、左腕の上膊下膊の内関節に筆をはさむと、余分のマチエールをしごいていた。黒のドスキンにマチエールの色彩は一段と映えた。その意外な効果を見てとった志功は、色合わせの試験に、パレットに代えて時々フロックの袖

や、チョッキや、ズボンを所きらわず用った。従って、絵を描きおえて、やおら立ち上った彼の姿は、まさに緋縅の鎧・腹巻を着た色武者さながらだった。授業をさぼって志功の写生を見学していた中学一年生の鷹山が、おッたまげたのは無理はない。いやおッたまげた原因は、それだけでなかった。色武者は今まで取り組んでいた東岳を遠く望んだ風景に向って、掌を合せると何ごとかを祈ったからである。志功もまた、このおッたまげた鷹山との出会いを、次のように記憶している。

「ぼくは、合浦公園でよく写生をしました。そして書き終ったあと有り難うございましたといって、その景色に丁寧に挨拶したものです。

或る日、その挨拶を終って後を見たら若い生徒が鼻の下を赤くして絵の書くのをみている、そして、ぼくのまねをして、景色に挨拶している少年がいるんです。

「おめだれだ?」

「鷹山……」

「家どこだ?」

「七戸……」

「七戸から中学サ来ているんだら金持の息子だべな——」

「そんでもね——」

こんな会話をかわしたあと、毎日ぼくの写生している場所へ授業サボッて、白いユニホームを着たままはだしで絵を見に来たのが鷹山さんでした。」(「県政のあゆみ」昭和四十二年五月号「私の青雲時代」)

これが志功と鷹山との出合いであった。そのうち絵道具をしまった志功は、鷹山を連れて浜辺に出て、五辨・濃桃色の花を開く浜茄子のかたわらに寝そべって、将来の夢を語るようになった。今でこそ弁護士控所の給仕とサボリの中学一年坊主。互にまだ得体も、底も知れない狢同志だが、仏具屋にいる狢や、菓子屋にいる他の狢たちも糾合して、そのうち一緒に展覧会を開こうと語り合った。青森湾はブルッシャン・ブルーに底知れず深まり、揺蕩していた。浜続きの右手には、先祖・胸形玄蕃義利が住みついた野内村から、善知鳥岬、浅虫を越え、遙か彼方に夏泊半島が霞んでいる。左手には、例のゴッホの「烏のいる麦畑」の相馬町の缶詰工場がつい鼻の先に望まれ、魚の排棄物を漁る鴎が渚に群れ飛んでいる。見上げる空は、引き込まれるように青く遠い。このとき志功は狢たちの集団に「青光画社」と名付けることに思いついた。

スマトラ記 (上)

田中克己

刀をなくしたと知った時の心境はどこにも発表できなかったが、今だにわたしの手帳に残ってゐる。

おほはは がたびしつるぎを
ゴム林のかたへに捨てつ
時へては探しもあへず
おほはは のめぐみかなしく
わがさがのいきどほろしく
わがつるぎあたらと思へど
たれひとか佩びむつるぎぞ
われおきてしらむつるぎぞ
わがごとく愛でにめでつつ

鴎外先生が亡くされたのは黄金のボタン、わたしは武士の魂を失ったのである。文士であった証拠があきらかではないか。

通訳君に剱を借りてわたしは庶務班に申告にゆき、「富部隊宣伝班某々以下四名映画撮影に参りました」といって、宿泊を許された。宿泊の室へゆくみち暗やみで兵隊にあふと「歩調とれ」の号令のもと敬礼され、通りすぎたあと「なんだ軍属か」といふ自嘲の声が聞えた。この夜は宿室も悪く、ちょっと眠りがたかった。

翌朝は起床、点呼で起され、一行五名(自動車運転手を含む)は南に向った。途中、昼食時になると、稲垣君らは住民から雛を買ひ、簡単に首をねじり、羽をとり、焼いて副食物とした。何もできないわたしは眼を丸くしてみてゐた。現住民が集って来たので、わたしは方言を採集した。この辺りはバタク族のトバ方言である。地名をきくと、見事な字でウレラワン山Ⅱ村と記したのは三十才位の男であった。山はドロクである。

まもなく大きな湖水が見えだした。スマトラ一(インドネシア一?)の大湖トバ湖で、面積は琵琶湖の二倍もあり、中央のサモシル島には、バタク族の生け垣をめぐらした村のほか、人面を石に刻んだ王の墓があると聞いた。稲垣君はここへ渡るつもりで湖岸のバラパットに泊ったが、宿舎で夕食をすますと、スイス人の経営するホテルへ散歩に(もとより自動車で)でかけた。ここでドイツ人のボンクと名乗る八七歳の老人に会ふと、わたしは乏しい金をはたいてビールを命じて飲ませ、「ドイチュラント」とドイツの旧国歌をうたった。ボンクはドイツ語も忘れかけ、この歌はわたしについて歌ったが、その最中に階段を降りて来る美人があった。わたしと目を見あはせるとまた階上にひき返して見えなくなった。久しぶりに聞くドイツの歌に思はず降りて来て、歌ひ手が日本人と知ると姿を隠したわけはわたしにはわかってゐるが、ここには書かないことにしよう。

この夜、わたしたちの室をおとづれたのは沼八九三二部隊服部隊の鷲尾忠夫伍長で、東大の経済を出た、故郷は名古屋市熱田区森後町二ノ四と聞いたが、わたしは約束したかも知れない出征家族への連絡をしなかった。

鷲尾伍長の出身地でわかるやうに、このあたりから近衛師団の駐屯地でなくなって、名古屋師団の駐屯地となる。翌日トバ湖の東岸沿ひに車を走らせ五九キロのバリゲに着く。ゆふべ話で聞いた通り村のまはりに生け垣のあることは、大和の垣内と全く同じだなと思った。キリスト教の教会堂があり、インドネシアがほぼイスラム教なのに、このバタクだけはキリスト教の布教が成功したのは、この山中にはイスラムが入ってゐなかったからで、これは台湾の高山族(戦争中までは高砂族)が戦後八〇パーセントまでキリスト教になったのとよく似てゐる。

閑話休題、パラパットで丁度ラジャ・ブンタルの葬列に出会ったが稲垣君は簡単にカメラに収めただけで、また自動車を走らせた。

わたしはブンタルの死に感動して詩を作った。「南の星」といふ戦争中の詩集(昭和十九年創元社刊)をお持ちの方には用はないが、この詩集は見つかれば安いが、発行後まもなく空襲で焼けて残存部数も少い。お見つけになれば買って下されば と思ふ。とまれその詩は

湖辺

湖の辺のバリゲの町
着飾りしバタクびと
足早やに歩むなり
華やかのよそほひなれば
よそめには祭りのごとし
たづぬれば大人の
葬りにゆくと答ふなり
トバ郡の大酋ラジャ・ブンタル
死せしかばそれが葬りと
湖の辺の小高き丘に
人さはにつどひつどひて
よそめには祭りのごとく
けふの日を葬るにありき
しづかなる湖のながめよ

といふので、伊東静雄の詩に似てゐるかとも思ふ。もすこし実景をいれればよかった。稲垣君のフィルムのだめだっただけに一層残念である。

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

共通点

福地邦樹

女の望むのは愛
男の求めるのは冒険
どちらも　まことに危険

女の長いのは電話
男の長いのは議論
どちらも　有害無益

女のカタルシスは涙
男のカタルシスは酒
どちらも　透明な液体

編集後記

四月五日。栗山理一氏より「文芸文化」の復刻版が雄松堂から刊行される旨の連絡があった。蓮田善明・三島由紀夫の黙契がその機運をうながしたのである。ともあれめでたい。

十五日。午前一時半三島由紀夫氏が夢に現れた。下半身をトレーニング・パンツで包み、上半身は裸だった。猟犬一匹を伴っていた。朝風の涼しい丘の上には何か紙で包んだ物が山積していた。その管理を、私は三島氏から委ねられているらしかった。霧の彼方を凝視していた三島氏は、機を発見したのか、それッ！　と犬を促すとすっ跳んでいった。やがて犬だけが帰ってきて、しきりとそこを嗅いだ。蹴起が成功して、主人の余香を懐しんでいるのだ。私は立ち上った。約によって山積した品物を、形見分けとして配って回らねばならなかったからだ。夜が白むまで眠れなかった。

十七日。棟方一氏の長男照さんから、父の死の四五日前、病床で「画仙・棟方志功」を読んで聞かせたところ、こっくりこっくりうなずいて下さった由お便りをいただいた。涙が出た。間に合ってよかった。

（O）

果樹園 第一八四号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年六月一日発行
編集兼発行者　小高根二郎　池田市石橋二丁目六ノ五
印刷所　元市印刷株式会社　大阪市東住吉区桑津町五の八
発行所　果樹園社　池田市石橋二丁目六ノ五（電話池田六一・八三一七）
定価　四〇円　送料　二〇円

果樹園　一八四号　昭和四十六年六月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園　一八五号　昭和四十六年七月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第185号

画仙・棟方志功(五)　小高根二郎
ロセッティ小曲(四)　森亮
花屋のおばさん　福地邦樹
どくだみ　吉本青司
ゆうぐれ　高梨一男
スマトラ記(十五)　田中克己
菜花忌第七回の記　上村肇
編集後記

画仙・棟方志功(五)

小高根二郎

2　青光画社の公募展

志功と松木との往来は、道路の氷割りが始まった三月になると、急に春のしらせのように賑やかになった。折から松木屋デパートが開店して、その記念行事の一つに、八甲田街道は横内の出身で、川端画学校で修業した山上喜司の油彩画展が催されたからだ。二人は示し合せて見にいった。見馴れている堀川の鉄橋が、ものの見事に描いてあって、二人は彼の本格的な技巧に息を呑んだ。松木は初めて油彩画らしい油彩画を見たと興奮した。

志功はこの山上の前に、実は柳町のメソジスト教会で開かれた木谷末太郎という人の油彩画展を見たことがあった。金の額縁の四号かに、鮮烈な色彩で自画像が描いてあって、よくもまァ…こんなにうまく描けるものだと、感嘆したことがあった。

「このときの自画像は今でも記憶にあります。自分の顔が描けるじゃないか、どうして描くことができるだろうかと、洋画という妙な絵がどういう仕掛で出来るのかを驚嘆したのでした。ナントモいいようのないほどのギラギラ輝やいた線が織りなす不思議な色具の配列の妙味のふるまいの、ただならない姿に、わたくしは仰天しました。本当の絵画という、どうともならないばけものようで、菩薩のようなあこがれの大世界に、わたくしは呆然としました。ただ、もう夢中になってしまい、この木谷末太郎の自画像が暗くなり、真っ暗になってしまってまでも、自分が闇になってしまったようにそこに立ちつくしていたのでした。」

（「板極道」）

この驚嘆が動機となって、志功は水彩から油彩へ転向したのであったが、又、初めての人物画—しげ子像の何枚かを、給仕部屋で描く発心ともなったのである。

しかし、この木谷に対する初心ゆえの呆然とした驚嘆より、山上に対する感動は板についた熱烈さがあった。

「今、想い出しても、『ああ、立派な仕事だなあ——』と思うのは、あの湯の島（注・浅虫の島）を、コロビヤマの裾元を流れている川に架っている、矢張り東北線の線路越しに、眺めた景色は、目ごころに残っています。真中の真赤な線路の桁が、とても印象的に美しかったでした。その頃、よく油絵で、流行った、電柱が、真中に画面を強く緊めていました。一寸、赭ちゃけた緑色の湯の島が天井一杯に叩きこまれる様に烈しく盛り上っていました。」（「みちのくの民芸」「春陽記」）

志功は山上を、「天才とは行かなかった様ですが、一寸、その側までは行った人でした」（同前）と後年になっても述懐したほど、感銘をうけたのだった。

ところで、展覧会の会期中に、松木が息せき切って給仕部屋に駆け込んできたことがあった。二百メートル余を駆けてきたからだ。今が今、隣の常光寺に、山上画伯が遊びにきたので見にこい……という誘いだった。画伯と住職とは友人だったので、会期中に山上はチョクチョク姿を見せていたのである。志功は丁度暇だったので松木に同道した。例の二畳の私室にあがりこみ、小さな窓から二人は常光寺を窺ったのだった。窓の下には、屋根から下した残雪が、埃や煤にまみれた氷塊となって残っていて、絶えずチロチロと滴を垂れて、まだ頭をもたげぬ蕗ノトウに遅い春を告げていた。気長なことであった。二人は、いつ寺から出てくるかもしれぬ画伯を、眼を皿にして待ちうけてたのである。やがて張りのある歯切れのいい声がした。「じゃあ失敬。いずれまた……。」津軽弁ではなく、東京弁であった。画伯は門内から身をひるがえすように現れた。黒のオカマ帽の広いツバの下から、長い総髪が若さの象徴のように溢れていた。黒皮のルパシュカのゆったりした胴回りを、白の打紐が引締めていた。そのダンディズムを気負った背には、年期を物語る古く荘重な絵具箱が、まるでわが子のようにおぶさっていた。彼は心もち首をかしげ、仰向きかげんに遙かな空を望み、蟹股で濡れた道を拾い、拾い、次第に遠去っていった。彼の影が見えなくなるまで、二人はまじろぎもせず見送っていた。いつ、懐かしい太陽の下を、あのような画伯として濶歩できる日が来るだろうか？　あてのない羨望とやるせなさとで胸の内がからっぽになったほどだった。松木はこの時、志功のダンディズム――黒ベンキを塗り、その上に白の油彩で唐草を描いた鳥打帽の向うを張って、山上画伯のようなツバ広のオカマ帽を購い、ひとつ、それに油彩で髑髏を描くことを思いついたのだった。

志功は山上画伯を窓から覗き見た興奮を、その足で甘精堂まで運んだのだった。古藤が注文のパンを配達する時のように、冷めぬうちに……と思ったからかもしれない。いや、興奮のはけ場は甘精堂しかなかったからである。他に浦町には小野がいるにはいた。が、彼は志功と同じ齢でありながら、すでに妻帯をしていたので、途中にある東北線の踏切りのように、なにか足を止めるものがあったからだ。それはゴッホの「ひまわり」を貫い、油彩画の描き方を見学させてもらった、一種の引目のような心緒だったかもしれない。

ともあれ、志功は甘精堂の横の出入口に立って古藤の名を呼んだ。が、出てきたのは、古藤でなく、おかみさんだった。彼女は口を尖らかすと、次のようになじった。

「うちの正公が先日、風邪をひいて寝ているので、薬をやったが、薬をのまない。それで粥をたいてやったが、粥もたべない。からだが弱るだろう、どうしているのかと思って障子をあけてみたら、正公がまっぱだかで猿又一つになって、襖いっぱいわけのわからない絵を描いている。腹が立つやらあきれるやらで、ものもいえなかった。あまりにも言語道断なので、さっそくひまを出そうとしたら、主人がそんなに絵がすきなら、絵を描かせるように道をつけてやったらどうだ、というんで、そのままおいている。」　（「板極道」）

とのことだった。

おかみさんは志功の来訪を、ついに古藤には取次いではくれなかった。彼は懲罰のため、日がな一日、餡を煉らされていたからである。志功が本間仏具店に松木を尋ねたときには、おかみさんは茶菓をふるまってくれたし、主人の正明仏師は、「キンチャ（注・松木の本名の金七）棟方さんきたんだから、仕事休んで話ッでもしろ」とか、「そとサいって一緒に遊んでこい」といってくれたものであった。「正公」「きんチャ」という呼び名からして、月とス

ッポンほどに違う両店の処遇を物語っていた。志功は、正公よ……よくもやりにやったものだ、それにしても、とんでもないことをしでかしたもんだと、まるで自分が叱られてるあんばいに、拳に汗を握っているのであった。

てんでに雌伏するこの狢たちが、一斉に穴倉から跳び出して「青光画社」の旗揚げをしたのは、その秋だった。志功は野間歯科医の紹介状をもらって、長島町の日本赤十字社青森支部にでかけていくと、支部長に出会った。ホールを展覧会場に借してくれろという申し入れだ。そもそも青光画社展は、仲間同志なんぞの同人展ではなく、広く青森市民から出品作をつのる公募展であると大見得を切ったが、善意の支部長はそれを客気とはとらずに、若い志功の抱負であると解釈して許可をくれた。志功は余勢を駆って公募の趣旨を新聞社に触れて回った。後は旗揚げの旗が必要だ。世話のなりついでに、野間夫人に無心して古い塩瀬の帯を拝領した。それに、志功はブルッシャン・ブルーで「第一回青光画社展覧会」と横書きにして、それを看板にした。錦の御旗とまではいかないまでも、羽二重地の豪勢なこの看板は、俄然……前評判を呼んだ。各方面からの作品の搬入があい次いだ。志功は今度は如才なく受付係に早変りしてテキパキと事務を処理したので、呆然とした松木は、作品の運搬係に回らねばならなかった。それに審査は志功と松木二人が当った。水彩画歴はともあれ、油彩画歴といえば僅かに一年ばかりである。しかも出品者の中には、青森画壇の先輩である七尾善之助やその他の士も混っていたのであるから、まことに傲然とした自信といわなくてはなるまい。かつて自画像の太谷や、浅虫風景の山上に驚嘆や感銘はしたが、その驚嘆や感銘をしたタブローの境地とは異種の境涯を、いずれ拓いてみせるという心意気がひるませなかったのであろう。手先の画歴はともあれ、頭の画歴だけは、とうに青森画壇の水準を抜いていた証拠にはなろう。その自信満々の志功を、松木は次のように回顧している。

「今思っても汗が出るのですが、しかも同人展等という生やさしいものではなく、いきなり公募展に飛躍したのです。

ところがまた、よくしたものでこれにまた反響音があり、各方面からの出品搬入がありました。当時の赤十字支部をかりて会場としましたが、刺戟の少ない田舎町の事でしたから相当の賑わいでありました。

ロセッティ小曲（四）

森　亮

をのことをみな　恋しつつ
《結実（みのり）の時》の来ざりけり。
実らぬ「時」は　たゆたへる
「劫（こふ）」の蒼海（うだつみ）　破れむ日を

いづくの岸に待つらむか。
「愛」の館（やかた）の扉（と）のうちに
実りし「時」ら　さざめくを
淋しと、外に聞くらむか。

男霊（たま）と女霊（たま）とは手に手執（と）り
永生（とこよ）の岸辺たどるとき、
むかしの恋ぞ東道王（みちしるべ）。

実らぬ「時」は目敏くて
かの両親（ふたおや）に駆け寄りて
――憧（あこが）れ心地、見ぞ恍（ほ）くる。

「生の家」第五十五歌

棟方には一寸真似手のない才能があり、新聞掲載、出品受付、其の他事務万端を手ぬかりなくまとめ運びあげるのでした。

この展覧会の審査がまた、自信満々？の棟方、私の二人が当ったものです。」

（『みちのくの民芸』第七号「青光会その他」）

二人の眼鏡にかなった搬入作品を入選にして、それをぬかりなく陳列すると、次は受付に陣取って客引きに早変りするのであった。外廻りの道草を食って、苦心して古藤も応援にやってきた。まだ出品こそしていないが、一年坊主の鷹山も景気をつけに現れた。評判を聞いてセイラー服の女学生などもやってきたが、表の塩瀬の看板の豪勢さに気を呑まれて、入口でたじろいだ。すかさず二人の審査員は席を立っていくと、顔を赭くして、「入場料はいりません。どうぞ見てください」と、熱心な客引きとなって入場を勧誘した。その努力も手伝って、この第一回展はなかなかの盛況であった。松木は青森文壇の青年たちとの交際もあったので、その方面からの応援も加わった。志功は次のように回顧している。

「この展覧会は、盛んないい展覧会だといわれましたが、それには二人の有力な心の後援者があったのでした。いま社会党の衆議院議員になっている淡谷悠蔵氏（淡谷のり子さんのおじさん）と自民党の竹内俊吉氏（現青森県知事）でありました。淡谷氏は、林檎園を持ちながら『黎明』という文学雑誌をやり、小説を発表したりしていましたが、新聞に好意のこもった批評をしてくれました。また竹内氏は、青森県一の新聞『東奥日報』の文芸部長であり、編集長でもありました。また県有数の文化人でした。わたくしは、この二人の方に育てられたと今も思っています。竹内さんが、そのときわたくしの絵を高く評価してくれました。

『棟方氏の作品は驚くべき作品だ。彼の作は場中の白眉であろう。何かに影響されていないならば、氏はまさしく天才である。——彼の作品は自然を描いていない。いや彼の作品はまさしく自然を鞭撻している』

このことばで、わたくしは有頂天になってしまって、画家になる自信をもったのでした。——わたくしは画家になろう。わたくしはゴッホになろう、そう自分に語りました。」

（『板極道』）

古藤の記憶によると、この第一回展の狙いの出品作は、次のようなものだったという。

志功は「堤川の鉄橋」を出品していた。山上喜司の鉄橋のタブローと競争したつもりだったのだろう。ただし、志功のそれには、堤川の現場にありもしないゴッホの糸杉が、亭々と空に突き抜けていたというのである。先の竹内俊吉の評言のように、この糸杉で「自然を鞭撻していた」のである。この作品は後日小野の推薦で北斗社展にも出品されたが、主宰者の関彦四郎は一と目見るなり、「まさに将来大成する素質をもった、恐るべき画家」と折紙を付けたということである。

松木は草土社の劉生流の風景画を出品した。私室の壁にとめていた、あの「切通しの写生」の亜流だったであろう。

古藤は白に砂を混ぜて土瓶を描いた静物四点を出品した。絵具に砂を混ぜるテクニックは、立体派で流行した手法の一つであったが、彼はその手法を、菓子製造の実地と絵具節約という実用から発明したのである。

鷹山はブルッシャン・ブルーで描いた猫を出品した。

しかし、この古藤の記憶には、いささか錯誤がありそうである。と、いうのは、この展覧は堤川橋畔の映画館「青森館」の二階ホールで開かれた……と、彼は筆者に語ったが、前述のように第一回展は日赤青森支部で開かれたからだ。或いは古藤が出品したのは、この「青森館」の二回展以降であったかもしれぬ。

又、ブルッシャン・ブルーの「猫」を出品した鷹山は、次のように青光画社展を回想している。

「大正の末期、堤橋畔に青森館という活動小屋があった。二階がホールになっていて、色んな催に使われていた。

棟方志功の主催していた青光画社の第何回展かもここで開かれた。

当時中学三年に進学していた私も、油絵二点程陳列させて貰った。

棟方志功は南京袋のカンバスに、荒いタッチで描きこんだ三〇号位の浅虫海岸の岩を前にして、秋の二科展におくるつもりですと、自信満々来客に大声で説明していた。

その時の出品者に松木満史、古藤正雄、七尾善之助等の名前があった。

十代の矮軀に袴をつけた棟方志功は、大ぜいの観客に囲まれた会場の中央で、突然不敵な笑を発した。人々はこの若い主催者にどぎもを抜かれて一斉にどよめいた。」

（『みちのくの民芸』「志功の鷹ろき」）

鷹山の中学三年といえば大正十二年である。二科展を前にした青光画社展であるから、季は晩春か、初夏であろう。志功は山上の湯の島風景の向うを張って浅虫海岸の岩場を描いている。しかも、荒い岩塊にふさわしいドングロスのカンバスまで考案し、意気はすでに東京も呑んでいる。その軒昂さが、会場の観客を前に、二科展搬入を宣言し、その上に豪放な笑いまで振舞ったのである。その志功を、鷹山は十代と書いているが、正しくは二十一になっていた。尋常なれば兵隊になってる齢であるから、それぐらいの元気があって当然だろう。それにしても九月一日。おもいがけず関東を襲った大震災で東京の中枢部は灰燼に帰し、ドングロスに描かれた傑作・浅虫風景が展覧さるべき二科展が開催されなか

花屋のおばさん

福地邦樹

花屋のおばさんは
母一人子一人で
息子は二十五才の会社員だった
大通りから脇へそれた
こじんまりと清潔な店である
季節の切り花と植木鉢の草花少々
おばさんは働き者で親切で
私は時々めずらしい花をみつけて
名前を教えてもらったりする

その自慢の一人息子が
結婚をして　飛行機で新婚旅行に出かけた
美しい北海道　レンタカー事故
新婚夫婦死亡　新聞記事

一日も休んだことがなかったおばさんが
暮の門松やしめなわを売る季節に
二ケ月近くも休んだ
店を再開したとき　おばさんは
真黒な九官鳥を飼いはじめていた

そして一年
九官鳥は　コンニチワ　オオキニ　カー
チャン　という
この　くちばしの黄色い　新しいドラ息
子は
しわがれ声で　お客さんに単調なサービ
スをくりかえす
おばさんは事故で死んだ息子の事を聞か
れると顔をくもらせる
九官鳥のことを聞かれると
どんなに利口かと
上機嫌で話してくれるのだ

ったことは、幸運であったといっていい。

3　三名物男の一人

当時の青森市には奇人と評判を取った男が三人おった。或いは三名物男といった方が適切かもしれない。「やッちゃ飴」に、「オンコ」に、「スコーの絵馬鹿」である。

「やッちゃ飴」は本名庄内安太郎。その名の「安」から「やッちゃ」となったのだ。彼は指人形劇（ギニョール）を看板とする飴売り爺さんだった。禿頭からアバタ面にかけて頬かぶりをし、その上から古いソフトをかぶって、人なつこいショボショボまなこでやってきた。天秤棒でかついできた家台を地にすえると、紅白の幕を垂れた側面は、すぐさま舞台に早変りした。彼は頬かぶりを姐さんかぶりに直し、右手で人形を操り、左手で笛を吹いたり、太鼓をたたき、面白おかしいセリフをまくしたてた。この独演が終ったとこで、白墨形の白飴を売ったのである。ここまでなら尋常な飴売りで、別に奇人とはやされる資格はない。ところが彼には博打好きという泣き所があった。負けると人形や舞台装置は、形に取られるか、質屋に入った。その翌日は骸骨だけになった屋台をかついで回らねばならなかった。ああ、博打に負けたんだな……と、子供たちにもすぐ分った。彼らは神の子から小悪魔に豹変すると、

やッちゃ飴ボロクソ
飴までボロクソ……

と、囃し立てた。ボロクソとはアバタのことである。そのアバタを恥ずかしがって、彼はわざわざ頬かぶりをしていたほどだ。その顔のアバタの上に、商品の飴までアバタだとけちを付けられては我慢がならなかった。むかッ腹を立てたやッちゃは、天秤棒をふりかぶると、この餓鬼共！　と、日頃の得意客である小悪魔どもを追っていき、彼らが家の内に逃げこむまで追跡を止めなかった。そこに奇人といわれるゆえんがあった。

も一人の奇人は「オンコ」だった。本名は加賀松五郎といい、盲目の按摩だった。彼は本業の揉療治の他に浪花節を特技とした。彼は客の身体をもみながら得意の咽喉を聞かせた。が、忠臣蔵の討入りが、いつか曽我兄弟のそれになった。さらにそこに紺屋高尾がまぎれこんだりした。つまり、どうやら聞けるのは節回しだけの、筋はてんと態をなさぬ浪花節であった。彼はこの浪花節をサービスすると、なにか耳新しいニュースを所望した。ギブ・アンド・テイクなのだ。どこそこの箱入娘が連絡船のボーイと北海道へ駈落ちしたという話を耳に入れると、それをすぐさま次の客に提供した。その次の客から、どこそこの檀那は女中を国へ帰したふりをして、内儀にないしょで、浅虫に囲っているという噂を入手した。ところが、次の次の客には、忠臣蔵と曽我兄弟がこんがらかったあの浪花節さながら、ボーイがいつか女中を浅虫に囲い、檀那が他家の箱入娘と手に手を取り合って北海道へ駈落ちしたというホット・ニュースになった。この平然とした錯誤に奇人たるゆえんがあった。

この「やッちゃ飴」「オンコ」にくらべ「スコーの絵馬鹿」は奇人といっても、いささか風情を異にしている。馬鹿といっても風狂（すきもの）といった語感に近い。つまり、好者の骨頂といったところである。ともあれ、志功自ら、馬鹿とアダ名されたゆえんを、次のように語っている。

「古藤さんは、まともで落着いた青年でしたが、ぼくなどは、鳥打帽子に黒いペンキを塗って、白で唐草模様を書いたし、松木さんは帽子にシャレコウベのマークをつけて、青森市寺町の正覚寺の前、もっとわかりやすく言えば、大町の富士銀行の角から海

岸へまっすぐいった所に、旧さん橋というのがあったんです。そこの突端の石垣の所へ三人並んで立って『ムジナの会バンザーイ』と三回叫んだものです。周囲でみていた人達に馬鹿じゃないかと思われました。」（「私の青雲時代」傍点筆者）

ここでは、三匹の狢――志功、松木、古藤が「狢の会」を結成しているようになっているが、筆者が古藤に直接ただしたところ、彼は青光画社に参加したが、「狢の会」には参加をしなかった由である。思うに、唐草や髑髏の帽子をかぶった志功や松木ほどに、彼は馬鹿にはなれなかったのだ。事実、志功は右の談話で、古藤を「まともで落着いた青年」といっていた。それとも、彼は例の仮病をつかって甘精堂をしくじり、すでに故郷大湊の宮川菓子店へ鞍替えした後だったかもしれない。そういえばその頃（大正十三年夏）弘前から北海道の写生旅行にいく途次青森に立寄った下沢木鉢郎（しもざわきはちろう）（版画家　国画会々員）に、松木と志功は出会っているが、古藤は会ってはいないからである。その時の会同の模様を、下沢は左のように回想している。

「私はその前年に軍隊を除隊し、画家を志して画を描いていた時分で、その夏のある日、浅虫から野内（のない）へと歩いての途上で『どくろ』を描いた鍔のひろい帽子をかぶった男に呼びとめられた。松木と名のられたが思い出せない。その年の春に青森の赤十字社で県出身者の展覧会の節にお目にかかりましたと言う。家は木造だが今野内に来ているからとて、その下宿している家についてゆく。二階であったこと以外に記憶にない。丁度その日は土曜日なので、青森から棟

どくだみ

吉本青司

どくだみの花が咲いた
気品ある四弁花
点々と垣根にそって
白く
白く
目が覚めるように
白く
どくだみの花が咲いた

五　月

和泉式部の五月が来た

舞　姫

感想文なんか書くのをやめて
新緑の径を歩こう
エリス　ごらん
ポプラがあんなに美しい

ペンだこの詩

復活を信じよう
クリスチャンでなくとも
ある日
竜太のことを書いた
村の居酒屋で
コップ酒を飲んでいた竜太
けんぽう梨の木の下で
ごろ寝していた竜太
そしたら
竜太は蘇った
ひょっこり　電話が掛かってきた
君は何者か知りたい　という
＜あなたは？＞
＜俺は竜太だ＞

方が来るからとのことで待つことにする。日が暮れてから、その待っていた棟方氏が顔中汗だらけにしてフーフーし乍ら絵の勉強をしているのだそうである。青森から一気にやって来たのだそうだ。正に一気呵成の勢いである。食事にする。食事、これ又一気であって自炊している松木の釜は小さいので忽ちにして空になったので焚き直しだ。胃拡張と称してその食欲も旺盛だ。そんな習性は、仕事の上や日常の事に於いて今日でも続いている。

翌日は野内の町端(はず)れのお宮のある山に登って三人の名を境内の樹木に彫り、帝展を目差して頑張ることを盟い合った。多分今でもその木があるのではないかと思う。私は木の上から浅虫の島が見える景をコンテー素描をした。後年この作品は、当時の記念として棟方氏へ呈上している。

その年の秋には、私がテンペラでの作「堀割」が帝展に入選したので棟方、松木の両人の競走が更に加わり相前後して上京された。」

（「みちのくの民芸」）（「大正十三年頃」）

この下沢の文中に、かつて志功が第一回青光画社展を開いた赤十字支社で、この春に、東京在住の県出身者の画家・彫刻家を中心とする展覧会「東奥美術展」が催された由しるしてある。その主なメンバーは左の人々であった。

日本画の元老格には、三上仙年の教えを受けた野沢如洋があった。紋付・袴姿で中国・欧米にまで画材を探索し、馬を描かせたら日本一という定評があったが、文展の審査員を固辞し、生涯を野にいた画人だった。御大は平家物語に取材して「暁の御堂」「霜の大原」「浦の御座船」を描いた帝展審査員の高谷竜(たかやりゅう)岬(こう)だった。志功は絵葉書で「霜の大原」のロマンティシズムを満喫していた。「枯れた池があって、霜の降りた朝、その池に蓮華の葉が枯れて植わっている図です。全体に白いモヤのような静かな静かな景色配りのものでした。大原御幸を絵にしたもので、着物の端だけで表わした女人物の存在が妙に美しく、またあでやかな中にしっとりしたその絵中の気分が、寂としてよく描かれてありました。」（「板画道」）。洋画では大物はいなかったが、帝展常連の前田慶蔵、田沢八甲、小林喜代吉。彫刻では、いささか抹香くさいが、中野桂樹、三国慶三、工藤敬三、工藤繁造などがあった。しかし、これらの先輩たちは、まさに雲の上の存在だった。装飾風な少女像を得意とした田沢八甲。牧野虎雄の弟子だった風景画家の

潮新書 63
日本浪曼派
伊藤佐喜雄
潮出版社
¥250

三島由起夫
—その生と死
村松剛
文芸春秋社
¥500

R・シュトラウス
クロード・ロスタン
杉本秀太郎
音楽之友社
¥580

日本近代文学大系
萩原朔太郎集
解説・北川冬彦
注釈・久保忠夫
角川書店
¥1600

芭蕉連句鑑賞
高藤武馬
筑摩書房
¥1800

ゆうぐれ

高梨一男

ゆうぐれは壁に来て壁に滅入る

しかし

オノレ・ド・シュブラック氏のようには

巧く滅形しない

そいつはまだ壁の中で藻掻いている

森

森へ行こう

そして茂みに身を潜めよう

傷ついた獣のように

森の茂みの中で

己の傷をべろべろ嘗めてやろう

小林喜代吉。比較的に軽輩のこれらの画家たちも、ミチノクの故郷に帰ってくると、多分に錦を飾る意識も手伝って、「われら中央画壇の闘士たちは……」などと、当るべからざる気焔をあげた。従って懇親会の席上でも、志功、松木、古藤、鷹山などは、会場の隅っこで、石くれのように固く小さくなっていねばならなかった。浅虫から野内へ向う路上で出会った松木を、下沢は石くれのように見覚えてなかったのは当然だった。ともあれ、松木の下宿で、たまたま下沢と一宿一飯の縁を結んだ志功は、やがて彼と板画の道でも結縁することになるから、読者は記憶の底に留めおかれたい。又、三人が帝展入選の大願成就を祈って、貴船(きふね)神社の境内の大木に、各自わが名を刻んだその野内こそ、九州宗像から落ちてきた胸形玄蕃義利が、初めて津軽に根を降したゆかりの地であった事実も想起していただきたい。肥後守で樹皮を深く深くえぐり、その傷口からわが祈りを樹液へ注入し、年輪と共に太く猛しく、高く、生長することを提案した志功の心緒のどこかには、玄蕃義利が太郎・次郎と、それから子孫にかけた祈願に通じるなにかがないであろうか？　いくたびか義利が玄海灘をしのんで想望したにちがいない浅虫の海……。その海を樹上よりスケッチして、後日志功に贈った下沢の心緒のどこかにも、それにかかわる思いが、いつか潜んでいたといえないであろうか？　どこかニーチェの永遠回帰めくが、あながち伝記作者である筆者の妄想だけとは断じられまい。

スマトラ記 (十三)

田中克己

八月七日にわたしたちはバリゲを出発してタバヌリ州の州庁のあるシボルガに向った。どういうわけかまた途中に近衛師団の部隊名をとった「宮の湯」という温泉があった。稲垣君らがここを撮影している間に、わたしはまたバタクの身体呼称をフタ・ボラフといふ男から採集した。ここの方言ではドイツ語のアハラウトに近いx(ハ)の音がきつく感じられ、きのふ泊ったパラパットは「足」を意味するのだと教はった。シボロンボロンといふ所へ来るとまた温泉が道ばたにあり、これは全く屋根なしで、「洗心湯」といふ立て札が立ってゐた。石灰の沈澱が見事で温泉丘を造ってゐる。一行は撮影をすましてから一浴した。「温泉をなんといふか」とのわたしの質問にアエル・ハーガトといふバタク語が教へられ、パイナップル（アナナス）をホナス、卵

をピラーといふ。バナナはどことも同じくピーサンであるが、ピサウ（山刀）をラウトと採集した。

この温泉からちょっと行ったところで道路工事をしてゐる一隊を見て、たづねるとここの部長（ダマン）イスカンデル・タンブルンの指揮するバタク人の一隊であった。イスカンデルの名はマレイ人にも多くアレクサンダーの訛りである。

ここまで書いてわたしは散歩に出て、いつものくせで古本屋をのぞくと、与謝野宇智子著「むらさきぐさ」といふのを買って来た。昭和十七年五月二十九日に亡くなられた母君晶子女史の思ひ出にと、昭和四十二年に出された本である。この五月二十九日は、前にも書いたようにわたしがスマトラ行の舟にのりこんだ日で、朔太郎、佐藤惣之助（五月十五日逝去）とつづいて亡くなられたことは、わたしは知ってゐたやうに思ふ。白秋の亡くなったのは十一月二日、東洋学のうみの祖で、わたしの勤め先の所長だった白鳥庫吉先生の亡くなられたのは四月一日（嫡孫芳郎教授によれば、薨去は三月三十日で敍勲のため、発表が四月一日となった由である）であった。白秋をのぞくこの訃報にわたしはいよいよ意気揚った。この方たちの亡きあと国のために働くのがますます必要と思ったのだ。わたしは若くて、うぬぼれてをり、戦果も揚りつづけ（と知らされてゐた）てゐたのである。自分でも嘘のようであるが、事実として書いておく。

わたしの父は大阪生れで、日露戦争に参加した。南山の戦（鴎外先生の「歌日記」に見え、「およづれか弱しと聞きし浪速びと先がけするをまのあたり見つ」と「また負けたか八聯隊」の評語がいつわりだったかと目を丸くされたのである）に損失した兵の補充としてであって安治川口まで乗船の途、銃を戦友にもたしたと自ら記してゐる。昭和二十年三月十八日の召集で向ひの三十七聯隊（中部二十三部隊と称した）に入営した満三十四歳のわたしは体重三九キロだったが、大阪駅まで三八銃を重がらずに運んだと比べると、父の方が弱かったのである。戦闘にも出ず歩哨動務で怖がってゐる弱兵のさまは「征塵」と名づける歌文集が残ってゐて、よくわかる。父の十三回忌には写真版にでもして頒つつもりである。藤田福夫教授の指示によれば、明治十六年二月十一日生れの父は金尾文淵堂発行の「小天地」といふ雑誌の第二巻一号（明治三十四年九月発行）に西島南峯と称して「片袖」と題してのせた鳳晶子のあとに歌をのせられてゐる。二十歳に達しないで歌を作ったのである。父の遺稿一万首の中には、ここにのせた歌はないやうである。鉄幹・晶子ご夫妻と金尾さんや小林政治さんを通じて交渉のあった証拠は、わたしの幼い時に見た手箱の中のお二方のハガキ類で証明されるが、父がわたしに語ったお二方のことは「よく喧嘩してたよ」の一語だけで、わたしは聞きかへす勇気を失った。金尾さんの妹との交情は

復刻版（限定二百部）

文芸文化

蓮田善明、清水文雄、栗山理一、池田勉が精魂をこめて編集した古典研究。その軌跡ははからずも蓮田善明の散華と三島由紀夫の自裁とを結んだ。

＊創刊号（昭和十三年七月一日）より終刊七十号（昭和十九年八月一日）に至る合本七冊
＊原型菊判、本文三八二四頁、原型多色刷表紙
＊特製総クロス装函入
＊別冊付録、総目次、解説

¥ 70000

東京都新宿区三栄町二九

雄松堂書店

写真入りの文があり、小林さんとの交情はいまだに証人がある。ともかくこの歌人はわたしが南方にゐる様を想像して「海の彼方に」といふ詩を作り「赤道直下常夏の、真日はかがよふ昭南に、夜を短かみふるさとの、夢みるまなき吾子ならむ」と歌って歌ひおへてゐる。晶子女史の病臥、逝去に際しての作がないのは、わたしと同じく緒戦の戦果の昂奮いまださめやらなかったか、桜花のごとく散ったつはものの死に外をなげくことをはばかったかのどちらかであろう。

いまさらではあるが、朔太郎への追悼は書いた。筆のつひでで申しわけないが、白鳥先生をはじめとする日本の頭脳や心臓の喪失を、あらためて書かしていただいた。「果樹園」以外にはさういふ場所もないので、いまにして、物に憑かれて、この雑誌の刊行を思ひ立ったことをありがたく思ふ。小高根さんとは同年、福地君もやや老いたかに思ふ。はるかに編輯・校正・発送の労をこれまたついでにお礼申しあげる。（還暦の年五月二十六日記す）

菜花忌第七回の記

白雪より菜の花へ

上村　肇

わが死せむ美しき日のために
連嶺の夢想よ!!
汝が白雪を消さずあれ

これは有名な「曠野の歌」の書き出しである。第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」の中の代表作と云わんより、伊東静雄全作品中の絶唱ともいうべき作品であろう。この作品の基調をなしたものは、小高根二郎氏の名著「詩人その生涯と運命」の中に記されてある、生涯をアルプスと取組み、山上の清浄な光りと影から、印象派的な画法の啓示を得たといわれる、伝奇的なイタリアの画家セガンティーニの「帰郷」という一枚の絵であった。「曠野の歌」をさらに響き高いものに持っていったのは、メーリケのモーツァルト伝の結である「運命の歌」であると小高根氏は述べている。この二つよりの感銘は詩人の胸中に流れよどみ、凝結して一篇の詩となった。私は、諫早に住んで二十五年、今年程、県境いの多良岳の白雪を美しく眺めたことはなかった。そして「あるいは?」という疑問が湧き始めた。アルプスと多良岳ではあまりにも、話が違いすぎるが、少年時代をこの諫早で暮らした詩人の眼底には、無意識のうちに、多良の白雪が焼きついていたのではないか、それがセガンティーニの絵とだぶって、名作「曠野の歌」が生まれたのではないか、と思うようになった。多良の白雪が消去って、その褐野一帯の、この諫早の田野に、春のさきがけの菜の花が咲き始めてくる。詩人が死の帰郷を歌ったごとく、伊東夫人が遺骨を抱いて、諫早に埋葬に帰ったのは、昭和二十八年の三月、菜の花の咲出す頃であった。翌年十一月諫早文化協会の手によって詩碑が建ち、十三回忌を第一回として「菜の花忌」が営まれることとなり、ことしは第七回「菜の花忌」として、諫早公園中腹の碑前にて開催を見た。大阪よりも花子未亡人、それに帯同して詩人伊東の愛弟子といわれた、東京の林富士馬氏が夫人同伴して列席を見たことは、関係者一同の最も欣びとするものであった。碑前には、諫早市長野田次三氏、令姉江川ミキさん、島原の盲目の詩人宮崎康平氏、長崎からは歌人秦美穂氏、詩人風木雲太郎、山田かんその他の文学人、佐世保からは中嶋英治、森英輔氏ら佐世保文化協会の人々。地元文化協会長中島太郎氏に代わって、副会長市川一郎氏が、開会の挨拶を述べ、司会は上村肇外出席者八十余名をもって

手にふるる　野花はそれを摘み
花とみずからをささへつつ
歩みをはこべ

果樹園　一八六号　昭和四十六年八月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第186号

画仙・棟方志功(六)　小高根二郎
陣中詩集(四)　蓮田善明
沈黙　吉本青司
スマトラ記(四)　田中克己
蚯蚓　高梨一男
編集後記

画仙・棟方志功(六)

小高根二郎

4　「夢」と「ドモ又」

「絵馬鹿」だという風狂のアダ名を決定づけたのは、志功自らの告白のように、どうやら「貘の会」の発会式らしかった。この会は絵の「青光画社」と違って、文学や演劇の方の結社だった。そもそも文学は、志功より松木満史の方が本家で、初めて本間仏具店で出会ったみぎり、彼が貸してくれた啄木歌集が、その萠芽となった。合浦公園での写生の帰りなど、松林沿いの砂浜に横臥すると、〈東海の小島の磯の白砂に　われ泣きぬれて　蟹とたわむる〉が、ついて出た。戯れたくとも、蟹は松の根つこでも探らなくては、簡単に見当らなかったが、松林が疎(まばら)になった日照りのあたり、這うように群生した浜茄子は、点々と紅い花を咲かせていた。そこらあたりから、東北方に東岳、南方にはのっそりと八甲田の山塊が眺めやられた。〈ふるさとの山に向ひて　いふことなし　ふるさとの山はありがたきかな〉。この啄木の故郷思慕の心緒は、すぐさま志功に乗り移って次の歌になった。

合浦(がうら)浜松原沿ひの砂浜にふるさとの花は
まなすの花

なんのことはない、青森のゴッホは歌人の素質も持っていたのである。形象では捕捉できない何か？　光のように、においのように、移ろい、漂いながらも、たしかに何処かに実存するもの。いや、光が影を呼び、又影は光に寄り添って造型する形象にくらべると、模糊とした頼りなげな心象でありながら、情念をそそのかしては行為にまで駆り立てる何か！　たぶんに青春期の躍やかな反吐(へど)に似たその心象を、志功は裁判所の古いガリ版を借りて、克明に鉄筆で刻んでいた。虫眼鏡で見るような細字で、盛り沢山に……。しかも、その内容を引き立てるために、浜茄子の花、八甲田山、浅虫の湯の島などのカットで飾ることも忘れなかった。

志功は歌を発表した。松木は器用に散文をものした。カギャこと七尾質店に勤めて水彩をやる藤本堅三は童謡を発表した。野間歯科の書生山田清朗は盛んに詩を書いた。松木、藤本、山田の三匹の貘は、頭領貘の志功より二つ三つ齢下だった。冊子の題名は初心にふさわしく「夢」と銘打たれた。

この若い貘たちに、なにがしかの刺戟を与えたのは、青森文壇の小説家竹内俊吉・淡谷悠蔵、歌人船水公明・加藤東籬たちに違いなかった。しかし、もっとも本質的な感化を与えたと思われるのは、昨年九月の関東大震災で深川を焼けだされ、年末に十八九年ぶりで津軽に引揚げてきた詩人福士幸次郎だった。彼は詩においては朔太郎に一歩譲ったが、理論では逆に一歩凌いだ、当時の一流詩人だった。

果樹園　一八五号　昭和四十六年七月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

新潮選書
詩人伊東静雄
小高根二郎
新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。
井上靖
¥550
新潮社

の会が開催された。「碑の建立の時に、アンケートを求められ、私は反対したような気がするが、こうして盛大な故郷の人々の暖かな思いに包まれた、菜の花忌に初めて出席すると、私が間違っていたことがわかり、心からおわびします」と林富士馬氏は美しい白髪の頭を謙虚に下げて参会者の心を打った。宮崎康平氏は伊東作品の日本語の美しさを語り、最後に「観光宣伝の具にしないよう、伊東静雄の純粋な詩精神を生かしたい」と述べ諫早市長は文化都市諫早建設のために努力したいと挨拶し、未亡人は「感謝に言葉もない位です」との謝辞があり、諫中音楽部女生徒の合唱を織りこんで、約一時間余の恒例の会は終了した。この日会によせた祝電、祝詞は全国各地より三〇通に及び、河同人木下和郎が碑前にて読上げた。この素朴にして清純な「菜の花忌」が人と人との心を和らげ、僅か乍らも真の平和を無言の間に築き上げていく、この行事の使命もここらにあるのではあるまいか。自らだけを考え、自らだけをささえることなく、他を人を、自然と共にささえあって歩みを運ぶ人生こそ、真の人生であり、社会でなければならないであろう。詩人伊東静雄氏の霊よ安らかなれ。

編集後記

五月五日。伊藤佐喜雄氏より潮新書「日本浪曼派」を頂戴した。さっそく一読したが、若き日の小生も時にチラチラ影を見せて、日記を実に克明につけているらしいのに感心した。日本浪曼派の生態を学ぶに必読の書である。

八日。姪の結婚のため上京した。折から日本橋東横で「文化勲章受章記念棟方志功展」が開催されているのを見た。特に板画が歴史的に展示されていて、「画仙・棟方志功」執筆の上に大きな啓示となった。午後、も一人の姪の案内で井上靖氏をお尋ねした。兄太郎は桜一丁目、氏は三丁目におられるので、ほんの近くだからだ。前日太宰治文学館主催の講演会が静岡であり、午前に帰ってこられたというお疲れのところを、鼻金色におちついた応接間でいろ〳〵お話をうかがえた。いずれ「画仙・棟方志功」に、井上氏、安岡章太郎氏の父君と共に、愚生の父と愚生も影を見せることになるが、当時学校では太宰治や石上玄一郎が蠢動していたのである。豊かな青春時代だった。

十三日。拙誌の最年小の読者である赤瀬信吾君から、諫早高校を卒業して京大文学部国文科に入学した旨の連絡をもらった。いずれ同君あたりが、拙研究を土着的視野からもっと深く掘り下げてくれるものと期待する。

二十四日。「四季」同人塚山勇三氏が十九日心臓病で死去した旨連絡をうけた。同時代を生きながら不思議と交渉がなかった。瞑福を祈りあげる。（O）

果樹園　第一八五号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年七月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五の八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社
（電話池田六一・八三一七）
定価　四〇円　送料　二〇円

幸次郎は一家をあげて板柳村の菊池仁康方に身を寄せた。やがて秋田との県境ちかくの碇ヶ関温泉で越年し、大正十三年の年頭に地方主義宣言を発表したのだった。その趣旨とするところは、今の日本に、いかなる精神運動より必要なのは、各地方を根拠地とした地方的特質を発揮した文化運動の展開だというのである。世の飜訳文化主義者流は、いたずらに民族的・地方的事実を黙殺したので平板なコスモポリタニズムに陥り、結局は社会主義のお先棒をかつぐのが落ちになったという。よろしく各地方は固有の地方的特質を発揚・発達させるべきで、そこにこそ国内文化の繁栄がもたらされ、これを民族的な大共通点から合一できるところに、世界に於ける民族文化の顕耀が約束されるという理論である。要約すれば、「真理や美に国境なしというも、事実あるのを如何しましょうか」という美学的な民族主義だったのである。幸次郎は一月十七日の「東奥日報」に「吾等の地方主義運動について」を発表した。この一文が「夢」の編集発行者であった志功の眼に触れぬはずはない。さらに、七月七日には赤十字青森支社で「地方文化第一回講演会」が開かれた。幸次郎は詩人百田宗治、一戸玲太郎、松井泰を従えて来青すると、みちのくの文化よ起て！ と一発ぶったのである。東都に名声を馳せる幸次郎の声咳に接した志功が、感奮をしないはずはなかった。それもそのはず、志功は、十年前に刊行された幸次郎の処女詩集「太陽の子」の愛読者だったからである。特に集中の「鍛冶屋のポカンさん」は、愛誦おくあたわぬ一篇だった。ポカンさんは誰あろう、富士幸の志功自身だと思われたからだ。

梨の花が真っ白に咲いたのに、
今日もまた降る雪まじりの雨。
濁り水は早口に鍛冶屋の桶へをどり
　込み、
まつ裸な柳は手放しで青い若葉をぬ
　らしてゐる。

ここの息子はポカンさん、
とんてんかんと泣く相鎚に、
苺の初生が食べたいと、
鉄礎台をたたくとさ、
手をあつあつとほてらして叩くとさ。

ああ、夢ならばさめておくれ、
ポカンさん、
この世のなかに多いものは、
秘蔵息子のやもめ暮らし。

時計の針のさきのやうに、
気の狂れやすい生娘暮らし
この年月の暑寒の往来に、
わたしの胸は凋んだ花の皺ばかり、
わたしの胸はとりとまりない時候は
　づれな食気ばかり。

明治四十五年七月深川和倉

六十年も前の詩とは思えぬくらい若々しい抒情だ。志功がこの詩を愛誦したのは、ポカンさんと同じく向う鎚で手を痺れさせながら、季節はずれの食い気に等しい、季節はずれの描き気で、切なく身を焼いた鍛冶の頃を思い出したからである。

志功はこの「鍛冶屋のポカンさん」のほかに、「心」という詩にも共感を覚えた。その十二行目に、志功の守護神ともいうべきゴッホに触れた一行があったからだ。

ゴッホには底まで静かに、思ふ魂が
　ある！

そういえば幸次郎は、その年十一月に、碇ヶ関から中津軽郡青女子村の村長竹浪政夫方に引越したが、そこでもゴッホを歌にした。

青女子の村のはずれの古沼に春闌けて崩
　ゆGOGHの柳

ゴッホは柳の樹をアルルでよく描いたが、青女子にもその柳が多かったのだろう。ともあれ、幸次郎のこのゴッホ好きは、志功のゴッホ傾倒と完全に一致した。そういえば、「太陽の子」自序を志功は詩と同じぐらい愛誦したが、そこにも両者が互に呼び合い共鳴する、燃える資質を発見することができる。

「自分は太陽の子である。如何なる奈落の底へ落ちてもあの燃え上る空中の偉大崇厳な火の円球を憧れてやまない。自分は彼れから遠ざかれば遠ざかる程其愛着の深さを感ずる。此詩集の最後の篇『太陽崇拝』を書いた頃から見ると作のない自分は一段と悲境にある事は感ぜずには居られないけれども、自分は此処から燃え上る火焔の未来に於て異常である事を信じて疑はない。如何なる剣の穂先きが此処から出るか、如何なる叫びが出るか見ろ。」

この太陽のように燃える幸次郎と、志功とが、たまたま青森の町角で出会ったことがあった。これはまさに志功にとって、歴史的な事実であったといっていい。

「まだわたくしは、青森の裁判所で弁護士控所の給仕をしてゐた頃ですから昔の話になりますが、青森の町の、どこかそこかで、いつも絵を描いてゐました。元の裁判所前通りの共同水道栓や、共同便所のあつた、善知鳥神社通りとT字路にあたるところで三脚を据へて油絵を描いてゐました。だんだん人が多くなつて、おかげで暖くなつてよいなあーと思はれて筆を矢鱈に振つてゐた時「志功さんよく描げしたネシ」と後から声をかけてくれた方がありました。「アリガンドゴス」わたくしはさう答へたまま筆をつづけてゐました。すぐそばの青森市で一番古い新聞社、青森日報社編集長の福士幸次郎先生であつたのが後で判りました。」

（「福士幸次郎著作集」別冊）

この志功の記憶にはいささか時間的な錯誤がありそうである。というのは、幸次郎が青森日報の編集長になるのは二年後の大正十五年秋であるから、もしかしたら七月七日の講演で来青した前後に、名物男の志功が街頭で写生してた折に出会ったとも想像されなくもない。しかし、それでは、人垣が寒さよけになったという前掲の志功の文章と季節的に食違う。もっと後年の出会いと解釈するのが妥当である。なぜなら、その頃志功はすでに、幸次郎の地方に立籠る regionalism（地方主義）とは反対に、天子様の宮居のある東京へ、なにがなんでも打って出るという誓を、盟友の松木・古藤との間に交していたからだ。又、志功の給料は、給仕としての最高額二十一円にすでに達していた。後は雇員になるより他に道はなかった。事実、「おめえ字が上手だから雇員になれ」という勧めが事務所からあった。が、正式な雇員になったら最期、明るいうちに絵を描く時間が生みだせぬことは目に見えていた。志功の選ぶ道は上り東北本線より他になかったのだ。

この志功の上京の悲願は、いつしらず沢地弁護士の耳に入っていた。俠気のある彼は、「棟方は目がわるくって掃除もへたくそだ。あれは東京へ出て絵をやりたいといっているのだから、いっそ東京へ出してやろうじゃないか。その方がこの控所の伝統の、給仕の面目を見守ってやることになる……」（「板柳道」）と、弁護士会に呼びかけてくれたのだった。そういえば、前任者の文学青年だった山本も東京へ送り出してやったじゃぁないか。今度も皆で三円、五円と醵金して、志功を絵馬鹿ではなく、ほんとの絵描きに仕立ててやろうということになった。話はトントン拍子に進んで、青森弁護士会に所属する全弁護士から、なにがしかの芳志が沢地弁護士の

陣中詩集(四)

蓮田善明

闘

昨夜小心恟々臆したる敵の乱射のもと
我れただ黙し　兵調へ待期す
われらが誓ひ、たゞ勝たんのみ
ふけゆく秋の露しとどに
戎衣に透り　寒　骨にしむ

星かげ漸くうすらぎ
黎明東にほのめけば
秋天忽ちつんざく
おお　轟然
わが砲咆吼す
二門
三門、
数門、数十門
暁闇に電光のごとく
火吐き
硝煙霧に渦巻き
ああ　全線
巨弾喚き飛び

怒りはためく
刻、一刻、秒、分、時、
おゝ　見よ
敵に一発の反撃も許さず
敵陣に喰ひ入り
土と岩と吹き散る
ああ　睥睨し　傲然と
猛撃する、
焔よ、
響よ、轟きよ
ああ巨人の
素早く、激しき乱打
煙わき、目に見えぬもの
一瞬に
唸り叫び破砕する

かれら、幾月かけて
築き　掘り　構へし堅陣
巾ひろき河とクリークを楯に
河堤と部落と森林と積重なる丘阜と
幾十百の巧緻なる銃眼
鹿柴、鉄条網、地雷を備へ
姿をかくし
われを狙ひ

もとに集まった。その金を彼は志功の掌に握らすと、背中をボン！　ボン！　とたたいて、「われわれの思いを存分に発揮してみろ。ただ『けっぱれ』の一句じゃ」と、激励したのだった。

夏休明けに志功出陣……という情報は、すぐさま若い貉の間に飛んだ。それはまさしく、松木、古藤、鷹山、藤本、山田らにとっては晴れがましい旋風、又羨望のショックでもあった。ついに松木は志功と一緒に上京をすると宣言した。そして、東京生活に一日も欠かすことのできぬ東京弁ョの勉強を、二人はおッ始めたのだった。

「二人は上京の準備にとりかかりましたが、面白かったのは、「これから東京へ行くのには、東京弁ョの稽古しなくてはマイネ」青森の田舎くさいものをかなぐり捨てて、アーチストの色彩を体にも、こころにもぶちこまねばならないというので、東京弁の猛稽古をはじめたことでありました。

二人は、県庁の裏通りとか、公園の木の下の道とか、あまり人通りのない桜町の小路とかの通りをえらんで、いままで使いなれた「わ」（わたくし）とか「が」（君）とかいうのをやめて、「君」、「僕」で会話のやりとりをしました。「君、そんなこ

われを待てる
万余の梟鼠
ああ　何ものぞ

機到れり
一気に壊滅せよ
われら起つ、一斉に
進軍、おゝ喊声
横隊に、縦隊に
朝川をしぶき上げ
火となりて突進する
忽ち敵弾必死に
縦ゆ横ゆ、斜ゆ
高く　低く
焼けつつ飛び来り
隊列を縫ひ
乱れ疾る
ああ　戦友
傷き斃れ
水に臥す
かしこに、ここに
天皇陛下万歳
顧みず往け、進め
おお轟々たる肉弾
大進撃
敵陣に取り縋り

手榴弾投擲
剣をふるひ
鉄条網を打ち断り
壘を攀じ、突喊
一角つゞいて一角
敵潰へ算を乱し奔る
「渡河成功」競ひ上る信号火

ああ　重機関銃は掃射し
白刃は息をもつかず追及する
第二線の丘阜より
乱射し来る反撃と
今慌て射つ敵砲弾をくぐり
匍匐し、躍進し、
迫り攻め進む
ああ見よ、砲兵は
正しき照準もて射程を延伸し
森は燃え、丘は火粉と裂けり、
逸早く総退却にうつれる敵縦隊を追ひて
機敏に　呼吸するどく
猛鷲は急降下し、
随所に粉砕する
ああ　上る、「第二線突破」の信号と
「全線追撃」の司令弾と——
尖兵は丘阜にくひ入り
後備は呼応して陸続と川を渡り

とでは困るではないか」、「そうですかねー」と、たのしいが少しこっけいでもある東京弁ョの勉強でありました。」

（「板極道」）

気の早い松木は東京弁ョの勉強だけでは物足りなくなった。覚えたての東京弁ョを実地に試してみたくなった。いや、それより東京の下検分をしておきたくなったのだ。丁度、六月なかばから、郷党の大先輩小山内薫が指揮する築地小劇場が、あたかも東京復興の象徴のように花々しく開演していた。出物はラインハルト・ゲーリングの第一次大戦に取材した表現主義の『開戦』。アントン・チェーホフの『白鳥の歌』。エミール・マゾオの『休みの日』だった。これを演ずる役者は、汐見洋、東屋三郎、友田恭助、千田是也、田村秋子らの面々ときていた。新聞雑誌が伝える新劇の評判と魅方は、上京の夢でのぼせ気味の松木をすっかり呑みこんでしまった。その後にロマン・ロランの『狼』が追演された。七月に入ると、カール・チャペックの『人造人間』が上演された。青山杉作、丸山定夫、夏川静江、山本安英の新顔も加わって人気はいよいよ上った。松木はもう矢も楯もたまらなかった。偵察と称して倉皇と上京し、倉皇と帰青した。そしてその偵察報告会が、貉の会

小ざかしき残敵は、唯蹂躙する
ああ、急追撃
敵屍埃を被れり
葬る暇なし

倭建命の御歌に追和し奉る

——にひばり　筑波をすぎて
いく夜か　寝つる（命）
——かゞなべて　夜には九夜
日には十日を（火焼翁）
——古事記——

たたかひの　幾日（いくか）すゝみて
幾山を　幾夜か寝（い）ねし
日々（ひび）並べて　八日か来つる
今日未明（まだき）　また進み往く
群山（むらやま）の　群嶺（むらみね）の上に
いと高き　山見えそめぬ

の例会の会場である赤十字支社で開かれた。

震災後一年にまだならぬのに、さすがは帝都、まさに不死鳥のように蘇りつつあること。めぼしい西洋建築は、耐震性のない煉瓦建築に代って、鉄筋コンクリートが亭々と空にのしだすであろうこと。昨秋見送りとなった二科展や帝展も、秋薔薇・黄菊のように今秋は復活して開花すること。これらの建設的な雰囲気にも増して素晴らしいのは、築地小劇場の開演であること。それは歌舞伎や新派の約束事ずくめの演出や演技と違って、表現主義的な奔放な創意にあふれ、まさに帝都復興の鮮麗な序曲にたとえられること。

この松木のいささか歯が浮くような偵察報告に、苦い貉たちはてんでに面をほてらせた。志功も真夏の夜の夢でもうつつに見せられたように眼を輝やかすと、「それで松木君。東京弁ョのス験（けん）の方は合格スたかネ？」と東京弁ョで話をしめくくった。松木は総髪を撫であげると、「そいだきゃア、マイネ」とやったので、両人の県庁裏の猛練習を知ってる面々は、どッ！と　笑い崩れた。ここで志功は東京に行っても、きっと応援作品を送るから、青光画社の方だけは続けてくれろと、後に残って絵を描く藤本や鷹山その他の面々の掌を一人一人握った。しかし、貉の会の方は…といいかけた言葉を松木は引き取って、この大貉がいなくなったら解散もやむをえまい…と、西洋カツラのようにちりちりに縮れた志功の長髪を指ではねあげた。そこで「貉の会」の解散を記念して、ひとつ打揚げ興業をやろうじゃないか、と松木は提案した。築地の余熱が冷めるどころか、いよいよ煮えたぎっているからである。演題は有島武郎作『ドモ又の死』だ。内容をかいつまんで紹介すれば、飯の食えない貧乏画家の仲間を、いかにして売り出すかという奇計をあしらった新劇風な喜劇なんだ。そのために仲間の一人「ドモ又」を天才に仕立てて突然若死をさせる。いや、若死をしたと虚構して、彼の遺作を飛びきり高く画商に売り込もうという筋なんだ。道具立は格別なにもいらない。皆が持ってる画架をもちこみ、講壇をモデル台にすれば、それで舞台であるアトリエはすぐできあがる。その他に寝棺らしい白木の箱、死んだドモ又に扮させるベートーヴェンの石膏のマスク一つあればこと足りる。つまり、絵を描きたくとも、思うように描けぬ今日の俺たちの生活を、そっくりそのまま舞台に持ち込んだら、それでコミック・ドラマ「ドモ又の死」は成立するというあんばいだ。

この言葉巧みな松木の解説で、やろう！という貉たちの決行の意志は即座にきまった。彼は懐中から、刊行されたばかりの有島武郎著作集第十六輯を取り出すと、さっそく「ドモ又の死」の朗読をおッ始めた。筑地仕込みのせいか、訛はあるが、セリフは歯切れよく聞こえた。一っ気に朗読を続けていた彼は、五人の仲間〔花田、沢本（アダ名生蕃）、戸部（アダ名ドモ又）、瀬古（アダ名若様）、青島〕の中から誰か一

人、死ぬ役を選定する場面にきて一服した。聞いていた貉たちも息を呑んだ。と、いうのは、死ぬ役を指名するのは、誰あろう花のようなモデルとも子だからだ。しかも、指名されて死なねばならぬ者は、その犠牲の代償として、とも子と結婚することができるからだ。そう仲間で申し合せても、とも子が誰を指名するかで動揺する。同じように、この分のいい死に役—「ドモ又」に誰が振り当てられるか、貉たちは互に気になった。が、本読みは今日はこのくらいにして、いずれ練習の途中で、適役を割り当てることになった。

ところが、その練習の途中で、松木は家の都合で急に上京をあきらめねばならなくなった。今回は志功一人を送り出さねばならない。「ドモ又」役は自分で……と内心きめていた松木は、その役割を志功に餞けせねばならなくなった。いや、松木は木彫をやり、油彩も結構こなし、戯曲のセリフ廻しなどまさに役者なみであった。とにかく、なにをやらせても器用だった。松木は『ども又の死』の真の主役、つまり、仲間から俗物だときめつけられながら、その侮蔑に甘んじて画商や成金を向うに回して、夭折の天才創造の大芝居を画策する「花田」の役をすることにした。名目上の主役ではなく、実質上の主役だからだ。とも子に一番に指名をうけそうに想われる「若様」には、かつての志功の凧絵ファンであり、詩人志願者の、沢地弁護士の息子司郎に振り当てられた。その役はノッペリとした美男であることが必須条件なので、彼以外にその条件を充たす者は見当らなかったからだ。後の「生蕃」や「青島」の役なら、藤本でも、山田でも、その他の誰でも、結構こなせそうであった。それにしても、肝心なとも子の役は誰にしたものか？　志功なじみのしげ子では、いかにも年が若すぎた。結局、松木の女友達の中から、誰か活発なひとを選ぶことになった。彼女は五人の仲間の中から、将来を託すべき一人を選別するのだ。

とも子——（人々から顔をそむけ）では始めてよ。……花田さん（注・松木の役）、あなたは才覚があつて画がお上手だから、いまに立派な画の会を作って、その会長さんにでもおなりなさるわ。お嫁にしてもらいたいって、学問のできる美しい方が掃いて捨てるほど集まってきてよきっと。沢本さんは男らしい、正直な生蕃（せいばん）さんね。あなたとはずいぶん口喧嘩をしましたが、奥さんができたらずいぶん可愛がるでしょうね、そうしてお子さんもたくさんできるわ。そうして物干竿におしめが賑やかに並びますわ。青島さんは花田さんといっしょに会をやって、きっと偉くなるわ。いまに皆んながあなたの画を認めて大騒ぎする時が来てよ。そうして堂脇さん（注・成金）とやらが、美しいお嬢さんを貰ってくださいって、先方から頭を下げてくるかもしれないわ。けれどもあんまり浮気をしちゃいけなくってよ。瀬古さん（注・沢地の役）……あなた若様ね。きさくで親切で、顔つきだって一番上品で綺麗だし、お友だちにはうってつけな方ね。でもあなた、きっと日本なんかいやだって外国にでも行っちまうんでしょう。お大事にお暮しなさい。戸部さん（注・志功の役）は吃（ども）りで、癇癪持ちで、気むずかしやね。いつまでたってもあなたの画は売れそうもないことね。けれどもあなたは強がりなくせに変に淋しい方ね、……

戸部——畜生……

とも子——悪口になったら、許してちょうだい。でも私は心から皆さんにお礼しますわ。私みたいながらがらした物のわからない人間を、皆さんで可愛がってくださったんですもの。お金にはちっともならなかったけれども、私、どこに行くよりも、ここに来るのが一番嬉しかったの。ともどもに苦労

しながら、めいめいが一番偉いつもりで、仲よく勉強しているのを見ていると、何んだか知らないが、私時々涙がこぼれっちまいましたわ。……でも私、自分の旦那さんを決めなければならないんだわ。いやになるねえ。私がいい人を選んでも、どうか怒らないでちょうだいよ。私、これでも身のほどをわきまえて選ぶつもりですから……

（きゅうに戸部の前にかけ寄り、ぴったりそこに坐り頭を下げる）戸部さん、私あなたのお内儀（かみ）さんになります。怒らないでちょうだいよ。私あなたのことを思うと、変に悲しくなって、泣いちまうんですもの…

「君……冗談をいうない、冗談を……」と、このとも子の思いがけぬプロポーズに、「ドモ又」は泡をくいながらも、結局彼女の手をとって、うれし泣きになるわけだが、志功の壮行興行としては、まさにうってつけの演題だったわけだ。ネプタもすぎ、善知鳥神社の大祭も終り、吹く風に夏の別れがそれと知れる一夕、日赤青森支部のホールで「ドモ又の死」は賑やかに開演された。三十坪ほどの鮨詰のホールに、志功の幅のある胴間声は徹りすぎるほどよく徹った。その声で、志功は空腹の処作よろしく、うーん、うーんと唸ってみせた。真に迫っていた。又、とも子は若様の顔が見たいばっかりに、無給でアトリエにやってくるんではないか？　と、猜疑し、嫉妬した。或いは、自分の作品は仲間の誰の作品よりすぐれていると、絶大な自信をひれきしてみせた。西洋カツラのようにチリチリ縮れた長髪は、まさに扮装いらずの「ドモ又」だった。赤い唇には紅もいらなかった。ただ拝領物のフチ無し眼鏡だけが、築地流のスポット照明に、時に光るのが気になった。しかし、汗みずくになった志功の熱演に、九月七日の別れを知ってるほどの者は、盛んに拍手を送った。

六日の宵、寺町の来々軒で、「銘の会」有志の送別会が催された。集った者は、松木、山田、藤本だった。中華料理を満喫し、ビールでほろ酔いになったところで、能登屋写真館へ繰り込んで記念撮影をした。その一葉が今に残っている。志功は筒袖の白ガスリを着込んで椅子にもたれている。感激で胸いっぱいなのか、それとも眼鏡が光るせいか、眼を伏せている。見送られるつもりが、急に見送る立場になった松木は、

大正13年9月6日夜の送別会
左から山田清朗・松木萬史・藤本堅三・棟方志功

袖付きの紺ガスリを着、両掌を帯にかけてつっ立っている。放心したように見開かれた眼に、いかにも無念といった表情を読み取ることができる。

翌七日の夜行でいよいよ志功は上京することになった。西洋カツラもどきの頭には、能勢帽子店に特別あつらえた慶応型の学生帽をかぶった。その長いツバの上には、「画」という銀製の徽章をかざした。桜庭という女友達の父が鋳物師だったので、これまた特別に作ってもらったのだ。着物も、昨夜の筒袖の白ガスリと打って変って、初めて袖付の紺ガスリに、袴を付けて改まった。伯母よねと姉ちゑとで新調してくれたものだった。帯は野間歯科医からの賜物だった。誰からの頂戴物か腕時計も、左手首にコチコチ時を刻んでいた。プラット・ホームまで、病気の父の名代として次兄賢三が送ってきた。彼は志功が給仕になってから間もなく自動車運転の勉強をしに上京、技術を習得して帰青し、今は上磯乗合バスの運転手になっていたので、けッぱれ！　という、送る気合も真剣だった。世話になった野間家の人たちも送ってきた。善知鳥神社の通り抜けのパイロットや、控所の掃除の下請をやってくれたしげ子のセイラー服姿が、びっくりするほど伸びているのに、志功は目を見張った。ネプタの晩、沼貝の餌食になりかけた書生の山田は、昨夜についで送ってきた。そういえば、松木も今日は元気を取り戻して、遅れてもきっと行くぞ……と、志功の掌を固く固く握った。甘精堂で悪戦苦闘をしている古藤は、志功がいなくなったら、故郷大湊の宮川菓子店に鞍替えするつもりなので、握る手に力がなかった。が、そのやん

沈黙

吉本青司

ときたま蜜蜂が使者のようにやってくる
晴間
ここではみんなが美しいことばを知っている
だんだんふくらんできたヒシの実のように
古代のことばを知っている

〈反歌〉

ヒシの実の大きくなって鯉あそぶ
燕雀
そのためにさすらい
そのために巣くらい
鳩にはなれず
烏にもなれず
ああ　わがうた！

山の村

〈かえらぬひとになってしもうた〉
という　そのひとは
過疎の山村で山仕事に生きていたひとだ
赤いちいさい小学校が目にうかぶ
そして　その小学校だけを
たからのように生きていたひとびと
〈時間〉というふしぎな沈黙の中に
ひとびとの善意だけが　今も
日だまりのように残されている
その住民がまたひとり消えた
遠い電話の向こうで
それを告げたひとは声がなかった

わりとした握力に情が籠っていたので、逆に志功の方からけっぱれ！と強く握り返えした。七尾質店に勤める藤太堅三も、昨夜に続き別れにきた。その質店の三男坊、絵では先輩格の七尾善之助や、その他の先輩も送ってきた。発車時刻がきて志功が車窓の人になると、誰が発声したともなく「万歳」となった。後は「万歳」「万歳」の鯨波となり、末は汽笛と一緒になった。

「青森駅を発って、わたくしのただ一ツの母校長嶋小学校にも別れました。浦町駅も過ぎました。堤川を越えて、八甲田山が全貌を見せて拡がって来るあたりの、練兵場のあたりまで来ると、なんだかかんだか、今まで知らない涙が頬をつたって来ました。どうすることも出来なくなってしまいました。よく描いた合浦公園の松原が去って行きます。よく寝ころんだ種鶏場のポプラの列も過ぎました。…中略…

古藤、松木と三人で、『たれが一番出世するか、ここに名をきざんで願をかけようじゃないか』と名をきざんだ野内川の橋げたも過ぎました。

よく描きに通った国道の白い道も、野内のタンクで通っているアメリカ石油会社（ライジングサン）の、地方ではめずらしい西洋式の建物や、石油タンクの丸い群立も、また、その附近の貴船神社の森も通ってしまいました。久栗坂の橋を通り、いつも、浅虫に行く途中に休んだ、軒の深い蔭の家、そうして、鶯の鳴き声、山田流の琴の音のゆかしい想い出の赤坂家も飛んで飛んで行きました。

善知鳥前の岬が過ぎると浅虫温泉です。この湯の街の真中を流れている湯気の上っている湯川を越すと、湯の島、裸島、カモメ島がそばに寄って来るのです。もうここで知っている第一、第二、第三のトンネルをくぐって、小湊になるのです。野辺地から東への先は知っているところはないのです。もう、わたくしは初めての旅路に入ったのです。あふれて来る異様なさびしさに、目の前、心の中は、ただシクシクとさびしく暗くなってしまうのでした。

そのころ母はなくなっておりましたので、父や、祖母、兄弟たちに向い、『帝展（いまの日展）に入選しなければ帰りません。誰が病気をしても、死んでも帰ってまいりません。家の方に不幸があっても知らせないでください』と車の闇の中でわたくしは叫びつづけました。」（「板垣道」）

評伝 小栗風葉
岡保生著
紅葉の権威がその関連として完成した周到な風葉伝
¥2,800
東京都千代田区猿楽町二―二―六
桜楓社

スマトラ記 (㈥)

田中克己

バタクは悪評高い民族である。増渕佐平「南方圏の体臭」（昭和一六年一〇月、誠美書閣刊）といふ大東亜戦争を予期して書かれた？ 本ではバタ族といふ章があって、マンデー（水浴）が嫌ひで垢まみれで、平気で豚を食ひ、さらに犬をも好んで食ふと記されてゐる。イスラムのメナンカバウ族やアチェー族との比較でいはれてゐるのであらうが、豚や犬を食ふのは漢人でもこの土に多く来てゐる広東人も得意なことである。わたしの宣伝班支部で炊事をやってゐた二人の青年がこのバタクであったが、わたしたちは誰一人、これを不潔だと感ぜず、その煮炊きする料理を食ってゐた。

蚯蚓

高梨一男

ハゼウルシ　ネムら混じる雑木林は
老鶯の声もして
丘沿いの径に朝の犬を伴えば
まだ湿ってる赫土の中ほどに
蚯蚓いっぴき居る

飼うでもなく
尺ちかい身をかすかにくねらせて
きのうの朝と同じ辺に
きのうのおまえは
居る

自身ゆくさきを知らぬ
めくらの蚯蚓よ
——犬も避けて通る

増渕氏はさらに老婆を木にのぼらせ、ゆさぶって落ちれば食ひ、落ちねばまだ役立つとして食はれるのを免かれる、といふ食人肉の風習を記してゐる。これなどもなんか無根の侮蔑の記事である。わたしが前に近衛師団に提出した民族誌では、もとよりそんなことは記さず、バタク族の総人口一四五万、カロ、トバ、マンダイリンなどに分れ、カロ、バタクはマレー族が来るまでは海岸沿ひに住んでゐた。山地に退いた今もカロ、バタクは聡明で仕事欲があり、正義感が強い。農民で米を作り、ヨーロッパ人用の野菜やジャガイモを作る。商業を華僑と対抗して行ふ唯一の民族である。ただし米作その他の農業はおほむね婦人が行ふ。四乃至八家族が大きな家に同居してゐる云云と記した。いまタルトンから七キロのシポホロンといふ大地でイスカンデル、タンプブルンといふ郡長の指揮で路普請をしてゐる数十人の元気な姿を見てわたしはなぜだか感動してゐた。怠け者ばかりと思ってゐた南方民族が自発的に勤労奉仕をしてゐるのである。わたしは稲垣君らが撮影してゐるのも喜んで見てゐた。この日（八月七日）の泊りはタバヌリ州の首府シボルガのホテルで、インド洋の見える庭の椅子に腰かけてゐる将校の中に清田少尉といふのがゐて、わたしは有名な水泳選手だと知ってゐた。名古屋師団とともにどこに転戦したか、今も御元気でスポーツ関係の仕事をしておいでと新聞で知ってゐる。

このホテルのことだったかと思ふが、「句会をしてゐるから来い」とのことでゆくと、上等兵の水田鎌太郎さんといふのが司会をして互選をしてゐた。わたしは批評を乞はれたが何もいへなかった。消灯時刻にでもなったのであらう、句会が了ると、水田さんは内地の妻へと句集を托された。わたしは昭和十八年になってから名古屋の奥さんへ送ると、「夫は戦死しました」といふ手紙が来た。仄暗いあかりの下、しづかに句を按じてゐた将兵はおほむね死んだかと、わたしは悲しみをとゞめ得なかった。勝敗の如何に係らず、理由の如何に係らず、戦争をやめてほしいといふのが今のわたしの悲願である。その理由の一端はかういふところにもある。

翌日はシボルガ発、八八キロのパダンシディンパン、そこから一一〇キロのフタノパンを経て十二山といふ名の奇山を見、一一六キロでギンジョルといふところに来ると赤道標

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥500

新潮社

があった。ジャングルの中に石標が立ってゐて梢では猿が遊んでゐた。たうとう赤道を越えたかとわたしは変に感激した。稲垣君のおかげである。彼に誘はれなかったら、わたしは相変らずつまらない顔をして、師団司令部参謀付の本荘少尉と将校クラブで球を撞くぐらゐが唯一の楽しみであったらう。

この夜の泊りはブキ、ティンギ、もとのフォート・デ・コクである。高原のホテルはインド洋岸のシボルガとちがひ涼しかった。この夜訪ねて来た中尉は中村員重といひ、ペンネームを中室員重といふ詩人である。この人ももう亡いと承知してゐる。何を語りあったかはもとより覚えてゐない。

翌九日は三六キロのマニンジャウ湖へゆく。火口湖か陥落湖かしらべても見なかったが、水の美しい小さい湖である。稲垣君らはこのあたりに住むメナンカバウ族の子供たちに日本の歌を教へる兵隊を撮影した。わたしはその間にこのあたりの方言を採集してゐた。よそならマタ（目）といふのをマトといひ、カパラ（頭）といふのをカパロといひ、耳をタリゴ、髭をシ・スグイといふ時、ゴ・グが鼻にかかった。わたしにこの単語を提供した男に名を問ふと、片仮名でダトマン・チコラドと書き、その下手くそな字は今もわたしのノートに残ってゐるが、タドマン君は日本の兵隊とちがってインドネシア国で元気に生きてゐると思ふ。わたしも還暦に垂んとして生きてゐる。ありがたいかな、わたしは体重三八キロとこの間の体格検査で検べられ記入されたのである。

編集後記

六月二日。新潮社の池田雅延氏が拙著を大量に石橋まで持つてきて下さった。ベテランの片岡久氏から面倒な出版事務の一切を引継いで下さつて大変なお世話になつた。書斉と応接を兼ねたゴタゴタとした二階でとりあえず乾杯をあげた。

十一日。宇都宮の小川和佑氏が「日本読書新聞」に「電話のような楽しさ」と棟方志功伝を批評して下さつた。そういえば、伊東静雄伝、蓮田善明伝以上に棟方伝が一段からはうけている。前二者に比し、今度の主人公はあまり有名すぎるので、愚生としてはかえつて書きにくいのだが、少し小説的な手法を使つているところが面白がられるのかもしれない。

十四日。当の棟方志功氏から、「小野忠明との出会いはカッドウシヤシンにしてもよい程のバメンです」といつてこられた。恐らくこの出会いの詳細は、画仙自身忘れておいでだつたであろう。

十五日。早大の陣ノ内宜男氏から、拙著を中心に、静雄の小学時代の同明生が座談会を催して下さる由のたよりをいただいた。有難いことである。

拙著「詩人伊東静雄」に関し、「日本読書新聞」「東京日々新聞」「大阪毎日新聞」「東京新聞」「静岡新聞」「新潟日報」「京都新聞」「中京新聞」「徳島新聞」「高知新聞」「日本学生新聞」等に批評を頂戴した。新聞社ならびに執筆者に心から感謝申し上げる。

（O）

果樹園 第一八六号（毎月一回一日発行）

昭和四十六年八月一日発行

編集兼発行者 池田市石橋二丁目六ノ五 小高根二郎

印刷所 大阪市東住吉区桑津町五の八 元市印刷株式会社

発行所 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社（電話池田六一・八三一七）

定価 四〇円 送料 二〇円

果樹園 一八七号 昭和四十六年九月一日発行（毎月一回一日発行）池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価六〇円

果樹園

第187号

画仙・棟方志功(七) 小高根二郎
ロセッティ小曲(三) 森亮
陣中詩集(五) 蓮田善明
スマトラ記(六) 田中克己
夕顔 吉本青司
伊東静雄先生の密葬の日 竹内徹
螢 高梨一男
をらびうた(十) 蓮田善明
編集後記

画仙・棟方志功 (七)

小高根二郎

六、上京と帝展落選

1 守護神・ローマの臥女神

上野に着くと霧雨が降っていた。手には犬、肩に鳩をとまらせた西郷ドンにまず敬意を表してから、道を聞き聞き竹の台の陳列館までやってきた。折から第十一回二科展が始まったばかりだった。中川紀元、青郷青児、鍋井克之などという、いわゆる大家の十五号から二十号ぐらいの作品が、銀や白のしゃれたフランス風や、或いは豪奢なルネッサンス型の額縁におさまって、ふんぞりかえるように、壁面からいささか傾斜を保ってならんでいた。二科賞の金札と、樗牛賞の銀札の付いた作品の前には、自然、足が釘付けになった。前者は横山潤之助、後者は木下孝則で、それぞれ若い男と女を描いていた。特に金賞を射止めた腰かけた男の半身像は、ふン、これだばワにも描ける……と、志功は鼻の先であしらった。こんなまずいものでゆうゆう入選でき、おまけに金賞まで取れるなんて、東京の画壇なぞ甘いもんだ……と腹の内で高をくくった。昨年の自分の出品予定作、ドングロスに描いた岩場の力強さを、この男の坐像に替えて想い浮かべていたからである。志功は後年、この恐いもんしらずの向意気を反省して、「絵の外側だけを見て、中側を観ていなかつたのでした」（「板極道」）と述懐している。

正午にはまだ間があった。上根岸にお住まいの中村不折先生を尋ねようと思った。不折といえば、帝国美術院の会員であり、太平洋美術学校の校長でもあり、推しも推されもせぬ洋画壇の元老だった。南宗画と官学派のボール・ローランスに洋画を学んだ彼は、好んで中国史話に取材したロマンチックなタブローを得意とした。この先生宛に、青森日報の編集顧問をしていた世話好きな福岡翁が、紹介状を書いてくれていた。もしよかったら書生に置いてやってほしいという内容である。志功は籐の手提鞄から墨書きの封書をとりだすと、胸にしまい直した。そして地図を頼りに、帝国博物館の裏手から鶯谷の東北本線を高架で越え、駅近くの安手な旅館や小料理屋のごみごみした界隈を抜け、東北本線沿いに日暮里に向けて下りながら、ぐるぐるまいをやった末、上根岸にやっと中村邸を探し当てた。丁度、子規庵と眼と鼻の先の向合せで、一は宏壮、一は貧寒、非常に対蹠的であった。志功は恐る恐るベルを押した。やがて玄関先に中年の婦人が顔を覗かすと、米意を質した。志功はふところから紹介状をとりだすと、例の西洋カッラの頭を深く垂れて、彼女に捧呈した。両掌を膝に当てると、かしこまって御託宣を待った。

「先生はいま外遊中です。あんたは青森の田舎から福岡さんの添状をもってこられた

けれども、日本全国からあんたのような人がたくさんくるのだから、中村ではとてもお世話はできない。そんなにかんたんに考えてはいけない！」

御託宣は平手打ちのように痛烈だった。いや、女とはいえ、東京弁コの歯切れのよさは、さっき金賞の座像をあしらって一段と高くなっていた鼻柱が、ピン！ と指先で弾かれたほどの、屈辱的な痛さだった。戸がピシャリと閉められてから、やっと顔をあげた。全身を串刺しにした屈辱感は、まだしばらく道路に佇んでいた。玄関払いではなく、道路払いを喰わされたのだ。そう、思うと、屈辱感は真赤な怒りに変容して爆発した。「畜生ッ！青森人だと思って馬鹿にしやがって……。もう二度とこんな所に来てなんてやるもんか！」と、心の中で東京弁コで報復していた。東京弁コを初めて使ったのだ。その怒りは一瞬に燃えつきると、後はションボリと青褪めた。居住の第一候補地が潰滅したからだ。次第に心が鎮ってくると、邸内に書道博物館が設けられていることに気が付いた。なにか心の中で誘うものがあって、導かれるように内に入っていった。薄暗かった。その幽明の空間を組み立てる壁面には、草書や隷書やテン書が、まるで化け貉か竜のように、這いつくばったり、つながったり、踊ったり、うずくまったり、或いはあたりを窺っていた。陰刻の碑文は、又、墓石のように薄気味わるく、時間を遡って志功を蒼枯とした古代の世界へと拉致した。それは苔むした古い日本であったり、その苔も枯れ果てた古い支那であったりした。一体こんな奇怪な字が、絵画となんのかかわりがあるのか？ 志功にはてんと理解がとどかなかった。もともと不折は、絵画だけでなく、書道の方の巨匠でもあるという事実を知らなかったほど、効かったからだ。

この時、室の中央の床に、象牙色のかたまりが仄かな光を吸収して、おぼろに浮かび上っているのに気付いた。それは等身大に煮凝った油脂のようだった。近付いてみると、首がなく、腕も、足もない、大理石のトルソーだった。おゝらかに横たわってはいるが、ギリシャのヴィーナスの近付きがたい完璧な均整ではなく、どことなくドメスチックな親しさが感じられる不均整なローマのヴィーナスであった。言葉を替えていえば、理想的な冷たい美ではなく、個性的なぬくぬくとした美が感じられた。双の乳房は処女のように未成熟で堅いが、盛り上った腹部には、処女の特徴である輪が入ってはいずに、すでに経産婦であるような均らされた丸みがあった。臍の窪とその陰影も、狭められたがゆえの深い燻りではなく、ただ深く広いがための影の濃さであった。下腹部と両腿に推しせめがれた陰阜にも、単純な新鮮さとは違う、異質の豊饒さが内包されていた。特に腿から脛にいたる筋肉質の厚みにも、ピチピチとした若さと健康さではなく、憩いを欲求するけだるさで屈曲していた。いや、いや、首と腕と足がないことが、かえって志功に恣意の空想をそそりたてるに役立った。彼は四辺を見回して、壁面の狂い貉と竜の他には何者もいないことを確認すると、「お母ッ！」と横臥像（36.5×148㎝）に呼びかけていた。「お母ッ……。スコーはとうとう東京さ出てきしたじゃ」といった。すると切断された頸部から、によっきりとさだの頭が生えた。黒い頭布をかぶり、猛る吹雪の中を馳け抜けてきたあの顔である。長い睫はまだ雲片をのせていた。頬だけは、体温と息とで吹きつけた雪を融かし、玻璃のように光り、林檎のように紅くほてっていた。「よく蒸けだァ薯ッ！」。右腕の切断された下腮がスルスルと伸びると、湯気の立つ新聞紙袋を差し出した。志功はその紙袋をうけ取るつもりで手を伸ばした。「薯ッより乳ッ欲しじゃ」。むんず……と掌は彼女の乳房を掴んでいた。めったに当てがわれたことのない

乳房だったからだ。円丘は暖くはなく、さりとて、それほど冷くもなかった。が、握力をうけつけぬ緊張した硬度に、志功はあわてて掌を離した。母さだではなくローマの女神だったのだ。このとき女神は寛容なやさしさで囁きかけた。

「あなたは、青森から、東京によく来てくれました。絵の勉強というものは、人のことばや情では得られません。あなた自身が先生になり、弟子になることです。絵は口をきくものではありませんから、こころを聞かなくてはいけません。ことばは、わたくしにも出来ませんが、美は、生きつづけています。美しさは無言ですが、美しい世界をいつも知らせています」（「板極道」）

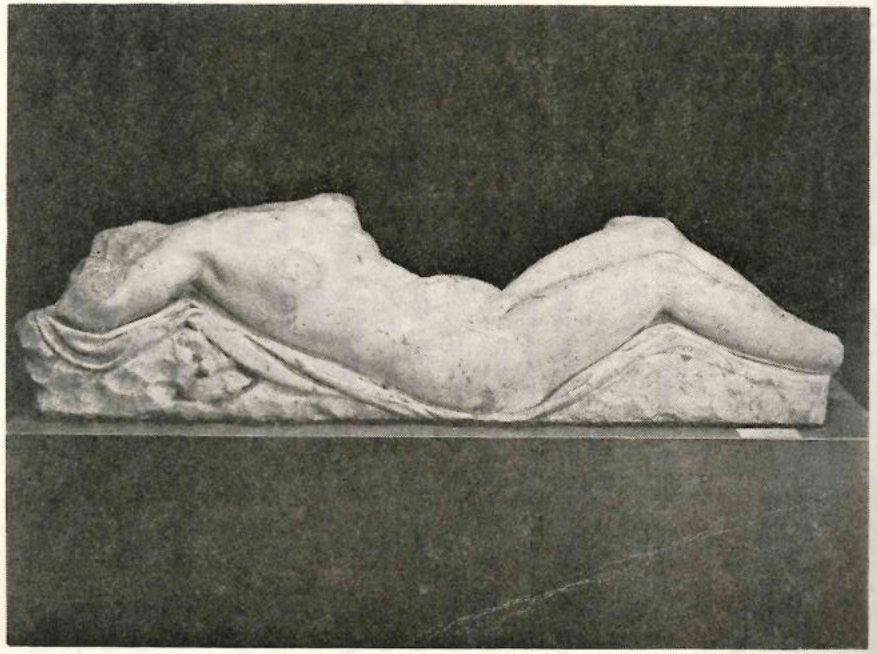
そう、大理石のヴィーナスが囁いたような気がした。その石の囁きがうつつに聞えるように、自分も石になったような気がした。いや、煮凝った油脂のような裸像に、抱きすくめられてるような陶酔を感じたのだった。

外には秋雨が音もせず降っていた。憧れの二科会は幻滅だった。道路払いの屈辱にむかっ腹も立った。しかし、おもいがけずローマの女神に回り合い、しかも、抱きすくめられるほど愛されたのだ。これを幸先のいい東京第一歩といっていけないだろうか？ 志功は寛容な横臥像に向って両膝をつき、両掌を合せていた。

「貴女こそ美の女神。わたくしの先生。きっと帝展へ入選してご覧にいれます。そして哀しくなったら御身のもとにまいります。嬉しいことあっても、きっとまいります。どうぞお守りください。」

そう、祈っていた。

ちなみに、志功に道路払いをくわしたくだんの女性を、「板極道」は不折の妹であるかのように推定しているが、中村家（不折の息丙午郎）



ローマ "女神臥像"　（大理石36.5×148㎝）
ブリヂストン美術館蔵

けれども、日本全国からあんたのような人がたくさんくるのだから、中村ではとてもお世話はできない。そんなにかんたんに考えてはいけない！」

御託宣は平手打ちのように痛烈だった。いや、女とはいえ、東京弁コの歯切れのよさは、さっき金貨の座像をあしらって一段と高くなっていた鼻柱が、ピン！ と指先で弾かれたほどの、屈辱的な痛さだった。戸がピシャリと閉められてから、やっと顔をあげた。全身を串刺しにした屈辱感は、まだしばらく道路に佇んでいた。玄関払いではなく、道路払いを喰わされたのだ。そう、思うと、屈辱感は真赤な怒りに変容して爆発した。「畜生ッ！青森人だと思って馬鹿にしやがって……。もう二度とこんな所に来てなんてやるもんか！」と、心の中で東京弁コで報復していた。東京弁コを初めて使ったのだ。その怒りは一瞬に燃えつきると、後はションボリと青褪めた。居住の第一候補地が潰滅したからだ。次第に心が鎮ってくると、邸内に書道博物館が設けられていることに気が付いた。なにか心の中で誘うものがあって、導かれるように内に入っていった。薄暗かった。その幽明の空間を組み立てる壁面には、草書や隷書やテン書が、まるで化け貉か竜のように、這いつくばったり、つながったり、踊ったり、うずくまったり、或いはあたりを窺っていた。陰刻の碑文は、又、墓石のように薄気味わるく、時間を遡って志功を蒼枯とした古代の世界へと拉致した。それは苦むした古い日本であったり、その苔も枯れ果てた古い支那であったりした。一体こんな奇怪な字が、絵画となんのかかわりがあるのか？ 志功にはてんと理解がとどかなかった。もともと不折は、絵画だけでなく、書道の方の巨匠でもあるという事実を知らなかったほど、幼かったからだ。

この時、室の中央の床に、象牙色のかたまりが仄かな光を吸収して、おぼろに浮かび上っているのに気付いた。それは等身大に煮凝った油脂のようだった。近付いてみると、首がなく、腕も、足もない、大理石のトルソーだった。おゝらかに横たわってはいるが、ギリシャのヴィーナスの近付きがたい完璧な均整ではなく、どことなくドメスチックな親しさが感じられる不均整なローマのヴィーナスであった。言葉を替えていえば、理想的な冷たい美ではなく、個性的なぬくぬくとした美が感じられた。双の乳房は処女のように未成熟で堅いが、盛り上った腹部には、処女の特徴である輪が入ってはいずに、すでに経産婦であるような均らされた丸みがあった。臍の窪とその陰影も、狭められたがゆえの深い燻りではなく、ただ深く広いがための影の濃さであった。下腹部と両腿に推しせめがれた陰阜にも、単純な新鮮さとは違う、異質の豊饒さが内包されていた。特に腿から胴にいたる筋肉質の厚みにも、ピチピチとした若さと健康さではなく、憩いを欲求するけだるさで屈曲していた。いや、いや、首と腕と足がないことが、かえって志功に恣意の空想をそそりたてるに役立った。彼は四辺を見回して、壁面の狂い貉と竜の他には何者もいないことを確認すると、「お母ッ！」と横臥像（36.5×148㎝）に呼びかけていた。「お母ッ……。スコーはとうとう東京さ出てきしたじゃ」といった。すると切断された頸部から、によっきりとさだの頭が生えた。黒い頭布をかぶり、猛る吹雪の中を馳け抜けてきたあの顔である。長い睫はまだ雲片をのせていた。頬だけは、体温と息とで吹きつけた雪を融かし、玻璃のように光り、林檎のように紅くほてっていた。「よく蒸けだァ薯ッ！」。右腕の切断された下腹がスルスルと伸びると、湯気の立つ新聞紙袋を差し出した。志功はその紙袋をうけ取るつもりで手を伸ばした。「薯ッより乳ッ欲しじゃ」。むんず……と掌は彼女の乳房を摑んでいた。めったに当てがわれたことのない

乳房だったからだ。円丘は暖くはなく、さりとて、それほど冷くもなかった。が、握力をうけつけぬ緊張した硬度に、志功はあわてて掌を離した。母さだではなくローマの女神だったのだ。このとき女神は寛容なやさしさで囁きかけた。

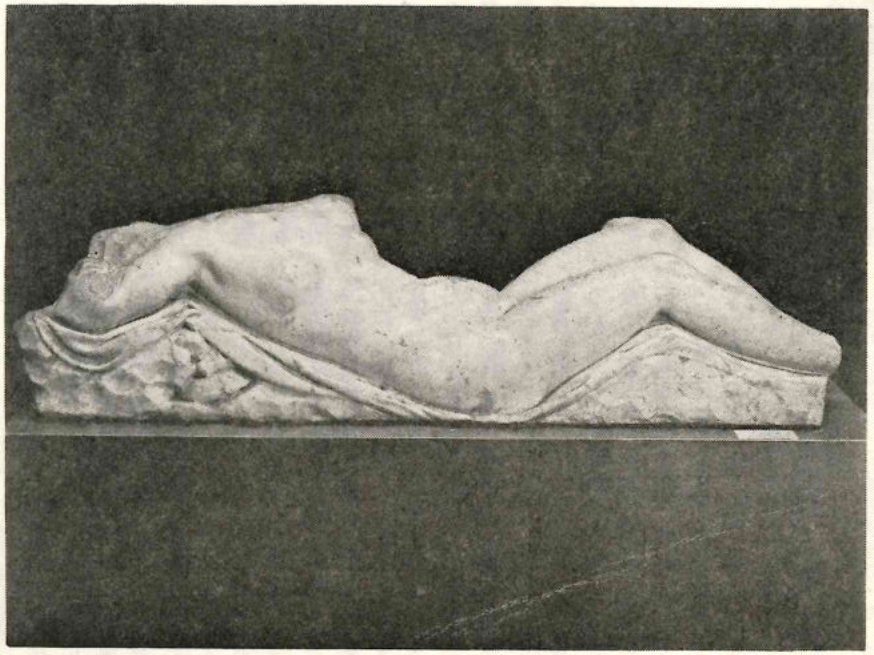
「あなたは、青森から、東京によく来てくれました。絵の勉強というものは、人のことばや情では得られません。あなた自身が先生になり、弟子になることです。絵は口をきくものではありませんから、こころを聞かなくてはいけません。ことばは、わたくしにも出来ませんが、美は、生きつづけています。美しさは無言ですが、美しい世界をいつも知らせています」（「板橇道」）

そう、大理石のヴィーナスが囁いたような気がした。その石の囁きがうつつに聞えるように、自分も石になったような気がした。いや、煮凝った油脂のような裸像に、抱きすくめられてるような陶酔を感じたのだった。外には秋雨が音もせず降っていた。憧れの二科会は幻滅だった。道路払いの屈辱にむかっ腹も立った。しかし、おもいがけずローマの女神に回り合い、しかも、抱きすくめられるほど愛されたのだ。これを幸先のいい東京第一歩といっていけないだろうか？ 志功は寛容な横臥像に向って両膝をつき、両掌を合せていた。

「貴女こそ美の女神。わたくしの先生。きっと帝展へ入選してご覧にいれます。そして哀しくなったら御身のもとにまいります。嬉しいことあっても、きっとまいります。どうぞお守りください。」

そう、祈っていた。

ちなみに、志功に道路払いをくわしたくだんの女性を、「板橇道」は不折の妹であるかのように推定しているが、中村家（不折の息丙午郎）



ローマ "女神臥像"　（大理石36.5×148㎝）
ブリヂストン美術館蔵

に照会した結果、彼女は恐らく女中頭であったであろうという。又、当時不折が外遊しているといったのは嘘で、お上りさんの書生志願者に馴れっこになっている彼女の、常套の口実だったわけだ。それにおかしなことには、当時邸内にはまだ書道博物館は建設されていなかったという。それが建設されたのは昭和十一年というから十年以上も後のことだ。ただ当時不折の書だけを収蔵する未公開の倉庫が建てられていたという。想像するに、道路払いのショックで打ちひしがれた志功が、折から開扉されていた倉庫をみつけ、そこで心を鎮めようとしおしおと入っていったところ、偶然、ローマの横臥女神に出会ったのだろう。そうなれば、この守護神との出会いは、いよいよ奇遇、まさに運命といっていい。これは余談になるが、このトルソは戦後間もなく書道博物館から京橋のブリヂストン美術館に譲渡された。今もその第一室で、彼女はけだるげに永遠の時を横たわっている。

2　横山大観何者ぞ

志功が結局おちついた先は、伯母よねの知合である本郷弓町の渡辺勝兵衛方であった。勝兵衛は内科医橋本三郎家のお抱え車夫だった。家は小さくて三間しかなかった。従って、下宿とはいっても、家族と一緒に寝、家族と一緒に食事をする、味もそっけもない殺風景な明け暮れだった。薄暗い屋内には、十燭光の電燈が一つ、螢火のように寒々と点っているだけだった。それでも月末には、下宿代として十七円也を請求された。と、いうのは、東大近くのこの弓町一帯は、いわゆる学生相手の下宿屋ズレをしていたからだ。伯母よねから十円、兄賢三から十円、計二十円しか仕送りがなかったので、下宿代を支払えば、手許には三円しか残らなかった。ついせんだってまでは、給仕最高の二十一円の月給をもらい、半分を食扶持として家に入れても、十円なにがしが手許に残る豊かさだった。十円と三円。そのひどい落差さは、志功に貧寒とみじめさを痛感させずにはおかなかったが、自分から熱望してやってきた東京である。おくびにも泣言は出せなかった。彼は唇を噛むと次第に秋の深む東京をあちこち描いて回った。できれば最近作を帝展に搬入しようと思ったからである。手近かな東大の銀杏並木や三四郎池。御茶水の聖橋や駿河台のニコライ堂。少し足を延ばして上野の不忍池の周囲も描いて回った。合浦公園の箱庭的な池と、比較にならぬ茫洋さだった。折から池の端は茅町にかゝた時である。日本画壇の雄横山大観の宏壮な邸をみつけた。その宏壮さは洋画壇の元老不折邸の比ではなかった。丈高い腰板をした屋根葺きの高塀をめぐらし、中央部には一枚欅の鉄鋲打った正扉が、左右に側扉を従えて悠揚と朝霧にかすむ池に対していた。志功はこの豪勢さに、思はず、おおッ……と立ち止った。というのは立ちこめる朝霧の景色に、故郷の先輩画家である今純三（今和次郎の甥）の「浅草の朝」を思い出したとこだったからだ。それは静かなブルー調の朝靄の中に、ぼんやり点景人物が浮んだつつましい構図だった。帝展の前身である日展の出品作だった。あんなつつましいタブローを出品作に……と、思った矢先、大観邸の豪勢さに息を呑まされたのだ。そういえば、畏敬する先輩蔦谷龍岬だって、大観の前に出ると童のように小さい。文展で特選をとった「暁けの御堂」だって、この現実の御堂の豪勢さには、所詮、絵空事にすぎない。志功は貂のように、う！　う！　と唸った。なんという、さいはての青森人のつつましさ。いや、つつましやかに見えて、世間知らずの一人よがり。津軽のジョッパリ。そう、津軽人に警告する先輩だっていたのである。

それは酔狂州こと葛西善蔵だった。津軽に

ロセッティ小曲（三五）

森　亮

彼女なくてなんの鏡ぞ、
月を浮かべぬ　池の面か。
虚しきは　主なき晴衣、
夜の空に　飛ぶ叢雲か。

通路に　かのひと見えず、
昼を追ひし宵のさびゆく。
ひとを枕きし　しとねに涙、
身はひとり　現ともなし。

彼女なくてわが胸、終に
語るべき言葉を知らず。
あてもなく冷たき道を

たどりゆく　われは旅人、
森のうへに雲湧きおこり
いや増しに道を暗うす。

「生の家」第五十三歌

帰って地方主義の御題目を唱えている福士幸次郎と違って、妻子六人だけは津軽に帰えし、彼は鎌倉建長寺門前の茶屋の娘ハナ子と一緒になって、所もあろうに、志功と同じ弓町の下宿屋・西城館にしけこんで、朝から酒杯を傾けていた。愛弟子だった弘前女学校教諭の石坂洋次郎も休暇には顔をだした。

「ネ、君。岩木山はきれいな山だ。が、それはあたりに大きな山がないからで、よくみるとつまらない山だ。津軽人も岩木山同様一寸見にはちゃんとしているが、大きな所がない」

と、放言してはばからなかった。又、弘前出身で「新潮」の編集にたずさわっていた佐々木千之も、よく西城館に出入りしていた。葛西の出席した合評記事に眼を通してもらうためである。が、いついっても原稿は蠟石の文鎮に押しひしゃがれたままになっていて、締切りに間に合うかどうかと、佐々木をハラハラさせた。そんな思惑にはてんと無関心に、酔狂州は朝ッぱらから酒杯を傾けて上機嫌だった。「一寸ま、一寸ま、まあ、一寸、一杯、いべし」と、佐々木に酒杯を差し出した。佐々木は昼間だからと断わると、岩木山は他に高い山がないから立派に見える……の例の御託をならべ

「同郷人だから、同郷人だからというのは、僕ほんとはきらいでね、なんだかヤバッイ（きたない）」（佐々木千之「葛西善蔵」）

そう、郷党意識を唾棄してみせた。

「貉の会」の会員だった志功は、この葛西善蔵を尊敬していた。私小説の神様としてである。ハナ子に取材した、いわゆる「おせい」物の愛読者であった。「哀しき父」「不良児」「おせい」などを読んだ時には、「こちらの体いっぱいが熱くなってきて、その生活の中に入って行くような思いをするのでありました」（「板極道」）と、いうほど、深い感銘をしたものであった。

その善蔵が、まさか同じ弓町の空気を吸っていようなどと、想ってもみなかったことは、志功にとってしあわせであった。と、いうのは、岩木山は今までのように、どの山よりも、志功の心の中で高くありえたし、同郷人のヤバチさも覚らなくてすんだからである。いや、それどころではない。志功は何か傑作をでかさねばならなかった。なにがなんでも、目睫に迫った帝展に入選しなければならなかった。なつかしい合浦公園の藤棚の下、菖蒲が紫に咲き添うている池畔に、鯉が遊泳しているとっときのタブロー。青森で描いた気に入りの一枚はあったが、それを越える

陣中詩集(五)

蓮田善明

夜光時計

夜る目ざめて　眠ねざるは　わが性なり
暗き闇に男　いのち　ひとりありて
さらにも闇く目閉ぢてあれば
瞼が中のかなしく乱れたる
虹ぞ　燃えおどるかな

幼き時この虹をよろこび
日中の太陽に向ひて目閉ぢ試みしことあり
母のやはらかき胸に臥して
ひとり　もてあそびし花火ぞ

今　わがひとり目ざめて　耳許に聞くは
小さき夜光の腕時計の刻み
何を疑ひの底に汝は一夜
さゝやける睦言。
ほと目ひらきて目近くとりて見れば
つめたきガラスの下に　みどりなる　螢光
は
ゆらゆらと燃え立ちて
ふしぎに寒き焔ならずや
満ち盈ける月の光を、はた瞬きうるむ星の
明りを
奇しき工の
かかる小さき板に刻めるか
なべて　心も　奥ふかく　闇の底にありて
小さきものにあるぞかし
しづかに　目ざめ　夜を凝視むるわれに
ああ　見ゆるものは闇の中の光。

—十一、五、朝—

こほろぎの歌

秋更けわたる霜月の　こほろぎ
わが目覚めたる閨近く侑ひ寄りゐて　なく
らしき
共に臥す兵ら未だ　熟睡の息　漂ふ
ほと温き壕の中なる　闇に
明けやらぬ有明のうす月の　冷たしや
草戸洩りわが面を　ぬらす
暁を不眠の癖のわが　退屈さ
幸ひや尋ね語らむ汝と　ふたり

一枚を東京で用意しなくては、帝展は危い。志功は大観邸の門前で茫然と佇んでいる自分を発見した。おのれ、上野美術学校の光栄な第一回卒業生！　かつて岡倉天心に将来を託された天晴な麒麟児！　そして今は日本美術院をしょッて立つ統領、フランスのサロン会員でもある巨匠！　この大観を越えねばならぬ。越えただけでなく進まねばならぬ。霧の中に牛乳配りが、自転車で現れては消え、新聞配達も出没しだした。志功は再びう！　う！　と唸ると、まだまどろんでいる不忍池を揺り起こすように、

「横・山・大・観・何・者・ぞ！」

と、叫んでいた。そして左足を高くもちあげると、力いっぱい大地を下駄で踏みつけた。次で右足もそれに習った。後は左右交互に門前を踏み鳴らし、そのドラムは高塀が切れるまで続いた。ヨ！　コ！　ヤ！　マ！　タ！　イ！　カ！　ン！　ナ！　ニ！　モ！　ノ！　ゾ！。よ！　こ！　や！　ま！　た！　い！　か！　ん！　な！　に！　も！　の！　ぞ！

3　試煉の帝展落選

志功は必死になって珍らしい東京風景を描

「いづこより登り来りし　露もなき　夜を
そも何のこころに　この岩室の　枕べに
来て
今日の朝くらきに　来なく」
「この岩山はこそわが長き冬の　ふるさと
わがままに　公らこそ　をこなれ　ここに
わがめでたき　住居を侵すものか
しかすがに　さえたる白き月の光さへ　厭
ひて
燈も無く地の下の闇に　堪へ
物思へる公に　歌ひなむわが最期の
闇の　奥所の、いやはての暁の歌を……」

ああ　闇ゆ　地中ゆ　わく奇しびなる　う
た
かざらぬ声に神の　語り給ふめでたきうた
ぞ
姿なき　こほろぎの声　あはれ

—十一、七—

暁

神は真暗き闇の後
薄紅に染め給ふ
神は常夜のいやはてに
物の貌を出し給ふ
黎明息吹く山風に
吾れ起き出でていきを吸ふ
眠り奏えたる魂振りて
東天紅に神を呼ぶ
神の証は限もなく
神しろしめす大いさよ
想ひ稚き鳥の歌
神秘しき雲のたたずまひ
おれ暁の男　山に立ち

進撃

歩いた
歩いた
ただ肩が堪へ
足が、靴が、もう
ひとりで歩いてゐるだけだ
またもあのやるせない力が
俺達の奥底から
焔のやうに噴き上げてゐる
戦友よ——
いく日　過ぎただらう
山幾つ越えて戦つただらう

いて回ったけれど、気負いばかりが先に立って、なかなか気にいったタブローができなかった。結局、東京の焼け残りの風景の中から、西欧的な風景を探しだし、それを拾い回ってるようないらだたしさに、追っかけられどうしであった。路傍の石くれの一つ、わだかまってる松の根っこの位置まで、知りつくしていたアト・ホームな合浦の、あの手にいった自在さにこと欠いた。それに下宿先の渡辺の雰囲気は、およそ夢に想い描いたアーチストの生活には、縁遠いものだった。お抱え車夫の勝兵衛は、さすが職業柄、モチーフになりそうな風景の案内をよく知っていて便利だったが、婆さんの方は口やかましくて、おかわりの椀の数まで気にしなくてはならぬのが、やりきれなかった。やりきれなさは、手狭で暗いだけではなかったのだ。せっかく、池の端で、「横山大観何者ぞ！」と昂揚して帰ってきた志功の暢達の精神も、馬鹿の三杯汁を居候なみに峻拒されたことで、なよなよと萎靡せざるをえなかった。

丁度、その頃、野内の貴船神社の境内で、立樹にわが名を刻んで帝展入選を祈願しあった先輩・下沢木鉢郎も九月に上京し、兄の家に身を寄せて、同じように東京風景を描いていた。夏の北海道旅行では適当な出品作がえ

あの高い山は
うしろに未だ見えてゐるが
蹤々と打ちつゞいて
しんしんたる急追撃だ
敵屍が埃を被むって
横はつたまゝであるが
葬る暇は無い——

病院にて

われ寝疲れて、あかつきの
石廊ひとり歩む——。
患者ら呻きつかれて深き睡りに落ちいれる
　ひと時、
病院の中庭に星の光うすくたゞよひ
たゞ秋の木のくらく音するしじま。
われ階を降りてその木のかげに寄らんと
足さぐりすれば、石階に
大いなるさくらの花びら　点々と
ほの白くかさなり散らばへる。
ああ
とほきふるさとの春の夜の、
はかなき少年の日に美しかりし
さくら花びら。
あやしく心ときめきて足踏みとどめて眺め
　ありしに
星のうすれしあけぼのの
あかるき光りにわれは見き。葩は昨夜
やめる人訪ひし看護兵のそこにこぼせし
蠟燭の白き脂なりき。

秋落葉

秋のひる小川のふちの木々の葉はおのれと
　散れり風もあらなくに
秋の木は退屈なれば身ながらにその葉散り
　舞ふ美しきかな
おのづから梢を離れて散らばへる秋の真昼
　の木の葉なるらむ
しづかなる秋の日あびて川ばたの木の葉色
　づき散りにけるかも
もみぢ葉の水に散らばひ流れゆく寂かなる
　かも川端の木は
梢離れ舞ひつつ落ちて石ばしる水に湍かる
　るもみぢ奇しも
秋の木はおのれともみぢ散らばひぬわれは
　憩らふその木のかげに
われひとり秋の木立の下に立ち落ち葉の中
　に佇むしじま
若き日の倦みたる頃の哀しみの秋の木立の
　中に返り来
若き日のこふらくひとのおもかげの中にあ

られなかったからだ。彼は北津軽郡は板柳の出身、志功より二つ年上だった。早くも大正五年十六才の日に上京し、それから大正十年徴兵検査をうけるまでの五年間、出版社の小使をしていた。それも美術出版社の中央美術社だった。そこから「中央美術」が月刊され、講義録も出版されていた。編集委員の中には、文士の佐々木茂索、版画家の平塚運一、テンペラ画家の平沢大暲らがいた。講義録は石井柏亭が担当だったので、社にちょくちょく現れた。その機会を逸せず、下沢は絵を見てもらっていた。柏亭の他に、平福百穂、近藤浩一路といった有名な先生方も影を見せた。つまり、下沢は少年の日から、多少は画壇通になっていたのである。徴兵検査で弘前へ引揚げるとき、東京在留五年を記念して、日本水彩画会と光風会に撒入して、いずれも、初入選していた。この夏の北海道の写生旅行の前にも、日本水彩画会、光風会に二度目、新たに中央美術展にも撒入、そのいずれも入選していた。つまり入選の壺を心得てしまっていたといってよかった。彼はモチーフを探して築地から月島、本所深川にかけて彷徨した。明治のハイカラな風俗版画家・小林清親風な風景を探して回ったのだ。「柳橋夕陽」「元柳橋両国遠景」「佃島雨晴」「本所御蔵橋

るごと落ち葉浴び立つ
落ち葉あび川べに立てばさらさらに水にう
　つれる影形なき
水に浮きながれ去りゆくもみぢ葉の見送る
　となくあやに美し

「万代橋朝日出」のような東京風景を物色をした。洲崎の遊廓近くの堀割にきて、彼はここだ！　と腰をすえた。四五日通ってその堀割をテンペラで仕上げ、それを出品作にした。

結局、志功は青森での旧作「合浦池畔」、下沢は東京での新作「洲崎堀割」を撒入した。発表は夜だった。出品者たちは、こちらの木蔭、あちらの樹蔭にうずくまっているらしかった。その証拠に、闇の中に煙草の火が、まるで螢火のように無数に明滅していた。審査室の煌々とした電燈の光が、時に影で裁断されたり、或いは明暗に大きく揺れた。鑑別のすんだ作品を、入落の別に仕分けているのだ。つど、出品者の心も、明暗に揺れ、やがて光がさいぜんの均一さに戻ると、ほッ……とした吐息になった。志功も石のように、固く、小さくうずくまっていた。息がつまるようなこの雰囲気で、彼は幻覚に悩まされていた。撒入作の池畔に遊ぶ緋鯉、白鯉が、手作りの額縁の継ぎ目からスルスルと抜けだすと、広

わが上にもみぢ降りくるわが肩にもみぢか
　すかに音立てにけり
秋の日の溜息聞ゆ啜り泣く洋琴聞ゆいのち
　かなしも

小路のネオンと一緒になるために、勝手に遊弋するからだ。「これッ！　すずまれ。先生様に叱られるぞ！」。そう、つぶやくと、掌を振って、鯉たちを額縁の中に追いもどさねばならなかった。油断をすると再たチョロチョロした。「すずまれ！　といったら、すずまれ！」。彼が掌でしきりに追っていたのは、幻覚の鯉などでなかった。実は、脛を狙ってしつこく襲ってくる哀蚊だったのである。

この時、「入選を発表しますッ！」という声がかゝって、掲示板に巻紙が張出された。すると、何処にこんなに潜んでいたかと思われるほどの大勢の人が、ぞろぞろと集まってきた。うずくまっていた志功も思わず立ち上った。○○さん。○○○さん。光栄な入選者の姓名が間をおいて呼び上げられた。その声は寛永寺の鐘のように、上野の杜をとどろき渡るように思われた。マ行が呼ばれるたびに、その発音は志功の心臓をゆさぶり、鐘の余韻のように消えた。マ行のムはなかなか呼ばれなかった。が、やがてサ行のシが呼び上げられた。シ・モ・ザ・ワ・キ・ハ・チ・ロ・ウ・サ・ン。下沢だ。やったのだ。初入選の栄光をせしめたのだ。呼び上げの最後を飾る初入選者は数少かった。二百余名の入選者の発表はつつがなく終ったのだ。志功は雷撃をうけた立樹のように、裂け焦げたまま、しばらく闇の中に佇んでいた。貴船神社のタカオナミノミコトは下沢にだけ加勢したのだ。上根岸のローマのヴィーナスの助力を求めたことに怒ったのかもしれない。ともあれ、無念残念な落選の心境を、志功は次のように伝えている。

「ついに『棟方志功』の名を聞くことはできませんでした。気が抜けてしまったようになって、わたくしは馴れない上野の森の中から不忍池を横ぎって、切通し坂、湯島天神の下を、車通りから本郷三丁目を進んで、真砂町を弓町の下宿している渡辺家に入るのでした。うつろになった心は、それから何日たっても元になれないほど口惜しかったものでした。『今に見ろ——今に見ろ——』ただ一人でそうわめくばかりでした。」（「板板道」）

スマトラ記 (去)

田中克己

この日わたしはもう一ケ所、ブト、ブサ村でもメナンカバウ語を拾ってゐる。提供者にラジャ（梵語の王）・ダト・ダンティコといふ男で、チコラド君とちょっと違ってわたしは身体呼称ではなく太陽（マト・アリ）、月（ブラン）、星（ビンタン）、雲（アワン）、椰子の実（カランビク）といふ風な語を拾った。たぶんマレー話でいって「ここのことばは？」といふ風に採集したのだと思ふ。メナンカバウ語が通用マレー語のもとになってゐるといふのが証拠立てられたやうで、別に珍しいことばもなかった。この日と翌日と、映画班は名古屋師団の演習を撮す。この師団は涼しいブキティンギ高原で、日本と同じ食糧で日本と同じ訓練を行ひ、次の戦闘に備へてゐるので、その有様を内地に見てもらいたいといふので、稲垣君らも大変苦心したやうだが、後で試写を見ると一向にとれてゐなかった。それにしても名古屋師団はスマトラからどこへ移ったのだらうか。わたしには調べもつかないが、この師団の移転したあと、ブキティンギの辺りには大阪師団が来て、その将校としてここにゐた義弟は去年の十二月に亡くなったが、一度もスマトラを語りあふことはなかった。

翌八月十一日、わたしは四八才になる小学校長からメナンカバウの民俗や歴史を聞いた。モハムマド・マクススといふ通訳がゐて、わかり易い語で話してくれるといふことだったが、英語だったかと思ふ。スマトラの原住はバタク族で、メナンカバウはベトナム方面からあとで渡って来た。（メナンカバウといふ語の意義は三つある。）三人の兄弟から起り、一人はトルコへゆき、一人は中国、日本へゆき、末子がミナンカバウの祖となった云々。

わたしはくはしくノートしながら、あるところでは信用しないでゐたから、今もこれを再説するにたへない。

次はミナンカバウの女系相続のことで、これは興味があったが、これまた果樹園の読者の方には説く必要もあるまい。

八月十四日には高原を下りて、インド洋にのぞむパダン市の西海岸州の州庁にゆき、司政長官矢野兼三閣下に会った。元富山県知事で高校の友昌彦君の兄である。わたしがそのことを申し上げると閣下は喜んでインダルンのセメント工場が復興してゐるからとって欲しいと云はれた。稲垣君にそのことを云ふと「撮影する」といって閣下について出てゆく。工場の事務室にわたしは残って借りた書類を写し、それがすむと長官に倣って句を作った。長官は蓬矢と号し虚子門下なのである。撮影がすんだあと昼食をいたゞいたが、閣下はわたしに

「田中君、ここにのこって教育部長にならないか。妻子も今に呼べるよ」

と仰しゃった。わたしはきっぱりお断りした。理由ははっきりしないが、異民族の土地で軍政下の居住は苦労が多くて、妻子にそれを味ははすなどは、といふのだったと思ふ。もとよりアメリカ潜水艦の跳梁する海路はるばる妻子が来ることもまじめには考へられなかったし、わたしはうすうす日本の敗戦を予感してゐたやうに思ふ。予感しなかったのは矢野長官が戦後、市民抑留所での責任を問はれてスマトラのメダンで獄中生活を送り、幸ひに長官は日本へ帰されたが、同獄の東海岸州の長官以下何十名かは死刑となった。これらのことは長官の「獄中記」（潮文社）にくはしい。わたしは物にふれ激するたちである。教育部長などの人柄ではない。長官の言葉を聞いてゐたら、たぶん帰れなかったのではないかと思ふ。ただしこの時の応酬は一分間で、長官の苦笑で終ったのである。わたしはホッとした。

翌日もわたしはパダンにゐて、日本人の奥さんを持つウスマン氏の家にゆき、ミナンカバウ語を採集した。

翌八月十七日にはウンビリン炭坑を撮しに行って途中ソロクといふところで、華人の店協昌盛といふのに寄った。この店の主人の妻は熊本の人で、在留三十年、日本語を殆ど忘れたお婆さんであった。この夜ブキティンギのホテルに帰ると、「田中徴員に」といふ電話があった。聞けば近衛師団司令部の参謀部将校本荘健男少尉の声で「命令を達します。宮兵団附軍属田中克己は至急メダンに帰還すべし。」といふので、電話はたちまち切れてしまった。稲垣君たちに相談したがどうしようもない。尤も稲垣君たちの撮影には一向用のないわたしである。パレンバンまで行って仲好しの北町一郎、田代継男などに逢はうとのわたしの希望は消えてしまった。あとはメダンへ帰還の方法である。軍に便があるかどうかあす聞いてみよう。わたしはひとまづ眠ることにした。その晩また電話があって毎日新聞の篠原、桐山二氏が迎へにゆくとのことであった。これでわたしの心配はなくなり、わたしは安眠した（篠原、桐山二氏は早く別れたと書いたが八月二十日すぎまではまだメダンにゐたのである。訂正しておく）。

夕顔

吉本青司

クラスメイトから　わたしマドンナと呼ば
　れているの
とむすめがいった
白く夕顔の匂うゆうべ
父は
むすめのもうひとつの顔を想いうかべてい
　た
　泉のそばで

わが身のうちに　ふかい泉のあるのに気づくのは　もう旅路も終わりに近づくころのことである　山の神さまの森かげに湧く泉のように　どこからともなく　まるで何かの鼓動のように　絶え間なく湧き出てきては　こころをぬらす　きらきらと　水晶のように　夏草をはじきながら　湖をつくり
　流れをつくる　冬にはあれほど暖かいはずの水が　天然の冷蔵庫から出てきたもののように　いのちのきびしさに気づかせる
　そして　いつも涸れてばかりいた青春が
　すぐその傍にやってきて　少しとまどっているのさえ　手にとるように見えるのだ

伊東静雄先生の密葬の日

竹内徹

○伊東先生逝去の知らせ

昭和二十八年三月十三日午後三時ごろ、高校入試（三月十七日）をあと数日に控えていた。当日、阿倍野高校の全職員が会議室で、入試の関係書類の整理、諸用紙の準備等、あわただしくしていた。ばたばたとあわただしくスリッパの音をたてながら矢野給仕が会議室に入ってきた。「伊東先生がなくなられた。」と息をせききって先生の逝去の知らせがもたらされた。一瞬、全職員は仕事の手をやすめ、「やっぱりだめだったか。」とあちこちからつぶやく声がきかれた。

実は、国語担当の教員（松隈、渡辺、和食杉野の各先生）とわたしは、三日前（三月十日）に久しぶりに、伊東先生をお見舞したばかりであった。そのおり、すでに先生は、自分の死を予感しておられるようだった。先生は錆びついた古びた寝台に、薄板のように、やせ細った体をよこたえていた。が、頭だけはいつものように大きく、髪ものび放題で、オールバックにかきあげておられた。ただ眼光は異様に、深い渕のふかみどりのように、じっとわたしたちをみつめておられた。そのころ、各新聞紙上に、連日、肺結核は不治の病でないこと、アメリカでバスよりも強力なストレプトマイシンの新薬が発明せられ、臨床上よりも大成功をおさめたこと、遠からず日本にも輸入せられること等の記事が大きく報道せられていた。

ところが、一か月ほど前から先生の病状は悪化の一路をたどり、花子夫人も学校を休みがちで看護にあたられていた。わたしたちの見舞に、先生は、例の九州訛りをまじえ、うけ答えせられてはいた。しかし、さすがに声は低く、とだえがちで、消え入るような声であった。先生は、われわれをじっとみつめつつ「もうひと月おそく病にとりつかれておれば、自分も助かったのに。」とうらめしげに訴えられた。その声は、十八年もたったただ今も、わたしの耳底にこびりついて消え去らない。そばにおられた花子夫人は、幼い児にさとすように、そんな弱気をはかず、頑張るようにくり返えされた。そしてしばしばハンカチで目をぬぐわれた。三日前にお見舞のおりのことが想い出され、しばらくは仕事も手につかずにいた。

○病院へ急ぐ

伊東先生の訃報をうけ、先ず学校を代表し、前述の国語の先生方とわたしが病院へ直行した。三月十日のお見舞のおり、遠からず今日の悲報をうけるだろうとは覚悟はしていたが、こんなにはやく到来するとは思わなかった。あべのより近鉄南大阪線にのり、汐の宮駅下車、起伏のはげしい田舎道を黙々と歩きつづけ、約二十数分で長野分院に着いた。

あたふたと、病院の玄関を通りぬけた。でこぼこの多い、長い長い煉瓦づくりの廊下道を進んだ。北館の先生の病室にたどりついた。この病院は、もとの大阪幼年学校であった。敗戦後国立病院に急に改造したもので、病院とは名ばかりで、わたくしたち素人でも施設、設備の完備していないのがわかるのであった。先生のおられたのは大部屋で、うす茶色によごれた白カーテンで間仕切られていた。三日前にお見舞にきたときと、全くそのままのすがたで眠るように横たわっておられた。ただちがうのは顔面に白い布でおおわれているだけであった。真白の布がわたくしたちの眼に痛いほどつきささるようにうつった。それは現実に先生が逝去されたことを物語っていた。伊東先生が亡くなられた実感がひしひしとせまってくるのであった。

○遺体を霊安室へ

午後四時には、看護婦が遺体を消毒にこられた。三日前には先生は薄板のように見えたが、亡くなられた今日は、さらにかさ低くなりはて、ベニア板のようにやせ切っておられた。ところが、頭、顔面は昔のままで、生けるように瞑想しておられた。看護婦は、きわめて事務的に、手ぎわよく遺体を消毒せられた。わたくしたち国語の五人は、茫然として立ちすくんで見守っていた。花子夫人が、先生の平素から愛用しておられた茶がすりの、渋味な着物を着せられた。胸に組まれた手はいたずらに大きく、骨太く、黒い念珠をもち永遠の眠りにつかれていた。実にやすらかな寝すがたであった。先生の傑作といわれる「噴野の歌」を象徴する壮厳なすがたであった。

いよいよ午後六時に霊安室で密葬がとりおこなわれることになった。わたしは看護婦の詰所に行き、電話で学校長、教頭に本日の密葬に出席されるよう連絡した。わたくしたち五人は、午後五時半には、北側の病室より病院の南端にある霊安室へ先生の遺体を運ぶことになった。病人用の手押車に先生の遺体をうつした。軽々とうつされた。花子夫人が先頭にたたれた。わたしは手押車の後の押し手にまわった。他の四人の先生方はおふたりずつ左右両側に付添れた。しばしば先生の詩に出てくる愛嬢まきさんは眼をまっ赤に泣きはらしつゝ、ついてこられた。愛息夏樹くんは、まだ小学生で、涙ひとつみせずに、よちよちしながら先生の遺体につきそはれた。病院の廊下は、煉瓦のすりへったでこぼこ廊下で手押車が大揺れに揺れ、両脇につきそい、おさえておらないと、遺体がすべりおちそうになった。遺体をのせた手押車は、約七、八分もかかって霊安室へついた。

螢

高梨一男

白粉ばな錯綜する裏の堤のくらがり
睦み合い縺れ合い共に落ちゆく恋い螢
思い乱れて空高く飛ぶ独りぼっち
月のこまかいかけらみたいに
つべたく燿う青い炎たち

合歓

合歓の木は孤独を好む
——夏の鶯鳴く雑木の丘に
ひともと
——岨径をへだてて
へら跳ねる狭間池の畔に
ひともと

ようよう夢から醒めた
ネムの花と
ネムの花と
おそい朝の挨拶を交している
互いに羞みほほえんで

○ささやかな密葬

簡素にしつらえた祭壇に遺体が安置せられた。密葬の時刻までまだ二、三十分もあった。すでにたそがれどきであった。深閑とした霊安室は、三月はじめで、さむざむとした部屋であった。午後六時ごろには、伊東静雄先生の奉職先の阿倍野高校の関係者数人、花子夫人の奉職先の登美丘高校の関係者十余名、昨夜、夜汽車で長崎よりかけつけたご親戚の方十名ばかり、総勢三十名たらずであった。病院の近くの寺より呼ばれた若い僧の読経、焼香と、約四十分ぐらいで密葬がおわった。二十年に近い先生の大阪生活でのお葬式としては、実にわびしい密葬であった。

○帰路につく

午後七時には密葬の儀もとどこおりなくおわった。わたくしたち五人は、遺族の方々にあいさつし、汐の宮駅へむかった。あたりはすっかり夜のとばりがおりてしまっていた。五人はそれぞれの思いにふけり、だれひとりものもいわず、とぼとぼと歩きつづけた。春とはいえ、まだ肌さむく、先生の四十七年の生涯をとじるにふさわしい清楚な夜であった。

をらびうた（十一）

蓮田善明

船内日直将校に服ム、病状軽きも、却つて気分の爽さを欠ぐがくるし、埠頭迄の行軍、乗船時の混雑、最初の日直の多忙に、痩セ、咳など出づ、夜例により睡気到らず、一時より巡察などしてかへってその苦しさをまぎらしにもなる。暁少しねむる、

十七日、舌焼け、胃苦しく、度々口中に湯水をふくみて癒す、職務のほか何も為さず、三時交代の所輸送指揮官の巡視に随行、且つその後砲煙状況の調査報告のため約二時間後交代す、

夜は船尾に寝ることゝする、薄暮敵潜艦の雷撃、我船の砲撃等緊張して気分よし、闇中に□よりパイナップルを分けられ、実にうまし、夜非常装具のまゝ窮屈なる寝方なりしも、数日来の睡眠をとりてうれし。

十八日、くだものもらひたれど、食慾少し、腰いたし、射撃部隊を指揮す、又ねむる、但しねむってはゐない、半睡なり、しかし睡後気分はよく、昼食はとる、辛きカレーなり、のみたかりしブランデーもうなし、

もはや赤道を越えたる海の色は反射つよく、青といふより銀盤に似る、遮光眼鏡を用ゐざれば、立哨者の目を痛むるか、立哨時間を三十分とす、スコールの大雲右舷水平線を蔽ひ鬱然たり、

夜、パレンバン河口に碇泊、二度雨に会ひ、船室に帰りて寝る、

十九日　曇天の下を遡江す、両岸のジャングル間を濁水をのぼる、四時パレンバンにつく。

386岸にせまり水に繁み立つ森の間をいや河のぼる船のあかなく

387時じくに繁み立つ森に鳴く鳥の声はとよもす河の面までに

388いくたびを時雨わたれる河の上の船にぬれつつ見る常世島

○

389あたぶねがかづき寄りきて放つたま暮れゆく海に水尾をしるして

390あたのたまそるゝぞおそしわがたまのうたきいかりてはやしぶきたり

391たゝかへる船にわがありあたぶねのあとき

定本
阪本越郎全詩集
編纂・丸山薫、村野四郎・装画　藤田嗣治
弥生書房
¥6800

詩集
晩年叙情
野長瀬正夫
残夢詩篇・老残詩篇・童貧庵詩篇・落葉雑筆
金の星社
¥1500

鴛鴦行
林富士馬
伊東静雄の「思い出」、三島由紀夫回想「死首の咲顔」他
皆美社
¥2500

愛と光のなかに
寺島キヨコ詩集
百余篇の純粋可憐な女の詩
弥生書房
¥580

えゆけるたそがれの海

○

二十日　パレンバン下航、東に向ひ夜海上に碇泊

392あたをうつたまのひゞきは耳にのこりしづけき海に闇ふかみゆく

393あたぶねのかづきにげたる後がたりくれたる海を見かへりにつつ

394河ぞひの茂木の一枝ゆするゝと指すに猿ゐて枝うつりする

二十一日　雲ふかく又雨なり、午前三時頃なりけん用便に起きいでしに、霧ふかく海上をこめ、舷側の下に、夜光虫のみ光りたるが見え、星かげのうつれるかとうたがはれしが、空は一星のかげもなし、潮ながれゐることをその虫の光のながるゝによりてしられぬ、

船中の臭気くるし、

395霧重くこめたる船のふなべりに夜光る虫に潮にながれつ

○

396河下る船につききし群鳥もとほくはなれて海ばらを行く

○

397星そこにおちくだけぬとおもほえて潮にながるゝ虫のかげかな

○

398船のぼる河の岸べはみだれ立つ繁木の海のきはまりもなく

（注）「むら立ちの」を訂正するつもりらしく、その左側に「みだれ立つ」を記入してゐるが、もとの「むら立ちの」は消さないである。

○

399船泊てし沖べの潮は疾からし浪にながるゝ虫の光りに

○

400大いなる疾雨雲のはしりくる背方は朝の真日きらめきつ

○

401大海をめぐりて走るむら雲の大いなるかもわがこころおこる

○

402見はるかすこの樹の海をわたりきてはなとふりこしつはものあはれ

403樹の海を天かけりつつあたの上にはやふり立ちてむけしつはもの

○

404雲をこえ潮路見さけてそのいくさ樹の海の上ゆうちくだりたり

○

405ふるさとゆもたりし杯は小さくてこの大海はくむにあたはぬ

○

406海峡をこゆる燕はなきはしよこぎりて去く船の上たかく

○

407空はくもり海はにごれるこのわだをはらはざらめやきよめざらめや

○

こたびのいくさのともの多くははじめていくさ立ちせる若き将校と下士官兵たちなり、このわかき将校三人いくさがたりはなけれど、のぞみみちたるその面、日々のつとめまことにさやけくたのもしたまく文学をしり、うたつくりなどし

復刻版（限定二百部）
文芸文化
蓮田善明、清水文雄、栗山理一、池田勉が精魂をこめて編集した古典研究。その軌跡ははからずも善明の散華と由紀夫の自裁とを結んだ。
東京都新宿区三栄町二九
雄松堂書店
¥ 70000

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥500

新潮社

甲板に枕をならぶる夜など、おもひ〳〵
にそのこのめるところなど語りたのしめ
るをきくにその議論に何はなけれど、そ
はいくさがたりにも似て

408 みつみつし久米のたけをがいくさごといま
だかたらずうたごとをかたる

二十二日　次第に晴れ、十時ジャカルタ港
につく、髪刈りなどす、白髪ふえたる
如し

○

此の島にて佐藤春夫氏と会はんとてか
ねてつくれる

409 みんなみのとこよのしまにうたびとと杯に
うかべんことひのほしは

二十三日　遂に上陸できず、出港す、午後
四時半、本日は日直将校上番なり、
海青深くかゞやく、船橋にて、伊東静
雄氏のバタビヤ、スラバヤ沖海戦の詩
を思ひ出でゝ

410 この海のいくさたゝへしうたびとの君を見
がほし相かたるべく

編集後記

七月二日。拙著が縁となって多くの未知の方々から手紙を頂戴し、三人の方が発行所に来訪された。その中の一人である竹内徹氏から、この日、本号に掲載した「伊東静雄先生の密葬の日」をお送りいただいた。静雄のこの日を客観的に書ける人は極く限られているので、貴重な文献である。そういえば遅れ遅れになっている思潮社の「伊東静雄研究」の校正がやっと出た模様である。諸家の伊東に関するエッセイや随想などの全集と呼ぶべき企画らしいが、真実の資料はまだこれから幾つでも出てくるのである。先号でおしらせしたが、静雄の小学同期生十人の座談会などそれである。又、現在人文書院で「定本伊東静雄全集」の校正も進行中である。この秋はちょっとした静雄ブームの観を呈しそうである。

十二日。坂本越郎未亡人美登里さんから豪華な「定本坂本越郎全詩集」を頂戴した。挨拶状によると、六月十日が三回忌であった由で、つい一昨年あたりに亡くなった、と思っていたので吃驚した。と、いうのは、歳月が早く経つということでなく、この頃とみにおぼつかなくなった私の記憶力と視力に対してである。しかし、坂本氏に初めてお目にかかった日に拙誌に連載中であった平井俊夫氏のトラークルの訳詩に関してお話をしたことだけはしかと記憶している。坂本氏も昔訳したことがあるといわれたからだ。その訳を載せている「魂の夜明け」（独逸抒情詩選）も収録されていて、私にはなによりの回向となった。（O）

果樹園 第一八七号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年九月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町五の八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社（電話池田六一・八三一七）
定価六〇円

果樹園　一八七号　昭和四十六年九月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価六〇円

果樹園　一八八号　昭和四十六年十月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価六〇円

果樹園

第188号

画仙・棟方志功(八)　小高根二郎
少年　吉本青司
陣中詩集(六)　蓮田善明
スマトラ記(六)　田中克己
蠅　高梨一男
をらびうた(三)　蓮田善明
編集後記

画仙・棟方志功(八)

小高根二郎

七、拾う神と風の招き

1　島家の援助と自活

捨てる神あれば拾う神あり。よくしたもので、志功は水の神タカオナミノミコトに見捨てられたけれど、思いがけず大黒さんに拾われることになった。というのは、落選作「合浦池畔」が、ちょくちょく渡辺に現れる薬屋の島丈夫に、引取られることになったからである。

島はもともと新潟の出身で、志を立てて郷関を出ると橋本内科の書生に入った。書生をしながら独学で薬剤師の免許をとって薬局に勤めたが、勤続十年で独立、本郷四丁目に薬屋を開業したのである。彼は隣県富山の万金丹のヒソミにならって、手をこまぬいて客を待ってはいずに、自転車に薬箱を積むと、積極的に客をもとめて走り廻った。従って、小柄な身体の、顔も、手足も、陽に焦げて真ッ黒だった。薬剤師とお抱え車夫……。橋本内科時代の馴染みで、島は独立後もちょくちょく渡辺に顔を覗かせた。ケチが身上の婆さんも、島の真ッ黒な顔を見るなり、「それ、大黒さんがござった」とほそく笑んで、彼女としては例外の番茶のふるまいを忘れなかった。と、いうのも、島の来訪のつど、やれ風邪の新薬、これは爺さんの疝気の特効薬…と、番茶の値打以上の貰い物が必ずあるからだ。

その日も島はでがらしの番茶を啜っていて、おや！　と鴨居を見上げた。凡そ貧寒な渡辺家には不似合な、豪華な油彩画がかけられていたからだ。三十号の「合浦池畔」である。折から風邪気味で休業していた勝兵衛は、今は写生に出ていて留守だが、近頃青森出の面白い画家が下宿していると紹介した。そして島が感じ入ってる絵は、なんでも帝展とやらを滑った、残念作である由も付け加えた。

島が「合浦池畔」に見入っていたのは、タブローそのものの美ではなかった。藤棚あり、池あり、鯉群あり……といった風景が、何処かで見覚えがあるように思えたからだ。そうだ、それは家内ヤイの実家——新潟県加茂の田下家の妻ツヤさんの実家——新潟県亀田は長谷川家の裏庭にそっくりではないか……。三年前故郷で結婚式を挙げた後、挨拶廻りで立ち寄った長谷川家の、その池畔にヤイと二人で佇んで、木石の典雅なたたずまい、池水の幽すいさに、思わず「いいねえ」「イイワネ」と顔を見合わせたことを思い出したのだ。新婚といっても、新潟から東京までの汽車の旅が、記念旅行であった質朴な夫婦生活のスタートに、その池畔の情緒は、兼六公園や天の橋立に匹敵する感銘であったか

らだ。この絵をヤイに見せてやりたい。いや、そこそこの対価であるなら、二人の記念のため買っておいてもいい。そう、思い立った島は、志功が帰ってきたら、ひとつ相談をしておいてもらいたい……と勝兵衛に頼んで、帰っていった。

年の暮を目の前にして、この大黒さんの出現に志功は狂喜した。青森から見れば東京は暖国に相違ないが、一カ月三円也の小遣では、いかにも懐中が凍えあがった。新井薬師や井上哲学堂ぐらいの行程二里の郊外の写生なら、勝兵衛から教わったとおりの道順を、親から貰った二本の脚で往き還りすればこと足りた。志功は山男のように画材料を背にかつぐと、暗いうちに家を出、暗くなってから戻ってきた。昔の文人墨客もみんなそうではなかったのか？　そうだ郷土の大先輩――俳人・歌人・作家・国学者・画家であったシラノ・ド・ベルジュラックもどきの天才、あの建部綾足だって、家老職であった弘前の生家を出奔するときには、二本の足を使ったんだ。足の疲れや、胃袋の飢えには、どんなに堪えたっていい。しかし、魂だけは疲れさせてはならぬ。画魂だけは飢えさせてはいけない。そのためには、どんなに窮乏しても、絵具にこと缺くことがあってはならない。写生から戻ってきた志功は、勝兵衛から昔の同僚が「合浦池畔」を所望している由を聞くと、絵具代を稼ぐために、さっそく三十号をひっかつぐと、四丁目三番地に島家を訪れた。かみさんのヤイは大丸髷に赤い鹿の子のテガラをかけた格好で、夕餉の支度におわらわだった。手は気ぜわしく大根を刻み、眼は七厘の餅が焦げないかと監視していた。新潟加茂の実家から正月用の餅が届いたので、前祝いに雑煮を準備しているのだ。主人の丈夫は、この日の売上げをしめくくると、明日の商いの準備を箱詰めにしているところであった。志功が、ごめんなさい……と陽焼けのした顔を覗かすと、これまた真っ黒な島は、「まァ、おあがり」と招き入れた。黒い顔なら信用しても間違いないからだ。まさに大黒（おおぐろ）さんと大黒さんの鉢合せだった。志功は夫婦とも忙しい最中なのを確認すると、絵だけを置いて帰ろうとした。と。島は、「まア米所、加茂の餅でも食べておいき……」と勧誘した。客の気をそらさぬ外商のコツを、地でいっているのだ。いや、そうではなかった。実は、島の父親は、若い時から外商で出稼いだ人だった。そして最後は、何処で、どう、果てたやらも分らなかった。その父の最後を調べることは、彼の生涯の念願でもあった。父は何処で誰と袖をすり交わしていたかもしれない。そんな意味合からか、故郷を離れて出稼いでいるほどの者には、島は格別な親愛を感じて惜まなかった。箱詰した薬袋の数をあたりながら、「まァ、お上り」と重ねて誘った。そこに「さァ、出来ましたョ」と、湯気の立った鉄鍋をヤイは座敷に運んできた。上りカマチに、つっ立ったままだった志功の口腔に、唾が湧いて出た。幸吉の酒の肴だった蜜をかけたシンコ餅。使の道すがら盗み食いして、歯と歯の間でネチネチとねばったあの味覚を思い出したからだ。志功はノコノコと座敷に上って了っていた。そして食卓を囲んでから、島夫婦と初対面の挨拶を交したのだった。夫と志功の椀に雑煮を盛りつけたヤイは壁に立てかけてあった「合浦池畔」を見て、「まァ、長谷川の裏庭にそっくり……」と共感の聲をあげた。全く夫と同じ感銘だったのである。従って、夕餉が終った時、このタブローを買うために、今日一日の売上げの一部を当てることに、彼女はいさゝかの異存も感じなかった。

しょっぱなから身内のように打ち解けたこの出会い以来、なにかといえば島家へ、志功の足を向けさせたのは当然だった。伯母よねから塩鮭を一本送ってきて、それで総菜がまか

なえるので、自炊を思い立った志功が、近所の疊屋に間借りをする時、僚友勝兵衛へのおもわくなぞおかまいなしに、快く島は保証人になってくれた。その上、足りなくなったら、いつでも遠慮なく取りにおいで……と、米櫃から宝石のような新潟米を、幾枡か、ヤイにすくわせて志功にもっていかせた。

又、つい隣町は真砂町の版屋の飾窓に、志功がなんとしても手に入れたい、印材の蠟石があった。守護神ローマの臥女神の肌ざわりをしのばせたのかもしれない。（それに似た蠟石を、偶然のことながら、西城館の葛西善蔵も、いつ手をつけるかもしれない原稿の文鎮にしていた）。暇さえあれば志功はその飾窓の前に立ち、子供のように肩を左右にゆさぶっていた。ぬめり……と指に吸いつくような蠟石の感触を、硝子板越しに楽しんで飽きなかったのだ。主人が顔を覗かすと、志功はいくらかと尋ねた。なんど聞いても、値段は上りも下りもしなかった。そのうち志功は月賦にしてくれまいか？　と交渉を始めた。逃げも隠れもしない。きっと完済するという口約だった。主人もつい、彼の執心に根負けがして、しようがねえなァ、じゃァ誰か保証人を立ててくれよ……ということになって、外商帰りの島は、版屋の前で捕まると、自転車を降りて、この月賦契約書に、右親指で押印させられたこともあった。その他、大きな絵を描かねばならぬ時の絵具やキャンバス代、親譲りの足ではどうともテコに合わぬ遠出の電車賃や汽車賃を支援してもらうことも再三でなかった。丁度、弁護士控所給仕時代のパトロン・歯科医野間忠一に代って、東京での苦闘時代の後援役を引受けてくれる運命となったのである。

そういえば青森の野間家では、志功が上京してから間もなく、忠一が出奔するという事件が起っていた。

少　年

K氏の生家を訪う

吉本青司

級長になったと泣いたという
そんな話がすばらしい

蟬

あなたのお母さんは
すこしお耳が遠かったが
どこのお母さんにもみられる
やさしさときびしさで
じっと坐っておいでだった
その端正なおすがたが
何ともいえずうれしかった
日がさ
その方は
別れみちまで送ってくだすった
白い日がさをさして
ひとなつかしいごようすで
夏草に足をうずめて
見送ってくだすった

白い雲

少女たちと海辺のみちを歩くことは
まるで少年の日のようである
ながい松原みちはところどころぬかるみ
よけて通るのがたいへんだった
いつのまにか道づれになった犬が
あとになりさきになり
どこまでもいっしょにやってきた

らだ。この絵をヤイに見せてやりたい。いや、そこそこの対価であるなら、二人の記念のため買っておいてもいい。そう、思い立った島は、志功が帰ってきたら、ひとつ相談をしておいてもらいたい……と勝兵衛に頼んで、帰っていった。

年の暮を目の前にして、この大黒さんの出現に志功は狂喜した。青森から見れば東京は暖国に相違ないが、一ヵ月三円也の小遣では、いかにも懐中が凍えあがった。新井薬師や井上哲学堂ぐらいの行程二里の郊外の写生なら、勝兵衛から教わったとおりの道順を、親から貰った二本の脚で往き還りすればこと足りた。志功は山男のように画材料を背にかつぐと、暗いうちに家を出、暗くなってから戻ってきた。昔の文人墨客もみんなそうではなかったのか？　そうだ郷土の大先輩――俳人・歌人・作家・国学者・画家であったシラノ・ド・ベルジュラックもどきの天才、あの建部綾足だって、家老職であった弘前の生家を出奔するときには、二本の足を使ったんだ。足の疲れや、胃袋の飢えには、どんなに堪えたっていい。しかし、魂だけは疲れさせてはならぬ。画魂だけは飢えさせてはいけない。そのためには、どんなに窮乏しても、絵具にこと欠くことがあってはならない。写生から戻ってきた志功は、勝兵衛から昔の同僚が「合浦池畔」を所望している由を聞くと、絵具代を稼ぐために、さっそく三十号をひっかつぐと、四丁目三番地に島家を訪れた。かみさんのヤイは大丸髷に赤い鹿の子のチガラをかけた格好で、夕餉の支度におおわらわだった。手は気ぜわしく大根を刻み、眼は七厘の餅が焦げないかと監視していた。新潟加茂の実家から正月用の餅が届いたので、前祝いに雑煮を準備しているのだ。主人の丈夫は、この日の売上げをしめくくると、明日の商いの準備を箱詰めにしているところであった。志功が、ごめんなさい……と陽焼けのした顔を覗かすと、これまた真っ黒な島は、「まァ、おあがり」と招き入れた。黒い顔なら信用しても間違いないからだ。まさに大黒（おおぐろ）さんと大黒さんの鉢合せだった。志功は夫婦とも忙しい最中なのを確認すると、絵だけを置いて帰ろうとした。と。島は、「まァ米所、加茂の餅でも食べておいき……」と勧誘した。客の気をそらさぬ外商のコツを、地でいっているのだ。いや、そうではなかった。実は、島の父親は、若い時から外商で出稼いだ人だった。そして最後は、何処で、どう、果てたやらも分らなかった。その父の最後を調べることは、彼の生涯の念願でもあった。父は何処で誰と袖をすり交わしていたかもしれない。そんな意味合からか、故郷を離れて出稼いでいるほどの者には、島は格別な親愛を感じて惜まなかった。箱詰した薬袋の数をあたりながら、「まァ、お上り」と重ねて誘った。そこに「さァ、出来ましたョ」と、湯気の立った鉄鍋をヤイは座敷に運んできた。上りカマチに、つっ立ったままだった志功の口腔に、唾が湧いて出た。幸吉の酒の肴だった蜜をかけたシンコ餅。使の道すがら盗み食いして、歯と歯の間でネチネチとねばったあの味覚を思い出したからだ。志功はノコノコと座敷に上って了っていた。　そして食卓を囲んでから、島夫婦と初対面の挨拶を交したのだった。夫と志功の椀に雑煮を盛りつけたヤイは壁に立てかけてあった「合浦池畔」を見て、「まァ、長谷川の裏庭にそっくり……」と共感の聲をあげた。全く夫と同じ感銘だったのである。従って、夕餉が終った時、このタブローを買うために、今日一日の売上げの一部を当てることに、彼女はいさゝかの異存も感じなかった。

しょっぱなから身内のように打ち解けたこの出会い以来、なにかといえば島家へ、志功の足を向けさせたのは当然だった。伯母よねから塩鮭を一本送ってきて、それで総菜がまか

なえるので、自炊を思い立った志功が、近所の畳屋に間借りをする時、僚友勝兵衛へのおもわくなぞおかまいなしに、快く島は保証人になってくれた。その上、足りなくなったら、いつでも遠慮なく取りにおいで……と、米櫃から宝石のような新潟米を、幾枡か、ヤイにすくわせて志功にもっていかせた。

又、つい隣町は真砂町の版屋の飾窓に、志功がなんとしても手に入れたい、印材の蠟石があった。守護神ローマの臥女神の肌ざわりをしのばせたのかもしれない。（それに似た蠟石を、偶然のことながら、西城館の葛西善蔵も、いつ手をつけるかもしれない原稿の文鎮にしていた）。喉さえあれば志功はその飾窓の前に立ち、子供のように肩を左右にゆさぶっていた。ぬめり……と指に吸いつくような蠟石の感触を、硝子板越しに楽しんで飽きなかったのだ。主人が顔を覗かすと、志功はいくらかと尋ねた。なんど聞いても、値段は上りも下りもしなかった。そのうち志功は月賦にしてくれまいか？　と交渉を始めた。逃げも隠れもしない。きっと完済するという口約だった。主人もつい、彼の執心に根負けがして、しようがねえなァ、じゃァ誰か保証人を立ててくれよ……ということになって、外商帰りの島は、版屋の前で捕まると、自転車を降りて、この月賦契約書に、右親指で押印させられたこともあった。その他、大きな絵を描かねばならぬ時の絵具やキャンバス代、親譲りの足ではどうともテコに合わぬ遠出の電車賃や汽車賃を支援してもらうことも再三でなかった。丁度、弁護士控所給仕時代のパトロン・歯科医野間忠一に代って、東京での苦闘時代の後援役を引受けてくれる運命となったのである。

そういえば青森の野間家では、志功が上京してから間もなく、忠一が出奔するという事件が起っていた。

少　年

K氏の生家を訪う

吉本青司

級長になったと泣いたという
そんな話がすばらしい

蟬

あなたのお母さんは
すこしお耳が遠かったが
どこのお母さんにもみられる
やさしさときびしさで
じっと坐っておいでだった
その端正なおすがたが
何ともいえずうれしかった

日がさ

その方は
別れみちまで送ってくだすった
白い日がさをさして
ひとなつかしいごようすで
夏草に足をうずめて
見送ってくだすった

白い雲

少女たちと海辺のみちを歩くことは
まるで少年の日のようである
ながい松原みちはところどころぬかるみ
よけて通るのがたいへんだった
いつのまにか道づれになった犬が
あとになりさきになり
どこまでもいっしょにやってきた

陣中詩集(六)

蓮田善明

ナイフ

戦地へ慰問の品送る時ナイフなど便ありといへば、さらばと己がナイフをくれし人あり。中学の頃より二十年使ひ古せしを今日まで用ひ来り、このたびの大陸の旅にも携へありしといふ。黒き木の柄のヂャックナイフ風の小刀なり。その刃は長き年月に砥ぎ減りて形わろけれど、今も鉛筆を削り紙などをきるに用立つといふ。

この古きナイフ今もよく砥かれて刃の裏表白く光りていさゝかも錆なし。この人とわが陣地に一夜を枕を並べたりし。二十年使ひ馴れしナイフは自らその人の半生の歴史品なればと固辞せるも、押して贈られければ納めつ。

少年の日より使へるナイフとて今も使へる
　をわれに呉れしひと
少年の日より砥ぎ来て刃も減りしナイフを
　今も白く砥げるひと
少年はナイフを愛しきかくのごとその後君
　は思想を愛しき
二十年使ひしナイフ惜しみなく我に呉ると
ふ明日なきわれに

父

父生きまして　字に枯れて
健なり八十八歳
石を愛して頑なり性
宵中に燭をかゝげ
枕に肘して作りたまふ
詩稿の紙に落つる灯の
光りは老の面に映え
若き男の鶴嘴とりて
大地眩しき夏の日に
面ほてりして岩を砕く
赭き面にたがふなし
父よ　我れ悲しき弱き
末の男子と生れて
夜は目ざめがち
眼冴えて
ひとり苦しき夜
おん姿うつつなく眺めありき
されど何とても父を呼ばず
唯知りぬ父の不幸の深さ
唯思ひぬ父の幸ひの高き
そを守る神の、仏の

東京で開かれた歯科学会に出席したはずであったが、その後の消息が杳として知れなかったからである。そのうち三女みち子の担任の女教師も姿を消していることが判明した。結局、二人はしめし合わせて家出をしたのだろう……ということになった。そのうち、忠一の愛用したパイプ、頭髪、金側時計、軍人だった父の遺品である勲三等の勲章などが、別府から小包で家に送り届けられた。当時は三原山心中などが流行した頃だったので、たぶん二人は阿蘇の火口にでも身を投げたのだろう……と推定された。

この情報は、野間歯科の技工の内職をしていた長兄一から次兄賢三に伝えられ、賢三から仕送りの金と共にニュースとして志功に伝った。おもえば青森出発のみぎり、忠一から貰った兵児帯は、形見分けだったわけである。この想いがけぬ悲報は、帝展落選後だっただけに、志功の身と心にこたえた。しかも、上京した志功を追うように、長女しげ子からは激励の手紙まで舞い込んでいた。一生懸命に勉強して、偉い絵描きさんになってください。さくら井屋製の便箋に、そう書いてあった。兄妹のように仲好くしていた彼女たちは今後どう浮世の荒波を凌いでいくのか？　男一匹でさえ生き難さを痛感させられていた志

父がため与へたまへる
さ夜中のしじま
なべて休ねて屋根の上に
星闌干と威あり
風の神闇き木枝に憑りて
うちつぶやき　涯しなく
疾り去りゆく
くすぼれる梁の下
小暗き燭の
芯きりて墨うちすり
かしかしと筆の穂を
嚙みやはらげし唇に
かぐろき墨汁はしも
つやつやし口臙脂の如
左手に紙のべ撫でて
あな、筆のまにま
とびきたるこゝばの魑魅
長き年詩を書きし
この老父の筆とりの力こもりて
しかも寂ぶ文字の形。
朝、父かすかに疲れ
うち眠りたまふ
日明く枕べに
ひろげしまゝの詩稿帖——
老人の朝目早きに
家びとらなやみありしに
近き年朝毎に朝餉忘れて
眠りたまふおん父
不幸なる生涯の暮れを
かく終へたまひしか、

—昭和十五・四・六—

われ父

われ父
汝ら　愛し子　三人
三人と数へ
汝らが顔を並べて
思ひつつうつつなし
遠々し外国原の
山の頂に吾あり、ここに

—四、七—

春暮陣中

うす曇る　春暮
啼き初むる　宵蛙
射ち初むる　夕の狙撃
わが誦む「洛北大寒」
涙して声立てながら

注「洛北大寒」は文芸文化第三巻第三号に載せられし吉井勇の十首の

功は、居ても立ってもおれぬような思いに、追いたてられた。

伯母よねと次兄賢三からの二十円の仕送りと、時たまの島家からの支援だけでは、とうてい勉強生活が続けられぬことを覚った志功は、明けて大正十四年、どこか住込みで勤められる先はないかと心あたりを探した。さいわい看板絵師忠太郎の知人で、青森の啓明社という石版印刷所で版下をしていた松田某を、伯母よねが紹介してきて、彼の世話で勤め先の東京教材出版社を尋ねてみた。場所は麹町の紀尾井町だった。主人の石川真琴はさっそく書生志願の志功を引見した。小さな応接間には、その広さにふさわしい小さな額が掛っていた。プルッシャン・ブルーばかりが盛り上った四号の熱海風景だった。上野山清貢の帝展出品前の旧作であるとのことだった。石川は上野山の古くからの親友だといった。上野山といえば、特選候補の筆頭ともいうべき、売出し中の画家だった。又、隣家は、築地小劇場でこれまた売出し中の女優・山本安英の生家だとのことだった。つまり、友や親戚の晴着を借りる、あの手である。石川の肩は一段と聳え、志功は西洋カツラの頭を垂れると恐懼した。そもそも弊社は、伏見宮邸、

歌。勇の近来の歌の中にもすぐれたりと見ゆ　—四・七—

蚊帳

夕食を終へると何もかもつかれいとなり
私はまだ日ざしあかるい蚊帳をくぐる
中はうす蒼いやさしい光り
私はしろい薄団に足をもたせ
しづかに見廻すこの変化

—四、十七—

ああ　私はつかれたのだ
そしてここでしづかにやすめばいい
何といふほのぼのたる透きとほる美しさ
ここに一人ゐる、と私は自分の顔をみて
子供のやうに　につと笑ふ
私はゆめみよう
ここはやすらひのところ、夕の蚊よ
何を音づるるか

—四、十七—

李王邸と同町内にある。しかも、神聖な教育の柱や礎ともいうべき資材を製造し、販売することを目的としているのであるから、ここで働く者はその聖職にふさわしい品位ある風采をしていなければいけん。そう、石川は前置きすると、採用条件として、次のように厳然と申し渡した。

「先づその長い肩までの髪の毛を明日の朝此処に来るまでに潔く、切って来なくては家には置けない。君の将来を決定する為の先づ最初の大事だ。」（「板愛染」）

断髪令であった。それは霹靂のように志功を撃って、反射的に椅子から起立していた。ゴッホ志望の看板である西洋カツラ。いや、「ドモ又」の演出で、扮装いらずと評判をとった名題の生のかぶりもの。未完の天才画家を象徴するこの長髪。いや、いや、伊達や酒落っ気でなく、マントを持たぬ身に、ありがたい防寒具の役も果してくれているんだ。これをバサリ……とやらねばならない。いかにも残念無念だ。眼底からなにやら湧いて出そうになったので、志功はすかさず

「ハイッ！」

と、叫んでいた。控所時代に習い性となった、間髪を入れぬ、あの呼吸である。「今が今、切ってきます」。そう、誓いの言葉を石川に投げつけると、教材出版社を跳びだして、もよりの理髪屋を探して踊り込んだ。眼鏡を外した裸眼にも、バリカンの進行につれ西洋カツラが次第に剝かれ、惣坊主になっていく過程がよく分った。なんだか小学時代に逆戻りしていくような情なさで、幾度か眼尻を、指で拭わねばならなかった。やがて、でき上った惣坊主をいたゞくと、志功は威勢よく教材出版社にとって戻した。石川は仕事場で出来あがった地図の原稿を検分しているところであった。彼は侵入してきた惣坊主を認めると、指先で太い赤青鉛筆をもてあそびながら、今度は惣坊主の検分にかかった。ほほう……。これはよろしい。

「これはモノになるかもしれん。良い玉は磨かれるヨ。」（「板極道」）

と、謎のようなことをいった。どう思ったのか、石川は席を立つと入口までいった。そして鴨居の帽子掛けからソフトを一つ手にとった。ツバの狭いチロリアン・ハットだった。それを持って戻ると、直立不動の惣坊主にスポリ……とかぶすと、「風よけだ。君にやろう」といった。これが正式な採用申渡しだった。志功は軽い舶来のソフトを脱ぐと、よろしくお願いします……と、改めて頭を下げた。

この時、志功は、石川に地図原稿を検分してもらってる烏口を手にした画家は、長髪のままであることに気が付いた。書生ッぽには許されないが、ベテランになると長髪も許されるらしい。ちょっぴり志功は違和感を感じた。が、この画家はどこかで見掛けたことがあったな……と思った。それは何処でだったか？　そうだ。憧憬の山上喜司画伯ではないか！湯の島風景で、志功と松木の初心を感激でゆさぶったあの人である。オカマ帽・ルバシカのダンディズムに、いつあのような画伯として大道を濶歩できるか？　と、あこがれたその人だったのである。その人は絵筆でなく烏口で、石川の注文に応じて字を書き直していた。明朝風な堅い「太平洋」を、軽蔑に傾いたイタリックに描き直していたのである。雲形定規を枕にして、メスのような烏口の切ッ先から、音楽のように絵画的な字が流れでた。まるで設計された鋳型から、機械的に抽出される確かさだった。志功は改めて山上のアルチザン的な器用さに舌を巻いた。石川も満悦したらしく、「よし！」というと、改めて志功に向って、ベテランである山上を紹介した。

2　澄生版画「初夏の風になりたや」

志功は惣坊主の初心に戻ると東京生活の再出発をした。チロリアン・ハットを寒さよけにかぶると、例のように始業前の早暁に、もよりの清水谷公園で画架を立てた。そこは紀尾井坂を登ればすぐの所で、伏見宮邸、李王邸、宮内官舎、行政裁判所などの神聖な領域の丁度カナメのような地点だった。自然、志功の遅筆も弱気や野心で荒れずに、敬虔につつしんだ。しかもその風景の中に黒いセイラー服に赤いストッキング、編上靴の野間しげ子をなつかしく佇ませた。その心がけがよかったせいか、春の先駆である白日会展に、六号のこの「清水谷静景」が入選した。展覧会場の東京府美術館はできあがったばかりだった。アテネのパルテノンよりも高く、階段を幾重にもしつらえた美の殿堂の、まさに皮切りの展覧会に陳列されたわけだった。磨きあげられた階段には、まるで紫雲が棚引いているような感じがした。それは赤十字青森支社や、青森館での賑やかな青光画社展とは別格の、敬虔に溢れた感激だった。

この記念すべき大正十四年（一九二五）の朗春には、志功はその殿堂で再び別種の感激に酔わされた。いや、感激というより、一種の目覚め、或いは覚知といった方が適切かもしれなかった。それは版画が受付けられて二回目の第五回国画会展だった。その特設された版画室で、志功は川上澄生の「初夏の風」に出会ったのだ。

その作品は経七寸五分、横一尺一寸五分の四色刷りの木版画だった。背景は淡い深海色で初夏の風が象徴的に表現されている。その風は裸身の二人の猛ましい青年のような形で、大空いっぱい放恣に暴れている。それはういういしい夏雲の息吹きであり、象徴なのだ。画面の上部——右、左隅では木の葉がそよいでいる。地上ではなよやかな草と木が、悶えるように右へ靡き、左へ流れ、或いは旋風となって巻き上っている。その結果として道を歩いてきた葡萄色の長衣を着た貴婦人は

保田與重郎歌集
木丹木母集
山かげを立ちのぼりゆくゆふ烟わ
が日の本のくらしなりけり
けふもまたかくて昔となりならむ
わが山河よしづみけるかも
¥ 1500
新潮社

画面の中央で、瞬間、たじろがねばならなかった。左右の風男がいきなり裳裾をまくろうとするからである。右風男の煽りで、彼女は右手で花のボンネットを摑み、パラソルを持った左手で思わず前を押えた。が、その隙に左の風男は、容赦なくうしろから匂わしい裳裾をまくりあげた。その情緒的な瞬間を、川上は詩にも作って、風男の左右に刻んでいる。

かぜ　と　なり　たや
はつなつ　の　かぜ　と　なり　たや
かのひと　の　まへに　はだかり
かのひと　の　うしろより　ふく
はつなつ　の　はつなつ　の
かぜ　と　なり　たや

この詩の息ときめかせたような韻律と、放恣な初夏の風の欲情と、貴婦人の誇らしげな含羞との渾然とした調和は、いきなり志功を擒にしてしまった。眼だけに訴えてきた他の陳列作品と違って、眼と心とを同時に捕えてしまったからだ。彼は眼を皿にすると、まるで画面をなめまわすようなあんばいに、タブローの隅から隅までを検分した。しっとりとした調和は、地色のある紙を使用してる配慮にあることが分った。が、なによりこの「初夏の風」を魅力的にしているのは、絵と詩の、或いは絵と字の、シンホニーであることに気がついた。川上は詩も作るらしいが、僕だって歌をやるんだ。同じ詩人同志という共感も志功の鑑賞に手伝った。啄木の〈ふるさとの山に向ひていふことなし……〉といったような、舌に乗る詩歌には、もともと志功は弱かった。彼はふところからノートを取り出すと、近くの鑑賞者たちが振返るような大声で一句、一句、朗誦しながら「初夏の風」を写しとった。写しとると、彼は歩みながらも朗誦した。〈かぜ　と　なり　たや〉〈はつなつ　の　かぜ　と　なり　たや〉。その朗誦は美の殿堂の階段を降りきり、公園をいくときにも続いた。〈かのひと　の　まへに　はだかり〉〈かのひと　の　うしろより　ふく〉

「初夏の風」　(115分×75分)　川上澄生

四季　第十号　¥480

また、いつか、どこかで　杉山平一
石神井通信　黒田三郎
ビオラ　他三篇　大木実
遠い日の冬の旅　高森文夫
鶏頭の道　伊藤桂一
壺　呼び出し　石割忠夫
夢みる　山形幹雄
冬枝　菊池正
鹿幻想　近藤芳雄
奇人の出会　小高根二郎
木曽の櫛　小野夏江
風習　吉田満
禽獣・虫魚・草木　山岸外史
羅馬哀歌　呉茂一
ドゥナツ　道連れ　竹中郁
続々　サングラスの蕪村　田中冬二
続　伊藤整年譜・書誌　その二　曽根博義

東京都千代田区内幸町一—二—二　大阪ビル
潮流社

しろより　ふく〉。広濶な場所に出ると、その声はいよいよ高くなった。〈はつなつ　の　はつなつ　の〉〈かぜ　と　なりたや〉。

この詩と、風男と、まくられた貴婦人の図柄は、いつまでたっても志功には忘られなかった。図柄を忘れたと思うと、ふと舌に乗った〈かぜ　と　なりたや〉の詩句で、ゆくりなく図柄を思い出す結果となった。この魂にいつか刻みこまれた図柄——絵と文字とのコンポジションは、やがて十一年後に、佐藤一英の譚詩「日本し美し」に結縁して、志功の出世作となるので、読者の記憶の底にとどめおかれたい。

ちなみに、文明開化の風俗を得意のモチーフとする川上澄生は、明治二十八年の横浜生まれ、志功より八歳の年長である。大正五年に青山学院高等学部を卒業してから一年間アラスカの鮭罐製造の人夫になって出稼ぎ、その後に栃木県立宇都宮中学校の英語の教師をしていた。版画の他に文芸も愛好し、平峯劉吉のペンネームで「文章世界」に投書したこともある。

*　*　*

スマトラ記 (上)

田中克己

わたしは迎へに来た毎日新聞の篠原、桐山二氏の自動車に乗ってメダンへ帰った。来る時は長くかかった道も一日半で飛ばし、途中のことも何も覚えてゐない。なぜメダン帰還を命ぜられたか二氏は語らなかったし、わたしも尋ねなかったが、近衛師団の管轄地をこれ以上遠く離れてパレンバンまで行くことが許されないのだと思ってゐた。シャンタルの町まで来た時、わたしはふと思ひついて、両氏にたのみ警察に寄ってもらった。出発の時、書き忘れたが、ここのオランダ婦人の抑留地にゆき、太っちょのおばあさんにまづ英語で「英語を話すか」と聞き、「ノー」と返事され、ついで「ドイツ語話すか」と聞き、「ナイン」と返事され、「フランス語話すか」と聞き、「ノン」とフランス語で返事され、話す気のないことがわかって、汚い小屋にとぢこめられまはりを金網で張りめぐらされてゐるのをわたしは気の毒に思ふと同時に、負けるものではないと痛感したあと、近衛師団の上陸地の撮影にゆく途中、バナナを昼食とし、人通りのない林の中の道で稲垣君とわたし

は並んで小便した。その時、刀を道傍に置いたのをふしぎに思ひ出したのである。ある筈はないと思ひながら、警察に寄り署長を呼び出して、「刀無かったか」と聞くと、すぐわたしの刀がとり出された。わたしは恥かしくて礼もそこそこ刀を摑んで警察を飛び出した。自動車の中で刀を握りしめながら、わたしは考へてゐた。皇軍の恩威はこの異民族の地に「道ニ落チタルヲ拾フナシ」まで行はれたと、いい気なものだが、わたしの気持は恥かしさから、ありがたさの方に変って行った。

宿舎に着くと、永田軍属がゐた。わたしの顔を見ると、「自動車運転の練習をして三日目に上等兵をはねた。さした怪俄でなかったが謹慎を申し渡された」といった。わたしは部下の監督不行届の為に呼び戻されたのである。わたしはすぐ師団本部へゆき、監督不行届のおわびをいひ、参謀から「今後気をつけるやう」と注意されてすんだ。永田君の謹慎の間、わたしは事務室に坐ってゐた。わたしの居ない間に永田君はロハニといふ十二、三才の少女をお茶汲みに雇ってゐた。わたしのマレー語は上達して笑談もいへる。「ロハニ、もしもだよ、ここの役所で結婚するとなら、誰と結婚するか」、「トアン、あなたです」。「わたしがだめなら」。「トアン永田」。「永田がだめなら。」「トアン小泉（台湾から来た軍属）」。それがだめなら森武二郎軍属だといふ。わたしは吃驚した。彼女は待遇順（もしくは地位の順）にちゃんと合った答へをしてゐるのである。この少女にしてただちにそれがわかるとは。わたしはこれを植民地気質かと納得した。

永田君の役割であらうが、この宣伝班支部の仕事の一つに東海岸州の出版印刷の許可のことがある。華僑の楊さんといふ老人が甥というのをつれてやって来た。要件は日本紀元のカレンダーを出したいので許可してくれ、といふのだった。「まだ八月だぜ、秋にでもなってから原稿もって来い、許可する」とわたしは答へ、楊さんは納得して帰って行った。

内地で五月末に発行された「神軍」といふわたしの第三詩集が十冊送られて来た。跋文は保田与重郎が書いてゐて「大東亜戦争を熱祷した新時代の詩集」と書いてある。満洲事変につづく支那事変と、兄弟相ひせめぐのには反対だったが、米英との戦争は愉快だと思ったのは緒戦の大戦果のあとで、軍部がそこまでやるとは、実のところわたしは知らず、十二月八日の正午ごろ朝寝を親友に起されて戦争勃発とのことにびっくりしたのである。これが熱祷だったらうか。しかし出発間際に集めた詩稿をたのむと、校正から出版所から皆やってくれた肥下恒夫と保田に感謝しつつ、わたしはこの詩集を新聞社支局と近衛師団の参謀部とに頒けまはった。一冊を呈した東大法科出身の本荘健男少尉は真顔で訊ねた。「詩はなぜ行わけになってゐるのですか。」わたしは「知らない、慣習なのだ」と面倒くさがって簡単に答へた。（行わけの理由を福地君あたり明確に答へて下さればよいと思ふ）。とまれこの詩集のおかげで（題名も大東亜戦争後、わたしの作った詩の題から保田によって採られた。わたしの戦争加担者の一証である。

これもある日わたしと小泉と二人だけがゐるところへ面会者があった。若い少尉である。宣伝班の小泉といって訊ね、小泉が「わたしだ」と名乗ると、本を二冊とり出してつめ寄った。この二冊の中、一冊は少尉の著したマレー語教科書、他の一冊は小泉著で、内容は全く同じなのである。これを剽窃といひ、出版法ではどうか、著者としてはあるまじいことなのである。小泉はこの日あるを知ってか、わたしには云はず、著者も他の名としてゐたのを、少尉は調べあげて対決しに来たのである。「あやまりなさい。それでも日本人か」。少尉は声を高めたが、小泉は終始答へない。わたしは代って部下の監督不行届のわびをいひ、今後絶版させるといって引きあげてもらった。これまで支部長の席に坐ってゐた小泉はこれ以後はそこに坐るのを止めたが、礼もいはれなかったし、わびもしなかった。わたしも不行届で発行所にゆき絶版にするやう手続もとらなかった。南洋ぼけといって、何でもルーズになるのである。もう八月も終りであった。わたしの南洋住ひも半年にならうとしてゐたのである。

わが友三島由紀夫
レポート・自決の心理と動機
奈須田 敬
¥ 800
東京都新宿区花園町一〇六
原書房

蠅

高梨一男

それはもう世界の裏側には
不幸が充満してるに相違ないが
そして
全人類と抱擁する衝迫を覚えつつ
しかも雑閙の中で
又も忌々しく僕を襲う
この嫌悪
牢固たるこの嫌悪

残生

青空に死の匂いさえ感じられ
ふたたび永遠に帰ってこない
僕の人生よ
心昂らざる昏れのこった日々よ

昏れのこった日々は
切ない祈りで充たさねばならない
あの空面を漂い流れる旗雲の
解きがたい不思議のかなしみにまで
僕の生を翳らせていようとも
やはり僕は祈らねばならない
未だ心を明さぬ恋人のように
遠いゆくてにある
存在を
求めて

をらびうた (十)

蓮田善明

○

川大君の　まけのまにまに　つるぎたち　身にとりはきて　立ちてくる　われを送るとうたびとの　やさしき友が　いさみつつよみしうたぶみ　そにそへて　たびし黄菊をいくさ路の　長き潮路　朝によみ　夕べに香ぎて　月は日に　いわたりくれば　みんなみの　島の八十島　つぎこえて　今日かもわたる　うなばらは　君がたゝへて　さやけくも　うたひあげたる　うみいくさ　かつてさかりし　その海と　まさにわたれば　さまざまに　思ひ出ることの　しきなみの　しきてやまねば　ひめもちし　菊の枯れにし　かほりのみ　はつかにあるを　船のへに　めぐれる海の　さく浪の　白きめざして　ちりてよと　高くなげつつ海の底　しづける霊の　幸ひて　みいくさほぎ　言霊の　うるはしみして　すめがみの　みよきはみなく　にほひてよ　ふかきこのうみ　きよきそのうた

反歌

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

412うみいくささかりし沖にたつ浪の秀にさく
花のしばしたゞよふ

二十四日　夜来雨模様となり、朝来降りこむ、漁舟点々、島影なし、浪なし

413時じくにふりつぐ雨にうたれつつへさきに
見はるいくさうごかず

414たれこめし空明るめばみんなみの海さへ冷
えし身のぬくみくる

二十九日、マランより帰り来て迎へたまへる佐藤春夫氏にあふ、この二年年毎に年送る近き日にはおとづれしを、今年今日は奇しくここに相会ひまつる、またなきふることびとと会ひてさき路へ行くに、思ふことは八汐路のしくしくに、また極まりては唯たのしさのほかいふべきもなし。今夜出でたゝば迎年は海上なるべきも、或は敵情にては年を迎へ得べきかも期しがたければ、この手帳を托して、ふる年のふるうた一度ここに終らんとす、

○

415またと世になきうたびとといくさ路のさき
路に今日し相会へるかも

416紀の国の白良の浜の白つゝじかざして君は
まさきくありませ

豫てよめる
迎年のうた

417あたらしき年のはじめに八汐路の汐にかづ
きてみそぎせむ我　（了）

編集後記

八月一日。「青い森社」の佐藤米次郎氏から来信。朝日新聞主催の「受章記念展」のリセプションで、棟方志功夫妻や親類の八木橋夫妻、詩人船水清氏等に会った由で、画仙を歓迎するラセ、ラセ、ラセ……というネブタの盛大なはやしが聞えてくるようであった。

十七日。「日本学生新聞」八月一日号を頂戴した。同紙に大久保典夫氏の「日本浪曼流の系譜」が連載されている。このところ蓮田善明の章で特に善明の鴎外解釈をあつかった本号は参考になった。この日横浜のKさんという女性から、卒論の資料に「画仙・棟方志功」が読みたいので……と会員申込みがあった。一寸びっくりしたが、考えてみると当然そんな季節が到来している。

果樹園 第一八八号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年十月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　六〇円

果樹園　一八八号　昭和四十六年十月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価六〇円

果樹園　第189号

画仙・棟方志功(九)　小高根二郎
陣中詩集(七)　蓮田善明
ことば　吉本青司
スマトラ記(七)　田中克己
枯木灘　高梨一男
「鵬雛」と「学芸」と　島津忠夫
編集後記

画仙・棟方志功(九)

小高根二郎

3　重なる帝展落選と父の死

おもいがけず、父幸吉から葉書が舞いこんだのは、もう秋になってからであった。父はよほど手足が弱ったかして、名代の鎌に彫った、あの落松葉の銘（志功はこの銘を伝承している）の雄勁さはなく、一字、一字が、硯からこぼれたようにたどたどしかった。志功はその文字を拾うように読んだ。

「志功よ、虎の絵を描いて帝展に出品しなさい。『虎には竹』といって、竹をつけて描きなさい。よく絵には太い高い竹を書いていますが、虎というモノはあんな高い竹のあるところには居ないモノです。必ず熊ザサの様な、笹原の様なところに居る姿を描きなさい。キット入選しますから」

（「哀父記」）

そう、書いてあった。出品作に「果樹園」を描いていた志功は、幸吉の「虎に竹」のモチーフの提案に、ふッとほゝ笑んだ。それにしても、葉書の文章はなんというやさしさだろう。癇癪玉の爆発と共に鉄瓶が飛んできた昔を、思い出した。そういえば、出郷する頃も、幸吉はほとんど怒らなくなっていた。志功は暇乞いにいくと、床の中から、うン、うン、うなずいただけだった。別れて丁度一年だ。帝展に入選しなければ帰郷しない誓いを思い出して、ふッと涙ぐんだ。

志功は幸吉の葉書を護符のようにふところにしまうと、感傷をぶッ飛ばすように、八はつなつ　の　はつなつ　の八かぜ　と　なりたや八を口ずさんでいた。もう、口癖になっているのだ。いや、志功はこの「初夏の風」で、閨秀画家・橋本花子の実家である浦町の原子邸を思い出しているのだ。彼女の父の原子康一は小学校々長であったが、家は代々地主の富裕な家柄で、宏壮な邸内の裏庭は果樹園になっていた。

女性の膚のようにスベスベとした林檎樹の幹と枝は、大らかで放恣な曲線を描くと、まるで空間を抱きかかえるように天へ伸びて、できるだけ食餐に光と熱とを掻き集めようとしていた。しかし、末端の枝々はつつましく自分の領分を守るために、あらかじめ彫塑的な均斉で剪定されている。その瑞枝の突端に吹きでたように咲く白い五弁花。その花の一つ、一つに、梯子がけして、丹念に毛筆で人工授精をする近所の「かっちゃ」と「めらしコ」たち。八かのひと　の　まへに　はだかり八かのひと　の　うしろより　ふく八。だが、あいにく彼女たちは、日本手ぬぐいで姐さんかぶりをし、コギンの野良着に、モンペで武装している。澄生の貴婦人の情緒はうかゞうべくもない。この時、どこその「かっちゃ」が、疲労忘れに淫らな冗談でもとばしたものか、陽のような笑いがキンキラと湧き立った。この思い出によって空想の画筆を進めていた志功は、いつか「かっちゃ」や「め

らしコ」のモンペを脱がせ、澄生風な文明開化の貴婦人の寛衣に着せかえていた。彼女らは風に狙われる裳裾をふくらませ、楚々と林檎の林をさまよった。いや、林檎の林はともあれ、白い除虫剤を噴霧されてる桜桃の林の方は、まさに橄欖やオリーヴのそれではないか？　地面には、菫や、タンポポや、イヌノフグリなどの微塵の花も咲いている。どこからかルネッサンスめいた熱い風が吹く。志功は彼女らの文明開化の寛衣をはいで、ボッチェルリ好みの膚が透く軽羅をまとわせた。あゝ、「かっちゃ」や「めらしコ」たちは女神になった。生きのいいローマの女神となった。彼女らは手に手をとって、ぐるぐる舞いの輪踊を始めたではないか……。

志功の思い出は幻想とごっちゃになった。いや、思い出は幻想でぼやかされ、理想化された。従って、果樹園の空と樹と草と土の線と面とが馴合いすぎて、いささか画面の明晰さを缺いた。が、それだけに色彩には、融け合う夢のような美しさがあった。どこか色彩画家モーリス・ドニの風趣があった。それは又、口癖になっている初夏の風の匂いにも通った。が、なにより、昨年の合浦公園風景に次いで、今年も古里の原子家の果樹園に取材したことに、志功はなにやら安堵に似た思いを覚えた。それは臍の緒で母胎につながってる安心に似ていた。或いは福士幸次郎の地方主義が、案外、古里の取材という形で、識域の外から志功に働きかけたのかもしれなかった。

ともあれ、志功はこの「果樹園」三十号を、期待と翹望と、それに相応する不安と危惧とで帝展に搬入した。入落の決定を待つ雰囲気は、昨年といささかも変っていなかった。闇の中にはそこゝに煙草の螢火が明滅していた。ただ、夜目にも白く美の殿堂の階段と円柱とが、現実として聳えているのが違っていた。その階段を、胸を張って昇れるか？　昇れないか？　志功は書道博物館のローマの臥女神の支援を呼んでいた。彼女だけでなく、もよりの不忍池の弁財天の応援も求めていた。彼女たちに、「果樹園」の林檎樹の下で舞ってもらい、審査員先生がたの眼を、なにがなんでも、額縁の中へ引きずりこまねばならない。しかし、残念ながらローマの女神はトルソだ。手足がなくては、踊りたくとも、踊るわけにはいかない。ここでひとつ、ご苦労でも「かっちゃ」や「めらしコ」に出場を願って、ネプタのように景気よく、彼女を担ぎ回ってもらわねばなるまい。志功はいつかネプタバヤシのように、〈はつなつ　の　かぜ……〉を口ずさんでいた。この時、「入選発表」の声がかゝった。掲示板の下に、どこに潜んでいたかと疑われる人の群が詰めかけた。さいわい志功がしゃがんでいた場所は、その発表場所に近かったので、ほとんど移動する必要はなかった。口吟をやめると立ち上り、耳を澄ました。常連の姓名と作品名が、志功のそばだてた耳元を掠めてすぎた。○○先生系の何の太郎兵衛という正体と、本歌取りの歌に似た作風が、ついと頭に浮かぶ、うんざりとする数であった。時々耳新しい名も混り、いよいよ新入選にかゝった。新入選は一、二、三と指折れるほど数が少い。志功は掌で耳屏風をつくると一心に傾聴した。が、結局、「棟方志功」の姓名も、「果樹園」の作品名も、呼び上げられなかった。またしても女神たちの支援がえられなかったのだ。言葉を換えていえば、志功は女神たちに惚れてもらえなかったのだ。落胆と傷心とで思はずくずおれそうになった。その志功を、雷撃のように打ち、五体を硬直させたショックがあった。それは志功に代って、「ナナオ・ゼンノスケ」「リョクイン」が呼び上げられたことであった。「ナナオ」といえば、青光画社展に水彩を出品した、あのカギヤ質店の三男坊の七尾善之助であろうか？　志功は掲示板

を覗きこんでいる人間が一人もいなくなるまで、その場に、足が釘付けになっていた。そういえば昨年も、先輩に当るが、下沢木鉢郎に先を越されていた。志功はしんがりとなって掲示板を覗き込んだ。まさしく「七尾善之助」とあり、作品は「緑蔭」とある。同姓同名ということも考えられなくもないが、七尾善之助はこの春から日大歯科に入学しているので、考えられないことではない。事実、彼は志功より五つ齢下だが、小学時代から絵筆を握っていて、純粋絵画としての画歴は、志功よりむしろ古かった。いずれ、七尾質店に勤めている藤本堅三からの連絡で分ることだが、専門の画家ならとにかく、学生の素人画家に先を越されるなんて、ゴッホの面目がどこにあろう？　死んでしまえ。死んでしまえ。ワだばゴッホになれぬなら、死んだ方がましだ……と、真っ暗な公園を広小路へよぎり、湯島天神からお茶水を経て神保町を通り、お濠ばたを気味わるい千鳥が渕に沿って紀尾井町に辿りつくまで、その死の歎きを重ねつづけた。

新入選の七尾善之助とは、まさにカギ屋質店の七尾、青光画社の善チャであることは、藤本からのしらせで、やがて判明した。若冠十八歳で見事に栄光を射とめたわけである。志功より五つ齢下。かなり早熟な才能であることは間違いない。志功は会場で、その「緑蔭」の前に立ちつくした。それは彼自身が幾度も描いたことのある、馴染みの東大構内の風景だった。なるほどそつなく描かれていた。そういえば、昨年の下沢の入選作「堀割」も、洲崎での写生だった。それに反して、志功の搬入作は、思い出による空想画だ。或いはそこに、微妙な相違が現れるのかもしれない。そう、志功は反省した。

実は、入選発表の翌日、落選作「果樹園」を美術館に引取りにいった志功は、これまた搬入作を引取りにきた橋本花子に、ばったりと出会ったのだった。彼女は志功より二つ年下だった。青森の新町小学校から、札幌の北海高女を経て、女子美術学校に入学、藤島武二と高間惣七に師事していた。今度は「風景」二点を出品、カンナと向日葵(ひまわり)のある三十号が初入選していたのである。

女にさえ、志功は先を越されていたわけである。志功は、風呂敷に包んでいる自分の落選作は、実は花子の実家の原子家の裏庭に取材したものであると、告白をした。そして、「ひとつ、ガの絵コ、見てけェねェだか？」と、彼女を近くのベンチへ誘ったのだ。きっと彼女はわが家の風景をなつかしがるに相違ない。そう、判断したからだ。もし彼女が郷愁を感じてくれたら、もう誰の眼にも触れることなく塗りつぶされる運命の「果樹園」も、浮かばれるに相違ない。なによりの供養だ。そう思いながら志功は包みを解いた。ベンチに腰をおろした花子は、白日の下で志功が支えている三十号を一瞥するなり、「あ、これにはデッサンがない」と言下に審判を下した。志功が期待した郷愁のかけらもない、手厳しい批評だった。「まァ、あわてることはないッ。みっちりデッサンからやり直すことネ」。女学校時代、わざわざ札幌ですごした彼女の東京弁コは、板に付いていた。そう、忠告をした花子は、労働階級を描く革新画家として風望されている夫八百二(現在、岩手県々会議長)と落合うために、再び美術館へとって戻した。志功は、デッサンがない、骨抜きだ……と審決された三十号を風呂敷に包み直しながら、昨夜噛みしめた「ワだばゴッホでない」という嘆きを、白日の下で改めて反芻させられたのであった。

「わたくしの絵には、デッサンというモノが無いのだろうか。この大事という、デッサンというものについて、どうすれば本当のモノが把握できるものだろうか。」(「板橋道」)

陣中詩集 (七)

蓮田善明

述志

世の人　われに　この世の学者たれといふ、
学者になつたとて　われ何かせん
わたしはあらぶれて、しかしわたしの道を行かう。　春の風がかなしくくるひ
やがて夏の日の光りはげしくもえたつて
めくるめく雲の疾走！　花白く
火と盛きなむ……
見よ、秋立つ日にいき病みて
よしや冬の霜、仮の日の
青き葉にふりてそが根いたむとも
ああ　霜の色せる白菊！
父よ、あなたの碑に苔のみどりの永遠に濃きを……
父よ、わたしはあなたに倣ふ、
あなたは従容として長寿八十有八歳
人のいのちのはるけくかぎりなきをこの世に示して寂したまうた、われしはあなたの末子
父をしる日最もおそく
しかしまた徐かに父をしる年月をもつこともできた
父よ、わたしは信ずる——
あなたのやうにはるけく、あなたのやうに知られざる智を
わたしが学者になつたとて何うしよう
わたしは知ること貧しくて、花のやうにさなり、戦野の道にも咲きいでし一莖の花のごとく！
ああ　汝こそ　まこと貧しくて　かぎりなく美しく　豊かに
おのがいのちもて世をかざれるかな

—四、二三—

六月、母と子と

六月、はじめて
嬰児は自ら寝返りうちて
母の坐す方へ向き
その声さんざめく陽の笑ひ
その目雲をつらぬくひかり
ああ
窓外に棗の葉は茂りて
さ緑の
みどり児の会釈
こぶし口に吸ひ
まだ土踏まぬ
ももいろに透ける足
足すりて……
母よ、そこに坐し
その顔　われに向けたまへ
そのおん声　われにかけたまへ
はるけき光にとけて
母のうしろ姿……
みどり児はひとり呼び
ひとり笑まふ

—四・二五—

雲

詩こそ　よむべし
なげうたんがため
見よ！　五月の空
雲白く飛べる
よしや日すでに暑く
木の葉暗く茂るとも
雲の飛揚の路あるのみ
天路はるけく！
ああ　われ風を笑はん
山嶽を憤らん
かくて日くれし時
滂沱たる涙もてわが通りし路を沾らさん
われ空窓に倚りて
詩集を開く
されどそは開かれしまゝ
白く光れり、五月の昼
青森のなつかしい人たちに会えるだろうかと、わたくしの心の底から噴き出してくるやるせない悔恨と想いが、身ごころをすくめたのでした。」（「板橋道」）

もし、帝展に「果樹園」が入選さえしてくれていたら、父が死ぬ一カ月前に、会えていたわけだ。そう思うと、改めて自分の不甲斐なさに対する悲しみと悔恨が、きりなく湧いてでた。所詮、死という悲しみは、配偶と肉身をおいて、担い手は他にない。どこにも持っていきどのないこの傷心を抱いて、志功は夜の町をさまよった。この時ふと、本郷の島家を思い出した。主人の丈夫は、彼の父六郎が、いつ、どこで、果てたやらも知らなかった。その墓を探し当てることが、彼の永年の宿願であることを、ゆくりなく志功は思い出した。五つ六つの頃までしか父を知らぬ島さんより、ワの方が何倍かましだ。戒名も賢三から知らせてきていた。清雲院幸岳秋明居士。あの世の名前だってわかっている。それに墓所はおきまりの寺町の常光寺だ。そうした安堵で、足はいつか本郷三丁目へ向いていた。自分より多く悲しみを担っている島丈夫に出会って、比較感から、担いきれぬ悲しみを希釈してもらおう……という心緒が、いつか動いたのかもしれなかった。道々、志功は、こんな夜、貧乏のどん底で、なんども幸吉に借り酒に走らされたことを思い出した。

「夜、一合、また一合と、借り酒に使われて、あのガラスのカンビンを両手に抱いて、このカンビンさえ無くなれば……と思ったものでした」（「哀父記」）

父の思い出といえば、楽しいそれよりも、こんな辛く悲しいものの方が多かった。例外

この彼我の才能に対する猜疑と、絵画の本質に対する疑惑とで、この日以降…志功は日夜責めさいなまれた。

この二回目の帝展落選の悲しみは、おまけに父幸吉の死によって追撃ちをかけられた。月末の十月二十六日の夜明け、ぽっこり五十六歳の生涯を閉じたからである。病名は心不全だった。喘ぐように大きく、二三度深呼吸をすると、それっきりであった。前日が丁度妻さだの四回忌に当った。通夜の席で、まだ元気な天保十四年（一八四三）生れの祖母つるを中心に、伯母よねや忠太郎の間では、「きっと母っちゃが呼びにきたんだべ」ということになった。四年前の丁度その日、「さだ！　ガバ、ヘンカすのも、コイで最後だ。ウット泣げ、泣げ！」と、わめき泣きながら、さだの棺の蓋を釘付けにした幸吉の姿を、思い出したからだ。

「チチシス」の電報は賢三から届いた。が、帝展に入選するまで帰郷しないという誓いで、志功は自縄自縛になった。「スグカエレ」とあったが、意地でも帰れなかった。

「父は死にましたが、誓いだから帰ることができないので、心の中で泣きつづけました。これでは何時になったら父の墓におわび出来るのだろうか、何年たったら青森と

は「虎に竹」と、酒の肴だった蜜かけのシンコ餅の走り使ぐらいのものであった。とろり…とした黒蜜の甘さ。歯にほどよくねばったネチネチとしたシンコ餅。島家はどこか餅のにおいがした。それは口腔からツバキとなって飛び出して、つい足を急かすのだった。

突然の夜の訪問であるにかゝわらず、客あしらいのよい大黒の丈夫は、さァ、お入り…と、志功を居間に招き入れた。ヤイは火鉢のそばで火箸でカキ餅を延ばしていた。狐色に延び広がっている飴入り餅。ワを呼んだのは、これだったのだな……と、つい、志功はニコニコの恵比寿になってしまった。幸吉の死の悲しみを訴えたいという甘えなど、いつか霧散していた。

「帝展はどうだった?」

と、腕組みをして大黒は尋ねた。

「再た滑りした……」

と、面目なげに恵比寿は答えると、ヤイが火箸で前に置いてくれた狐に、あんぐりと噛みついた。

「そんなら再た内に持っておいで……。これが一人で寂しがって夜啼きをして困るからネ」

と、大黒は欄間に掲げている昨秋の「合浦池畔」を顎でしゃくった。口に余る大狐にかぶりついていた志功は、「アリガンドゴス」と口の内でいって、思はず頭を下げた。眼には、悲しみの涙でなく、うれし涙が浮かんでいた。

ちなみに、後年島の父は亀田東南二十キロの寺社村の三度栗のある寺に、明治三十五年秋に葬られていることが分った時、志功はこの知遇にむくいるため、島について現地へ飛んでいった。

志功は幸吉の死から十日あまりして、次の絵ハガキ（帝展第五回展出品中西利雄「風景」）を青光画社の藤本堅三に送っている。

＊

大正十四年十一月七日

〔東京市外中野桃園三三八七関方より、青森市博労町七尾（かぎや）方藤本堅三宛〕

おはがき見ました。会と、あなた方のお力で、八回を重ねることを、うれしくあります。よろこびます。おれいも申します。松木屋だそうで、何よりです。松木兄の方にも、たのんであります。出しそうです。佐藤君の大作は、見物でしよう。私の画は十枚ばかり、ノマの山田君に送ります。「十二三日」に七尾善之助氏がこの他、お力になって呉（ママ）ださるそうで何よりです。おれいを云って呉ださい。みんなの人達がお力になって、自分が居なくとも、自分達が作った会が大きくなって行くのを、どんなに、うれしいことでしよう。

又、かきます、どうぞよろしく。

＊

この文面によると、松木屋デパートで第八回青光画社展が開かれるのだ。堤川の青森館時代よりだいぶ盛大になっているようである。志功も東京から十点の応援作品を送ることを約束している。送り先は、野間歯科の書生山田清朗宛であることから推すと、主人忠一の出奔事件はまだ起っていないのだ。十点の中に必ず混っている白日会に出品した「清水谷静景」。その敬虔な東京風景の中の、黒のセイラー服、赤靴下、編上靴の点景人物に、あゝこれは私だワ……と、本人のしげ子に思いあたらすことができるのだ。このことは、帝展落選、幸吉の死という重複した悲しみを償う、島丈夫の落選作買上げにつぐ、志功の心ひそかな喜びだったに相違ない。又、志功はまだ上京の夢を果せず、すっかり元老格になってくすぶっている松木満史に、出品方を督促している。藤本からの便りで、会期である十二、十三日の両日には、平出品者だった七尾善之助が、今や帝展入選という錦を着飾って会場に現れることがわかっただので、元審査員の名誉にかけても、出品しなくてはならないからだ。

十一月下旬、展覧会が盛会裡に終った由の連絡をうけた志功は、次の絵ハガキ（仏蘭西現代大家新作画展、マルク「アンジエリー風景」）で藤本宛に礼状を書き送っている。

＊

十一月二十三日

〔東京市麹町区紀尾井町六石川方から、青森市博労町七尾方藤本堅三宛〕

くわしく、気持よい程、親切に、書かれたお手紙うれしく、見ました。おれいを申します。送った絵がまづくて、申し訳ありません。おほめにあづかって、はづかしいことです。佐藤国夫さんや佐藤勝三様に会ったら、お礼をいって呉ださい。石岡さん、斉藤さんには深くおれいを申します。田中しすいさんにもよろしく。堤さんや、大川さんにもおなじく。新聞が出たら、どーぞお願申します。お身体お大切に、みなさま

こ と ば

Cosmosism

吉本青司

夏の悶　深い影をつくった木犀の樹
そのひとつは金色に
そのひとつは銀色に

さきぶれもなく訪れた賓客
星にもまがう花々

常緑の葉かげにつつましく　やがて
たかく　ふくよかに咲きみちる

金と銀　陰と陽

まろやかに光る泪のように
敷石にそそぐ　こころとこころ

沈黙する　ことばとことば　きびしく
回帰をつげる季節の答辞

そのひとつは金色の
そのひとつは銀色の

地はいま天のかがやきにみち
いっさいの汚濁を寄せつけぬ　秋

桶谷秀昭評論集

凝視と彷徨 上下巻

伊東静雄を味到し、蓮田善明を理解し、三島由紀夫を知ること深い、公明にして犀利な評家。さらに与重郎、隆明、和巳その他をも返照する動態の論理と倫理…。

★上巻目次

第一部　「批評精神」以下七篇
第二部　「透谷と反近代」他五篇
第三部　「三島由紀夫」「蓮田善明」「保田与重郎」「北一輝・辻潤・大杉栄」以下十三篇
第四部

★下巻目次

第五部　「吉本隆明」「高橋和巳」他五篇
第六部　「文芸時評」

上下巻各　一〇〇〇円

冬樹社

によろしく。

＊

両佐藤、石岡、斉藤、田中、堤、大川……と、たくさんの名が出ているが、いずれも出品者なのであろう。かつて志功が松木と一緒に、審査した人も混っているに相違ない。志功は「送った絵がまづくて、申し訳ありません、おほめにあづかって、はづかしい……」と、いつになく慎んでいる。まだ帝展の会期中だから、落選の傷手から癒えていないのだ。しかし、末尾では新聞に出る批評を心待ちにしている。自ら信じるところがあるからだろう。

この青光画社展の批評を出した新聞は『東奥日報』、執筆者は竹内俊吉だと、筆者は想定する。と、いうのは、竹内が『東奥日報』に入社したのは、丁度三か月前の九月だったからだ。彼は東京殖民貿易学校、三田英語学校、正則英語学校などに学び、志功の三つ年上だ。（『東奥日報と大正時代』）「棟方氏の作品は驚くべき作品だ。彼の作は場中の白眉であろう。何かに影響されていないならば、氏はまさしく天才である。」と褒めちぎったのは、『板極道』では、二年前の第一回展の時のように書いているが、この八回展の時だと解釈した方が、竹内の職歴から考えて自然である。あたかも、その事実を証明するかのように、十二月に藤本宛に出した絵ハガキ（仏国現代大家作画展プラマンク「花」）には、前便のつつましやかさを一擲して、志功は竹内の褒辞にあやかって、「ムナカタ大シコー」と署名している。

＊

十二月十二日

〔東京市紀尾井町石井方ムナカタ大シコーより、青森市七尾方藤本堅三宛〕

送って呉だされた、自分の青光画社出品画返送くだされて、私は心から、お礼を申します。たしかに、うけとりました。自分は此れからを、生通し、通しに掛って、大きい青光社をみなさまと共に、大きくいたしましょう。…後略…

＊

「生通し、通しに掛って……」という言葉など、もう後年の志功の面影が現れている。ともあれ、大シコーと名乗った彼は、どうやら落選の傷手から癒え、本来の自分の面目を取戻したようである。

＊

＊

＊

天野忠詩集　絵・高木四郎

人嫌いの唄抄

孤立／向う側／しずかな人／どぶろくの中の季節／古い空気／声／後生

京都市東山区山科川田山田一五

文童社

¥300

スマトラ記（七）

田中克己

プアサはアラビア語のラマザンでイスラム教徒は日中は飲食しない。この一ケ月つづいてゐたのであるが、わたしたちはあまり気がつかなかった。宣伝班支部のイスラム教徒が通訳と女給仕のロハンの二人だけだったからかもしれない。しかし八月二十九日にこのロハニがジャバ料理をもって来て、けふはブカ・プアサ（お正月）だといった。わたしは礼をいってこの御馳走をちょっと食べたあと、お祝に金をやったやうに思ふ。

その夜はメダン駅前の公園で催しがあるといふので行ってみた。インドネシア人も華僑もみな来てゐて、露店が出てゐる。例の華僑の富豪の息子張世良はインドネシア人の女をつれてゐて、わたしにこれを恋人だと紹介した。そのあと前に述べたカレンダーのことで役所に来た楊老人がぜひお祝にといって、わたしにビール一ダースを渡した。わたしはけちな華僑のこのしぐさに吃驚して受取り、そこらにゐた知合に配ったあと、自分もちょっと飲んだ。そのあと空腹なのに気づいて、近くにゐた新聞社の支局長に「ビンジェイ（ミーゴリン）へ焼きそばを食べにゆきませうや」と誘った。支局長はたちまち賛成して車の方へ歩いた。ビンジェイはメダンから二二キロ離れた町で、ここも今夜は賑ってゐるであらう。わたしのあとには支部の写真技師森武二郎君がつづき助手席には支局のボーイが坐った。車は平坦な道路を時速一二〇キロで走ってゐた。窓から入る風が快く、わたしはたちまち眠ってしまった。

目をあくと、わたしの前に三木上等兵と漫画家の松下紀久雄君とがゐた。シンガポールから来たのださうである。わたしは大喜びして「メダンの市中を案内しよう」と松下君に申し出た。松下君は三木上等兵と顔を見あはせ「まあまあ」といって、怒々と立ち去った。見まはすとわたしはベッドにねてをり、枕許にはま新しいパンツが一枚おいてある（二十五年たって、当時のメダン軍病院の看護兵を探し出し、訊ねると、わたしには数へ切れないほど見舞客があって、その置いて行った見舞品をわたしはみな看護の衛生兵にくばって歩いたさうである）。わたしがパンツをはきかへると、丁度すがたを現はした宣伝班支部のジョンゴス（ボーイ）のアブに「一緒に出よう」といひ、そのまま百メートルほどある芝生を横ぎって通りをゆく馬車を呼びとめ、南にゆくことを命じ、ベラワン通りから、東にある華僑の町にゆき、馬車から降り、アブと一緒に焼きそばを食べた。熱帯の日は暮れ易くもうまっ暗になってゐた。わたしはまた馬車を呼びとめ、宣伝班支部に帰った。そこには各新聞社の人がみな集まってゐた。わたしはふしぎに思ったが、わけがわからないので、何かいって自分の室へ入らうとすると、

枯木灘

高梨一男

○

天洵は鳶と化して
裏山を飛翔する
逐われた鹿が
凪の海へ入水する
青野と幻覚して

○

一生を故郷（くに）で過してる連中は
大概　気はいいが
風貌は妙にいかつい
黒潮に育つ魚貝類に酷似する
——ホウボウ　メバル　イサキ　コチ　オコゼ　ウツボ　イセエビ　カニ　アワビ
など
——中には
マンボウのようにでっかいのもいて
朝から酒をくらっている

同盟通信社の田浦支局長が「田中さん、病院で心配してゐるから、一度帰ったらどうですか」といった。わたしは素直に「なるほど」といひ、たぶん田浦支局長の車に乗せられて病院へ帰った。

それが何日のことだったか、わたしにはわからない。わたしはビンジェイの手前で自動車が河原に転落し、森君と二人、入院したが外傷はなかったが、家族のことを問はれて妻の姓名をデタラメに答へ、おかしいといふことで入院させられたのださうである。それから数日（わたしの三一回めの誕生日がその中に入ってゐる）わたしの言動は全く記憶がない。この時、診察に当られた久米軍医が三鷹市に開業しておいでのことを知って、わたしは妻と訪ねて行ったが、軍医は二十数年前の患者のことは全く忘れておいでだった。

わたしの記憶はこのあとしっかりしてゐて、わたしの病室の北側の扉が閉じられ、南側に並んだ二室に入院してゐた浅井中尉と松岡中尉とがわたしとよく話してくれるやうになった。院長の命令でわたしの看視をしてゐられるとは少しも気がつかなかった。浅井中尉は慶応出身の将校で、ブキテマで戦死した毎日新聞記者の柳重徳氏を弔ったわたしの詩を見て、同級生だったといって喜ばれた。

さてかうして日をすごす内、九月十五日にやっと退院の命令が出た。あとで聞いた話では、相変らず言動がかはってゐるとの軍医さんの意見に対し、「いつもさうですよ」と田浦さんがいってくれて退院が許されたのださうである。この意見具申がなければわたしはいつまでも精神異常として入院したままになったらう。ともかくわたしは早速、師団司令部へ行って参謀長に退院の申告をした。

しかし実はわたしはまだ異常だった。宣伝班支局の椅子に坐って通訳と話すとき、英語が旨く出ない。通訳に「わかるか」と訊ねると彼は「わかりません」と答へた。それはまだよいが夜になると怖くてたまらず、室の鍵をしめ、軍刀を枕許に立ててやっと眠った。三木上等兵に内緒でそのことをいふと「あんたはいま恐怖症ですよ。怖い人の前ではちゃんとしてゐるぢゃないですか」と教へてくれた。なるほどと感心して、その夜から怖くなくなった。しかしわたしの異常はシンガポールまですぐ伝はったやうである。北川冬彦さんの小説「悪夢」にはちゃんと、田中は「気の毒に自動車事故で頭を打ち気が変になった」と書かれてゐる。いまでもわたしの言動は変ってゐるさうである。自動車事故のせいならよいが——。

わたしのスマトラ滞在は十月十二日ベラワン港乗船で終り、同時に仕事はなにも与へられなかった。スマトラでのことで忘れてゐたことを教へてくれたのは草下英明氏で、その昔「星座手帖」（四四年、社会思想社刊）に「南を思ふ」といふわたしの詩が載ってゐる。

印度洋のそみし夜の
空ゆくは老人星（カノープス）
南十字の四つの星
ケンタウルス座
星映せし海によすがら
こだませし珈琲摘む唄

といふのはまちがひなく、スマトラの唄であ

斎藤清衛著
芝草
第一節　人間ということ
第二節　旅の記
地上を行くもの／はてしなく歩む／北陸の旅／東北の細道に立つ
第三節　昭和つれづれ草
¥600
東京都千代田区神田小川町三ノ二四
右文書院

る。しかしいつ作り、どこへ発表したものやらご存じの方はお教へ願ひたい。（了）

『鵬雛』と『学芸』

—伊東静雄ノート—

島津忠夫

小高根二郎氏の『詩人伊東静雄』を読んでいて、「静雄は予科線の宣伝誌だろう『鵬雛』の原稿を書かされている。「いやいや」と嫌厭の情をあからさまに吐露している」というところ、これは昭和十八年十月四日の日記を引用して書かれているのだが、この「鵬雛」は、住吉中学の校友会誌ではないかと思ったことが、この調査の動機である。

過日の同窓会にて、清原和義氏に調査を依頼していたところ、校友会誌の類が保存されてをり、『耕人』『学芸』所載の伊東静雄作の詩を書き送ってくれた中に、『学芸』所収のうち一つは未紹介ではないかと思い、改めて住吉高校におもむいて調べてみた。

「鵬雛」は、第四十六号（昭和十七年三月二十日発行）、第四十七号（昭和十八年七月三十日発行）、第四十八号（昭和十九年七月二十日発行）の三部で、第四十六号の「編輯後記」に「この秋にあたり従来の住中校友会改組せられて住中報国団となる。（中略）同時に「会誌」は「鵬雛（ホウスウ）」と改る」とあり、「会誌」を改題したもので、これで全部である。この四十六・七の両号は私の在学中のことでたまたま記憶に残っていたのである。その内容は清原君がいうように、「全く文芸的な雰囲気は無く、むしろ学校要覧に近いもの」で、編輯兼発行人が米沢総太郎（四十六・七号）大庭光雄（四十八号）とあり、国語科の仕事とされていたのではなかろうか。詩人伊東静雄がこの編輯の仕事に携わっていたとすれば、いかにも「いやいや」という言葉が発せられるような索然とした内容である。ただ、十八年十月四日の日記に見えるということは、いずれの号をさすのかが不審であるが、第四十六号が「昭和十七年三月二十日発行」とあるにかかわらず、新学期以降の運動部記事などが見えることから、第四十七号も発行の日付より遅れていて、十月はじめにまだ編輯が片づいていなかったのではないかと考えられる。

ところで、この『会誌』とは別に、創立以来「耕人」という校友会誌があり、その第六号（昭和五年二月二十日発行）に、「山科の馬場」の散文、第七号（昭和六年二月二十七日発行）に「庭をみると」、第八号（昭和六年十月十日発行）に「ののはな」、第九号（昭和七年二月十八日発行）に「私の孤独を」の詩が、それぞれ掲載されていることは、「伊東静雄全集」にも所収されていて、周知のことであるが、その『耕人』が第九号で終り、『学芸』と改題されるのである。「創立十周年記念号」と銘うって「昭和七年十一月一日発行」とある『学芸』には、全集に「拾遺詩篇」として見える「事物の詩」のうちの「秋」の一篇が掲載せられている。全集の「作品年譜」によれば、「呂」昭和七年十月号よりの採録である旨記されているが、『学芸』所載の詩は、全集所載の本文と変るところはない。更に『学芸』第二号（昭和八年十二月廿五日発行）には、次の詩が見える。

少年N君に——

私を待つ者よ　君は徴笑ひながら
隠れるが
私は其処の林から
小鳥をみんな呼び寄せて
歓んでゐる君を寂しがらせよう

第二詩集「夏花」に見られる「若死　N君に」が思いおこされるが、この詩は全集にも

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

未収録である。

この「学芸」は、以下第三号（昭和十年三月一日発行）第四号（昭和十一年三月一日）第五号（昭和十二年三月）第六号（昭和十三年三月十五日）と続くが、これらには伊東静雄の詩文は見えない。もともと、この「学芸」への改題が、「耕人」のあまりにも文学的なことへの反省として生まれただけに、だんだん文学的な色彩が乏しくなり、第六号は、「予算の関係上、今年は遺憾ながら諸先生の御寄稿を願はぬことにした」（後記　加藤惣一）とあり、私の入学した昭和十四年以降は全く休刊となっていて、こういった雑誌のあったことも思いつかなかったのである。それにしても、今、これらの「学芸」をひもといていて、西垣脩や庄野潤三が生徒の欄で盛に活躍しているのも興味深く感じられたことであった。

終りに、長年同窓会校内幹事として力をつくされ、恐らく退職を控えて、これらの校友会誌を整理、整本して後に残された黒田猛、今回の調査に当って種々便宜を計って下さった現校内幹事堀江馨、清原和義の諸氏に感謝する。

（筆者は愛知県立女子短期大学助教授。昭和十九年三月住吉中学卒。昭和二十九年四月より三十三年七月まで国語科教諭として住吉高校在職）

編集後記

九月四日。コギト時代に書いた拙詩「まつ日ははるかに」の後尾を忘れたので教えてほしいと、福岡の上田あぐるという方から手紙をいただいてびっくりした。そういえば八月にも、東京の斎藤久美子さんから、拙小説「浜木綿の歌」の読者であった由の手紙をいただいていた。当の筆者の方が、自分が詩人であり、小説家でもあった昔があったことを忘れがちであるので、いささか面映い思いがしないでもなかった。しかし、保田与重郎選集が刊行される時勢であることを思うと、別に不思議ではない気もする。上田さんも、斎藤さんも、もういいお母さんで、お子さんたちと文学を語る年頃になっておられるのだから、単なる回顧や郷愁からでなく、浪曼派の精神に共鳴し、その精神に生きようとする若い層が生れてきても別に不思議ではない。

九月九日。伊東静雄の詩碑を堺に建てたいと熱願する鳥田稔氏が来訪された。堺の灯台を眺めやられた料亭の子息だった由である。堺の人である安西冬衛さんの詩碑も、そろそろその準備会が持れた様子なので、その後に考えられていい企画のようだとお話をした。それにしても、工業団地で荒廃した堺の海の、そのどこらあたりに静雄の霊をたたずませることができるだろうか。

九月二十四日多磨霊園の三島家之墓から、三島由紀夫の骨壺が紛失した由のニュースが伝えられた。その瞬間、私の頭にきたのは、盗難ということではなく、復活ということであった。（O）

果樹園 第一八九号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年十一月一日発行
編集兼発行者　小高根二郎　池田市石橋二丁目六ノ五
印刷所　元市印刷株式会社　大阪市東住吉区桑津町五の八
発行所　果樹園社　池田市石橋二丁目六ノ五
（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価　六〇円

果樹園　一九〇号　昭和四十六年十二月一日発行　（毎月一日一回発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価六〇円

果樹園 第190号

画仙・棟方志功(十)　小高根二郎
伊藤佐喜雄　田中克己
草雑　中野僖子
鈴鹿踏山　原考福地邦樹
陣中詩集(八)　蓮田善明高梨一男
こわいひと　田宮顕太郎
夕映えに　織田喜久子
冬至　吉本青司

画仙・棟方志功(十)

小高根二郎

八、苦闘の日々

1　貉たち東京に集まる

古貉の松木満史が待望の上京をしたのは、志功に遅れること一年数か月、大正十五年の春であった。太平洋画会に木彫「寒日童女」が入選したからである。この作品は、ドンギン（胴着）を着、藁靴をはいた小学一年生ぐらいの少女が、身体をすくめながら、かじかんだ両掌を息で温めている立像である。張った両肘の先から抜けていく体温が分るほど、寒気をあたりに漂わせた佳作だった。松木はやがてアトリエを建ててやるという父の口約をえて、大手を振って上京してきた。このなつかしい同志貉を迎えた志功は、教材出版社を未練もなくやめると、阿佐ヶ谷に家を借りて共同生活をおッ始めた。あこがれのアーチストの生活を実践するためである。一年余の勤めで、なにがしかの貯金もできた。それから若干、伯母・次兄からの送金につぎ足せば、当分なんとかやっていける目算が立ったからであろう。いや、そうではない。かつて松木と一緒に憧憬の対象とした山上喜司が、地図描きというアルチザン的な日常業務で、せっかくの才能を日々磨り減らしていく現実を、うつつに見たからだ。まこと、ひとごとではない。志功自身、その地図描きの手伝いと、生活の雑務に深夜までこき使われて、勉強の時間が生みだせなかったからだ。なにはさておき、アーチストとしての生活を取り戻さねばならない。純粋美の女神にそっぽを向かれるようなことがあってはならない。そのアーチストの典型として、志功は山上に替えて、教材出版社の社長石川の友人、槐樹社の上野山清貢（うえのやませいこう）を心の祭壇に祀っていた。

上野山の逸話は、いつも石川夫妻から聞かされていた。上野山の死んだ先妻は作家の素木（しらき）静子で、石川の妻君も彼女と親友だった。静子は足が悪くて松葉杖で歩いたが、なかなかの美人だったとのことだった。上野山との間に女の子があったので、静子が死んだ当座、上野山は子守役もせねばならなかった。子供は遠慮なく背中で小便を漏らした。猟狩した上野山は、呉服屋に跳びこんで唐チリメンを買うと、それを惜しげもなくオムツとして当てがった。そして懐中からウイスキーの小瓶をとりだすと、蓋を酒杯にチビリチビリ……とやって、このとっさの処置に満悦した。こんな法外な超俗さが面白いと、石川は上野山の人柄を褒めちぎった。又、妻君は妻君で、そりゃア、静かな方だったワ、と若死をした親友を追慕した。

たまたま、その上野山が教材社に現われたことがあった。芥川竜之介ばりのザンバラ髪。細くキリキリした小さい眼。額にはセンシブルな細く深い皺が三四本あった。赤シャ

ツの上に毛糸のチョッキを無雑作に着込んで掛けてある自作ブルッシャン・ブルーの海のタブローの前に寛いだ坐像に向うと、これが真実の画家なのだな……、という実感が志功の胸にきた。さすが牧野虎雄が嘱望するだけの貫禄がある、と感銘した。

「わたくしは画工として働きながらも、上野山氏から、本当の絵とはどういうものかという話を聞かされました。そして、わたくしの胸の中にも、底にも、純粋なものを湧きあがらせて下さったのでした。」（「板極道」）

そう、志功は述懐している。

青森時代は、松木が山上画伯を拝ませてやると、わざわざ弁護士控所まで志功を呼びにきたが、今度は志功が、真実の画伯を拝ませてやると、野方の上野山のアトリエへ松木を誘った。欅と、栗の矮林と、畑とが、野放図に造型する起伏と広がり。その片隅にちんまりと佇んだ、赤屋根、三角に尖った板造りの文化住宅式な洋館だった。折悪く画伯は写生旅行で不在だった。エプロン掛けの新夫人は、無駄足を運んだ信者たちを気の毒がって、「これはほんの電車賃……」といって、小遣をひねり包みにして二人に握らせた。神様を拝みにいって、逆に賽銭を頂戴してしまったのである。「どうだい。東京の神様は豪気だろ……」と、志功は約束の東京弁コを使いながら、得意がった。野方から阿佐ガ谷までは一里そこそこだ。ぶらり、ぶらりと鼻唄をうたいながら、ひねり包みを拳に流してきた二人は、途中の菓子店で賽銭の一部を餡パンに替えると、それを昼食がわりにばくつきばくつき帰ってきた。

これも生活の知恵の一つだ。由来、アーチストはもちつもたれつの生物なんだ。二人で生きていくのも、三人口でも同じこった。いや、三人寄れば文珠の知恵ということもある。自然たつきのアイディヤも湧いてこようというもんさ。と、いうわけで、松木は詩人志願者とも、画家志望者とも、得体がしれぬ高橋静寂という青年を、マッチ箱のように小さな家につれてきた。やがて、高橋の交友関係から、阿佐ガ谷駅南にくすぶっている蔵原伸二郎の仲間とかいう、神戸雄一という詩人が貧乏神のような青い顔をして現れた。大枚二百円の工面がつかないと、首を吊らねばならぬというのである。二百円といえば、志功もいはず通りすぎた。彼は死に、わたしは後悔にたへなかった。新聞では「コギト」にのせた「春の鼓笛」が代表作と出てゐた。一生の間、文学が好きだった彼と、わたしは四十三年間ろくろく話もしなかった。わたしは後悔にたへず、早々に席を辞した。こんな目に会はないやう、良い友だちとはなるべく話をしよう。「君子の交りは淡きこと水の如し」といふ少年の時おそはった孔子のことばが、厭人症の時の救ひになるが、わたしはそれを捨てねばなるまいと思ふ。伊藤佐喜雄はそれを教へてくれたのだ。

伊藤佐喜雄

田中克己

津和野の人宮崎智恵さんと「日本浪曼派」の総帥中谷孝雄さんとからしらせを受け、わたしはお通夜に行った。夫人から「死顔を」といはれて棺をのぞくと、「花の宴」の作者は、昭和三年と同じ顔をして目をつぶってゐた。この友に最後に会ったのは、厭人症にかかってゐるときで、大根畑の中の無人の道でであった。彼はわたしを見、わたしは彼を見たが、にっこりともせず、物を

の半年以上の生活費に当る。こ奴は大変な大法螺吹きだと思っていると、彼は九州のどこそこかの城主の裔だと自称した。そして持参の風呂敷を解くと、小軸物を取り出した。これは家伝の池大雅だけれど、誰か二百円で買ってくれる人はあるまいか？ という相談だった。壁に掛けると可憐な茶掛だった。点、線、円、角で構成される葉群の向うに高窓が見え、そこに琴を弾いている唐人が見えた。清爽高雅な気韻が琴の音となって、幅外にそよぎ流れるようであった。蕪村と合作した「十便十宜」のあの「十便」の一幅をとりだしたみたいに見事なタブローだった。「無名」の署名、「前身相馬方九皐」という遊印も千鈞の重みがあった。志功は「う——む」と唸った。本郷の印判屋の飾窓に、月賦で買ったあの蠟石をみつけた時と同じ吐息だった。しかし、五円なにがしかの蠟石とは話が違う。五円月賦でなら四十カ月、十円月賦でも二十カ月——それも飯も食わずに、一年半以上もかかる勘定だ。職を離れた志功にとって、どう算段しようもない高根の花である。志功は再た「う——む」が出そうになって吐息を呑みこんだ。

そこに、それこそ偶然、教材社の版下仕事を手伝っている松田が尋ねてきた。顔見知りの松木が上京したと聞いて、一升ぶら下げて会いにきたのだ。あい変らずの菜ッ葉服姿だった。彼は壁間に掛けられている茶掛けを見上げて、「ほゝう……」と、不精ヒゲの伸び卑怯じゃあないか

彼は
賢いけものたちのように
風の掟を守らなかった

少年は　ひるまず
おのれの方向へ突走った
幼い日に
叢の地図に迷い込んでしまった
錆びた　おもちゃの
ダンプ-カーになって—

やがて
遠い草原が
ゆっくりと成長し
彼の骸を隠しはじめると

風が
鋭くはすかいに
少年の
明日をよぎった

草原

中野僖子

草原に風が吹くと
はすかいに
風の行手ができる
その日向臭い
流れの下に
小さなけものたちの
道があった

少年の母親は
いつも風を待っていた
やさしい明日を
ひっそりと
呪文をとなえながら

だが
少年は待たなかった
待つなんって
ひどくみじめで

た顎を撫でた。この息を吐く「ほゝう……」は、さいぜんの息を呑む「う――む」より、いささか希望がチラチラした。その発声には、賛嘆とも、放念とも、諦念ともつかぬ、茫漠とした広がりがあるからだ。彼は遠慮なく軸の前に中腰にしゃがみこむと、「ほゝう」を繰り返えして落款を改めた。「ふむ、「無名」……。こいつはなかなか乙ではないですか。」といった。

この時、自分が所有者だと、証明でもするあんばいに、神戸が落款の説明をした。大雅の初めての名は勤。まだ玉瀾女史を妻君に迎える前の勉強盛り、丁度、棟方さんの年格好より二つ三つ上だと思われる頃に、この無名と変名したという解説だった。志功はその後を引取って、大枚二百円で譲るそうだよ……と、松田へ橋を渡した。松田へ渡した橋は丸木橋のようにあまり頼りにならぬが、もしかしたら彼を介して、気前のいい教材社の石川社長へコンクリートの二の橋が架からないこともない、と判断したからだ。松田はしゃがんだ姿勢のまま、今度は腕を組むと、「う――む」と唸った。が、この「う――む」の息の呑み方は、あきらめや逡巡のそれではなく、魂に決断を迫る力があった。「誰でもいい。適当な人があったら世話してください。なにがなんでも、僕には二百円がいる切迫した事情がありますんでね」と、神戸は敬恭に身をすくめた。「よろしい。引受けましょう。」と、松田は胸板を叩く代りに、あぐらに戻った。そして、皆に半身に背を向けると、菜っ葉服のズボンの下に腹巻でも探ってる様子だった。が、やがて疲れた紫チリメンの包をとり出した。それをほどくと洗いざらしのハンカチーフのくるみになった。さらにそれを開くと奉書紙の包みが現れた。開帳でもするあんばいにそれを剝くと、内からうやうやしくくすんだ札束を取り出した。そいつを斜めにしごくと、親指と人差指の指頭にツバをつけて、かっちり二十枚を捻りだして、神戸の前に差し出した。神戸の顔から血の気が引いた……と見るまに、紅潮した。驚愕と歓喜の潮流が、あまりに早く交替したからである。志功、松木、高橋は息を呑まされたままだった。まさか菜っ葉服の松田が、これだけの大金を身に秘めていたとは、予想もしなかったからだ。人は見掛によらぬもの。そう、感銘しッ放しだった。「では頂戴する」と、松田は軸を壁からはずし、それをスルスルと巻きにかかったが、「前身相馬方九皐」の遊印を改めて見直すと、「ふむ。前身青森啓明社方なにがしってわけか。乙だよ、これは……」

雑踏考

福地邦樹

雑踏になぐさめがあるとすれば
それは穀物のように流れつづける
没個性のやすらぎのため

雑踏に悲哀があるとすれば
それは熟れすぎた果実が
したたり落ちるやさしさのため

雑踏に怒りがあるとするならば
死海にたまった塩分のように
のがれようもなく煮つめられてゆく
人間のたましいどもの
累々たる集積のためなのだ

鈴鹿山麓

高梨一男

黄金田に囲われて
真っ白いお花畠

蕎麦は小花を総状(ふさなり)に咲かせ
莖の丈は優に二尺

畦畔で話して居る
「さぞ雪が深いよのし　ことしや」

と満悦した。が、紙幣の数を一枚一枚読んでいた神戸は、ふと手をとめると、「とうとう取られるか……」とつぶやいて、さいぜんより青くなった。やっと、二十枚間違いなくあった札束を懐中に収めた神戸は、周旋料というわけだろうか、入れ代りによれよれの一円紙幣を二枚志功の前に差しだした。そして、「景気直しに、一丁、陽気にやりましょう」と、大雅を失った自分を励ますかのように、盛大な酒盛を提案した。

さいわい酒は松田が持参していた。しかし七輪と鍋が一つ、それに茶碗が三つだけ……という道具立ては、自ら料理の趣向を規制した。が、腹の虫のきゆ――ッ！　と鳴る催促で、てんでに手分けして、桜肉、豆腐、葱、砂糖、醤油の調達に走り、酒宴の準備万端が整うまで小一時間も要しなかった。いよいよ宴を開かうという段取になって、今度は箸が二膳足りないことに気がついた。志功は肥後守をとると外に跳んで出た。向いは神頭勝弥(こうづ)邸である。よく茂ったカナメの生垣が続いていた。彼はその下枝を二本切取った。ついで樹皮をはいだ。アーチストのうたげ。楽しさいっぱいの期待は、自然、歌になって口に浮んだ。＼はつなつのかぜ　に　なりたや／＼かのひとの　まへに　はだかり／＼かのひとの　うしろより　ふく／。後は韻律を鼻唄にしながら、志功は、指であしらいやすく、馳走がはさみやすく、そして口に運びやすい棒の細工に、余念がなかった。この時、生垣の向うで娘たちの声がした。

「勝代姉サマ。この肌色の方がふくらみがよくなくって？」

若々しいバネのきいた声であった。

「そうネ。」

と、少し距離のあるところから明るい声が応じて、パチリ！　と鋏が鳴った。すると、廊下であろうか、もっと奥の方から、

「操(みさ)ちゃん。その横のレモン色もいいわョ」

と、少し年上らしい、落ちついた声がした。

現代教養文庫732
優しき歌
—立原道造の詩と青春
正確な資料に基いて、小説的な手法で書いた、光と風と花の詩人の伝記。ポケットに丁度入る可憐なる袖珍版。
社会思想社　¥200

陣中詩集(八)

蓮田善明

薊

夜のあける前に　窓を
そつと内側から　推し開けた
まだ
つめたい星の光が暗く射し込んだ
そこで私は私の手もとに見た、慄然と
薊の花一輪、窓に
星を見ようと涙ぐんでゐるのを——
薊は花散らない
いつの日　いかめしく　己れ刺さしつつ
天にのぼるものぞ

夏昼

わたしは寝てゐる　昼さがり
眠るのではない　眠れないわたしだ
何することもしらない
外は　久しぶりの小糠雨
窓から　小さく　空の光が見え
何がある？　うすくらいその光り
静かで　すこし冷えてさへゐる空気
わたしの目は嬰児のやうに
ぼんやりと　もののあやめない　形を
うつしてゐるばかり
わたしはひどく所在なく
あちらをじろり　こちらをじろり
小鳥の声が一羽
甲高く冴えて鳴いてゐる
わたしの耳は嬰児のやうに
何を聞かう？
みんな満ち足りてある故に　……

—六・六—

馬

裸の馬どもが
かたまつて
どどどど……と
馳つて行く
あちらへ
……見送つてゐる
そんな悪夢よ
乱れた足音
……
どどどどと馳り行き
ふと何処かで方向が
くるりと左へ廻った
……
おれは今日こそ
あれを　じつと
見つめてゐるのだ
……
おお　馳けて来る
一斉に
鼻づらを揃へて
鬣が波のやうに
浮きつ沈みつ
おれの方へ
うつくしい目になって
……

—六・一五—

蠅の屍

真ひるどき　あが書よめる
あぐらかく膝の上にふと
蠅一つ　まろび落ちた
萎えはてし羽翅の力も
うちじろぐ　仰向きしまま
小さき肢ひきつり
向つ家の兵の室にて
たかれるを除虫剤の
掃撒をうけたるならむ
触りみれど　とびたち行かむ
かなしきいのち　蠅ももちけり

—六・下旬—

無題

わが写真を撮るといふか
わが眼つむれるを撮れ
そはわが姿
みづからわれの見ることを得ず
わが表はすことも得ぬ　わが姿
悲しからんとす
それを撮れかし
わが眼つむれる瞬間

—七・二三—

○

枕もとにローソクをつけて

「みつ子姉サマ。これ？」
「違う。その横……」
「これぇ？」
「そう……。」
で、またパチリ！と鳴った。
どうやら娘たちで薔薇の花束を作っているらしかった。そういえば、甘い香気がそこはかとなく漂っていた。いや、それは腹の虫を鳴かす、スキ焼が始まったらしい、弾く脂の玉の臭いだった。志功は仕上げた四本の棒の長さをそろえながら、中断した「初夏の風」の結びの句を口ずさんだ。＜かのひと　のうしろより　ふく＞＜はつなつ　の　はつなつ　の……＞と言いかけると、いきなり、至近距離のカナメの蔭から
「えッへん!!」
という、男の大きな咳払いがした。ど胆を抜かれた志功は、家の内へ跳んで入った。神頭邸の主、勝弥閣下だったのだ。元第十師団長だった予備役中将の彼は、日課の庭仕事をしていたのだ。三人の娘たちが切っていた薔薇も、彼の丹精の作品だった。志功が箸の代用にと失敬したカナメも、整列した将兵なみの画一的な均斉さが、彼の鋏で強いられていた。娘の鋏とは別のチョッキンが、時に間遠にしていたのは、それだったのだ。

そんなことはみんな、どうでもいい余事であった。大体、スキ焼の宴には序曲というものがない。いきなり沸騰と興奮のたゞ中に到達するのが特長だ。泡を吹く桜肉は、とりわけ沸騰に役立った。土色に煮えたぎった肉片は、せっかちな賞味者の唇と舌をこがした。それを冷すためかのように、冷酒をなみなみとついだ不揃の三つの茶碗が、五人の間を次々と巡った。「なんまいだぶ」「なんまいだぶ」と、手探りで珠数の輪を回す、あの念仏講の婆さまのしぐさに似ていた。大きな珠が巡ってくれば、そこで必ずコックリと一礼をする。丁度、そのように、大きな茶碗が回ってくると、五人の美の信者達は、そこでコックリを繰返した。くびり……一杯やって冷やした口に、再た熱い具を放りこむためである。

しかし、アルコールに弱い志功は、二度目のコックリをしたか、しないうちに、足の裏からこそばゆさが、脚から腹にかけて這い上ってきた。とうてい坐ってはおれなくなってゆらり……と立ち上ると、こそばゆさはさらに、胸から頭に駆け昇った。そして脳髄をペロペロとなめ回った。なにか、しでかさねば収まらぬような心緒がきざした。その心緒は、はにかみという抑制と、ままよという衝

はかないものなどよんでゐると
がらんとしたこの民家の暗がりを
ねずみが何かにぶつかり
こほろぎが板にぶつかり
風がそこら歩いて廻り
おもしろい音を立てる
ここは第一線であるから
こんなに静かである　のどかである

—十一・六—

○

いち早い夏こそ来れ
うすあをき裘の葉は　窓を蔽ひてのび
梢高き空の幽けさ　軽雲は小走りつ
日ねもす　そのさみどりなす空に
銀きは　落ちちりしのちの花の夢——

（終）

動の間を、瞬間、往き来したが、ままよが勝って、ついに志功は爆発して〈ラセ、ラセ、ラセラセ…〉という、掛声が自然に口を衝いて出た。これはモーターの始動に類した。それは、〈イペラセ、イペラセ〉の郷愁を誘発し、松木、松田、高橋はてんでに箸を取ると鍋と茶碗をたたいて拍子をとった。神戸も遅ればせながら、半ば空いた一升瓶をたゝいた。

ネプタ　流れろ
忠臣　立てよ
ラセ　ラセ　ラセラセ
イペラセ　イペラセ

志功はこのネプタ囃子に煽られて六方を踏むと、眼を剝き、箸をへの字の口にくわえ、両腕を左右に拡げて、まるで落ちかかる虚空でも支えるようなしぐさをした。ラセ、ラセ、ラセラセ。志功おはこの「幕揚げの五郎」を演じてる様子だった。彼は五尺の短軀で、丈余のネプタになったように力みかえると、囃子に合せて小刻みに身体を揺りながら、一回転をしてみせた。街を練り歩く風情を表現したのである。この志功を、天の岩戸を開くタジカラオノミコトにでも見立てたものか、松木は着物を脱いで猿又一枚で跳び出した。そして、まだ切ってない葱を手草にとって前に当てると、南洋のラバさん流になよなよと腰を揺りながら、力んだ志功の背後に寄り添った。アメノウズメノミコトのつもりなのである。ワ——ッ！という歓声と、ゲラゲラという馬鹿笑が、壊れそうな二階屋の屋台骨をゆさぶった。「ドモ又の死」以来の共演である。この熱演は、三人の観客の拍手喝采にこたえて、しばらく止まなかった。丁度、向いの神頭邸では、日課の庭仕事を終えた閣下が、野良着のまま縁に腰を下して、茶を啜ってるところであった。「小わッぱ共！また騒ぎおって……」と、灰神楽のように舞い上る狂声に、白毛まじりの眉をひそめて、カナメ垣のこちらを睨んだ。そして茶をつぎたす娘に向って、「操。それにみんなも気をつけたがいいぞ……」といった。「ほんとにお父さま。あんな人達、早くどっかへ、引越すといいんだッ」と、まだ実践女専の英文科生であった彼女は、男まさりの黒い眉をそばだてた。

これは余談になるが、操は十年後に九大出身の朝鮮総督府に勤める医師伊東俊一に嫁いだ。この伊東は、志功の最も古いパトロンの一人である兵庫県高砂の工楽長三郎の従弟である。彼は見合のために昭和九年に朝鮮から帰ってきて、たまたま工楽家に立ち寄った。と、その床に、ずんぐりと太った、なんとも奇妙な鯉を発見したのだ。それが病みつきとなって、彼は従兄と同じく、どうにも癒しようのない志功病にとりつかれてしまった。戦後朝鮮から引揚げて兵庫県三木で開業した。昭和二十二年に工楽の案内で志功を三木に迎えると、座敷の四枚の襖に、引揚げで朝鮮に

夕映えに

織田喜久子

インドに逃れた東パキスタンの難民は百万をこえるという

太陽を熔かして
西空が紅蓮の炎をあげる
ぼうぼうと雲が燃えて飛ぶ
焼けただれる翼たちよ
音たててくずれる死屍よ
最後の審判のように
私の胸がときめく
——広野に飢える百万の難民は
血の色の夕映えに
彼らの神の国を見るであろうか

炎がしずまると
葬送のように
すみれ色の微光が天空いっぱいにひろがり
やがて闇に呑まれてゆく

おきざりにした、愛惜する白磁の面影を描いてもらった。それが縁になって、昭和二十六年の夏には、三木で個人展が催された。三四日、志功は伊東家に滞在した。その或る日の夕食後だった。操夫人はなんということのない四方山話を志功としていた。そのうち東京の思い出となった。それも阿佐ガ谷が中心だった。駅近くにあった天祖神社の「お伊勢の杜」。三角の空地にこっそり佇んでいた地蔵菩薩。陸軍所有地であった広漠たる「ラッパの森」。そこを過ぎてから突きあたるバスが通っている大場通。その四辻にあったブリキ屋と材木屋の間の小道を入ると一軒分ほどの空地で、その向うが、つまり六丁目九十八番地の神頭邸だった。彼女が通学でかよい馴れたこの順路を、志功ははぐれもせずについてきた。ここで志功は筆をとると、その邸はこんな生垣、こんな立樹、こんな洋風の応接間が建っていましたね、とスラスラと描いてみせたので、彼女は、まァ……と彼の天眼通に感嘆した。が、彼こそ家の向いのつぶれかけた二階屋で、朝ッぱらから、蕃声、奇声、狂声をあげてわいわい騒いでいた貉たちの一匹だと知って、彼女はこの奇縁にびっくりをした。びっくりしたのは志功とて同様だった。眼の前の伊東夫人が、二十六年前の時空で、

定本 伊東静雄全集

桑原武夫・小高根二郎・富士正晴　編集
全一巻菊版　十二月初旬刊

初版刊行より10年、伊東静雄の詩にたいする評価はますます高まりつつある。増補改訂版につづいて、その後、新たに発見整理された資料、とくに貴重な蓮田善明、島尾敏雄宛書簡などを加え、さらに総体的に綿密周到な校訂、再編集を施し、現時点で望み得る最高の完璧な全集をめざして、この定本をおくる。日本の暗くきびしい時代に稀有の美しい思想詩を創出し、日本の近代詩に消しがたい痕跡を残して去った宿命的詩人、今こそ完全な姿で我々の前に現出する。全詩篇、散文、日記、書簡、他に解説、注釈及び詳細な研究文献目録を収録。

¥3800

京都市下京区仏光寺高倉
人文書院

チョッキンと薔薇を切っていた主だと知って、宿命とでもいったこの奇遇に、「う――む」と息を呑んだのであった。

こわいひと

田宮顕太郎

伊東静雄先生が、着任された昭和四年、わたしは、住吉中学の三年生であった。先生は、低学年を教えておられ、わたしは、高学年の受験組に進んでゆき、ついに、教えられる機会もなく卒業してしまった。ただ一度、二年生の教室の廊下を通りかかったとき、黒板に書かれた文字を、左手にもった白墨で指しながら、半身で話している先生を、見たことがある。細面のうえに長髪が垂れさがり、「こじき」は「こじき」なりにやってるわい、と生意気に感じたものである。中学生のわたしにとっては、英語の「とんぼ」と、国語の「こじき」は、適切なあだ名という以外、なにも残っていない。

何年であったか忘れたが、わたしの大阪高校時代、記念祭のときであるから、十一月のはじめであった。わたしたちは、法善寺横丁の花月で、デモの流れ解散の祝杯をあげていた。そこを出たとき、伊東先生に出あった。先生の同行者が、だれであったか忘れたが、わたしの知りあいであったらしく、ついて来い、というわけで、入ったのが夫婦善哉であった。甘いのは苦手のわたしが、二杯一組の片方を、やっとの思いで、片附けるのを見て、先生は、もったいない、とこれにも手をつけた。そして、酒をのんだあとは、甘いものがないと、納まりがつかない、とのことであった。

昭和十二年、わたしは京大法学部二回生で、京大事件でつぶれた京大劇研を再興したり、途上という三号同人誌に参加したり、文学青年ぶっていた。この春休に、中学、高校の同窓で友人の、池沢茂君の訪問をうけ、「わがひとに与ふる哀歌」を見せられた。難解でわからない詩のなかで、「曠野の歌」は、一見してわたしの心にかようものがあった。読めばよむほど、魅了されていった。池沢君は、おそらく残本はないだろう、というので、その本を借りて、筆写することにした。夏になって、白クロース表装の一冊の本に、仕上ってきた。その本の最初の六頁は、わざと白紙のままにしておき、先生に題字を書いていただくつもりであった。

夏休も終りに近いある日の朝、案内を引受

四季 十一月号

岩と波……丸山薫
水……竹中郁
時間とともに　空白…大木実
手紙と私……萩原葉子
廃屋……茨木のり子
集中的……小山正孝
禽獣・虫魚・草木……山岸外史
サングラスの蕪村(四)…田中冬二
座談　現代と〝四季〟　神保光太郎　野田宇太郎　田中冬二　大木実　丸山薫　室生朝子
■塚山勇三を偲ぶ■
遺稿　書棚……塚山勇三
塚山勇三……杉山平一
聖霊降臨日の前……田中克己
微笑の人〈詩沼津の町〉…大木実
大事なこと……小山正孝
傷だらけの機関車……塚山信男

¥480

東京都千代田区内幸町一―二―二大阪ビル
潮流社

けてくれた池沢君と、高野線の住吉東駅に集って出かけた。伊東先生だけで、家人の姿はなく、玄関からすぐの四畳半に、招じ入れられた。正面の壁のなかばまで本棚で、道に面した左側は、上半分が格子窓になっていて、陽の光と風が通っていた。右側は、開け放った座敷につづいており、縁側のやや左よりに、釣しのぶが軒につってあった。ああこれが、「水中花」に出てくる釣しのぶか、と思ったりした。先生は、本棚を背にして座り、ここが玄関番を兼ねた書斎で、道をゆくひとの下駄の音が、よく聞こえるんだよ、と冗談めかしていわれた。

やがて、例の筆写本を差しだすと、先生はぱらぱらとめくっておられたが、すぐ「わがひとに与ふる哀歌　伊東静雄」、と題字を万年筆で書かれ、つぎの頁をあけて、ちょっと考えてから、なにか書きいれて返された。

「眸(みじ)めなわたしは、冬ともなれば何処に草花と　日の光と　土壌(つち)の影を享けるやら　ヘルデルリーン」とあった。なにか、感想めいたものが出さうで、言葉にならず、そのまま、お礼だけでいただいた。

ついで、こんなのを作ったのですが、とおそるおそる自作の詩三篇を、先生に差しだした。先生は、無言のままゆっくりと読んでゆかれ、また、始めから読みなおしてゆく。わたしにとって、その無言の時間はずいぶん長

冬至

吉本青司

星のうつくしさを知った夜に
ひとのかなしみをも知ったのだ

みずうみ

さわやかな目ざめほどすてきなものはない
とおく青い湖がひろがり
山々が永遠のかげをおとす
ことばたちがはばたくのもそんなときだ

TOSA

TOSAはギリシアに似ていると思う
あかるく照りかがやく太陽と
空と　海にむかって羽をひろげる海岸線が
どうしてもギリシアに似ていると思う
早熟な少年少女の物語がそこに生れたとしても
それはちっともふしぎでない
どうぞ
ダフニスとクロエーの模倣だ　などと
いわないでください

夕陽橋で

夕日が河口をかざるとき
やさしいものが過ぎていくのをしる
たましいのふめつを信じながら
失われたものの貴重さにおどろく
たまゆらの夕陽橋を歩きながら

コスモシズム

エピクロスよ
あなたがみた空虚は
ぜったいの無だったか
それともぜったいの有だったか
結合と離散の原理が　宇宙を
かなしみでいっぱいにする

新潮選書

詩人伊東静雄

小高根二郎

新著「詩人伊東静雄」は、その「詩人、その生涯と運命」に続く小高根氏の伊東静雄研究の第二著であり、伊東静雄に対するあくなき追跡は、ここに漸く全き形をとったと言えるだろう。詩誌「果樹園」連載当時から毎号愛読し、その早い刊行が待たれていたものである。その生立ちから死まで、小高根氏一流の丹念さで追求されており、今更に一人の詩人の生涯がいかに烈しさと純粋さに貫かれていたかに驚く。ここに初めて詩人伊東静雄は己が伝記を持ったということになる。

井上靖

¥550

新潮社

く、耐えられないものだった。やがて、詩稿をそっと返えされて、ぽつんと、「法科の学生が、詩なんが作るものではありませんよ。」といわれた。下手な詩だ、これはなにか、とでもいわれるか、と思っていたわたしにとって、この言葉は、より以上の打撃であった。わたしは、はあ、といったきり黙ってしまい、気まずい空気が流れた。先生の鼻の横にある黒子が、ますます大きくなって、わたしを睨んでいるような気がした。

池沢君が、「蜻蛉」の「われは荒野の尻に立てり」の尻は、卑猥な連想があって好ましくない、といいはじめて、わたしを救ってくれた。先生が、そんなことがあるものか、万葉にも出てくる雅語だ、といった話をききながら、わたしは寡黙になっていった。

伊東先生は、わたしにとって、こわいひとになった。先生の教えに背いて、わたしは、戦中、戦後を通じて、誰にも見せず、どこにも発表しない詩を、作りつづけた。先生の詩集が出るごとに愛読して、その影響をますます受けた。ときどき、時候の挨拶と消息の便りを出し、先生が国立病院でなくなられた、との返書を、夫人から最後に受けた。しかしあの日以後、お訪ねしてお会いすることは、こわくて、どうしてもできなかった。

編集後記

十月九日。京都鉄屋町の河道屋で天野忠氏と落合って会食をした。十年ぶりである。近頃の氏の詩の、なんともとぼけたような老境を歌っている詩境が面白く、一度上方風な老人ぶりを拝見したいと思ったからだ。ところで現れた氏は、小ざっぱりとした洋風で、歯なども入れてすっかり若返っており、歯医者嫌いで抜けたのをそのままに、結局麺類が最高の馳走になってしまっている自分を反省した。

十二日。新潮社の片岡久氏より、「川上澄生という人が従来ともすると軽く趣味的に見られていたのを不満に思っておりましたので、志功先生との関係であのように生き生きと語られ、ありがたく存じます」と便りをいただいた。この日、当の川上氏からも、「棟方君のことよく御しらべになっていると感嘆致します」という便りを頂戴した。

十三日。岐阜の殿岡辰雄氏より、「川上画伯の『初夏の風』は小生は初めて接する作品ですので、大変興味深く拝見仕りました。両画人青春の日が偲ばれます」とあった。

十月十七日。「コギト」の仲間だった伊藤佐喜雄氏が心臓衰弱で死亡した。この春、新著「日本浪曼派」を頂戴し生きのいい文章に氏の壮健ぶりを祝ったばかりだったが、残念なことであった。巻頭の田中氏の悼詩にもあるように生前の伊藤氏に、昔の仲間として親切が足りなかったのではないかとしんみりした。謹んで哀悼の意を捧げる。(O)

果樹園 第一九〇号（毎月一回一日発行）
昭和四十六年十二月一日発行
編集兼発行者 池田市石橋二丁目六ノ五 小高根二郎
印刷所 大阪市東住吉区桑津町五の八 元市印刷株式会社
発行所 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社
（電話〇七二七・六一・八三一七）
定価 六〇円

果樹園 一九〇号 昭和四十六年十二月一日発行 （毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価六〇円

果樹園 一九一号 昭和四十七年一月一日発行 （毎月一回一日発行） 池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価六〇円

果樹園

第191号

画仙・棟方志功(上) 小高根二郎
老境 田中克己
画仙・棟方志功(上) 小高根二郎
応召日記(一) 蓮田善明
編集後記
晩秋 織田喜久子
上高地 高梨一男
室戸岬十一章 吉本青司

画仙・棟方志功(上)

小高根二郎

2 版画への開眼

太平洋画会の入選を契機に松木が上京し、阿佐ガ谷のアトリエで、志功と待望のアーチストとしての生活を始めたという銘ニュースは、故郷大湊の宮川菓子店にくすぶっていた古藤正雄を、矢も楯もたまらず駆りたてた。古銘の一匹としての名誉にかけても、上京する決意を堅めたのだった。古い軍港の町に錨を下している格好の、頑固な鍛冶職の父直吉を説得するなぞということは、古藤にとって、ほとんど不可能事に属した。万やむをえず、非常手段として奥の手である仮病戦術を起用した。彼は重症の脚気を装った。足が鉛のように重く、その上に痺れるので、自転車を漕ぐことができなくなった。従って、得意先である海軍官舎の御用聞きもできず、毎日店でゴロゴロしてるより仕方なかった。目障りの上、又一向に直る気配もないところから、当分の間、自宅療養をすることになった。が、厠に立つにもチンバをひきひきのていたらくで、いつ復業できるか、その見込みさえ立たなかった。二年余りで青森の甘精堂の徒弟奉公をしくじっていた。今度も一年ばかりで、また宮川菓子店の動めも挫折するわけである。息子の不甲斐なさに業を煮やした直吉は、時に癇癪玉を爆発させた。が、癇癪玉は病状を悪化させはすれ、一向に薬餌の効を発揮しなかった。さすがの直吉も匙を投げかけているところに、古藤の悲願に勘付いている店主の宮川が説得にきた。息子の方ではなく、親父の方を…である。どうやら正チャの病気は、陸奥の寒い空気や水コに原因があるらしい。いっそ思い切って、暖い東京サに転地療養させてみたらばどんだべな？ という提案であった。実は、直吉とて息子の悲願を知らないわけではなかった。彼が木彫家になりたいと、幾度か願い出たつど、にべもなくはねつけてきたからだ。が、もう本人も二十歳だ。こゝらで性根を打込む仕事に取り憑かれなくては、一生を棒に振ることになりかねまい。しようがねェなァ、それだけ東京サ好きなれば、野倒死(のたれじに)を覚悟で東京サ行げ！ ということになったのである。

古藤の脚気はたちどころに治癒したことは勿論である。喜び勇んで彼は上京すると、ぬかりなく目黒の新聞販売店に住込んで、朝夕の新聞配達に従事した。青森時代とは打って変ってタフな健脚ぶりであった。やがて、どうやら東京の案内にも明るくなってくると、志功たちの阿佐ガ谷に近く、中野駅前の新聞販売店に鞍替をした。時に配達の足を延ばせば、憧憬のアーチスト王国——古銘たちの巣の臭をかぐことができるからだ。志功・松木はすでに、神頭邸前のつぶれそうな二階屋から引越していた。引越したといっても、すぐ